
その名も嘘つき勇者様

瀬田一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その名も嘘つき勇者様

【Nコード】

N7863X

【作者名】

瀬田一郎

【あらすじ】

物心がついた時から塔に閉じ込められていたお姫様は本でしか見たことのない外の世界に憧れ、いつしか外の世界に出たいと願った。そして物語が始まるあの日、外の世界に連れていってくれる勇者様が願いを叶えてくれた。二人を繋ぐのは「嘘」と「秘密」。それが破られた時、二人の運命は。ハートウォーミングな本格異世界ファンタジー。

プロローグ（前書き）

エレン領にある小国。王女は塔にとらわれて遠くに見える自分の生誕祭を窓から覗いていた。すると近くにある時計台の屋上に人影が王女に手を振っている姿が見えたところから物語は始まる。

プロローグ

「高い塔に閉じ込められたお姫様を助けるのは勇者様って決まってるんです」

「あんな……俺はお前に頼まれてここへ来たんだぞ？」

「はい。知っています」

キラキラとした瞳で塔より少し低い時計台の屋上にいるレオンに視線を送るお姫様。

困り顔の推定、勇者様は仕事の依頼書を胸のポケットから出してお姫様に見せるために広げて持ち上げる。

「ほらッ。お前のサインだろう？」

「はい。それでも勇者様でしょうか？ だってその格好はどう見ても勇者様ッ」

「あんな……遠くに見える演劇に紛れて城へ潜入したんだ。カナリアの巫女っていう演目知っているか？」

「知っています。本で読んだことがあります、その格好はアルドリア様の格好じゃありませんか？」

「そうだけとお前を助けるために脚本を変更して勇者の出番は頭とラストの約束の地へ連れて行く部分だけなの」

レオンは依頼書をポケットに乱暴に押し込みながら遠くに見える舞台を指差した。

移動演劇団【シーアテイル】が姫様の生誕16周年を祝う感謝祭のメインイベントの劇を行っている最中で観客はその劇に夢中だった。

舞台ではレオンの兄のテッドが扮する仮面の騎士が勇者と巫女を守る為に敵軍へ単騎で突っ込む前の長台詞のシーン。

「クライマックスまで時間が無い。終わりの戦闘シーンの演出で花火が夜を彩るからそれに紛れてお姫様を抱きかかえて走ってアルファレスへ乗り込むんだ」

「アルファレス？」

「そう。俺らの移動飛行艇だぜ。中はちよつと狭いのが難点だが塔の中よりは広いと思うぜ」

「はい。この塔は狭くて苦しくて自由がありません。何をすることも執事を通さなければなりません」

「……あのさ、だったらこの依頼書も執事を通したのか？」

「はい」

「何だろうな……一気にやる気を失くしちまうぜ。セキュリティの甘いのか、執事がお前を自由にさせたいって思っているのか」

大げさにため息を吐いて肩をすくませるレオン。

舞台下の奈落から中庭の真下を通る水路を抜けて時計台の複雑な内部のからくりを通ったのがバカらしく思えるとやはりため息は深くなる。

その様子を見て具合でも悪いのですか？と訊ねる純粋な瞳のお姫様にレオンはゆっくりと首を横に振った。

「まあ仕事だからなッ。嘆いている場合じゃない」

「はい。では私はお待ちしております」

「待つ？ お前が来るんだ。時間が無い。ほらッ」

「ほらって！！ こんなにも高い塔から飛び降りるとおっしゃるのですかッ?!」

「仕方ないだろう？ 魔法を破る時間も無い」

レオンは両手を広げて受け止めるジェスチャーをする。

塔と時計台は隣接しているとは言っても数メートルの距離はある。

そして高い位置にあるせいで風が強い。レオンの金髪も風にあおられて逆巻いていた。

ためらっているお姫様に早くしろ、とも言えずに時間だけが過ぎていく。長台詞が終わる合図の長剣を頭上に掲げる姿に歓声が沸いていた。

「だったら……あの台詞を言ってください！！」

「はぁ？」

「あの……アルドリア様が幽閉されていた巫女を救いだす時に言ったあの台詞をッ」

(何だ……こいつは……)

「お願いします！！　そう言われたら私も勇気が出そうなんです」

「だって俺は勇者じゃねえし俺が言っても嘘なんだぜ。劇で涙を流す奴らの気がしれないぜ」

「嘘？違います！！　あなたは勇者様です」

「だから……これは衣装だったの……ああ！！　もっつ」

レオンは進まない話に苛立ちを募らせる。強風にあおられるうっとおしい長い髪も無駄に装飾してある重たいだけの鎧も聞きわけのない女も大嫌いだった。

だがどれもやらなきゃ生きていけない。親方のマウルには世話になっっているしここは居心地が悪くない。仲間との関係もまあまあだ。そうレオンは自分に言い聞かす時間を挟んでようやく言う気になった。

跪くレオン。肩腕を斜めに下げて自分を紹介しながら共に来てくれませんか？と言ったたったそれだけの台詞。

「ダメッ！！　もっとちゃんとやって下さい」

「あのかなッ……」

何か言い返そうとしたレオンに注がれる期待する視線。立ち上がろうとする足を止めてもう一度、きちんと跪いた。

「怖がらないでください。私の名前はアルドリア。かの国から精霊の力を借りてここまで旅を続けております」

「精霊の力……？」

「はい。この火の精霊クーパーに水の精霊セイラム。土の妖精ハイドに風の精霊シーアテイルに導かれてあなたを助けに参りました」

本来の舞台ならば魔術師がそれぞれの精霊の名前を呼び時に魔法を詠唱し、勇者の背中越しに精霊がほほ笑むという演出がある。

その間をたつぷりと費やしてレオンは立ち上がり、塔にいるお姫様へ手を伸ばした。

「行けません……私は外の世界が怖い……」

「怖い？ 精霊の加護があればどんな場所にいたとしても恐れることはありません」

「無理です。外の世界はとても怖い場所だと聞いております」

「恐れることはありません。ここへいる精霊をご覧ください。彼らは怖いでしょうか？」

「……いいえ。とても優しくほほ笑んでおりますわ」

「そう。世界は彼ら四つの精霊からなる素質で作られています。いわば彼ら自身なのです」

「理屈はわかります。でも怖いものは怖い……。私は産まれてからずっとここで暮らしてきました。今更ここを出るのは怖くてなりません」

「知ることを恐れてはいけません。ここにいれば何も変わることはありませんが何かを手に入れることは出来ません」

「失うことありません」

「確かに失うことは何もありません。それは何も持っていないからではございませんか？」

「何も……持っていない？」

「そう。あなたは何も持っていない。だからこそ何かを手に入れることを恐れるのです。あなたはあの花の匂い？ あなたは風に触れたことがありますか？あなたは恋をしたことがありますか？」

「恋……？」

「あなたは美しい。この私の胸に宿るこの気持ちをあなたはまだ知らない。この心は世界をより美しくしてくれます」

「美し……く？」

「そう。あなたの瞳には世界は平凡で退屈で窮屈に見えているはず。私の手をとってくれるのでしたら私が見せましょう」

「美しい世界を？」

「はい。怖がらないでください。あなたはそつと私の手を握るだけでいいのです。そうしてくれば私があなたを守り続けると約束をしましょう」

「守ってくれる？」

「さあ手を伸ばしてください。もしも世界があなたを不安にさせるならば私はその全てと戦いましょう。そして必ず勝利をおさえめて見せましょう」

「……アルドリア」

「カナリア様。私はずっとあなたの傍におります。あなたを守る為に私はいる」

台詞はここまでで終わる。

最後は巫女が自らの手でアルドリアの手をとって旅が始まるというシーン。共に行きましようって言えばいいじゃないか、と激昂した稽古を思い出すレオン。もうずっと前の話だ。

何度も行っている演目で一番の人気を誇る物語。特に女性からの

人気が高くこのシーンをする度につつとりと恍惚した表情を浮かべるのがレオンには不思議だった。

「アルドリア様ッ！！」

「ッ！！ もっとゆっくりと落ちろってんだよ」

窓枠に足を乗せて勢いよく飛び降りてくるお姫様を慌てて受け止めるレオン。

勢いを殺す為にお姫様を抱いてからグルッと身体を回して時計台に立たせて手を離すと腰が抜けたお姫様がゆっくりと崩れていく。

「怖かった……」

涙顔になり呆然と塔を見上げるお姫様。窓には魔法人形がいてお姫様にお別れを言うように手を振っていた。

「魔法人形か……」

「シルクくんです」

「シルクくん？」

「名前です。人形じゃありません」

「はぁ……お姫様ってのも大変なんだなッ」

レオンは苦笑いで視線を魔法人形から震えるお姫様に戻した。

「ほら、首に手を回してジツとしているよ」

「はい。アルドリア様」

「アルドリアじゃねえんだよな…俺の名前はレオンってんだ」

「レオン？ 素敵な名前ですね。私はアスハ・レイチェル・フラン・フィールランド・オルト」

「なげえよ。どれが名前かわからなねえけどフランでいいか？」

「フラニーって呼んでください。カナリアもリアって呼ばれております。愛称っていうのでしょうか？」

「まあ……お前がそれでいいならフラニーって呼ぶぜ。俺はレオンでいい。他の仲間は後々説明するからな」

「はい」

フランの細いウェストに手を回すと震えていることが指先に伝わってくる。しっかりと抱きしめて耳元で首に手を回せ、と離すなよと釘をさした。

レオンの言った言葉を何度も繰り返しているフランに不安を覚えながらも抱きかかえて立ち上がる。やけに軽くて言いようのない気持ちになった。

見上げる塔。一部分しか見えていないがロクに運動が出来るスペースなんてあるとは思えなかった。円形の塔で幅も十メートルも無いただろうと思っていると魔法人形が力を失って倒れた影が見えた。

「もう演目も最後のシーンに入りますよ」

「そうだな。急がないといけないぜ。走るからただ黙っているよ」

「はい。レオンが守ってくれますもんね」

「ああ。何があるうと守ってやるよ」

レオンは半ばあきれながらそう言って時計台の屋上から複雑なからくりがある内部へと続く階段を降り始めた。

時計台内部

時計台を降り終えて水路に入る。下水道ではなく庭にある池を管理する水路なので二オイはあまり無いと思ったがフランには厳しいみたいだった。

「大丈夫か？」

「……はい」

「二オイはキツイよな。慣れちまった俺でも嫌な気持ちになるぜ」

「いえ……二オイじゃなくて」

言葉を言い終わる前にレオンの首に巻き付く腕が力づよくなった。水路の低い天井には妙な圧迫感がある。声が反響するのも慣れなければ怖いと感じる奴もいる。衣装を担当するヤーミンも暗くて狭いところは嫌だつて泣いていた。

レオンは少し速足で水路を抜けようとするが、足音が反響し気付かれるとまずいので気持ちだけ速く歩くようにした。

「水路つてのは舞台裏と繋がっているんだ。そこから船に乗るには舞台を通らなければならぬんだ」

「オルト平原ですね。エレン領とノール領のちょうど真ん中に広がる広大な草原で魔術師と兵士が戦います」

「そう。兵士達が精霊を閉じ込めていたのを姫と勇者で解放するんだ。その最後の封印を解く遺跡を守る為に魔術師達は兵士と戦うんだ」

「知っています。魔法を使えなくて剣と楯で戦うんですよね？」

「魔術師が見よう見まねで戦って兵士と互角つてのが気になるんだよなーって思わねえ？」

「大切なものを守るためには誰もが素晴らしい力を発揮出来るとそ

「書いてありました」

「小説や伝記にはだろう？ 現実には毎日訓練する兵士と魔法で何でもしてしまう魔術師が互角つてのがね…どうしても気になるんだよな」

愚痴っぽく言うレオンにいつしか熱が入るフラン。

本で得た知識や物語のシーンを熱く語ると次第に首に絡まる腕は緩まってきた。作戦は成功つてところかな？とレオンはほほ笑んだ。

「何を笑っているんですかッ！！」

「いや何でもない。本が好きなんだなっと思ってさ」

「本は好きです。私にもらえる者と言えば本だけでしたから」

「そりゃ魔術本と物語なら物語だよな」

「魔術本は一度も読んだことはありません」

「読んだことが無い？ だったらあの魔法人 じゃなくてシルクくんはどうやって動いているんだ？」

「だからシルクくんはシルクくんですつてばッ！！」

誰かが監視目的で人形を置いたのかな？とレオンは推測する。手紙も執事を通したと言っているし莫大な賃金ももらえたと親方は笑っていたことを見てもこれは黙認されているものと考えられた。

塔に閉じ込められている理由も知らないが可哀そうだと思つて柄の間の自由を与えてやるうという親心だと解釈するレオン。

「聞いていますかッ？！ 私は大切な話を」

「聞いているよ。悪いな。シルクくんはシルクくんだな。お前をずっと守ってくれていたんだから感謝しなきゃな」

「シルクくんは私の友達です。カナリアで言うところの精霊のマップです」

カナリア姫が幽閉されていた部屋にいた精霊のマップとはネズミやリスなんかをファンシーにして丸くしたような感じの生き物で常にカナリア姫の肩に乗っていた。

塔で見たシルクくんは毒地や鉱山の奥で作業する時に使われる魔法人形。フランよりも大きく単調な命令しか理解できないはずだ。

「大きさは全く違うけどな」

「大切なのは気持ちですよ。マップのようにシルクくんは私にとって大切な友達なのです」

「友達を置いてくるのか……良かったのか？」

「大丈夫です。執事にお手紙を書いておきました。シルクくんを大切に扱うように、と」

「それなら大丈夫だな。まあ一緒に連れていくのも無理だろうしいい判断だ」

レオンが寝めると顔を赤らめて喜ぶフラン。

子供のように無邪気な笑顔で鼻歌でも歌いだしそうだったのが可愛いなっと思つたレオンもつられて微笑み返す。

いい雰囲気が続いている。この調子なら水路は何事もなく抜けられる。話している間にもう舞台からの光がもれて見えている。

「舞台の光だ……顔は見せるなよッ。見られると演劇を止められるかもしれないからな」

「はい」

「じつと抱きついていて。少しゴタゴタした場所を通るからなッ。

外の音も気にするな。戦闘する声や音も怖いかもしれないが大丈夫」

「はい。守って……守ってくださいますもんね」

「あ……ああ……」

あまりにも綺麗な瞳で言うものだから調子が狂いそうになるな、

とレオンは心中で言って光を睨みつけた。

頭の中で何度も繰り返し返した戦闘シーンを思い返す。出たすぐに歓声が沸いて親方が扮する兵士に見つかる。ゆっくりと全体を見渡し、台詞を言って戦いながらゆっくりと袖へはけていく。

袖に隣接してあるシーアテイルの楽屋にフランを置いて代役のミレイを抱きかかえてまた舞台へ戻り、約束の地の件をして舞台が終わる。瞼の裏で拍手する観客が見えて胸がトクン、と高鳴った。恥ずかしいが悪い気分じゃない。

酔いしれるほどの演技じゃないが勇者に選ばれた人だけがもらえる歓声と拍手。栄光の光が幕に閉ざされるまでは勇者だけを照らしている。

「……すごい歓声が聞こえる」

「もう少し近づくと歓声も消えて剣がぶつかる音や演者が叫ぶ声の中を通る」

「緊張しますね」

「緊張？」

「初舞台ですもの。ずっと夢だったんですよ」

「夢…か。顔を出せないのが残念だけど舞台は悪くないぜ」

「はい。私はきつといい演技をしたいと思います」

「自信家だなッ。ハハハ」

レオンが大きく笑うとフランもつられて笑った。

「行くぜ。舞台だ」

表情をふつと戻して厳しい顔に戻るレオンが光を抜けて舞台へと立つのであった。

舞台

「アルドリアッ！！」

舞台の奥に作った遺跡のセットから出てくるレオンに剣をかざして叫ぶ親方扮する兵士長ガザン。遺跡の足元には魔術師の格好をして剣と楯を持つ人間が扇状に広がって遺跡の入口を守っていた。

「封印の解放は終わった」

「何だとツ？！ そんな……バカな……」

「もっお前達が戦う理由も無い。剣を収めよ」

「クッ……そんな……」

ガザンは剣を落とし、膝を折って前のめりに倒れる。

それを見て魔術師も戦っていた兵士も剣を落としてレオン扮するアルドリアを複雑な表情で見上げる。それぞれの表情を見渡す。

ほんの数秒だが、舞台の上では数分にも思える沈黙。腕の中にあるフランの小さな胸が高鳴っているのがレオンの身体に伝わってくる。

「引け！！ ノアールの兵士よ」

「……巫女様は」

「腕の中にいる。私がこの手で約束の地へと連れていく」

「……」

「引け！！ これ以上の争いに何の意味がある」

レオンが叫ぶとガザンは顔をあげて剣を支えにしてゆったりと立ち上がる。

「それは出来んツ」

「何ッ！！ もう終わったということがわからないのかッ」

「わかつている。だがッ……だがッそれでも私には兵士長としての誇りがある」

「部下の命と誇りを天秤にかけると言うのかッ。愚かな」

「若い兵士も同じ心でいる。我が国、ノアールのためでなく一人の兵士として引けぬッ」

ガザンがそう言っただけで遺跡へと走り始めると再び戦闘が開始された。それに合わせて照明も音楽も変わり花火も打ちあがり静まり返っていた客席からも歓声が続いた。

(行くぞ。いいか？ しつかりつかまっているよ)

腕に抱きつくフランにしか聞こえない声でつぶやいてから舞台へ降りる階段をゆっくりと降りた。

魔術師に守られながらも何故かゆっくりと戦地を歩く演出に涙する客もいた。こういうのがバカらしいんだ、と思ったレオンだが表情は崩さずに真剣な顔で歩みを続ける。

魔術師を倒してレオンへ襲いかかってくる兵士の一太刀をかわして剣で胴を薙ぐ。倒れる兵士が巫女へ手を伸ばそうとして息絶えた。狭い舞台だが襲いかかってくる兵士を払っていくので数分はかかる。

そして最後はガザンが目の前に立ちただかる。

「退いてくれッ！！」

「退けぬ」

「だったらこの剣でお前を斬る」

「斬れるものならば斬ってみせよ！！ノアール最強の兵士を倒せぬならば巫女様を守り続けることなど出来んわッ！！ 覚悟せえ」

ガザンは幼少期の巫女を守る護衛役としていたこともあり、思い入れが特別にあるという設定だった。

掛け声と共に斬りかかるガザンのわき腹を斬って、その背後でガザンが巫女の名前を呼んで倒れてこのシーンは終わりだ。

ガザンが倒れる派手な音が背中に聞こえて剣を捨てて舞台袖へと入る。

客席の興奮もピークになり、割れんばかりの拍手と声援が鳴り止まなかった。

「終わったぜ。ここはもう楽屋になる」

「……ふう。かなりドキドキしました」

「初舞台なんだ。緊張して当たり前さ」

「ど、どうでしたか？きちんと出来てましたか？」

「ああ。才能あるぜ」

ニッコリとほほ笑むフランを楽屋の椅子へ座らせるレオンへフランと同じ格好をしたミレイがつかつかと近寄ってくる。

「ずいぶん仲が良さそうねッ！！」

「出番が少ないからって怒るなよ」

「だって！！　せっかくの巫女の役なのにどうして今回だけ違う構成なのよッ！！　これじゃ主役はテッドみたいじゃない」

「確かに兄貴ばかりのシーンが多かったがすねるなよ。今回は作戦が同時進行なんだぜ」

「わかっているわよッ」

表情を強張らせるミレイは横目でフランを睨む。フランは怯えながらも笑みを浮かべたがそれも無視するミレイ。

「八つ当たりだぜ」

「わかっているって言っているでしょう。もうセットの組み替えも終わるから行くわよ」

「あいよ。見せてやるうぜ。最後の名場面ってやつをさ」
「言われなくても」

何とか機嫌をなおそうとするレオンを突っぱねるミレイはレオンを通り過ぎて薄暗い楽屋の隅にある全身鏡で自分の姿をチェックしていた。

鏡の上部には小さなライトがあって顔に影が出来てしわに見えるのが嫌だわ、と嘆くミレイの背後でその背中を見つめるフランの前へ跪くレオン。

「少しだけ離れる。すぐに帰ってくるから心配するなよ」

「はい。大丈夫です」

「ああ。その笑顔を忘れないでくれよ。何処かの誰かさんみたいに怖い顔をしているとしわが出来るぜ」

フランはふっと笑うと鏡越しに聞こえているわよ、とミレイが返事をしてくる。

グツと堪えてレオンを見つめるフラン。レオンは約束だ、と言って立ち上がりミレイの隣へと並んだ。

遠くにいつてしまうようで不安になるフランは手近にあった柔らかな人形を胸に抱き寄せて顔を沈めたのであった。

セツトはアナンの滝をみおろせる展望台に変わる。

実際にあるアナンの滝は足元に広がる穴は直径100メートル。底が見えなくて地球のヘソとも呼ばれていた。

そこでアルドリアと巫女は別れることとなる。全ての封印を解放し終えた精霊がこの場所に集まり、この穴へと吸い込まれることで地球と同化すると言われている。

「アルドリア……精霊が綺麗ですね」

「あなたに解放された喜びで精霊達も輝きを増しているように見えます。私が精霊の加護を受けた時よりも力強い精霊の力を全身で感じます」

「そうですね。これで全ての旅が終わります。あなたともここでお別れですね」

「私がお守り出来るのはここまででございます」

その返答に表情をくもらせる巫女役のミレイ。

本当はずっと一緒にいたい、と言えないでいる巫女と同じ気持ちなのだが離れなければならぬ運命を受け入れたアルドリアの別れのシーン。

旅は精霊の解放すること。それが終われば共にいることは叶わない夢であった。

理由は一つ、巫女には精霊と共にこの世界を守らなければならぬということだった。人間でありながら精霊となる巫女が人間である部分（アルドリアと共にいる自分）と決別しようとするシーン。

「本当にあなたに連れられて外の世界へ来て良かった。花の匂いも風の冷たさも……人々の温かさも知りました。決して本ではわからない現実もこの目で見る事が出来ました」

「はい」

「ありがとうございます。あの時にあなたに外へ連れられ無かったのなら私は一生部屋の中が全てだった」

「……そう言ってくださることに感謝いたします。巫女様」

「巫女様……最後まであなたは名前でも呼んでくれませんでしたね」

悲しそうに笑うミレイを複雑な表情で見つめ返すレオン。

アルドリアはわからないが、いつもテッドならこう言った表情をするので真似をしていた。

ノール領では主役をやりたがるテッドもエレンでは顔を見せたくないと言って代役をさせられるレオンの演技は常にテッドの真似をしているに過ぎない。

「名前を呼んでもらえませんか？ アルドリア」

「……それは出来ません」

「どうして？ あなたは私の知らない世界を教えてくださいました恩人なので」

「……理由などいつの間にか忘れてしまいました」

「もうあの日、あなたが外の世界を教えてくださいました日から一カ月も経ちますものね」

「私は何もしておりません。言うなれば運命があなたを導いたのでございます」

「運命……精霊や魔術師と同じ言葉で私とお話するのですね」

レオンはその言葉に隠した感情をかみしめるように沈黙で答えた。精霊の光が強くなって催促をしているように点滅している。それを横目にミレイは目を閉じてください、と言った。

その言葉に目を閉じるレオン。

ゆっくりと近づいてくるミレイの足音がレオンの目の前で止まった。

「あなたとはもつと一緒にいたかった。あなたともつと多くの世界を見たかった。あなたとずっと一緒にいたかった」

レオンがゆっくりと目を開けると目の前にいたミレイが背伸びをしてレオンに口づけを迫っていた。

唇を重ねる二人。身体を抱き締めようと葛藤しているとミレイが一步下がってほほ笑んだ。

「それだけで私は嬉しい。離れても心はずっとあなたと一緒にいます」

精霊の光がミレイの身体へ注がれた。レオンの立ち位置からすれば見えているが、観客席から見ると光の屈折の関係で姿が消えて見える。

一人残されたレオンは光へ触れようと手を伸ばすと光が消えてしまふというシーン。

光で見えなくなっている隙に足元の装置が沈んで舞台裏へ入れるようになっているのだが、急ごしらえで作った舞台にはそんな装置は取りつけられていない。

今回は光へ手を伸ばしている間に幕が下りて演劇は終了となった。拍手や喝さいが鳴り止まない舞台は大盛況の内に幕を閉じたのであった。

シーアテイル船内

全てが終わり楽屋へ戻るレオンとミレイ。

楽屋には全ての舞台関係者が親方を中心に集まってフランも親方の隣でその輪に加わっていた。

「今日もいい演技だった。目的のお姫様も奪還出来た。後は逃げるだけよ」

「逃げるって……何だか嫌な言い方だぜ」

「いいんだよ。もうこの街へ二度と来ることは無いんだからよ」

「はあ？ 何でそうなるんだ？」

「一国の姫様を誘拐したんだ。それなりの覚悟はしておけよ」

「お姫様を誘拐って相手側も知っているんだらう？ だったら別に

……」

「甘いなツ。知っていたとしても黙ってお姫をさらわせると国の面子に関わるだらうがツ。ドタバタと逃げる姿を見せればこの国の面子も守られるってもんだよ」

ガハハ、と大柄の身体を揺らしながら笑う親方に引き気味のフランだった。

周りにいる演者も人種こそバラバラだが特別小さな人間ではない。だが親方は全員の倍以上の大きさがある巨人族の生き残りだった。

このシーアテイルに乗っている全員は何かの生き残りだったり見世物小屋から引き抜かれたいわゆる普通じゃない人間達だった。

見た目もモンスターに近い人間もいるがこの船では普通に暮らしていた。それも親方の人柄のおかげだとテッドは言っていた。

テッドとレオンも特別な人種とやらでテッドがエレン領で顔を出したくないと言う理由もそこにあった。

見た目は人間そのものなのだが、瞳の中に白い輪がありエレン領

では悪魔が宿る肉体と言われて忌み嫌われていた。逆にノール領にいけば精霊が宿る神聖な肉体と呼ばれている。

そんな他人からの感情を気にしないレオンは感受性が違うんだ、という親方の言葉に妙に納得している。テッドは小さな時から人目を気にし過ぎている気がする。

「それで水路を通って隠れて連れだしたわけね」

「堂々と明け渡してどうするッ。小さくとも王位継承権が低くともこの国のお姫様であることに違いはない！！」

「何処の国も面子が大切ってことね。あー嫌だね」

「それがあるおかげでこっちはいい仕事をさせてもらってるんだ。ガハハ」

親方はポツテリと出たお腹をさすって豪快に笑った。

「だったらこんなにダラダラと出ていいのかい？今頃、兵士達は大騒ぎじゃないか？」

「もうそろそろ合図が来る。城下町を回るパレードがいいところに来た時に花火があがる。それがくれば一気にこの船を空へ飛ばすぞ」

「片付けもしてねえの？あぶねえよ。人だっているんだ」

「安心しろ。パレードを見る為に人はいない。あるのは舞台だけだ。どうせなら派手にぶっ壊して空へ逃げてやるうじゃないか」

派手なことが好きな親方らしいプランだった。目立って悪党に徹しろ、というのが奪還屋稼業での鉄則らしい。

悪党になれば好奇心で客入りが増えて演劇の方も潤うし一石二鳥だと胡散臭い話を耳が痛くなるほどされた。

「それじゃ持ち場へ戻れ。船を動かすぞ」

生返事でいつもの銃座席へ向かおうとするレオンの肩に手を乗せ無理やり振り向かせる親方がフランの背中を押した。

「今日はこの子の面倒を見るのがお前の仕事だ。案内をしてやれ」
「あーらレオンにぴったりな仕事ねー頑張ってるね。ゆ・う・しゃ・さまー」

バカにするようにレオンの脇を通り抜けるミレイ。

親方に背中を押されてバランスを崩しかけたフランの身体を抱きとめた姿を見て親方は満足そうに笑って部屋を後にした。

残された劇団員も持ち場へとダラダラと移動していく中、二人はどうすればいいのかわからないままにまごまごとしていた。

「とりあえず……あの大きいのが親方だぜ」

「はい。とつても大きい方ですね」

「そう。それで口が悪いあいつがミレイ。そして今部屋を出ようとした仮面の騎士がテッド」

「さつきあいさつさせてもらいました。優しい人ですね。レオンさんと兄弟なんですよね？」

「そうだよ。背が高くてカッコいいのがテッド。ちんちくりんのライオンヘアーなのがレオンってね。覚えやすくていいだろう？」

「ふふふ。飾らない人なんですね。レオンさんもとつてもカッコいいです」

「照れるなッ。ハハハ」

テッドはその様子を遠くで見ている。背が高く黒髪の長髪で顔立ちも似ても似つかない。ただ瞳の中にある白い輪だけが兄弟だということを教えてくれる。

レオンがテッドと目が合うと無表情で部屋を出ていくテッド。女好きで誰にでも優しい兄だが、エレン領の人とは極力接することを

避けている。嫌な思いをしているのは知っているのでレオンも団員も何も言わないでくれている。

見えない何かがそこら中にあつて全てを見えないふりをしていることで保たれている劇団。居心地は良く。フランも慣れるといいな、とレオンは本気で思っていた。

「深く関わり合わない方がいい」

フランから少し離れてフランの着替えを探している耳元でテッドがそう言った。

レオンは衣装を乱雑に保管してある衣装箱から顔をあげてフランがいる部屋の中央を振り返るとフランがニコツと微笑み返してくれた。

「……何で？ エレンの人だから？」

「それもあるが……」

「何だよ。何か言いたいことがあるなら言ってくれよ」

レオンは顔を衣装箱に向きなおしながらテッドと会話をする。テッドは帽子で口元を隠して話を続ける。

「あの子をさらうのが仕事だつて言っていただろう」

「依頼書は読んだ。仕事も成功しただろう？」

「成功はまだしていないが……まあいい。だったら次の航路は知っているな」

「次は……ええっとマリスフィームだっけ？ 水の神殿があるとか」

「そう。ノアール領の水の都市。その意味がわかるか？」
「さあ？」

「彼女はエレン領のお姫様であり、マリスフィームには未だにエレン領との確執を嘆く人間も多く残っている土地だ」

「知っているよ。でもこれは狂言誘拐なんだろう？ だったら途中で誰かが回収しに来てかくまってくれるんじゃないの？」

「立ちよる予定は無い」

「じゃあ……ノアールには来れないよな」

真っ赤なドレスを持ち上げて固まるレオンが半身を振り返るとフランは驚いたような顔をして首を横に何度も振った。

派手すぎるよな、とわざと大きな声を出してドレスを衣装箱の奥へ投げて服を探し始めた。

「依頼書には誘拐する、しか書いていなかった。だったらあの子はどうするつもりだったんだ？」

「塔の中にずっといたからな……欲しいものは全て揃えてくれた人がいた。現実を知らないのさ」

「依頼書を執事に渡すくらいだからなっ俺らのことどうやって知っただろうな？」

「何度も公演しているからな」

「じゃなくて裏の家業なんて普通知らねえだろう？ 誰かから聞くにしても誰に聞くんだ？」

「執事じゃないか？ そんな話をしているんじゃないんだ。話をすりかえるな」

「はいはい。とにかく忠告は聞いておくよ。俺だって子供じゃないんだから大丈夫」

「そう……だといいいんだが」

テッドは帽子を取ってニコツとほほ笑んで部屋を出る。

一人にされたレオンを見兼ねたミレイが一枚のワンピースを差しだしてくる。レオンは顔をあげてそれを引っ掴む。

「あんな姿で居られたら気になって仕方ないわ」

「ありがとう。それで着替えも手伝ってくれると助かる」

「優しいのね。あの子には」

「俺は誰にだって優しいぜ」

「あっそ」

レオンの手からワンピースを取り返してズカズカとフランへ近づいていくミレイに怯えるフラン。背中越しに大丈夫だよ、と口パクで言うと同じように口をパクパクさせるものだから変な顔でミレイがフランの手を引いて着替え部屋へ引っ込んでいく。

外からの搬入も多く人通りがある部屋なので騒がしい。大工が舞台をばらす音や音響がスピーカーやモニターを回収している姿にホッと息をつく。

街から街へと移動する船なので舞台関係の荷物はここへまとめられて相変わらずごちゃごちゃしている部屋。大部屋なのに荷物が多いで小さく思える。

甲冑を外して衣装箱へ投げ入れてレオンの着替えは終了。女の着替えてるのは長すぎるな、と待ち疲れて着替えている個室を覗きに行こうとした時、ちょうど扉が開いた。

「あの……これ」

「いいんじゃないの？」

「でも……かなり薄くてスースーします」

「まああんなゴテゴテしたもん来てたら変な感じだろうな。ミレイありがとうよ」

小さく手をあげてミレイは去っていく。口も態度も悪いが面倒見

が良くて思いやりもある。

「よし。これで移動するまでに船の中を案内してやるよ」
「はい」

ニコツと笑うフランを連れてレオンは楽屋を出た。

長く細いだけの通路にさえ新鮮な驚きを見せるフランに案内してやるのは悪い気分では無かった。

いくつかの部屋であった劇団員ともうまくあいさつ出来ている様子で案内は順調だった。

居住区を適当に案内して船室が並ぶ手前の部屋へ来るところで案内は終わるはずだったが、問題が起こった。

「ッ!!!」

船全体が揺れるほどの衝撃にフランが倒れそうになる身体を支えるレオン。

揺れは断続的にあり、爆発音まで聞こえてくる。悲鳴や応戦する重火器の音まで耳に届いてくる。

「離陸するぞ!!! しっかりつかまっておけ」

親方の船内アナウンスが怒号のように響く通路。

演技にはやりすぎなんじゃないのか、と思いながらレオンはフランを部屋の中へと押し込もうとする。

だが、フランはレオンにしがみついて離れようとしなかった。

仕方ないな、と思いながらも外の様子が気になっていた。フランに当てられたゲストルームには窓があり、外の様子もつかえるはずだと言い聞かし二人で中へ入ろうと提案する運びとなった。

一緒に入ること約束すると納得してくれてフランも中へと入る。

狭い部屋。ベッドがあるだけの質素な部屋だが通常四人が押し込まれる船員室と同じ規模の部屋だった。

「これは……」

部屋に入るなりレオンは激しい音が気になって窓へと近づいた。フランもレオンに手を引かれて窓際に来る。レオンの手をしっかりと握りながらレオンの肩越しから外の様子をうかがった時、光が破裂して悲鳴をもらしてしまった。

「あの……ッ。何が起こって……いるんですか？」

フランは中腰になったレオンの身体へしがみ付いて顔をうずめた。窓の外にある光景をそのまま言えば大変なことになると思ったレオンは少し考えてからこう言った。

「花火だよ。演目には花火があがるだろう？」

「はい」

「その中へ突っ込んだ」

「でも演目は終わりましたよ？ 主役はレオンでしょう？」

思ったよりも冷静なツツコミにレオンはとぼけるように笑ってごまかす方法を考えた。

レオンにしがみついている間に城壁の上へ並ぶ大砲は見えない。重火器の音や兵士の怒号や城下町にいる人々の頭上を越えた位置まで来るまで無言でフランの頭を撫でて危ないからジツとしている、と言っていた。

子供のようにうん、とうなずいて言いつけを聞くフラン。

「演目は終わったケド帰る時にまた来てくれっていう花火をあげる

んだ」

「前はそんなの無かった」

「今年から始まったんだ。前に来た時は静か過ぎて祭りっぽく無かったからな」

「……本当？」

「ああ。本当だぜ。花火は今年からだから間違えてシーアテイルにかすったんだろうな」

我ながら無茶苦茶な言い訳だと思う。自覚はあるがそれ以上に思いつく言葉が頭に浮かんでこない。

フランの震えは止まり、動きも止まった。ゆっくりとレオンにうずめた顔を離すと真つ赤な鼻が見えて幼い顔がもつと幼く見えた。

「私のせいじゃありませんか？」

「いいや全然。誰のせいでもない。強いて言うなら親方が空路をもつと海側にすれば良かったかな？　ってくらいかな」

「…良かった」

「そんな暗い顔するなよッ」

「ごめんなさい」

「謝るなッてば」

「ごめ……なさい……」

しおらしくなるフランにため息を吐くレオン。

「本当に……ごめんな……」

「どうした？」

「レオン……あれ……私……何だか……」

「おいッー！　フランー！！」

「フラニー……」

「そんなことはどうでもいいー！！しっかりしろー！！どうしたんだ？」

！
」

「呼んでもらえませんか？」

「フラニー。これでいいのか？」

「ええ……」

突然倒れたフランを抱きかかえるレオン。浅い息に熱っぽく真っ赤になる顔。髪もびっしょりと濡らすほどに流れる汗。

レオンがあだ名を呼ぶと満足した笑みを浮かべて薄く開いていた瞳を閉じてやがて腕の中で眠るようにレオンへ身を預けたのであった。

「すぐにスウィニーを呼んでくる」

フランをベッドへ寝かせた耳元でそう言って部屋を出たレオンだった。

フランの身体

部屋を出たすぐにミレイが立っていた。手には銃が持ってあり、つをレオンへ投げ渡した。

「白兵戦になるのか？」

「護身用に一応ね。あなたの大切なお姫様を守りたいでしょう？」

「もう劇は終わったぜ」

「あら？ 怒ると思った時には無反応で鈍感なのね」

「なんで？」

「……いいわ。それでどうするつもりなの？」

「いきなり倒れたからスウィニーを呼んでこようかと思っている」

「戦闘中なのに？ よっぼど大切なのね」

「依頼が一番だって親方に教えてもらっただろう？ 何かあるうと依頼は達成するようにって」

レオンは銃の装填数を確認して腰にかけたホルダーへ銃を押しこもうとした銃をミレイが奪い取ってレオンへ向けてハンマーを親指で押した。

「何をするんだよッ！！ あぶねえぞ」

「小道具よ」

引き金を引くとカチツと空のシリンダーが回る音がした。装填されているように見える小道具。これを客に見せて音に合わせてアクションをするとより臨場感が得られる。

「外のも演出なんでしょう？ 現に近くを打っているのに一発も当たってないし」

「そう……そうだと思っぜ」

「レオンも落ち着きなさい。たぶんあの子のが移ったのよ」

「ああ悪い」

「そういうこと。私は寝るからその小道具も返しておいてね」

「それだけの為に持ってきたのかッ?!」

「いいえ。あんたみたいにパニックになった子から没収したばかりなの」

それじゃあね、とミレイは銃をレオンへ押しつけて通路を歩いていった。

レオンはその銃の引き金を自分で引いてみて小道具だと確認する。何度も使ったことのある小道具。軽くて装飾も派手すぎる。

どうしてこんなの間違えたのか。フランの焦りが伝染したのか。

「早く行きなさいよ。待っている人がいるんでしょ」

ミレイは二つ隣の船室へ入ろうとしてぼんやりと立っているレオンの背中へそう言った。

振り返ると閉まりかけた扉が見えてミレイの姿は無かった。

「そうだ。スウィニーのところへ行かないと」

スウィニーの医務室は一つ上の階にあり、シアテイルのエンジンルームとプレイルームラウンジの間にひっそりとあった。

そう広くない船内。レオンの足では二分もかからないで来られるが船が揺れているせいでもっと長くかかった気がする。

半分開いてある扉を内側へ押しして中を覗くとスウィニーが振り返った。

犬人族であるスウィニーは耳が長く垂れてあり、毛色は白と黒が混じっていた。

「何があつたの？ 白兵戦？」
「いや？」

首を傾げるスウィニーと同じように首を傾げるレオン。
うっん、と悩みながら一つの薬を取り出してレオンへ投げてよこした。

「魔法かけられているよ」

「魔法……？」

「そう。飲んで。ほらッ」

促がされるままにレオンは投げてよこされた小さな瓶に入っている液体薬をグビツと飲みほした。

すう、と頭にあつた熱が引いていくような感覚があり目が覚めた気分になった。レオンは薬を見てまた首を傾げた。

「魔法なんてかけられた記憶なんかあつたっけな？」

「イタズラなのかな？ 弱い魔法だけど混乱する魔法。誘惑も混じっている複合魔法。エルフが遊びで使う魔法だと思う」

「エルフ？ だったらエルフが近くにいたのかな？ 偶然通りがかつて魔法をかける」

「目つきが悪いから怖かったのかもね。エルフは気まぐれだからね」
「なるほど」

レオンは空き瓶を適当な机の上へ置いてうなずいた。

スウィニーも手をあげてもういいよね、と言うように振り返りデスクワークへと戻ろうとしたのを呼びとめる。

「そうじゃなくてフランが大変なんだよ。熱っぽくてちょっと見て

もらいたいんだ」

「フラン？」

「あの例のお姫様さ」

「あーそういえば外の騒動はそういうことだったね」

スウィニーは手元に並ぶ薬を適当に革製のカバンへ入れてやれやれ、というように立ち上がる。

見た目では分かりにくいが年齢の男だと自らは言っている。嘘か本当かわからないような昔話をずっと語るせいで医務室はいつも閑散としていた。

眠り心地がよさそうなベッドが二つ並んでいる。船室のやつよりも充分に広さがある。

レオンはゲストルームにスウィニーを案内する。船内の揺れはズいぶんとマシになっている。

ペタペタと素足で歩くスウィニーの足取りは遅くレオンは角を曲がる度に振り返りスウィニーを待っていた。

ようやく辿りついたゲストルーム。行きとは違う意味で長く感じた。

「さてさて」

スウィニーはベッドの脇に座って横たわるフランをジッと眺めて低い声でうなづいた。

その背後に立つレオンは退屈そうにそのスウィニーの後頭部を眺めていた。窓の外も落ち着いて巡航モードへ切り替わるアナウンスも流れたこともあり警戒態勢は終わったようだった。

通路にはそろそろと戦闘待機していた船員の足音が聞こえている。

「塔に閉じ込められていたって言うていたよね？」

「そう」

「そこには何があった？ 変わったことはある？」
「変わったことね…何と比べてだい？」
「比べる必要はない。たとえば外壁に札が貼ってあったとか」
「札か……」

時計台に登った時には室内の明かりでフランの部屋は見えしたが外壁の細部までは見えていなかった。

外壁はレンガを積み上げられた昔ながらの塔だった。円柱の建物で部屋の部分だけが他の部分より一回り大きく時計台側に大窓があった。おそらく円柱に螺旋階段があつて地上へ続いているだろう。

細部まで思い出そうとするとどうしても中の部屋ばかりが思い出される。部屋の明かりで奥の壁に本棚やベッドや人形の影が映っているのが見えていた。

「人形……そうだ。魔法人形がいたな」
「魔法人形ってのは魔力を吹き込んで動かすタイプのやつかい？」
「ああ。フランは勝手に動きだしたって言うていたな」

確か名前はシルクくんだった。
時計台に飛び降りたフランに手を振る無表情がなぜか強く印象として残っている。

「……だとすればこの憔悴した状況にも説明がつく」

「どういうことだい？ スウィニー」
「彼女は魔法を自然に発してしまう体質なのさ。まれにそういう人がいるって聞く」

「それは病気なのか？」
「それは何とも言えないね。赤ん坊に多いんだ。年齢と共に自然に解決される」

「でもどう見ても赤ん坊には見えないぜ？」

「普通は赤ん坊から大人になる過程で魔法を制御する方法を周りの大人から学ぶんだけど彼女はずっと一人で制御する方法を知らなかったのかもね」

手元に置いた革製のカバンから一枚の木製の札を取り出してフランの小さく膨らむ胸の上へと置いた。札には見慣れない文字が並んでいた。

「時々、執事が入って来ていたと言っていたのも関係あるか？」
「わからない。でも本か何かで知識を得て成長と共に魔力を培ってきたのが外へ出た興奮とストレスで制御出来なくなっただけというものも考えられる」

「それは……治るのか？」

「安静にしていれば問題ない。この札は微力に魔力を吸い取ってくれるからそれで大半を発し終えたら落ち着いてくると思うよ」

「俺は近くにいっても大丈夫なのか？」

「ああ。何かあれば呼んでもらえるかい？ この札の効力は次の目的地へ着くまでは充分持つから何も無いとは思う」

「ありがとう。だったら俺はずっとここで見ておくことにするよ」

「……レオン」

「ん？ 何だい？」

スウィニーはカバンを持って立ち上がり、こんなことは言いたくないかと前置きをした。

「あまり深く関わらない方がいい。彼女はお姫様で君はエレンでは良く思われていない」

「スウィニーまでテッドみたいなお話を言うんだなッ」

「そりゃそうだよ。僕だって可哀そうだと思ったりするけど君とこのお姫様が仲良くなるほど辛い別れが待っているんだよ」

「みんな重く考えすぎなんだよ。俺はただ……」

「レビーに似ているんだろっ？そっくりだ。若い頃を見たこともある奴なら誰でも目を疑いたくなる」

「……」

レビーとは幼い兄弟の母親で白い輪が目に出てきたことを恐れて教会へ兄弟を捨てた有名な踊り子だった。

まだ二歳だった弟の瞳には白い輪が無かったが兄と同じ血が流れているから怖いので、と言って雨降る街へ消えていった後姿を憶えている。

「まあ……昔は昔。今は今。そんなに思っているほど俺は子供じゃないぜ」

「それならいい。でも」

「はいはい。話は短く要点をまとめないと医務室のベッドが埃っぽくなるぜ」

話を続けようとするスウィニーの背中を押して通路へ押し出したレオンは振り返る隙も与えずに扉を閉めた。

「あの……」

「何だ？起きていたのか？」

「いいえ、さっき目が覚めました。このお札を置いてから気分が良くなりました」

「そりゃスウィニーを呼んだかいたってmondan」

へへへ、とイタズラな笑みを浮かべて枕元にちょこんと座るレオン。札を手に持ちながら起き上がるうとするフランの肩を軽く押し、寝ていると言った。

抵抗することもなく寝そべるフランは落ち着かない様子で窓の外を眺めるレオンへ視線をやった。

外は真っ暗で星も見えない。竜や大型の鳥がいれば閃光弾を打って追い払うから綺麗なんだぜという説明をしていた時、視線に気づいて立ち上がる。

「邪魔か？ ゆっくり眠りたいなら出て行くぜ」

「ううん……何だか嬉しいの」

「嬉しい？」

「ずっと一人でいるからこうして誰かの話を聞いていることが嬉しい」

「そうか？ まあ普通だぜ。いつか慣れるさ」

レオンは座る場所を探すように室内を見渡して話を続けた。本棚やサイドテーブルはあるがどれも座る場所とは言えない。

ゲストルームは本来一人で泊るように作られていることもありそれなりにモノは揃っているな、と自分の狭い船員室と見比べてしみじみと思っていた。

本棚の脇には扉がありシャワールームや専用のお手洗いも完備されていることに感心しているとクスクスとフランが笑った。

「そんなに面白いか？」

「はい。とっても」

「ううん……良く分からないが悪い気分じゃないぜ」

「レオンさんは不思議な方ですね」

「ここにいるやつは全員特別って言われているよ」

レオンがあまりにもめんどくさそうに話すのでフランも布団の中へ引っ込んでしまった。

それでも黙って待っているとひょっこりと顔を出してレオンを覗いてくる。

ため息を吐いてレオンはフランが眠るベッドの脇のフロアリングへ座って布団を剥がして顔を覗いた。

「もう平気みたいだな。札はずつと持っているよ。目的地まではまだまだ時間がかかりそうだからな」

「目的地？ この船は何処へ向かうのですか？」

「マリスフイーム。水の神殿があつて貿易が盛んな街だ」

「知っています。川がたくさん街中に流れていてレンガの橋の下をカーテルっていう扇形の船で移動しているんですよ？」

「そうだ。補足すると扇形つてのは一人用で主に商人が商品を運ぶ時に使う。観光には楕円形のカーテルが一般的だ」

「面白そうですね。ぜひ乗ってみたい」

「ああ街へ降りたら時間があるし乗せてやるよ。でも結構揺れるぜ？」

「大丈夫です。さつきも揺れましたし」

「ハハハ。あれよりは揺れないのは約束するよ」

フランは知識で得たマリスフイームをレオンは実体験したマリスフイームの話をした。

二人の話は尽きることがなく、最後には必ずその目で確かめに行こうなと言って約束を増やしていった。

脳裏にはスウィニーやテッドの言葉が過つたが見ないふりで話を続けた。

「貿易が盛んだと人がたくさん集まる。毎日がお祭りみたいなもんだ」

「あのような賑わいが毎日？ 楽しそう」

「楽しいぜ。そこへも案内してやるよ」

「ありがとうございます。楽しみにしています」

「ハハハ。でも離れるなよ。人が集まる場所には喧嘩がある。特に海賊がいれば厄介だ」

「海賊……？」

「海賊を知らないのか？」

「はい」

「海賊ってのは……」

あんまり怖がらせるのもどうなんだろうな、と思っ言葉に詰まるレオンは頬を掻いて悩んだ。

「すごいめんどくさい」

自分で言っバカかっと思っレオンはため息を吐いて忘れてくれ、と言った。

「とにかく街にいる時は俺から離れるな。そうしていれば俺が何とかしてやるよ」

「はい。勇者様ですものね」

「それは……だから劇の衣装だっば」

聞く耳も持たないフランは演劇好きなのが伝わってくる。本だけが全てで外に見えるものと言えれば一年に数回の演劇と兵士の訓練だけだろう。

それだけに演劇は輝いて見えるに違いない。華やかな世界は人を惹きつける。観客の瞳の輝きを見れば誰もが夢を見る乙女になるとテッドが言っ言葉をふいに思っだした。

キザな言葉。甘ったるい声でささやくと頬を染める客を幾度とな

く見てきた。

「竜が近づいてきているぞ」

管を通ってアナウンスが船内に流れる。

レオンは窓の外を見て確認するが竜はシーアテイルを仲間だと思つて寄り添おうとしていた。

「今から光るぜ。眩しいから目を細めてみるよ」

フランは上半身だけを起こして窓の外をレオンの視線を追つて竜を探した。

夜の空は真つ暗で月も無い。それでも必死にレオンの目線を追つた。

「閃光弾射出!!!」

アナウンスがそう言うのと少し遅れて閃光弾がよれよれと竜へ向かつて降りていく閃光弾の尾から漏れる煙が見える。

やがてまたたく間に光が暗闇と竜を追い払った。美しい楕円形の光にレオンも目を細める。上下に長く伸びる十字架となつて最後は闇に消えた。

竜は驚いて彼方へと消えて行つた。

「綺麗……」

ぼつりとつぶやいたフランの言葉。目を細めている横顔に綺麗だろつ、と言つた言葉も聞こえていない様子で恍惚とした表情を浮かべていた。

光が消えた後も余韻に浸っていたフランをレオンは見つめる。い

つか兄弟を捨てた母親の記憶はかすかにしか無いが似ているのはわかる。だから、ではないと自分に言い聞かしながらもう少しだけその横顔を見ていたいとレオンは思った。

マリスフイーム

フランは話疲れたようでありつの間にか疲れて眠ってしまった。レオンは彼女を残して部屋を出てすぐに親方がいるはずのブリッジへ向かうことにした。

これからどうするのかを訊ねるつもりだったがうまく話を切りだす言葉が思い浮かばない。頭を悩ませて何て聞くのかを考えていたが結局何も浮かばないままでブリッジに辿りついた。

扉をノックすると中からは入れ、というしゃがれた声が返ってくる。

「レオンかッあの子はどうしている？」

「すっかり眠っているよ。まあスウィニーが言うとは色々あって疲れが溜まっているそうだ」

曖昧な説明をするレオンは親方が座る座席へと続く階段を登りながらそう答えた。

操舵するレバーやレーダーモニターやアナウンスのマイクがずらりと壁際に並んであり親方の席はそれらと前方一面に広がるガラスと全てのモニターが見れる位置に陣取ってある。

ブリッジの後方を占拠するほどの大きな椅子は親方でさえ小さく見える。通常運航になるとそのまま横になって眠れるようにと作ったという話を聞いた。

親方は右肘をサイドテーブルに乗つけて頬杖をついてゆっくりと歩いてくるレオンを目で追っていた。

やがて一段低い位置で立ち止まると左のサイドテーブルに乗ってあったブランデーを瓶ごとひっくり返し大きな口に流し込む。

「被弾はどうだったんだい？」

「最小限かすつただけで巡航には問題ない。そんな心配をしに来たわけではあるまい」

「まあな……フランのことをちよっと話に」

親方は空になった瓶を足元に置くくと世話役のゴーがさつさと瓶を回収して椅子の裏側に隠れている部屋に引っ込んだ。

あの部屋は世話役ゴーの部屋というより倉庫と言った方がいい。

ゴーは常に頭まですっぽりとボコをはおっているネズミ族の女。

長く突き出た鼻だけが見えて表情は隠し続けている。親方以外とは一切話さえもしないので謎が深い人物だった。

「お前が心配するようなことはない」

「まあそれならいいんだぜ。ただ街へ行った後にフランはどうなるのかな？　って思ったりしてさ」

「依頼書には何も書いていない」

「そう。塔から連れだした後が何も書かれていないから……ほら仕事は最後まで責任持っていつでも言っているだろう？」

そうだ、と深くうなずいてちつとはそれらしい顔になってきやがって、と言った後にサイドテーブルにあるはずの瓶を探して宙を掴もうとする親方。

完全に酔っぱらっているな。大丈夫なのか、とレオンは思いながらも親方の機嫌を損ねないように話を続ける。親方は面倒になると会話もロクにしようとしなくなる。特に酒が入っている時はそうだった。

椅子の裏側の部屋からゴーが出てサイドテーブルに新しい酒瓶を置くくと親方はグイツと持ち上げて一口で半分も飲んだ。

「あの子のことは問題ない。街へ着けば向こうの国の人間に手渡すこととなっている」

「本当なのか……」

「何だ残念そうだなッ。惚れたか？　グヒヒヒッ」

「あんた飲み過ぎなんだよ。俺はただ……」

「ただ気になるだけか？　だからお前にあの子を任せただ」

「どっという意味だ？」

「恋くらいさせてやるうと思ってなッ。こりゃレオンの方がするとはなッ　ガハハハ」

「違うぜ！！　何を勘違い……してるんだ。酒を飲み過ぎだぜ少しは身体を気遣えってんだ」

「うっん……そうだ……そうすることにしよう。俺はちょっと寝るぞ」

酒瓶を逆さにして全てを飲みほしてから空になった瓶を足元へ置いて後ろへ倒れるように寝ころんだ数秒後には寝息を立ててやがる。

ゴーは慣れた様子で瓶を片付けて器用に両手で足を持ち上げて椅子の上に寝かせていた。

ブリッジの人間もいつもの光景だと言わなければかりに持ち場の仕事に集中している。途端に居心地が悪くなったレオンは頭を撫でながらため息を吐いて階段を降りる。

平らなフロアへ降りた時には寝息はいびきに変わり、とつと退散するのがいいって思えるような爆音がブリッジ中に響いた。

扉を開き通路へ出たレオンは親方の話を思い出しながら歩いていた。

「何だ……もう心配ないんだな」

小さな声でもらすとさらに胸の中にある感情が窮屈だつてギョウギョウと音を立ててくる。

フランには執事がいて国があつてシルクくんだっているしな、と言葉を吐く度に感情が抜けおちていく脱力感とすっぽりと抜けた虚

脱感が同時に襲ってくる。

何を考えているんだかな、と自分自身を自嘲して歩く。
足取りが重くて数秒後には立ち止まってしまった。このままフラ
ンの部屋へ帰る気にもなれずにふらふらと人の気配を避けていたら
いつの間にか甲板へ出た。

夜の風が気持ちよくてしばらくボーッと突っ立っていた。

「もう会うことも……でもまた公演をする時に会いに行けばいいか。
うん。そんなときも勇者の衣装で」

「何を独り言しているの？ 芝居の練習なら付き合っケド」

「ミレイ……か？ どうしてこんなところにいるんだ？」

「いたら悪いかしら？」

「そうじゃないけど」

甲板の柱の裏からミレイが出てきてレオンに話しかけてくる。と
つさに現れるもんだからビックリしたぜ、と言ったが冷やかな視
線に黙ってしまった。

「テッドの言う通りね」

「何が？」

「あんたは子供で別れる辛さを知らないってこと。私達みたいな流
れ屋稼業をしているとこれからも別れることばかりよ」

「俺だつて知っているさ。ただ……」

「ただ？ 言い訳ばかりね。そんなんだから子供だつて言われるの
よ」

「誰に？」

「……はあ……言つてて悲しくならない？」

ミレイは本当に情けないと嘆いて手に持っていた水を一口飲む。

「彼女は特別だってテッドだってわかっているわよ。母親に似ているんでしょ？」

「ああ……スウィニーも言っていた」

「だから気になるだけよ。ただ懐かしがっているだけなの」

「そんな言い方しなくてもいいだろう？」

「それよッ！ それがダメだって言うの。いつものあなたならそうかもなって言って他の話をしようとする」

そう言われて何も言い返せなかったレオンも自覚はある。自分の胸にあつたのは懐かしさなのか、と思うと楽になった気がする。

「テッドもああ見えてすごい繊細だから気にしているわ。あなたのこともあの子のことも」

「テッドが？ 母親に捨てられてうらんでいると思っていた」

「バカね。事情があることくらいテッドにもわかるわ。ただ納得するのに時間がかかったのよ」

「……」

「ああどうしてあなた達兄弟はダメダメなのかしらね。あきれて何も言えないわ」

ミレイは髪をくしゃくしゃと触ってオーバーリアクションでそう言った。

「これで少しは大人になりなさいよ。それと小道具を戻すことを忘れないでね」

石像のように固まったレオンを通り過ぎて船内へ戻るミレイはすれ違い様にそう言った。

ようやく振り返った時には後ろ姿も見えなかった。残されたレオンは小道具の銃を取り出して返しに行かないとな、と呟いて船内へ

戻った。

マリスフイーム

水の街と呼ばれるにふさわしく街中には路地よりも多くの水路が流れていた。

名物は二つある。一つはカーテルの上に商売品を積んでカーテルで観光する客相手に商売している光景。もう一つは

「この格好は？」

「名物だよ。同じ格好をしている奴が多くいるだろう？」

精霊術式が縁に書かれた巡礼服を頭まで被らされたフランは膝丈のスパッツを履いて動きやすい革の鎧を着たレオンに訊ねる。

街を見渡すと神殿へと向かう巡礼者が多くいて女性はほとんどがこの服、カムイと呼ばれている服を着ていた。

名物のもう一つは宗教。水の神として精霊セイラムを崇める宗教が盛んな街。一日に一回は巡礼として神殿へ祈りを捧げる列が見られる。

「それはわかりますがどうしてこの服を私に？」

「普通の服を着ている方が目立つだろう？ ミレイだってこの街にいる間はあの服を着ているぜ」

「本当ですね。ミレイさんは何を着ても似合います」

目をキラキラとさせて少し前を歩くミレイを見る。細身の身体に

はサイズが合わないカムイしか無くて不満をもらしていたのは黙っておこう。

「フランだって似合うぜ」

「はい。サイズもピッタリです」

「それは子供用だけだなッ」

「え……？」

「ハハハやっぱり似合っているぜ」

「もうッ！！ 辞めてくださいよ」

「悪かったって脱ぐなよ」

脱ごうと手をかけたフランの腕を掴んで謝るレオン。少しだけ振り返るテッドは何も言わずにまた歩き始める。

わかってているよ、と心の中で答えるレオン。まだ時間はある。せめて日が落ちるまでは楽しくいさせてくれよ、と続けてテッドの背中へ言った。

「悪いな。もう機嫌治してくれよ。ほら…仕事が終わったら観光しようぜ。何でもおごってやるよ」

「何でも……ですか？」

「おう。好きな場所へ連れていってやる。名物の水饅頭なんか柔らかな歯ごたえに甘いタレがかかってそれを食べながら街を歩こうぜ」
「そう言うのなら許してあげますよ」

フランはようやくニコリとほほ笑んだ。急に上機嫌になり鼻歌交じりに何を食べようかなと内側のポケットから取り出した街案内のパンフレットを広げた。

一行が向かうのはギルド【メロウスリープ】。倉庫街の手前にあり、そこでフランを引き渡す手筈を整えると言っていた。

すれ違う人は先頭を歩く親方を見るなり怯えたり道を開けたり様

々だった。が女性に関してはその隣にいるテッドへばかり視線を送っていた。

カムイを着せなくとも目立たなかったのかもしれないな、とレオンは思いながら退屈そうに街を歩いた。ギルドへ入っても話は親方とテッドとミレイが行う。

いつもレオンはロビーで待たされて指名手配写真やすぐに解決出来る小銭稼ぎの仕事がないかをチェックするだけだった。

「これとこれとここへ行つて」

「そこは退屈だぜ？ 何も無い」

「何を言っているんですかッ？！アスカラミュージズの舞台となった神殿ですよ。円柱がたくさんあってその一つ一つには神様が彫つてあるとか」

「神様だつたんだ。立ち入りも可能な場所だから見れるぜ。ただちよつと思つたより小さいケドな」

「小さい？」

「親方と同じくらいかな？」

「充分大きいと思いますよ。約束ですね。絶対に連れていってくださいな」

「わかつた。あんなので良ければいくらでも見せてやるよ」

レオンが約束するとフランはやった、と子供のように喜び次に見るモノを探していた。演劇の舞台になった建物や場所をめぐる旅になりそうだな、と今まで行った演劇を思い出そうとして五秒後には辞めた。

とにかく日差しがキツイ。水路にいと涼しいくらいなのだが倉庫街には水路は無く風を遮断するように隙間なく建物が連なっていた。

倉庫街にもカムイを着た人間も商人も多くいるが、それ以上に屈強な男の数が増えている異様な光景だった。

リゾート地には似合わない物騒な装備を抱えて互いをけん制するようにならみ合っているが親方を見るなり視線を外そうとする姿も見慣れたものだった。

巨人族は気性が荒く、好戦的で野蛮だと決めつける多くの伝説が間違った形で広がっている。

親方は特別に気にする風でもなくマイペースに歩みを続けている。その足がメロウスリープの前で止まった。

外観は街に溶け込める工夫がしており、綺麗な色のレンガが積み上げられて二階のテラスにはカフェスペースも設置されている。これはマリスファーム政府の要請があり景観を損ねる建物を全面禁止にしてあるからだ。

だが、入るのは屈強な男がほとんどだ。

「レオンツッ！ 合流は夕暮れ時で後は自由行動させてやる」

「いいのか？」

「お前がいても退屈そうにしているだけだからなッ！！ お姫様も連れていけ」

「そういうことなら夕暮れまで街を歩かせてもらっぜ。さあ行こうぜフラン」

親方は首を鳴らしながらメロウスリープの扉を開いた。

テッドやミレイもその背中へついて中へ入る時にレオンの顔をちらりと覗いてきたが心配ないぜと言うように微笑み返しておいた。伝わっているのかどうなのかわからないままに二人は扉をくぐって中へと消えていく。

「あの……」

「いいんだよ。いつつもこうだ。俺は交渉や話しあいつてのがとんとん似合わないらしい」

やれやれと肩をすくめるレオンを見つめるフランの手を無理やりに引いてさあ行こうと歩き始める。

親方がくれた最後の時間を一秒でも無駄にしたくないから少々か
け足になったかもしれない。はじめは戸惑っていたフランも次第に
自分からレオンの手を引いてあれやこれを見たいとか食べたいとか
言うようになっていた。

中でも気に入ったのはカーテルの弾力性ある乗り心地と水饅頭の
タレだった。その二つを堪能しているカーテルの数メートル先に見
えるレンガの短い橋があつて子供達が風船を片手にこちらへ手を振
っている。

「振り返してやれよ」

「え？ 私か？」

「子供はそれが無性に嬉しかったりするんだぜ」

フランは橋をくぐり終えた後に振り返り手を振ると子供はすでに
路地へと走り去っていく背中が見えていた。

ほんの少し寂しげに残るあげただけの手をゆっくりと自分の元へ
戻して慰めるようにもう片方の手で握った。

「遅かったか。タイミングってのは難しいぜ」

「ええ」

「次はすぐに振り返せばいいんだ。水路はまだ充分ある」

「はい。次はきつと振ります」

「ハハハ。その調子だと怖くて逃げちまうかもなッ」

グツと拳を握り頑張ると言ったフランの顔が徐々に笑顔になった。
カーテルは市街地の水路をゆつたりと一周して元に乗った場所に
戻った。船着き場から手を伸ばしてゆらゆらと揺れ足場の悪いカー
テルからフランを引き上げる。

細くて軽すぎる身体。ふいに見せる儂い笑顔が胸を痛める。この数時間すればまた塔に戻るのか、と考えると時間が止まればいいのになって本当に思った。

「次……はありませんでしたね」

「ああ……ああ。でも次はまたある。今日じゃなくともまたいつかくればいいんだから」

「その時は一緒にいてくださいますか？」

「もちろんさ。次は俺も手を振ろうかな？」

「いいですね。約束……ですよ」

「ああ」

二人をおろしたカーテルが次の観光客を乗せて水路へ流れていく。すぐ目の前に見える露店で水饅頭を買って頬張る姿が曲がり角で消えると二人は次の目的地、神殿へと向かった。

カーテルが停泊していたのは港の隅。広場へと続く道があつて時計台を中心に左手に伸びる長い橋が神殿へと続く橋だ、と説明していると背後から声をかけられた。

「おやおや……リアムの方ではございませんか？」

「ん？ ああセイファーク」

「うふふ……お名前を覚えていただいて光栄です」

背の低くぶかぶかで装飾品だらけの海賊衣装を身にまとった髪の毛長い男が【セイファーク海賊団】の若頭。その背後には露出が高い服を着ている魔術師アリーダーと巨人族のゴルザレムがいた。

手には衣装と同じく装飾品で飾ったキセルがあり、長くて杖のよっに見えた。

ついでにリアムとは白い輪がある人間の呼称だ。古文書の一節にそう書かれていたことに由来する。

「お連れの方は例の人ですね」

「……」

「申し遅れました。私はセイファー。海賊の父を持っておりますが私自身は貿易商人と自負しております。エレンとも取引がございますのでぜひご贖戻に」

「……」

「怖がらないでください。うふふふっ」

フランはレオンの背後へと一歩下がり腰辺りをギュツと握った。セイファーからフランを隠すように前で出るレオン。

「フランって言うんだ。もう知っているだろうが色々あるんだよ。察してくれよ」

「色々とは淫靡いんびな響きですね。うふふふ」

「まあ……そうかどうかは知らないがほら海賊は誰だって怖いだろう？だから用事がないのなら去ってくれるか？今は案内をして楽しい思い出ばかりを作りたいんだ」

「そうです。観光とはそういうもの。ではお話を少しだけ」

「何か用事なのか？」

「ええ。神殿へ行かれるように見えたのでご忠告を一つ」

「ご忠告？」

「はい……うふふふ。ここ数日、神殿の地下へ降りる階段が開かれており多くのハンターや傭兵や海賊が押し寄せております」

「だから気をつけてってことか？いつからそんなに親切になったんだ。気味が悪いぜ」

「うふふふ私はいつだって親切です」

「そうかい。だったらありがたく聞いていますよ。話は終わりだな？それじゃあな」

「ええ。またお会いしましょうか」

レオンはそれ以上答えずにフランの手を引いて神殿へ続く長い橋へと歩いて行った。セイファーは追いかけてくることもなくやけにあっさりと手を振って引き下がったのが気になった。

いつもならば長く内容のない話を難しい言葉で繰り返してくるものだが、と考えたがすぐに頭の外へ押しやった。

長い橋は真つ白なタイルで作られてあり、足元を支える細い二本の支柱が等間隔で並んでいる。

「気にするなよツ。セイファーはいつもあんな感じだからさ」

「はい。でも地下へ降りる階段って言うていました。それは水の精霊が眠る本当の神殿への道が開かれたっていう話なんですか？」

「よく知っているなって舞台でもやっていたよな。そうだ。神殿の中へ入る学者や信者が雇った傭兵や海賊がうるうるしているってだけの話」

「神殿の中に入るだけなのに……中には魔物がいるのですか？」

「魔物がいたとしても扉が開いたのは数十年ぶりだから食料がなくて死んでしまっているぜ」

「そうですね。それなら怖くありませんのに」

本当に怖いのは互いのことさ、と言いかけて辞めた。心配症なんだよ、とだけ言ってこの話を辞めようとした。

「私も行ってみたいです。何もないのでしたら舞台になった場所は全てこの目でみてみたいです」

「ああ……まあ……ううん……」

「レオンさん？ どうかしました？」

「いいや。奥へ入ると親方との合流時間に間に合うか……長い道中の神殿だって聞くからな」

「長い？」

「ああこの橋よりも長い洞窟がある。だから入口の扉までだったらダメか？」
「……………」

かたくなに口を閉ざすことで抗議しているわがままな一面は心を許し始めたつてことか？とレオンはため息を吐いてそう胸中で思う。もちろん長い洞窟なんてものはない。だが神殿へ入るのは危険すぎる。セイファーが知っていたということは誰かがフランをさらおうとすることも考えられる。

杞憂なら見れなかったで済むがさらわれたら何をされるかわからない。そもそも何もなければ誰も護衛を雇うことはない。

そんな真実を言うより綺麗な思い出を残してやりたいと願うほどに嘘は増えていく。

「大きいですね」

神殿の前で入口を見上げるフランがようやく口を開いた。さきほどまでの不機嫌が嘘のように笑顔を見せている。

「水没している本当の入口はもっと大きいんだぜ。これは二階で披露目の時に使われていた場所なんだ」

「すごいッ。すごいです。レオンさん」

「ハハハ。喜んでもらえて嬉しいよ。中はもっとすごいぜ」

すっかり元気を取り戻したフランは橋を歩くのに疲れていただけなのかもって思える。横に広く小さな段差が七つある階段を走って登るフランの背中を追いかけれるレオンもつられて笑った。

入口には二本の大きな柱があり、圧倒的な存在感の半裸の髭を蓄えた男が柱の中間を支えている。これもオルトの剣つていう劇で負傷した主人公がもたれかかるシーンで有名だった。

フランは男の彫刻のふとももを手で触れてその場で座り込む。ちょうどオルトと同じ格好で背中を預けたところで階段を登り終えたレオンが目の前に立った。

「満足かな？」

「はい」

レオンは手を伸ばしてフランを立たせた。

背後には吹き抜けの礼拝堂があつて12の半裸の男の彫刻がある柱が壁際に内向きで並んでいた。

変わったものと言えば銅像の代わりに一段高い段差の上に壺が置いてあり、天窓から差し込む光がちょうど当てられていることだった。

神の水、と呼ばれてコインを投げ込むと幸運が訪れるという壺。フランへコインを一つあげて壺へ投げさせる。壺の五分の一がコインで埋まって足元には水がこぼれたシミが出来ている。

定期的に集めて神殿の補修に使われていることを知れば誰だつてありがたみが無くなるので黙って両手を合わせていることにしよう。

「何か願いごとを言えば叶うかもしれないぜ」

「……願いごとは誰にも言っちゃいけないですよ」

「幸運つてのは恥ずかしがり屋なのかな？」

「ふふっどうなんでしょうね」

フランはそう言ってまた願いに戻った。レオンは願い事か、と考える。

ふいに過つたのはもう少しだけ一緒にいたいってこと。親方は二度と戻らないと言つたが気が変わることも祈つておこつたか。そうではないと会えないもんな。

待てよ、それよりも塔から出られるように体質の改善を願つた方

がいいのか？

……まあいいか。とりあえずまた会えるようにって祈っておこう
と思った時、ゴゴゴゴゴゴ、と地鳴りが足元から迫ってくる。

「何だツ?!」

レオンは目を開いて周囲を見渡すが特に変わった様子もなく気の
せいか、と思った。
だが

「大変ですツ!!! みなさん、落ち着いて外へ出てもらえますかッ
!!!」

神殿の奥に見える階段から一人のカムイを身にまとった女がそう
叫びながら走ってくる。その背後の闇から地鳴りの正体が見えた。
人だ。人の足音がこの音だった。
海賊やハンターや学者や信者。様々な装いから開かれた扉から逃
げてきているのだと確信する。

「俺達も逃げるぜ」

レオンはフランの手をとって走ろうとした時、人ではない大きな存
在が闇を引き千切り姿を現した。

神殿

全身を青色の炎で包んだウォーラムという鹿に似た召喚獣。水の精霊の使いと呼ばれその存在も幻とされている。

ウォーラムは辺りを見渡して何かを探している様子でゆったりとした足取りで歩いてくる。中央にあった壺を蹴飛ばして割れる音が響いたが誰も聞いていなかった。

それ以上に男達の悲鳴がうるさい。レオンはフランの手を引こうとしたが、鉛みたいに重くて動かない。

「おい……フラン？」

ウォーラムと似た青色の炎が全身を包んであり、その瞳は虚ろなものだった。

共鳴と呼ばれる現象。精霊同士が何かを伝えあう時に起こるテレパシーのようなものだと言われているがどうしてフランが？ウォーラムもどうしてここへ？幻獣扱いされて使役するのも難しいはずだが。

疑問は次々と浮かんだがその答えを求める時間は無い。レオンはフランを抱きかかえようとすがビクともしない。

「何だつてんだッ！！」

「よ……よんでいるの？ 私を呼んで……何ッ？ 聞こえない」

「おいッ！！ フランッ！！」

魔法を発する体質がウォーラムを無意識に召喚した？そんなことも思ってはありえないと否定した。

だがフランが何らかの魔法を使っている、あるいは使用者とコンタクトをかわしているのは間違いない。嫌な予感は当たった、と辺

りを見渡す。術者を探したが人が多すぎてわからない。

「待ってッ！！ まだ何もッ」

フランはウォーラムへ向かって手を伸ばしたがその姿を保てなくなったウォーラムはわずかな炎だけを宙に残して消えてしまった。同時にフランを包む炎も消えた。騒ぎが終息していく神殿内。まばらに足音も止み始めてついに誰もが立ち止まり狐につままれたような顔をして互いに顔を見合わせる。

夢なのか、イタズラか、という言葉が飛び交う中でフランは手をおろした。

「行かなきゃ……」

「何だつて？ フラン？」

小さな声で何かをつぶやくフランが下ろした手の甲を擦り不安げな顔で奥の暗闇を見つめた。

レオンは視線を遮るように立ってフランの顔を覗きこむが虚ろな瞳でレオンさえ映っていない。

「呼んでいる……私を呼ぶ声が聞こえた……」

「おいッ！！ フラン？」

「レオンさん、行かないとダメなの」

「行かないとダメって言われてもな。何処へ誰に会いに行くんだ？ 下の神殿に誰かがいるっていうのか？」

「ううん……それはわかりません」

レオンは首を振るフランに頭を悩ませる。その虚ろな瞳を見ていとダメだ、とは言えなくなる。

呼んでいるとなればウォーラムを召喚した人間もいるということ。

それは危険なことなのだろうか。短い間で思考を巡らせるがその全てはフランの丸く大きな瞳に吸い込まれていった。

「私は一人でも行きます。レオンさんはここで待っていてください」「どうしたんだ？ いったん落ち着いて考えてみようぜ」「冷静です。理由は説明出来ません。それでも何か私を待っている」

「うっん……困ったもんだな」

レオンは説得する言葉を探したが見つからなかったのは自分もあれが何なのかが気になっていいることにあると思った。

止めるべきなのに自身も行きたいと思っっているという矛盾が胸にあつて困っているレオンは自分が守れば大丈夫かと諦め口調で護衛としての責任を持つ自分の心を慰めて奥の部屋へ振り返る。

騒ぎがおさまってぞろぞろとまた人が中へ入っていく姿があつた。人の列が消えるまで背中を見送ってフランへと向き直る。

「一つだけ約束できるか？」

「……？」

「俺から離れないこと。それが出来れば奥へ行くくらいなことないさ。ついて行くぜ」

「はい。お願いします」

フランがようやく表情を見せたのは笑顔でなく不安に満ちた、まるで怪我をした動物を心配しているみたいな悲しみがある表情だった。

何も気付かないふりでつとめて明るく行くこうぜとフランの先頭に立って奥の部屋へと歩き始めるレオン。

階段を降りると最近に舗装された場所も終わり、むき出しの岩肌
が迫ってくるように見える道へ足を踏み入れる。

天井や左右の壁に埋め込まれた魔法の光で多少の明るさはあったが不気味な静けさがあった。肌でそれを感じた誰もが表情を引き締めて知らずに無言になっている。

「大丈夫か？」

背後にいるフランに気遣ってレオンはそう訊ねたが返事はない。もう一度だけ呼びかけて大丈夫かと訊ねたが上の空だった。

レオンはしっかりと手を握ることで自分が守る意思表示をしなければ儂く消えてしまいそうなほどに思えた。杞憂ならいいが、脳裏にはウォーラムの姿が過る。

「痛いすツ！！」

「あ、ごめんな。考え事をしていた」

「いいえ。すいません」

「どうして謝るんだよ？俺が悪かったんだぜ」

「いいえ……あの……」

フランは振り返るレオンからも目をそらせてまた無言でうつむいた。レオンは強く握った感覚は無かったが知らずに自分も緊張していることに気づかされる。

道は親方でも通れるほどの広さはあったが体感するに半分ほどに思える圧迫感があった。それは魔法の光のせいだと光を睨みながら歩みを続けていると徐々に道は広がって一つの大きな部屋に出た。人が立ち止まり、人だかりが出来ていた。

「行き止まりか？」

「扉があります。あれが神殿への入口？」

「そうみたいだな。だが魔法士が魔法を唱えているのも無駄だな。こりゃ扉が開かれたってのは何だったんだ？」

人だかりの隙間からは鍵を解除する魔法の光が漏れて見える。一人ずつ腕に覚えがある魔法士が詠唱を続けるが青白い装飾をされた青銅らしき扉はピクリとも動かなかつた。

一人、また一人魔法を辞めてすごすごと戻っていき、ついにレオンは先頭になった。

天井すれすれまである背が高い扉は横幅も数メートル以上ある。とりあえず触れて壊せそうな脆い部分がないかを確認したが見つからない。

「扉が開いたって話だが、これは？」

「開いたのは階段の先にあった第一の扉。これは第二の扉になります」

扉を監視する神殿に仕えるカムイを着る信者がレオンの疑問にそう答えた。

「扉つてのはたくさんあるのか？」

「神殿へ続く扉は三つ。これを抜けると神殿の内部には入りませんが祭壇へ行くにはもう一つの扉が開かないなりません」

「扉がまだあるのか。だったら奥には誰もいないのか？」

「はい。扉が開いたのはもう何十年何百年も前の話になります。生きた人間がいればとづくに死んでしまっている」

「だったらさっきのウォーラムはどこから来たんだ？　ここで召喚した奴がいたのかな？」

信者へ素朴な疑問を口に出してフランを横目に見る。レオンと同じように扉に触れていた。

「あの召喚獣はこの扉の奥からヌツと姿を現しました。半透明な身

体だったので扉の傍で召喚され、具現化される前に扉をすり抜けた
と思いましたが……」

「思いますが？」

「さきほどの話の通り、生きた人間がいればとつくに死んでしまっ
ています」

「別の道があつてそつから神殿へ入つたんじゃないのか？」

「あり得ません。神殿への道は一つしかありません。海の外からも
別の入口を探した歴史はありますがどれも見つからなかったと一致
しております」

信者はそう言つてイタズラか何かだと思imasるので心配しないで
くださいと付け加えた。

「もちろん我々の仕業でもございません。ウォーラムが出たという
前例は聞いたこともありませんのでやはりイタズラではと思います」

「扉の奥から出てきたように見せる方法はいくつもあります」

「それに魔術師が騙だまされるつて考えるのも何だと思つぜ。なあフラ
ンツもついいだろう？」

信者からフランへ向き直り諦めようと言おうとした時、フランの
身体からまたあの青い炎が発しているのが見えた。

小さな炎で目の錯覚かと思つたほどにうつすらと燃えている。レ
オンはフランの視線を追つて扉の上部を見上げると扉の縁も同じ青
色に輝いているのが見えて訝しげに目を細めた。

反応しているのは間違いない。やはりフランと関係があるのだろ
うかとレオンは不安に思つた。

「……この奥にいるの？」

フランの声。

誰かと話しているように相手を思わせる妙な間があった。うん、とうなずいて扉の端へと扉へ沿って移動し始める。

レオンと離れていくフランが縁際で立ち止まる。

その細く白い腕がカミイの裾からすうーっと現れて縁の青い炎に触れる。

「レオンさん。開きます」

レオンはその声に従って数歩下がると遅れて足元が揺れ始めた。

周囲を見回すざわめく人々がまた来るのか、と呟いた。

扉の炎は静かに消えてフランを包む炎も共に消えた。ゆっくりと終息する揺れを吸収するように扉がつつすらと開いてその奥の景色が見えた。

手入れされていないのに美しい光沢を放つフロアがあり、宝石に似て人々を魅了する。誰もが悦に浸りながらも我先にと中へ雪崩れ込んだ。

「どうやって開いたのでしょうか？」

信者は興奮した様子でフランに訊ねる。

「たまたまタイミングが合っただけさ。中へ入ってもいいかい？」

「ええ……あ、あの……あつと……」

「さあフラン行こう」

それ以上詮索されることも嫌だと思ったレオンがそう答えてフランを中へと連れて行った。

光沢が放たれたフロアは歴史以上の価値がある量で埋められて足で踏むのももつたないと感じて素足になる人々も大勢いた。

掘り返して一部を盗もうとする人間もいたがフランにどうやって

開けたか、と訊ねてくる人間がいなかったことに安堵するレオンがフランの手をぎゅっと握った。

「絶対に何があっても守ってやるからなッ」

「……レオンさん」

不安を感じているのは自分の方かもしれない、と自嘲めいた言葉を胸中で吐いたレオンは手を離して先を急ごうと言った。

ただっ広いフロアは壁も天井も同じ素材でできている。光沢を放つ青が入った白色のブロックを詰めこまれてあり、濁って鏡のような反射はない。大理石に似ている素材だった。

神殿と言うよりは墓場のように見えるのはあまりにも殺風景だったからだろうか。

レオンは歩みを進めて神殿の奥の三つ目の扉とやらを探すことにした。

「扉が開いたことをどうしてわかったんだい？」

「また声が聞こえました。縁に触れて開いて欲しいって願えばいいって」

「願ったのか？」

「……はい」

「どんな声だった？」

「可愛い声でした」

「可愛いね。まあ嫌な気がしなかったのなら相手も攻撃を仕掛けてくることは無いと思うんだが……ううん……」

「レオンさん……？」

「うん？ ああ俺の考えすぎならいいけど警戒はしておくぜ」

レオンはそう言うとフランは浮かない顔をしていた。

その理由も知らないふりをして歩き続けて五分してようやく三つ

目の扉が見えた。

外見はさきほどの扉に似た青銅の扉だが、中央に窪みがあり円形の何かが埋まっていたと思われる。

「声は聞こえるか？」

「いいえ」

「何か感じるか？」

「いいえ」

扉の前で短いやり取りをする二人。

レオンは手で触れた。門扉にはひんやりとして滑らかな手触りがあつたが中央の窪みだけが熱を持っていた。

あの青い炎が填まっているのを想像して頭を振った。

「何か見えるか？」

「見える？」

「たとえば炎とか青い炎」

「青い……炎ですか……？」

フランは考え込むが全然憶えていない様子にレオンは何でもないと答えた。

「俺にも普通の扉にしか見えないぜ。これを開く鍵も見当たらないければ……諦めるしかねえかな？」

「奥にいるとも限らない。声つても……ってフラン？ 聞こえてくるか？」

「……え？」

「だから」

「聞こえないッ！！ もっと大きな声でッ！！」

レオンの返事ではないと気づいたのはフランの視線だった。
明らかに扉の奥の何かに向かって叫んでいる。レオンには聞こえない声がフランを呼んでいる。

「ッ！！ 危ないッ！！」

扉の奥から迫る音の波に反応したレオンはとっさにフランを抱いて扉の前から逃げた。

次の瞬間、扉の中央の窪みに青白い光の玉が現れて光を放射線状に放ち始める。その光の球体にヒビが入る音がした数秒後、光は割れて扉が開いた。

中から人ならざる何かが青い炎に押されて後方へ吹き飛ばされていく姿が横切った。

レオンは炎からフランを守るように丸まった。背中が燃えるように熱くて振り返ることさえ出来ない。

熱風に抱かれた悲鳴も神殿の入口辺りから聞こえて炎の大きさを知る。

「何があつた？」

扉の中にあつた全てが放出されてようやく振り返ることが出来たレオン。

周囲の宝石に似たブロックには焼け焦げる跡もなく、奥にいた腰を抜かした学者達も魔術師が展開する多重層結界に守られていた。不自然に開いた神殿中央のスペースには吹き飛ばされて現れた人ならざる何かが立ち上がるうとしているのが見えた。

「何だ……あれは……」

灰褐色の皮膚で覆われた背の高く細い人間がドロドロと溶けて足元に灰色の水たまりとなる。

魔術師はその光景に警戒しながらも結界を解いてその何かの動向を探った。灰の水たまりはぶくぶくと気泡を表面に浮かばせて形状を変えようとしたが、うまく整えられずにまた水たまりとなる。

やがて動きが止まり、表面から黒煙と白煙が別々の方角へと流れている。

「これを吸い込むなッ！！　これが本体だッ！！」

誰かが叫んだ。

煙はその声に反応し逃げようとする人々よりも速く、その四肢に巻き付いて絞めあげる。

運よく逃げ切れた人間達は助けようともせず、我先にと入口へと走り続け、広い室内には煙に抱かれた人間とレオンとフランだけが残された。

「フラン……俺達も逃げるぜ」

「ダメッ！！　私を呼んでいる声がします」

「そんなことを言ってもッ」

煙に抱かれた人間はやがてずると煙を発する灰色の水たまりに引きづり込まれ始めた。

「行かないと……私は行きます。レオンさんは助けてあげて」

「助けるっ たつて……一体何をすりゃッ」

「お願いします」

フランはレオンの手を解いて開いた三つ目の扉へと走っていく。その後ろ姿を追いかけようとしたレオンを呼びとめる煙に抱かれた

男達の救いを求める声。

迷いながらも剣を抜いて灰色の水たまりへ走った。逆さに構えた剣を突き刺して自身はさつと後方へ逃げる。刺さった剣先を表面の泥が溶かしていく。ジュツと煙をあげて折れていく剣の柄がころんと転んだ。

「何だつてんだッ！！」

レオンはゆっくりと中央へと縮小していく黒煙と白煙を腕を頭の前で交差しながら突き破っていき、二つに離すことに成功した。

先端しか残っていない黒煙や白煙を自らの魔法で引き剥がす魔術師がレオンへ礼を言つて結界を展開しながら逃げ出した。

「はあはあ……重くなる……」

身体に付着した煙がレオンの動きを制御してくる。それに抗うが重たくて耐えているだけでやっとだった。

グググつと水たまりへ引きずり込もうとする力に足を踏ん張って耐えるレオンに水たまりから白煙と黒煙が同時に襲いかかってくる。避ける力も残っていない、と観念したレオンの全身を煙がすっぴりと覆いかぶさった。

「クソッ！！ 離れやがれッ！！」

身体を包もうとする煙を千切つて投げて抵抗するが、投げられた煙はふわりと浮かんで戻ってくる。

ぎゅうぎゅうと押し込んでくる煙を押しつけようとした時、背中にもあつた煙に押されてバランスを崩して傾いたレオンの身体を一気に水たまりへ引きずり込もうとする。

フロアに水平に滑る身体がぐんぐん、と頭上にある水たまりへと

進んでいく目の前に剣の柄が見えた。

「次は折れるなよッ」

煙から手を出して剣の柄を掴んでフロアのブロックの隙間へと挟んだ。手がしびれるほどの衝撃があったが決して離さなかった。

しびれがレオンの全身を抜けて煙へ流れたのか、煙はふわっと浮かんでレオンの身体はフロアへと投げだされた。

「何とかなったか……はあ……はあ……」

折れた剣の柄を支えにして身体を起こすレオン。煙は水たまりへと吸い込まれていくのが見えた。

「今の内に……はあはあ……フランを……」

レオンは折れた剣を構えながら後ずさりしながら背後にあった三つ目の扉へ向かった。

追いかけてくる様子もなく表面に気泡を浮かべて佇む灰色の液体。レオンの身体は三つ目の扉をくぐり終わると扉はバンと勢いよく閉まった。

「一安心ってか……それとも罠にはまったか……？」

鞘に折れた剣を押しこんで踵を返したレオンはフランを追いかけ走り始める。

長い一本道。長方形の整えられたブロックに囲まれた道をひたすらに走り続けた先に祭壇の間と思われる広場があった。ドーム状の建物で天井の立派な金色の装飾が施された縁にそって水が流れて壁を濡らしている。足元にある小さな穴に水は吸い込まれて床の下へ

と流されているのが音でわかった。

祭壇は中央にあつてそこにはフランが何かを仰ぐように立っていた。その視線の先には青白い光があつてゆらゆらと浮き沈みを繰り返している。

「レオンさんッ」

「安心してくれ。全員逃げられたぜ。後は俺達だけだ。出口は他にないのか？」

足音に気付いたフランがレオンに振り返る。レオンは振り返ったフランにこう訊ねながら近づこうと歩くと青白い光がすごい速さで振動し始めた。

とつさに剣を構えようとして柄に触れたが折れていることを思い出して手を離れた。その場で光はくるり、と回り泣きつくかのよう
にフランの掌へと舞い降りた。

「怖がらせないください」

「怖がら……怖がる？」

「はい。この子が怖がってしまいます」

フランは指の腹で光を擦って大丈夫だからね、とほほ笑んだ。レオンは首を傾げながら近づいてフランの背後から青白い光を見おろした。

光の中には全身青色の羽根付きの妖精がいて泣いている。

「呼んだ声の正体はこれ……なのか？」

「はい。フェリアっていう名前にしました」

「しました……って」

「人間の言葉では発音が出来ないのでそう呼ぶことにしました。可愛いでしょう？」

神経が太いのか、マイペースなのか。フランはさきほどの光景を見ても焦る様子もなく掌の中のでフェアリアを夢中で撫でていた。指には青白い粉が付着してあった。

「可愛いのはいいが。さっきのあいづがこっちへ来るかもしれない。そいつも連れていけるならさっさと逃げよう」

「フェアリアです」

シルクくんにも妙なこだわりを見せたのを思い出した。

「フェアリアか……そうだな。よろしくフェアリア」

レオンも調子を合わせて掌にいるフェアリアへ触れようとした時、扉が壊された音がした。

「もう来たかッ」

「あの灰色の水たまりが狙っているのはこのフェアリアです。もっと言えばフェアリアに眠る水の精霊の力」

「フェアリアってのは精霊なのか？」

「媒体です。フェアリアに魔力を与えると水の精霊が召喚出来ると言っています」

「言葉がわかるのか？ そりゃ勉強したかいたがアツたなッ」

レオンは部屋中を見渡して逃げ場を探したが見つからない。ただ祭壇があるだけの部屋。壁際にある小さな穴はとも入れそうになり。出口は一つだけでそこから迫ってくる灰褐色の水たまり。

おそらく足音から形状を馬や鹿などの四足の動物に変えて走ってきているのがわかった。

「魔力を与えればあの灰色を退けることが出来るのか？そのために力を貸してくれって呼びかけてきたのか？」

「わかりません。言葉の全てを理解出来なくて……ただ魔力を与えてもらいたいって」

「だったら与えてやればいい。時間はあまり無いぜ」

精霊をどうして狙っているのかもわからないが二人は何かに巻き込まれて今ピンチだったことはわかる。

頼りになるのは折れた剣だけは心もとない。せめて時間を稼げば何とかしてくれるって言うなら折れた剣よりかは心強い。

灰褐色の足音がゆっくりと止まり、姿を現した。馬の姿に似た灰褐色の存在。

「あれも何だったのも全くわからねえぜ」

レオンは剣を抜くと不安が増した。改めて近くで見ると圧倒的な迫力があり、身体も数メートルある。こっちの味方は掌サイズ。

ふんツ上等だぜと気合を入れて剣を握る腕に力を込める。いなくなかく灰褐色の馬もやる気らしいのが目に見えてわかる。

「レオンさん……私……魔法は使えません……」

「何だつてツ?!」

「魔法なんて使ったことありませんツ!!」

魔法を自然に発する力を自覚していなかったのか。スウィニーの時も扉を閉まる音で目が覚めて札が何なのかも気休めだと思っただに違いない。

これでシルクくんを魔力で動く機械人形だつて言ったことを知らないことも説明がつく。

「だったら一度逃げるぞ。祭壇から降りてくれ」

「ダメです。この子は祭壇が魔法陣となっていていますのでここからは動けません」

「動けないだつてツ?!それでも……」

灰褐色の馬が目を離れたすきに音も無く突っ込んでくる。避けられない。背後には祭壇があつてフランがいる。

「だったらフェリアを掌で包みこんで願ってくれ!!」

「願う……?」

「ああ。願いつてのは叶うもんなんだぜ。魔力つてのは人の意思の強さだぜ」

「人の意思……?」

「フランがその子を思えば願いは届くもんだぜ。それまでは何が聞こえてもジツと目を閉じて願っている!! いいか? 絶対に目を開けるなよ」

「は……はい」

フランは言われた通りに目を閉じてフェリアを掌に包みこんで祈り始めた。微量だが魔力を発する体質がある。時間さえ稼げれば魔力は蓄積されて召喚出来るはずだ。

「上等だぜ!! 守ってやるよ。俺が必ず守ってやる」

そう言つて灰褐色の馬へと自らも剣を構えて駆けだした。

トランス

馬の右前足をすくうように斜めに斬りあげる剣が大げさに空振りした。寸前で跳躍した灰褐色の馬はレオンを無視して祭壇へと突進を続けた。

ドン、と祭壇に体当たりをしたが半透明の魔法の壁が攻撃を阻んだ。レオンはその背後から斬りかかり後ろ足を横へ両断したが腕に感触はなく、虚しく空気を薙ぐぶおん、という音が室内に響いた。力任せに振った剣の勢いに身体ごと持っていかれたレオンが体勢を崩した。

「見せかけか？」

すぐに体勢を整えなおして構えるが灰褐色の馬はこちらを見ることもしない。ただ真っ直ぐに半透明の結界に守られた祭壇を見おろしている。

細い瞳が弓なりに歪んで睨みつける視線の先にはレオンの言った通りにフェリアを握ったフランが祈りを続けていた。

「だったらまずは本体を探さないでッ」

レオンは胴体の真下へ潜り込んで闇雲に剣を振り続けたが宙を薙ぐ軽い感触に焦りだけが募る。

馬はいななき、前足をあげてさらに高い位置から祭壇に襲いかかる。半透明の壁と蹄の接着面に魔力で出来た摩擦が生じて青色の火花が散って馬は後方へよろける。

半透明な壁も無事ではなく、小さな亀裂が入っていたのを見上げてレオンは無力を実感する。

馬は小さく右前足で足元を探って身体をグツと沈めた。勢いをつ

けてもう一度体当たりするつもりのようにだ。

「何だ……剥げた……？」

灰褐色の馬の足から灰色の一部が剥げてパラパラと足元へ落ちた。目を凝らして確認してみると部分的に剥けているのが認識出来る。いずれも中には黒や白い塊が見えてさきほどの煙を思い出させる。おそらく本体だと思われる。

レオンは我慢出来ずに確かめるためにも剥げた一部へと攻撃を仕掛ける。膝の少し下にある黒い塊へと一撃を加えると感触があった。剣先に粘着質の液体がまとわりついて重くて振り抜けそうもないがグツと全力を注いで、足りない分は体重も乗せて剣を押しした。

剣先は宙へ投げ出されて自らもその勢いに吹き飛んだ。黒い液体が周囲へ散ってフロアを溶かした。ジュツと煙が立ってやがて消えた。

「はあはあ……気の遠くなる作業になるぜ」

糸口を見つけたレオンは内部が見えている部分を集中的に攻撃し続けたが威力は感じられない。馬は痛みを訴えることも身体を小さくすることもなく、また体当たりを辞めることも無かった。

ふらふらになりながらも剣を振り続けるレオンが放つ一撃がついに止まった。白い液体をすくうほどの膂力も残っていないので突き刺さった剣を押しすることも出来なくなり剣から手を離してしまった。

「はあはあ……喰って……喰ってやがるのか……はあはあ……」

手を離れた剣が飲みこまれていき、やがて元々折れて短かった剣さえも体内へ飲みこまれてしまった。

魔法を使えないレオンが持つのは拳だけ。辺りに使えそうな武器

を探したが見当たらない。疲れて視界も悪くなり、情報を整理する思考も停滞してくる。

だが何もしないよりは動け、と自らを鼓舞して走りだす。素手で塊を掴もうとした時、チツと静電気に似た何かが身体を貫通して意識を失った。

「レオンさんッ!!」

フランは目を開けてレオンの名を呼んだ。

掌の中にいるフェリアがレオンの意識が飛んだことを伝えてきたからだ。フェリアは続けて魔力をお願い、とフランへ催促し続けた。

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

「みゅーみゅー」

「私のせいでレオンさんがッ……」

「みゅーみゅみゅみゅー」

「ごめんなさい……何を言っているの？ねえ教えて!! 私にある魔力なら全部あげるから」

掌にいるフェリアへと思いを込めて願い続けたが何も起こらない。ドスン、と祭壇全体が揺れる振動がまた来る。灰褐色の馬が体当たりをしている姿が見えて震える身体。ギョッとするようにフェリアを抱いた。

「どうして私なの……？何も出来ない私……城でもずっと一人だったから私の名前を呼んでくれて嬉しかった。必要としてもらったのが嬉しかった」

「みゅみゅ？」

「レオンさんに迷惑をかけてあなたにも何も出来ないのが私なのッ

!! お願いだから教えて……そうじゃないと……」

逃げてしまいそう、と言いかけた言葉を飲みこんだ。ドスン、と体当たりする馬の目がジツと睨みつけてくるのが怖くて目を開けていられなくなった。

この掌にある小さな温もりにすぎる弱い自分を罵る別の自分がいったりして心の中はぐちゃぐちゃだった。

「精霊の血を受け継ぐ者よ…私は水の精霊。魔力を解放すれば……を……」

「ッ！！ 声が……声が聞こえた」

「みゅー？」

鮮明に聞こえた声に掌を開けると首を傾げる小さな少女がいてまたみゅーとしか言わなくなる。

「どうして……どうしてなの……」

フェリアをギュツと掌に押し込んで胸の真ん中へ抱えるフランがそう繰り返した。

何度目かの体当たりの後、ついに半透明な壁の一部が欠落し、破片が目の前へとひらひら舞い降りてくる。落下の最中に透明な滴になり、祭壇へ落ちた時にまた声が聞こえた。

「あなたの力を解放しなければあなたの心は死んでしまう。そしてあなたの心の死は精霊を永遠の眠りへと誘う」

「力の解放……？」

「精霊を繋ぐ血。現世へと召喚し命を謳う者へ」

「何を……何を……ねえもつと教えてッ！！」

声は消えた。

次々と剥がれる欠片が水滴になり、祭壇へ振る度に声が聞こえる。抑制された力の解放、世界の理を紡ぐ、時が満ちる、断片的に聞こえた言葉に疑問符を投げかけても返事は沈黙へと葬られる。

まるで世界に一人だけが不実なようにフランは強い孤独を感じ始めた。あの塔へいた時と同じあらゆる声や音や光が一方的に情報を伝えてくる。

「助けて……お願いだから私を助けてください」

届かない叫びをフランの震える唇からこぼれおちる。

その時、脳裏に過つたのは時計台に立ち手を広げる勇者様の姿。レオンさん……と小さな声でフランは呼んだ。

「何があるつと守ってやるよ」

ふいに浮かんだレオンの優しい声。

フランはハッと顔をあげてレオンの方を見る。倒れたレオンが震える上半身を起こして立ち上がるうとしていた。

「あなたの血に眠る私の力を……名はセイラム。水の精霊」

「セイラム……？」

その名をふいに口にした時、掌がほんのりと暖かくなった。

フランは視線を掌へ向けると指の隙間から青白い光が見えている。弱い光。数秒すると消えてしまった。

レオンが立ち上がり馬へと駆けだした。足首にある黒い塊を掴んでグツと引っ張っている。長い金色の髪の毛が逆立ってレオンの全身にわずかな青い火花が散っていた。

「離れるってんだ」

レオンは強い口調で灰褐色の馬へ言った。

肩につけてあった革の鎧がパンと弾けて壊れたのも気にせず、力を込める腕に巻き付き始めた黒い煙。ギュツと腕を締め上げる音が耳に聞こえたのが逆に反骨心を蘇らせた。

痛みを忘却の彼方へ投げ捨てて意識を黒い塊へと注ぎ続ける。レオンはただフランを守りたいと思っていた。

「ッ」

灰褐色の馬が動く、レオンの身体が宙へ投げ出された。巻き付いた黒い煙も塊へと戻っていく。

願いが通じたのか、そうではなく助走をつけるために後方へ戻ったのだ。レオンの投げ出された身体も背中から地面へ落ちて息が出来なくなる。

それでもよよろと立ち上がった視線の先にあったのは灰褐色の馬のお尻。四本の足の隙間から見える祭壇との距離はずいぶんと離れた。

「よしッ」

と口に出した時に視界が歪む。気が緩んだせいで痛みが全身に戻ってくる。特に絡みつかれた腕が千切れそうに痛い。

ダラリと垂れた腕をもう片方の手で擦って感覚を取り戻しながら灰褐色の馬の前へと躍り出る。

「もう一度、止められるのか……」

前足でフロアを蹴り勇む足取りを見てタイミングを合わせようとしたレオンの頭上を無情にも飛び越える灰褐色の馬。

全身のバネを伸ばして半透明の壁にぶつかりと部屋全体が揺れて天井を支える支柱の一部にも亀裂が入り始めた。崩壊を彩る音色は鈍く重たい。

ドン、と額を強く押し当てる灰褐色の馬へとレオンが追いついて触れようとしたが軽い跳躍で後方へかわされる。

レオンは遠くへ離れた灰褐色の馬を追わずに祭壇の手前で立ち止まった。

「大丈夫か？」

「はい。それよりもレオンさんが怪我をしています」

「心配ない。だが止められるのは難しい。それに柱を見ると建物ごと壊れるかもしれない」

背後にいるフランへ声をかけるレオン。視線を壁際にある柱の方へ見上げて深く息を吸った。

「まだ何か聞こえるのか？ それと話せるなら今の状況を伝えて祭壇からいったん逃げないかって相談してくれないか？」

「一方的に声が聞こえるだけで話は出来ません。ただ……ただ……」

離れないと危ないことはフランにも理解出来るがこの掌の温もりを肌で感じ、この声を耳で聞いているとどうしても離れられなくなる。

そのせいでレオンを傷だらけにさせていることも充分と理解している。

「レオンさんは逃げてください。私は残って何とかしてみます」

「フランが逃げないのなら俺もここへいるぜ」

「どうして？ 私達は知り合ったばかりです」

「約束したろう？ 何があるうと俺が守ってやるって」

半分だけ振り返りレオンは弱い笑みを浮かべてフランへ言った。
だが不安はある。手には剣さえもなく頼りの妖精も黙ったままで
おまけに目の前に見える灰褐色の馬は未だに闘志をむき出しの瞳を
している。

「……はい」

「ハハハ。不安そつな顔をするなよ。必ず俺が守るからその小さな
……えつと……名前なんだっけ？」

「フェリア……違う。セイラムつて名乗っていました」

「セイラム……水の精霊セイラムか」

レオンがその名を口にした瞬間、フランの掌から光が溢れる。あ
まりの光の勢いに包みこんでいた掌を開くと光は天井すれすれまで
伸びた。

「待つてはくれないかッ」

灰褐色の馬は跳躍し祭壇へと襲いかかってくると思ったが狙いは
さらに上だった。頭上に輝くあの青白い光が形状を変えて掌の中の
妖精に似た姿になった時、灰褐色の表面を覆う何か剥がれ落ち、
白と黒の塊は入口付近へと弾き飛ばされた。

ゴロゴロと転がる塊はその道中で一つの塊へと重なり合う。まだ
ら模様の塊も形状を変えて人の形になった。肩の位置に馬の頭部が
現れて模様の白色だけが吸い込まれていく。全身黒の人間に白い馬
が肩に乗っかっている姿が定着すると身体に線が入り次第に輪郭や
衣服を形成し人らしくなった。

最終的に黒いスーツを着た若い男となった塊が笑った。

「召喚か……ふははははは」

「何を言っただがやるんだ？ 人間なのか？」

「いいぞ。精霊の血を引く女もセイラムも同時に頂くとするか」

男はそう言ったが動きは見せなかった。レオンは注意深く見ているとまだ変化しきれていない部分が足にあった。

「リアムの少年と精霊の血を引く少女。召喚を感謝いたします」

「ではあなたが私を呼んだ人……？ 精霊の血を引くなんて私ができるか？」

「ええ。あなたには我々の血を解放する力があります」

「解放する力？」

「そう解放する力。この世界を再び混沌へ落とそうとする闇の手から救うための力を得るのです」

「闇の手……？」

「そうあの目の前にいる男も闇の一族のひとり。精霊の力を得て世界を崩壊へ導こうとしております」

精霊の言葉で男へと視線を向けるフラン。男は不気味に笑みを浮かべて精霊に待っていると指差して狂ったように叫んでいる。

「話は後にしてくれッ。あの男はもうすぐ動くぜ」

「レオンさん？」

「フランどうした？」

「あの……レオンさんの身体が……」

「身体が？ 何だこりゃッ?!」

レオンは全身を包む青白い光に気づいた。頭上で輝くセイラムと同じ光が全身の傷を癒してくれている。

「リアムは精霊を守る戦士でした。その身に精霊の力を宿し異形の

闇と戦う力があります」

「ただの噂や迷信だと思っていたぜ」

「その瞳にある白い輪が戦士の証。精霊の加護を受けた肉体はやがて大いなる力の器となる」

「やがてツて言うのが困るぜ。俺は今欲しいんだ。出来れば目の前の男を倒してここから出られるくらいにな」

「願えば戦う力を与えましょう。その身に精霊を宿すトランス状態へとなる素質があなたにはあります」

「トランスか……精霊が俺に力をくれるなら俺は願うぜ。フランを守る力を俺にくれ」

レオンはそう言って天高く掌を掲げた。

頭上にいるセイラムは目を閉じて何かを呟き始めると膨大な魔力が身体に流れ込んでくるのを感じる。何層もある意識を破ってレオンの心の最も深い部分へと精霊の力がそそがれていく感覚が全身をめぐる。

通常感覚がごっそりと削げ落ちて代わりに夢の中にいるような錯覚があった。自分の身体が自分ではないような感覚があつて同時に誰かが存在する温もりも感じる。

「これがトランスか……すごい」

レオンは自らの両手を見て力を感じる。身体の表面が白い光で包まれて全身を波打つ青色が掌へ集まってくる。

掌を上へ向けると青色の波がそこで溜まって形状を剣へと変化させた。グツと剣を握って斜めに払ったのに反応するかのように外側の水の流れが増した。

「トランスか……厄介な。だがその力はまだ未熟」

「そのわりには焦っているのが見えるぜ」

「ふんっ。頭に乗るなよ小僧」

男は低い体勢で駆けてくるがレオンにとっては何もかもが遅すぎた。数回のステップで男の攻撃をかわしその開いた胴体を剣で薙いだ。

苦悶の表情を浮かべて剣で斬られた傷口を手の腹で押さえる男が後方へ跳躍し体勢を整えた。

「強いッだがこれはどうかな？」

男は白い手袋を外して掌を足元へと押し当てた。

足元が波打ち、波紋を広げていく中を闇が侵略していく。やがて真っ暗な円が足元に描かれると土人形のような闇が円の中から生えてくる。

その数は膨大だった。波紋はさらに広がり入口付近から室内の半分へと陣地を広げ闇を拡大させた。

「クククク……数は増えるぞ」

「数だけいたって勝てないぜ。俺にはわかる」

「どうかな？ 楽しみだ」

男は足元へ当てた掌を垂直に立たせてレオンへ向けるとそれを合図にうごめく闇が一斉に襲いかかってくる。

軽い跳躍をしたレオンは流れるような剣技で闇を両断していく。それは踊るように優雅に。一筋の青色の線だけを残して闇が悲鳴もなく消失する。

そして大半の闇を切り払った後に円の中へ入り青い光を放つ剣を突き立てた。

「これで終わりだ」

と言って両手で剣を押しした。剣先は見る間に闇へと埋まっていく。剣先から流れる波紋が男の足元へと闇を押し返していく。

男は後方へ跳躍したが間に合わずに自らの闇に全身を飲み込まれた。

「バカな……これが精霊の力……こんなにも差があるのか」

「そうこれが精霊の力さ」

「ふははははは。ますます欲しくなった精霊の力。今はお前に預けておくことにしよう」

闇にすっぽりと全身を包まれると男は闇と共に消失した。

レオンは剣から手を離すと同時に力が抜けていくのを感じた。全身の白い光が消えて通常感覚が戻ってくる。心の奥にいた誰かが完全に消えると入れ替わりに疲労がのしかかってその場にへたりこんでしまう。

「はあはあ……」

「レオンさん」

「大丈夫だったか？ フラン。それにセイラムもって光がない？」

フランが駆けよってくる。レオンは半身を振り返りフランの無事を確認した後に頭上を見上げたがセイラムの姿は見えない。その代わりにフランの掌にちよこんとフェアアの姿があった。

「消えたのか？ まだ聞きたいことはたくさんあったんだが」

「はい。私も聞きたいことはありますがレオンさんの身体の光が消えたと同時に光はこの子に戻りました」

「そうか……まあ無事で何よりってことだな」

乾いた笑みを浮かべるレオンへフランの掌のフェリアが飛んでいく。
肩や背中や腹の表面に鼻を押しつけるフェリアがレオンの胡坐こくざをかいた太ももの上へ着地する。

「みゅーみゅーみゅー」

「何を言っているんだかもわからないな」

「みゅみゅみゅー」

「ハハハ気に入られたみたいだぜ」

フェリアはレオンへ向かって両手を仰ぐ姿にほほ笑みかけるレオン。

だが手を動かす力も残っていない。フェリアは太ももの上で立ち上がり羽根を広げた。そして小さな光の球体となりレオンの頭の中へと入り込んだ。

「あ？ 何だ？」

みゅーみゅーと頭の中で聞こえる声に驚くレオン。
さっきの感覚に似ていることから心の中に現れた誰かはこいつだ
つてことがわかった。

「精霊は気に入った人間の心へ住むことがあります」

「いいのか？ 神殿を留守にすることになるぜ」

「ふふふ。レオンさんらしいですね。身体に入られても何も言わずに
に任せてあげるんですね」

「まあ俺も親方のところへ住みついたからな。気に入ったんなら歓迎する
つても教わったことの一つさ」

レオンの疲労がいつしか消えていることに気付いた。立ち上がる

と身体の軽くなった気がした。

「はあ……大変だったが無事でよかった。色々思うことはあるがまずは帰ろうか？」

「はい。ここへ残ってもわからないことだらけです。フェリアがいるので話はまたいつでも聞けますしね」

「出てきてくれりゃな。やっぱりさ……心の中にいるってことは俺の思い出を枕にしてんのかな？」

「ふふふ。さあどうなんでしょうね」

「まあいいか。さあ帰ろう」

レオンはそう言って入口へと戻った。

すっかり忘れそうになっていたがもう別れの時間が近づいてきている。フェリアのことを気に入っているならまた会いに行ける口実も出来たと思いつながら三つ目の扉をくぐると背後で扉がゆっくりと閉まった。

第二の扉も同様にレオン達がかぐぐると閉まった。そして階段を登ろうとしたら避難していた人々が大勢いて話を聞かれたが適当にはぐらかして急いでいるからとフランの手を引いて親方との合流地点へと急いだ。

外は夕暮れ。海へ沈むオレンジの光が地平線を焦がしている光景を瞳に焼き付けるように強く瞳を閉じ、たった一日の旅が走馬灯のように流れた。

神殿の手前には海を眺める夫婦や走り回る子供なんかもいてさっきの戦いが夢のように思えた。二人で見た夢をまたいつか話し合おうと決めて広場の方角へ続く長い橋を渡った。

ノアールの姫

まるで似合わない親方と広場に懐かしさを感じてレオンは手を挙げた。その脇にはテッドとミレイとカムイを着た知らない小さな犬族がいた。

合流は広場の中央にある時計台の下。東西南北に向かってベンチが四つあり、その西側、神殿の方向を向いているベンチの前で話を続ける親方と犬族。横目でちらりとレオンを確認しても浮かぬ顔だった。

太い指で輪郭をさすって眉間にしわを寄せているのはだいたい厄介ごとに巻き込まれた時か、巻き込まれそうな時のどちらかだ。

「フラン様、ご無事で何よりです」

犬族の執事はカムイのフードを外してフランに向かってお辞儀をする。

レオンの背後にいるのに返事をしないフラン。振り返り顔を見ると疲労できちんと目も開けられていない様子だった。

「フラン様……？」

「疲れているんだ。話は目が覚めてから聞いてやってくれないか？
もう宿は手配してあるんだろう？」

「何かございましたか？」

「何かあって？ 思い当たることあるとか？」

そう訊ね返すと執事は言おうか言つまいかを悩みかねている表情をしたのち、こつ切り出した。

「神殿で騒ぎがあったと聞いて、もしもそれがフラン様の体質に関

係があるのならば思い当たることはございます」

「まどろっこしい言い方だな」

「それでいかなのでしょうか？ 騒ぎの原因を教えていただけないでしょうか？」

「原因か…… 体質と関係あるがどうかはわからないが」

と云って頬をかいて説明をする。ちぐはぐな記憶を整理することなく説明していると話し手であるレオンにもよくわからなくなってくる。だが、執事は大きくうなずいて表情を曇らせた。

その背後にいる親方も深いため息を吐いてあごから手を離れた。

「それで頭の中に妖精が住みついた。何でもいいかって思ったからそのまま橋を渡ってここへ来た。これが俺の憶えていることだぜ」

レオンが言い終わるとフランが寄りかかってくる。身体を支えて空いているベンチへと座らせるとふいに寝息を立て始めた。

「魔力の放出をした後は必ずそのような状況になります」

「その言い方だと初めてじゃないようだな。塔にいた執事ってのは

……えっと」

「スイフでございます。フラン様のお付きの執事をしております」

「だったら手紙を送ったのも？」

「はい。私でございます」

「回収も自ら来るとは目を覚めたらフランも喜ぶぜ。これで少しは安心出来る」

「いえ。ここへはフラン様を迎えに来たわけではございません」

「何だつてツ？」

スイフはキツパリとそう言つとレオンは複雑な感情に戸惑いながら顔をあげてスイフを見つめる。ベンチに座つてもさほど視線が変

わからない小柄の犬族。見た目では年齢がわかりにくいのがある意味特徴だと言える。

「次の仕事はフランをアソイヤ火山へ運ぶことになる」

「請けていただけるのでしょいか？」

「仕事の内容も報酬も申し分はない。だが船に危険が及ぶとなった場合は全てを放棄せざるを得なくなる」

「連絡は常に取り合っておける状態にしておきましょう。放棄された場合でも手付金はお納めください」

「……よからう。これで交渉は成立。後はダイアルリングのチャンネルで詳細を定期報告する」

「はい。ではその都度、フラン様のご容態についての報告と依頼の経過報告をお願いいたします」

親方がそうレオンへ告げるとスイフは振り返り親方と話を進めた。レオンは腕にフランを抱きながら話を摘まんで聞いたがまだ一緒にいられる時間の猶予が伸びたことくらいしか理解できない。それが手放して喜べる状況でないのも肌で感じた。

スイフはちらりと名残惜しそうにフランの顔を覗いてからカムイのフードをかぶり居住区がある市街地へと歩き始めたのをジッと見送った。

「どうなってるんだ？ これは」

「話は後だ。今はシアテイルへ戻る。医務室へ届けた後にブリッジへ来い」

「親方……俺がまずいことを言ったのか？ 神殿のことは言わなかった方が良かったのか？」

親方はただ無言でレオンの問いには答えずに踵を返して船着き場へ戻った。いつもと違う様子に深刻さが伝わってくる。豪快に笑う

こともなく淡々と作業を続けるのは研究施設の移転を手伝った時しか記憶にない。一步間違えれば船も沈むほどの魔力の檻がずらりと並ぶ格納庫の張り詰めた緊張感を未だに憶えている。

腹に詰め込んだ爆弾を破裂しないように歩く運ぶのは這うのでも走るのでもなく歩くしかないと航路を通常の四倍の時間をかけて飛んだ数年前。神殿で見たあの光景、あの魔力はそれに匹敵するのだろうかかとフランを抱き締める手に力が入る。細い腕に細い身体。難なく持ち上げて船へと運ぶレオンはただ素直に喜べない自分自身を呪った。

守つてやるなんて言っておきながらすぐに不安になる。あの時も馬を止めることどころか触れることさえ出来なかった。蚊帳の外。そんな自分出来るのは目が覚めた時、笑って迎えることだけだろうかと考えながら船へと戻る一行の最後尾に並んだ。

ブリッジへ入るとそこにはテッドと親方とカムイを腕にかけたミレイがいつになく神妙な面持ちで対面している。

「話を聞かせてくれ。これは一体どういうことなんだい？」

「あの子を逃がしたのはあの執事の独断だった。国ではなく執事個人からの依頼ということになる」

「それがまずいことなのか？」

「いやそれだけではまずいことではないが問題は理由にある」

「理由……？」

「精霊の血を引く女だと言ったんだろう？」

「ああ確かに精霊を血を引くって言ったぜ」

「間違いない。あの子は十数年前にさらわれたノアール領の小国の

「姫だ」

「何だつてツ?! フランがいたのはエレン領だぜ? 一体……誰が……」

レオンが信じられないと辺りを見渡すが誰もが真剣なまなざしで返してくる。テッドは困惑するレオンへ話を続ける。

「精霊を捕獲するためだ。精霊の力を手に入れて破壊神を復活させノアールと統治戦争を起こすつもりだった。そのためにあの子をさらったがあまりに強い魔力に塔へ閉じ込めた」

「何だそれ……そんな……バカなことつてあるのか」
「執事を中心とした親衛隊が調べたレポートがある」

テッドは小さな情報を入れたクリスタルを指に挟んでどこまで事実かは不明だが、とレオンの掌へ置いた。

「だけど大砲を撃ってきた。あれは知っているから当たらなかったんじゃないのか?」

「砲撃部隊は親衛隊が持ち場を確保していた。親衛隊も執事も全てあの国から逃げてノアール領へと亡命を終えた」

「だからノアールで受け渡そうとしたのか?だがどうして火山へ行くんだ?」

「精霊の回収へ行く。あの子が精霊を解放しなければならない。それも急ぐ必要がある」

「急ぐ?」

「灰褐色の馬はおそらくエレン領の王から放たれた刺客だ。黒いスーツに戻ったという話も一致する」

「闇の一族だつて言っていたな……確か」

「そう。向こうはあの子がさらわれたことに気づいてあの子の処分と精霊の回収を行おうとしている」

「回収？ 闇の一族が集めてどうしようってんだ？」

「闇の一族は精霊に封じられた闇の末裔。精霊がいなくなれば都合がいい。エレンが統治した世界では精霊も消えて自分達の世界を作ることが出来る」

「だとしても俺達と共に行く理由がわからない。こんな船よりもノアールの国に守ってもらえた方が安全だと思っぜ」

シーアテイルクラスの戦艦は数百も数千もある。兵士の数も圧倒的に多く、魔術師も多い。

「保護を拒否された。だが精霊を守ることの約束はくれた。そういうことだ」

「そういうこと……そういうことって何だよッ！！」

「ノアールは今、先代の陛下が危篤状態で王位継承権争いの最中。ここで王位継承権を持つあの子が戻ってくることを良く思わない人がいる」

「よく思わないだっつてッ！！親はどうしたんだ？王位継承権だっつてんだったら兄弟か親子だろう？」

「決定したのはあの子の母親だ。母親なんてロクな人間はいない」

「母親がどうして……」

「もう一人息子がいる。あの子が戻ることで王位継承権が一つ落ちることになる。十数年はあまりに長すぎた」

テッドはグツと感情を堪えて淡々と説明する。母親に捨てられた経験と重ねてしまい、少ししかない母の面影がフラッシュバックした。

泣いていた。母は泣いていた。ごめんね、と言う母をレオンは守ることが出来なかった。

「だが資金面での援助や精霊が住む地域の警備を強化してくれる」

「……会ってもくれないってか？」
「ああ会うことも話すことも無いだろう。この話もあの子には伏せる」

「嘘をついて言うのか？」

「そうじゃない……ただ黙っているだけでいい」

テッドはそう言って深くうなずいた。

「言いたいことがあるだろうがそれには理由がある。あの子の体質で最も重要なのが感情を不安定にさせないこと」

「爆弾や猛獣でも扱うような言い方だな」

「もつと危ない。あの子の体質は魔力を放出し続ける。問題は膨大な魔力を持つのにコントロールをすることが不可能なことだ」

「本人は魔法を使えないって言っているぜ」

「魔法は習得するもの。魔力は身体にある潜在的なもの」

「だったら魔法を覚えたら魔力をコントロール出来るのかもしれないな」

「無理だ。魔力が強すぎる。今出来るのは感情を安定させ続けること。迅速に精霊を回収するしか方法はない」

「騙して精霊を回収して……それでどうなるんだよ……その先はッ！！ その先はどうなるんだ！！」

レオンは激昂し、自らの腕を振ってテッドへ抗議したがテッドは瞬き一つせずにその言葉を受けた。

「エレンやノアールには帰れないだろう。ここへも置いておくわけには行かない」

「どうして？ 依頼が終わればサヨナラってか？」

「安全が最優先される。船を守るためだ」

「依頼は莫大な報酬を得られたから受けた。それで船を買えば……も

しも何かあっても魔力を抑えられるような装置も買えばいい」

「必要ない。あの子はこの船の人間じゃない。依頼が終われば降りてもらおう」

「そんなに金が大切なのかッ?! 依頼なんて断れば……」

「もしも断っていたら闇の一族が精霊を回収した時点であの子は殺されてしまっていただろう。二度目の依頼を断ればノアールで王族の誰かに暗殺されるだろう。安全なのはここにいることだ」

言い返せない事実にはレオンは黙った。強く拳を握って歯がゆさを感じる。

「考えるのは最後だ。依頼の時は依頼のことだけを考えると教えただろうがッ。フランはお前に任せる」

親方はそうレオンへ言ったが納得することなんて出来ずにいた。

「……ああ」

親方の迫力に潰された言葉達を飲みこんでレオンは返事をしてブリッジを足早に出て行った。

船の振動が足裏へ伝わってくる。医務室の中、レオンはクリスタルのデータを眺めながらフランの目覚めを待っていた。

「一度、正確な魔力地を計算して魔力を抑制するクリスタルを持たせた方がいいのかもね」

「精霊召喚つてのはそんなにも魔力を消費するものなのか？」
「特殊条件過ぎて僕には想像もつかないよ。そしてこっちがレオンの身体なんだけど」

とスウィニーはプリントされた様々な形をしたグラフが散りばめてあり、青や赤や黒などの鮮やかな色がつけてある紙をレオンへ渡した。

紙をちらりと見て首を傾げるレオンへとスウィニーが困り果てた様子で眉尻あたりを掻いた。

「元々の肉体グラフと比較しても何も変わらない」

「だったらトランスつてのは何だったんだい？ それに体内に小さな精霊がいる分が変わらないってのもおかしいぜ」

「ここの古い測定機じゃわからないのかもね。その精霊つてのも見てみたいんだけど出せるかな？」

「うっん……いる時はいる時でうるさいんだが今は静かだ。眠っているのかな？」

「姿が見えるの？」

「見えるね。小さくて半透明な羽根に青いまだら模様があって同じ色のドレスを着ていたぜ」

「それはいつに消えたの？」

「帰りの橋の途中で気付いて……神殿にいた時は誰も何も言っていなかったから見えなかったんだと思うとして」

「他の人には見えないって可能性もあるね。それで消えたのは？」

「ああ……えつと……橋を渡り終えて親方が見えて手を振った時には消えていたかな？」

「そうなるとフランの魔力が途切れたのと同時に消えたのかもね。姿が見えている間はずっと消費を続けているとか」

「そうなのかッ?! だったら無理をさせていたのかな……少し……

……いや結構、話を聞こうとしたから」

レオンは長い橋で繰り返した会話を思い出す。フランに頼んで何を言っているかを教えてもらっていたことも魔力の消費を拡大させたら、と振り返る。フランの青白い寝顔に言葉を失って視線を紙へと落とした。

「レオンのせいじゃないさ」

「俺のせいさ。神殿なんかに行かなければ良かった」

「親方が勧めたんだろう？ 観光に行つて来いって」

「ああ。思い出が無いのはつまらないだろうって思ってくれたんだらうな」

「それで最後。執事に渡して全てが終わるはずだった」

「フランは塔へ帰り。また一人で過ごすんだぜ」

そう言ったレオンの表情が悲しげだったのをスウィニーは背を向けて薬品を取り見ないふりをした。重症なのは心か、と胸中で嘆くスウィニーが古すぎる箱型の装置に手を置いて薬品を中へと流し込む。

「スウィニーさ……俺はどうしたらいいと思う？」

「レオンらしくないね。どうってのは？」

「真実を全て言うのか黙っているのか」

「言わない方がいいだろうね。精神が不安定な時に召喚が起きて暴走でもしたらこの船くらいなら数秒で沈む」

「そんな力があるって話を聞いてもわからないぜ。俺には少し歩いただけで疲れる運動不足のお姫様だ。何にでも名前をつけて可愛がる。そのわりに話しかけるとどうしていいかわからなくて困りやがる」

「レオンはたくさん知っているんだ。船の中には怖がる人もいるだらうね。僕だって正直怖いよ」

「いいやつなんだ」

「それを知っているのもレオンだけさ。君がみんなにフランのことを教えてあげたらいい。知ることが大切なんだよ」

「知ることか……俺はフランの何を知っているんだらうな」

と溢したレオンへスウィニーが柔和な笑みを浮かべて作業へと戻った。古い装置がガタガタと揺れて容器内の液体を揺らした。いつもはうるさくてかなわないと思うが今はその激しい音に助けられる。視界の隅で青い光の粒子が見えたことで振り返るレオン。いつの間にか視界を遮るようにフェリアが立っていて宙を滑るようにフランの横顔へ張り付いた。

「見えるか？ 今、フランの頬に触れているぜ」

「見えるね。脳が起きてから目が開けるまで数十秒かかるから今目を開けると意識と繋がっていると考えてもいいのかも」

「開けたか……」

レオンは立ち上がり頭を振って状況を把握しようとするフランの顔の前へと座る。フェリアはくるくると回ってレオンの肩へちょこんと座って首へ寄りかかる。

「おはよう……ごじます？」

「ハハハ。まだ夜だよ。疲れが溜まったんだらうな」

「はい。橋を歩いている途中からあまり憶えてません」

「ぼんやりとしていたからな。またいつか来ればいいんだ。今はゆつくりと休めばいい」

聞かれるのが怖くて早く寝かせようと邪険に扱ってしまう。フランの反応が怖くてレオンは思わず目を背けてフェリアを見てしまう。首を傾げるフェリアに沈黙を託すには無理があった。半ば諦めたよ

うにフランへ振り返る。

「……はい。少し眠たいので寝ます。次……朝……目が覚めたら話をしましょうね」

「ああ。たくさん話をしよう。これからはしばらく一緒にいられるんだから時間はある」

「はい」

「おやすみ」

「おやすみなさい」

そう言つと肩にあつた暖かな感触と共にフランの表情が消えた。眠りに落ちるのも早くて目を疑うほどだった。

「寝ぼけていたのかもね」

「良かったつて言つていいのかな？俺はもっとフランと一緒にいたいと思つているんだぜ」

「一緒にいられるさ。悩んでいても仕方ない。今日はもう遅いからレオンも眠るといい」

「ああ。そうするぜ。フランを頼むよ」

レオンは立ち上がり医務室を出ようと扉に手をかける。その近くにあるベッドで眠るフランの様子が気になつて立ち止まったが視界の隅にスウィニーが見えて扉を開けて通路へと身体を押しこんだ。

クーパールランド

アソイヤ火山。ふもとの街 【クーパールランド】

マグマが岩肌を削り作った自然の滑走路にシーアテイルを停泊させた。そのすぐ脇に街があつて炭坑夫がシャベルを掘り返した土の上に適当に刺して酒場へ消えていく姿が一番に目についた。誰もはやれやれと言つた風な表情でメツトを軽く叩いて愚痴を言い合っているざわめきが優しく仄かな灯りで包まれた街にはよく似合つていた。

だがその炭坑の街に似合わない人影もかなり見られた。テントを張つて火山へ続く道を封鎖し始めているノール軍の兵士だ。

「暑いぜ」

「そうですね」

レオンがタラップを降りてすぐにそう言つて火山の方角を見上げて目を細めて嘆いた声に同意するフランはすっかり顔色も良くなつた。魔力を吸う札を縫い付けたハットを被りバールンパンツにサスペンダーがあつてトップスはフリル襟の白いシャツを着ている。首筋に汗でピツタリと貼りついたネックレスには魔力を吸いこむ符が貼り替えられる長方形の木の板を持ち歩いているせいでフェリアの姿は見えない。

「あの列は何なのでしょう？」

「あれは奉納に行くんだよ。火山に眠る火の精霊に一年の無事を祈るために薪を火山口に投げ入れる伝統があるんだ」

「今日は奉納のお手伝いが仕事なんですか？」

「……兵士の方のお手伝いかな？ 奉納の儀式が行われる前に火山

へ入って精霊へ儀式をするっていう意思を伝えに行くんだ」

軍が封鎖している手前で薪を置いてふもとへ戻り薪を取りに行く女性だけの列を指差してフランは訊ねたのにそう答えた。

慣れてしまえば何も感じなくなる、と言った脚本家のアツポイの言葉が今になって頭のなかで繰り返される。嘘をついた。その事実がレオンの中でくすぶり始める。

先頭で歩く親方とテッドが街の方角へ歩くのでその背後を二人はついて歩いた。

「いつもこんなに兵士の方々がいらっしやるのでしょうか？」

街は妙にざわついているのを感じたようでフランはそう小さな声で訊ねる。普段は炭坑夫しかいない街。観光する場所でもなければ栄えている様子もなく、ひっそりと佇むという言葉が似合う街で荒廃した雰囲気がある。

錆びたレールの上をガタガタ揺れながら走るトロツコに乗せられた鉱物が落ちないように覆いかぶさる農夫達がレオン達一行を見て何かを話している姿が頭上を通過していった。

「普段は寂れた街さ。あんまり兵士のことは見ない方がいいぜ」

「え……？ どうしてですか？」

「忘れたのか？ フランはエレン領のお姫様なんだぜ」

「あ……」

「だからと言ってどうなるってわけじゃないが慎重に行動しようぜ。バシたら大変なことになるかもしれないしな」

レオンがそう言うとハットを目深にかぶりなおすフランがきよるきよると周りを覗くのが余計に目立つが兵士と話をされるのも困るので放っておこう。何より変な動物みたいで面白いつてもある。

「大丈夫さ。そんなに構えなくても親方に目が行くから俺達はほとんど目に入らないさ」

と先頭を歩く巨大な後ろ姿を指差して言つとフランは帽子から手を離して口を結んだまま大きくうなずいた。

「だが何かあつても困るから街の中にいる間は俺から離れるなよ」

「はい。ありがとうございます」

「礼は辞めてくれよ。俺がやりたくてやっているんだからさ」

「……はい。すみません」

すいませんつてのもな、と思いながら汗でベツトリとする頬を掻いて階段を登り続けるレオンはフランの体調にも気を配りながら歩調を整えている。そのせいでかなり親方との距離が開いた。

半ばを歩く二人に対して親方とテッドはもう階段を登り終えて街の入口にいる兵士と話を始めている姿が見えた。

「大丈夫か？ 疲れたら休んでもいいんだ」

「いいえ。大丈夫……このくらいでッ」

振り返りフランを待とうとしたレオンを追いぬいて階段を駆けあがるフランの背中を不安げに見送る視線がフランの肩越しに見えたテッドと合った。

テッドは未だにフランが船にいることを快く思っていないらしくレオンから視線を離すとすぐに親方の背中へついて兵士が案内する街の長の館へと踵を返した。

登り切ったフランが肩で息をしながら振り返りレオンの名前を大声で呼ぶと近くにいた全員が場違いな二人を微笑ましい表情で眺めてくる。少しだけ警戒を緩めてくれたのもフランの天性の明るさや

純粹さによるものだと思じてレオンも階段を駆け上る。

「あんまり離れないでくれよ。いきなり走るともたないぜ」

「はあはあ……… すいません」

「まあそんなに大きくない街だから見失うってことは無さそうだからゆっくり歩こう」

「………はい」

フランが息を整えるまで待つていたレオンはしばらくやることもないので街を眺めていることにした。

そこら中にロープウェイの紐が垂らされており頭上からは滑車の音がうるさく降り注いでくる。小さなバケツにこんもりと盛られた土や鉱物が不安定に揺れながら穴から穴へ移動していた。

もちろん滑走路に停泊しているシーアテイルの頭上にもすでにバケツは通過していて土が少しずつ甲板へ落ちているのが見えた。掃除の番は大変だな、誰だっけ？と考えているとフランはもう大丈夫です、と胸を押さえて答えた。

「じゃあ行こうか」

街はちぐはぐで統一感のない外観だった。建物の大きさもバラバラで足りない部分を補強している板のせいで幅も違い、路地にはみ出している建物もある。

ぎゅうぎゅうに押し寄せられた街の隙間をぬうように続く路地を歩いていると足の裏が痛くなってくる。舗装されていないむき出しの岩肌の所々が尖っていて間違えて踏んでしまうと顔をしかめてしまふ。

「こんな場所に住むと大変ですね」

「元々住もうと思っただけで街が出来たんじゃなくて炭坑を掘っている簡

易の宿を作ったのが街の始まりだったんだ」

「少しずつ大きくなって今では立派な街になった。そう思うとちぐはぐな光景も可愛く見えますね」

「可愛く……か？ よくわからないが好きになってくれたら話しかいがあったもんだ」

疲れもあるが地熱も手伝って暑すぎる空気はフランの口数を減らした。

その顔色を確認しながら歩調を緩めて歩みを続けるレオン達がようやく親方の後ろ姿を見つけた。

屈強な兵士に囲まれていてもその存在感は異常なものだった。親方の前で話を聞く司令クラスの兵士も土地の権利所有者である男も決して小柄ではない。

「ようやく来たか。話をついた。お前らは案内人と共に山へ登れ」

「ん？ 親方は来ないのか？」

「ああ。テッドとお前に任せる」

「何かあったのか？」

「決定は以上だ。後はこの兵士について行け」

親方が指差した兵士はエコーと名乗り、以後は自分が案内しますと言って敬礼をする。若い兵士で空回りしている空気を全身に漂わせている。

テッドはレオンとフランの名前だけを紹介して山へ登るルートを確認するために話を始めた。親方は土地の所有者と司令と背後に館の中へとそそくさと入っていく。

「まあ水の都市でもそうだったがこういう交渉ごとには向かないから俺らはどっかへ行って待とうか？」

「あ、それでは案内をいたしましょう。立ち話も何ですから宿へ入

り案内人とも合流致しましょう」

「ん？ 案内をしてくれるのはあんたじゃないのか？」

「いいえ。私は伝達役と護衛を兼任しておりますが案内出来るほどの経験はございません」

バカがつくほど正直に実践の浅さを露呈するエコーはサイズが合っていないヘルメットを押さえながら歩き始めた後を三人は追いかける。

ぎこちない歩き方に口数の多さから新人だとわかる。親方の用事つてのがメインでこつちがどうでもいい用事に見えるな、と關心しながら歩くこと五分して宿へ着いた。

宿の入口をくぐると閑散とした室内に乱雑にマットが敷かれているだけの簡易宿だった。荷物が端に積まれてあり、砂ほこりまみれの武器までもが転がっていた。

「到着したばかりですから」

中を見て不用心だと呟いたテッドへそう返すエコーが不機嫌な声色で答える。

「その案内人つてのは何処にいるんだ？」

「ここへ来られると思います。それまでしばらくお待ちください」

エコーは矢継ぎ早に訊ねられる言葉に苛立っていたのを隠しきれずに早口でまくしたてるようにそう言っただけで足早に何処かへ消えてしまった。

「暑さに慣れていないんだろうな……都会の兵士が引つ張りだされたか？」

「ああ。ここは暑い。レオン達も今の内に休んでおけよ」

「お言葉に甘えさせてもらっぜ。これで冷房でもあれば最高なんだケド」

「贅沢を言っな。だがこれはある」

テッドはそう言ってワンシヨルダのバックから小さな青い札を取り出してレオンへ投げてよこした。アイストーンという微力な冷気を発し続ける石を縫い付けてある札だった。

「へへへ。ありがたい。フランのもあるぜ」

「はい。あの……ありがとうございます」

フランは両手で札を受け取りテッドへ礼を言ったがテッドは薄く頭を下げてただけのそっけない対応だった。フランは言葉を詰まらせてすいません、と小声で言った。

「テッドはいつもこうさ。クールを見せるとモテるんだぜ」

「冗談っぽく言ってフランを元気づけようとしたがフランは伏せた瞳をあげることも笑顔を見せることも無かった。テッドも背を向けて腕を組んで案内人を待ち始める。

顔を見るのが辛いたって母親とフランは違うんだぜ、と言いたかったが辞めておいた。ミレイに言われた言葉もあつて沈黙を選んだレオンは勝手に寝ころんでふて寝をしようと思った。

居心地の悪い空気だった中、案内人が登場してテッドと話を始める声が聞こえるとレオンの隣に誰かが座った。薄目を開けなくともフランだとわかった。

「……嫌われているのでしょうか？」

「誰にだってあの態度さ」

「船内でもあまり歓迎されてもらえない視線は感じます」

「誰だって人見知りくらいするさ」

レオンは目を閉じたまま受け答えをする。ノアールからの依頼を賛成していない船員もテッドを含めてかなりの数がいる。だが親方の指示通り、フランには事情を話すことも出来ないので無視をするしか出来ないでいる人も多い。

知らない隣人がどれほど怖いのかを想像したことはないがフランを知れば賛成してくれると信じている。今はただ時間が足りなくてぎくしゃくしているだけだろうとスウィニーは言うが本当だろうかと考えてしまう。

親方に拾われなければ多くの人種は見世物にされるか、迫害されるかだった。そういう事実があつて居場所を失う恐怖は伝染していく。フランの力が暴走すれば、フランを追いかけるエレンに見つかれば、ノアールに引きとつてもらえ、おろせばいい、そんな声がレオンにも聞こえてくる。

「あー……暑くて眠れないぜ」

上半身を起こして背筋を伸ばすレオンは横で悲しげな表情を浮かべるフランに同意を求めるが上の空。視線の先には案内人とテッドが地図を手にルートと持っていく道具を確認し合っている。

「これから火山へ何をしに行くのでしょうか？ 兵士の方とは別れてしまったようですが……」

フランはただ疑問を口にしたただだろうかレオンにとっては難しい質問だった。何と答えればよいのだろうか、と首を鳴らして考える。

フェリアのように精霊を回収する？あの時はフランから声が聞こえたと言って走ってくれたからついていけたが今回は自らそこへ向

かい精霊に会うこととなる。

理由を聞かれて本当の話をするべきなのか。だがそんな話をするには母親だと思っっている人が敵で本当の母親とも会えないって話もしなければならなくなる。どう受け取るか何を感じるかは見当もつかないが真実を話すと何が起こるかわからない。

かと言っつて嘘をつき続けることも出来ないだろう、とフランの表情を横目に見ながら心に留めておく。

「火山口へ行くんだ。そこで精霊に会って話をすると思う」

「……………と思う？」

「話すのはフランだ。神殿のごたごたの後にノアールの人から依頼されて精霊と話してくれっつて……………えっつと……………説明しにくいぜ。とにかく兵士と共にいると身元がバレるかもしれないしな」

「そう……………ですか……………」

「エレンにはエレンの話し方もある。発音の仕方もそれぞれ地方独特のモノもあつたりするから会話をしているだけでどこの出身ですか？ とかいう話にもなると困るしな」

「はい。困ります」

「そういうことだよ。フランはあんまり気にすることじゃないぜ。魔物もほとんどいないだろうし山を登るだけだ。数は必要ない」

レオンは真実を織り交ぜながら嘘をついた。少しずつ話をしていこう、と心に決めて今はごまかすことを選んだ。

何があるうと守ってやると言っつたすぐにこれだ、と自責の念が執拗に浮かんでくる。レオンは自らの未熟さを恨んでグツと歯を食いしばる。

「それで問題ない。レオンも用意出来たならすぐに出発するぞ」

テッドがそう言っつとレオンへ足元にあつたりユックを投げてよこ

して案内人と共に火山の入口を封鎖しているバリケードへと歩き始めた。

バリケードの傍らで薪を入れた壺を脇に抱えた女性達が正座して何かを待っていた。ノール兵士は完全封鎖を実施しているらしくこの地域に住む人の出入りまで制限をしていた。

その前を四人が通るとバリケードを守っていた重火器を持った兵士が敬礼しバリケードの一部を解放した。案内人も敬礼をしていることから兵士の一人だと知った。

「あの方々は？」

「俺達が精霊との会話を終えるまで待つてくれているんだ。神殿の時のようにパニックにならないようにな」

壺を抱えた女性達の年齢はバラバラで人種も違った。壺の形も色も薪の量も違うが赤色を基調とした布を身体に巻きつけてある衣装だけは同じだった。

密集した一団の先頭にいた老婆がリーダーで兵士に詰め寄って激昂している声も未だに聞こえてくる。

「事情は伏せておいた方がいいだろう？話しても信じられないぜ。ウォーラムの時だって夢やイタズラだって言って中へ入って危険だったからな」

「危険……」

「フランは心配しなくても俺が守ってやるぜ」

「はい……でも話は出来るかもわかりませんしお役に立てるかどう

かも心配です」

「今、あの神殿の時みたいは声は聞こえないのか？ 何かを感じるとか？」

フランは小さく首を振る。

詳しい話も聞かされていない。精霊を解放すればどうなるとも解放する理由も知らないで全てが親方達の中だけで話は進んでいた。

闇の一族が精霊を回収することが出来るのならずっと前にしているはずだ。だが今になって動きだしたのもエレンの王族から命令されたってのもつじつま合わせに聞こえる。

何が真実で何が起ころうとしているのか、そもそもさらわれたって話も本当なのかも嘘なのかもわからない。執事はどうしてそんなことを知ることが出来たのだろうか、と考えるほどに無口になってしまふレオンはハツとフランの視線に気づいた。

「フェリアは……フェリアの声も聞こえませんがレオンさんは感じますか？ フェリアの何かを」

「いや今は何も聞こえないな。俺の頭の寝心地はいいらしいぜ」
「ふふふ。そうだと私も嬉しいです」

魔力を吸いこんでいる札をぶら下げたネックレスの紐が首筋に見える。細くて白い首筋に真っ黒のゴムがびったりと吸いついていた。意識と連動しているより自然に放出している魔力に反応して精霊は姿を現すというスウィニーの仮説は正しいと思う。札を持っていく時は小さな精霊は姿を現してこない。

精霊の血を引く者と言われていた言葉から思うにノアールの姫と一つのも疑わしい。そもそも精霊の血とは？ 自然に魔法を発する体質とも関係があるのだろうか？

まただ、レオンは考え込んでしまふ頭を振って笑顔を見せた。

「俺も嬉しくなるぜ。あーマリスフィームみたいに観光都市だったから美味しいものでも食べられるんだけどな」

「食いしん坊ですね」

「フランだって食べたいだろう？」

「はい。実は期待してました」

「ハハハ。正直なのはいいことだぜ。火山でも自然に取れる食べ物はないのかな？ 聞いてみるか」

話をそらせるレオンは前を歩く案内人に質問をした。

まだ山へ入ったばかりなので遠くに木々が多い茂る部分も見えている。動物の気配もあって果物くらいはありそうだった。

「果物がありますが塩分が含まれておりますので人間が食べるには塩辛すぎますよ」

「そうなのかな？ 残念だな」

「観光地ではありませんからね。お連れの方は疲れましたか？ 休息にしましょうか？」

「後どのくらいなんだ？ あんまり休んで遅くなるのもあれだし」

「距離にすると数キロですが山道ですから二時間近くはかかると思っています。我々でも悪い足場を歩くと疲れる。斜面も急こう配で思ったよりも体力は奪われます」

「うっん……フラン疲れたか？」

レオンは振り返りフランへ訊ねるがフランは大丈夫ですよと微笑み返した。

「ではまだ先を行きましょう。ある程度行けば温度が急激にあがりますからその手前で休憩をはさめば大丈夫でしょう。ですがぐれぐれも無理はしないようにしてもらえますか？」

「あ、はい……」

明らかにフランを見て案内人はそう言った。柔らかな物腰とは裏腹に有無を言わせない迫力があつた。

身体を心配しているよりも別の事情があるような口ぶりにレオンは不服だつたが事を荒立てる必要もないとフランの横へと下がつた。全員が厄介な物として見ているような視線を感じてフランはまた目を伏せて歩き始めた。テッドに冷たくされた時と同じような表情に明るく話しかけるレオンの声も届かない自分の殻へと閉じこもっている。

「迷惑をかけていますよね」

「いやそんなことはないぜ。精霊と話を出来るつてもフランだけなんだからフランの体調を気遣うのは当然だ」

「……私、頑張ります。だからもう少しだけ一緒にいてもらえますか？」

「何を言っているんだよ。俺はずっと一緒にいるぜ」

ネガティブな思考を壊せるほどに明るくふるまおうとしているレオンだけが空回りしている現場の空気にテッドは苛立っていたのがその瞳でわかる。

時折、目が合うと瞳の奥で湛えた感情がこの足元を流れるマグマと同じように真つ赤に燃えあがっている。今になって思えばそれがテッドらしくないと思うべきだった。

「ここで休みましょうか？」

案内人がそう言つて岩石を削つて作った椅子に座り足元へ荷物をおろした。荷物から飲み水を出して飲んだりしながら休憩する間もテッドは座らないでいた。

レオンとフランも適当な岩石へ座り、道具から水を取り出して一

息入れた。

「火の精霊ってさ、どんな感じなんだろうな？ やっぱり怒れる巨人なのかな？」

「物語のイメージではそう言った巨人がマグマの雨を降らせて街を灰にしたとかいう逸話がありますが火の精霊は深い愛情を持った精霊と言われています」

「深い愛情？」

「人を包みこむ優しさが海ならば人を愛し人を抱き締める強さみたいなのが火なのでしょうが？ 悪い面ばかりが強調されるので観光地にはならないんですよ」

「そうなのか。悪い面？」

「嫉妬・憎悪・憤怒などのネガティブなイメージが物語で定着してしまつて人が寄りつかなくて普段は静かな一帯ですよ」

案内人は調査団の一員で民俗学や宗教学の権威も持っていると自慢げに話を続けた。

「物語はたくさん知っています。ガレリアと巨人の舞台もここですよね？」

「よくご存じですね。そうあれも巨人が街を滅ぼしたというシーンだけが印象的なのですがあれはマグマの噴火を予期して街から非難させるために巨人は街を壊したんですがね」

「そうだったんですか？ 私の知っている話と全然違います」

「脚本家は話を捻じ曲げてよりドラマチックに盛り上げようとはかりしているので事実と違う話も多いんですよ」

「へー。知らなかった」

「ハハハ。皆そうですよ。学者の中でも勘違いしている人もいますからですから」

「そうなんです。火の精霊と会えばもっとイメージが変わるかも

しれません。会うのが楽しみになりました」

「そりゃ良かった。何しろ精霊と交信をする時は心の全てが見られてしまうそうですから好意的に接すればそれ以上に愛情を持って接してくれますよ」

案内人は朗らかに笑って物語の話と歴史を織り交せて話した。さきほど見せた鋭い瞳も嘘だったかのように柔らかな表情で接している。

ただそれだけにフランが精霊と話すのは慎重に行うべきものなんだろうとレオンに思わせた。命に関わるようなことが起こる可能性もありあの時と同じようにトランスで戦うことになることも覚悟しておこう。

テッドがいるのもトランスと関係あるのだろうか？トランスが暴走して止める役目をテッドが任されたと考えれば自然に納得出来る。いつもテッドはレオンのお守役をしていた。

任務が失敗しそうになってフォローしてくれたのもいつもテッドだ。自分の感情で突っ走るレオンを冷静に止めてくれるのはいつだってテッドだった。

「そろそろ行こう。日が暮れるまでには用事を済ませたい」

テッドが舞台の話で盛り上がる二人へと行って再び、山に登るところとなった。

山の景色がガラリと変わった。足元にあったわずかにあった木の枝も消えて熱気で表面が泥になる足場が傾斜を流れていくのが目に

見える。

尖った岩石の形も丸みを帯びたものとなっており、遠くでは穴が確認できるようになった。その穴の奥には朱色に波打つマグマが衝突し合っていた。

案内人も口数が極端に減り、手袋で汗を拭いながら何度も振り返りフランの顔色を確認していた。

「どのくらい登ったんだ？ 急激に気温があがって別世界だぜ」

レオンは振り返る案内人に叫ぶ。マグマが山の内側を溶かす音や焦がす音、水蒸気があがる音や耳の中に溜まる汗のせいで声が聞こえにくく感じる。

「まだ半分ほどです」

「まだ……半分もあるのかッ？ 思ったよりも辛いぜ」

「この上に行くのと地表の隙間から煙も出るので視界も悪くなります」

「そりゃ大変だぜ。このくらい離れていても大丈夫なのか？ 足音も聞こえないぜ」

「もうすぐ一本道になりますから大丈夫です。姿が見えなくとも音が聞こえなくとも火山口へ続く道はそこだけ」

案内人も叫んで答えるが体力を消費するだけです、と言って会話を辞めた。

レオン自身も熱気に包まれたせいで全身が重たい。標高の高さも手伝って酸素も薄く体力を奪っていく。

「大丈夫か？」

「……はあはあ……はい。大丈夫です」

「無理をするなよって言っても休むのも無理か」

「うほ……はい。大丈夫です」

「ほら、これも持って首筋を冷やせば少しは楽になるぜ」

テッドにもらったアイスストーンをフランに手渡したがそれさえも受け取れないほどに疲弊していた。レオンは足並みを落として背後からフランの首筋にアイスストーンを当てながら歩いた。

「あの………すみません………」

「俺は好きでやっているんだ。謝る必要なんて無いぜ。どうしても謝りたくなったらありがとって言うてくれよ。その方が嬉しい」
「………」

こくん、とうなずくフランは言葉を出す力もない。

それからもずいぶんと山を登り続けた気がする。白い煙が足元にまとわりつくようになってたな、と思っているとすぐに煙は視界を遮った。

身体に付着する水蒸気の量も煙の量と共に増えて身体を重くする。フランの首筋に当たったアイスストーンも効力を失ってぬるい石になったのが掌の感触で察した。

足元に見える誰かがつけた目印を踏んで移動しなければならぬほどの煙に抱かれて傍らにいるフランの姿も見えなくなりそうだった。

「手を握るぜ。何かあれば握り返してくれ。返事は全て握り返してくれたらいい」

レオンはそう言ってフランの手を握った。湿った手同士でぬるりと滑るがしっかりと握った。

火山口を降りると言うことは水蒸気が流れて出来た狭い道を縁にそって歩いているだけになる。一歩踏み外せば火の海へ落ちることとなる。そう思えばしっかりと握る手に力が入る。

「ッ」

その景色が一変し、真っ赤に染まった。

煙は頭上にたむろしていて視界は鮮明になっていた。足元の汚い煤けた岩が自然の段差となつて火山口へと続いている。大部分がマグマで足を踏み出す度に小さな石が転がって岩肌を滑り落ち、ジュツと音を立ててマグマに消滅する。

螺旋状に続く一本道で段々と火山内部へと下って行っていた。

熱気はからつとしたモノとなつて体感温度はグンと下がり、息がしやすくなった。身体も軽くなり意識も鮮明に近づいてくる。

「祭壇が見える」

「はい。あれは……どうしてこんな場所にあるのでしょうか？」

「作つたんだとしてもどうやって作つたんだらうな」

ずっと下り続けていると宙に浮かぶブロック群が見えた。正方形に整えられた深紅のブロックと黒のブロックが交互にあつてその中央には水の神殿と似た祭壇があつた。

「支柱も無い。どうやって浮いているんだ？」

「不思議ですね」

近づいてくるほどにそのシルエットが鮮明になってくる。左右から伸びた支柱に支えられて浮かんでいるように見えると思われていたブロック群は文字通り浮かんでいた。

マグマと水平に浮かぶ祭壇。側面の壁もまばらにあつて元々全部を囲っていたが熱で溶けてしまったように見えたのは側面のブロックの角が丸くなっていったからだつた。重力に垂れるように、獣の尾のように滑らかなカーブを描いて伸びたブロックも複数ある。

「声は聞こえるか？」

「いいえ」

「もつと近づいてみるか。聞こえたら教えてくれよ。聞こえなくてもフランのせいでもないから気にするなよ」

「……はい。すいま あのこと……ありがとうございます」

「いいんだ。この時に礼を言うのは違うかなって思うぜ。でも何度感謝されても嫌な気持ちにはならないぜ」

レオンは柔らかな笑みを浮かべてフランの言葉を受け止める。

案内人とテッドは先にブロック群へ立って祭壇を調べ始めている姿を横目にフランの歩調に合わせて歩いていったレオンもようやく祭壇へと足を乗せた。

その時、ガタガタとブロックが揺れ始めた。

「何があつたッ?!」

レオンが戻ろうとするが背後にあつた側面のブロックが帰り道を塞ぐように落ちた。

まだ揺れ続けているブロック。レオンは腰に差した剣に手を置いて周囲を見渡して警戒をする。

「みゅー」

頭の横で声が聞こえた。フェリアの声。

レオンが振り返るとフランの首から下げた札が千切れて足元に落ちていたのが見えた。フランは頭を抱えて膝から崩れた。

「フラン何か……何か聞こえたのかッ!!」

「辞めて……辞めてー!!」

フランは叫んだ。声の限り叫ぶ悲痛の声色にレオンの足も止ま
た。

二つのクーパー

「レオンさん、後ろッ!!!」

振り返る前に熱気が背中へ迫ってくる感覚があったが目の前で叫ぶフランに気を取られて反応が遅れた。

「クッ」

レオンは右手を顔の横に当てて熱球をもろに受け止めてしまった。衝撃で身体ごと吹き飛んで前のめりに地面に突っ伏す。

声の主は案内人だった。案内人は簡易に作れる盾（本来はマグマが飛び散った時に身を守る登山用の盾）を構えながら身体を丸めてレオンとフランの方へ近づいてくる。

その背中越しに見えるテッドの身体が燃えている。明るい炎の色が身体の表面を包み込みもがき苦しむシルエットがよれよれと動く度に熱球は乱反射し始めていた。

「何があつたッ?!」

「わかりません……私が気付いた時にはあのように炎に抱かれておりました」

「助けないと」

「ダメです!!!」

盾を構えてレオンとフランを守るように身構える案内人を押しつけてテッドの元へ行こうとしたレオンの衣服を引っ張り盾の効力がある範囲に引き戻される。

「あれは……精霊の火。あなた達は精霊を呼びだす為に来たのでし

「ようツ?!」
「だとしてもツ。あれは何だ? 水の精霊を呼んだ時はあんな風に苦しんでいなかった」

レオンは案内人の肩辺りで展開する半透明の盾越しにもう一度確認し、自分の記憶と照らし合わすが全く違って見えた。あれはトランスというより肉体を焼き尽くされるほどの勢いと膨大な悪意を感じる。

視線を水平に動かして隣にいるフランを見る。辞めて、と叫び続けている全身の表面に薄い真つ赤なオーラが現れ始めた。

「大丈夫か?」

「辞めて!! お願いだから辞めて!!」

「何を言っているんだ? フランツ!! しっかりしてくれ」

「いやー!!」

錯乱するフランの肩を掴んで落ち着かせようとした手が何かに弾かれる。指先にしびれが残っているがもう一度フランへ触れようとした。

「大丈夫だ。俺が守ってやる。怖がることなんて何も無いんだ」

「辞めて……クーパー……私達は二つで……」

「何? 聞こえないぜ」

「辞めて……クーパー……お願いだから」

「クーパー……? 火の精霊の名前か? 頼む。俺からも頼むぜ!

!」

レオンも共に叫んだ。

だが、フランは怯えて震える。テッドは苦しみがいている。レオンはただ何も出来ずに手をこまねいている。

「レビー……貴様はなぜ俺を捨てた……」

テッドが漏らした言葉さえも焼き尽くす炎は勢いを増し続けて、いつしか巨大な火柱になっていた。ブロック群ごと揺らすほどの力があり、足元に広がる火の海も呼応するように波を高くしていた。

「火の精霊は双子だという話を聞いている。あれは……片方。嫉妬や憎悪にとりつかれたクーパーか」

「嫉妬や憎悪だつてッ」

「彼自身も強い憎悪を持っていたのだろう。それに反応したのか、厄介なことになった。もう片方の精霊が出てきてくれたら良かったんだが」

「もう片方……精霊は二人？ だったらフランが聞いている声はもう片方の声……なのか？」

「おそらくそうだろうね。辞めてっていう言葉もそう受け取れば自然だ」

テッドを包む炎は色を濃くし、深紅に近い赤となる。やがてシルエットも炎に貼りついた影になり、声も聞こえなくなった。

声が聞こえなくなるとフランも次第に落ち着きを取り戻し始める。丸めた背中、必死に足りない酸素を吸うような呼吸。頭にやっていた両手を地面へついたが自分を支える力も残っていないく頬から倒れる。

レオンはフランを抱き起こしそうと手を伸ばすが触れられない。身体の表面にあった赤いオーラがよりくつきりと見えてそれが阻んでいる。オーラは球体状に膨らみ、フランを包む甲羅になった。

「レオンさん……あれは精霊……でしょうか？」

案内人の声で振り返ると火柱は火山口の隙間に敷き詰められた白い煙を突き破って消えて、残ったのは全身を真っ赤に変えたテッドの姿だった。水の神殿でトランスした自分の姿とそっくりなテッドがしゅうしゅう、と音を立てて呼吸していた。

魔物のそれに似ている姿に絶句する案内人が盾を片手にレオンの背後へ逃げ隠れた。レオンはテッドから目をそらさずに立ち上がる。テッドは手を掲げると全身の赤い光がそこへ集結してくる。光は長槍となり、軽く横へ薙ぐだけで熱風が襲ってくる。

「テッド……」

「退け」

「テッドじゃないのか……」

「退かないのならばお前も殺すッ！！」

「辞めてくれッ！！ どうしたんだッ」

テッドは低い体勢のまま、地面すれすれを滑空して槍を突き上げる。槍先がレオンの頬をかすめて前髪の一部を焼いた。

「……辞めて」

「クッ」

レオンの背後から二本の炎の角がテッドへと伸びたのを槍で器用に捌きながら後方へ押し戻された。

フランが立ち上がる気配があつて視界の隅に見えていた角がキューっという風船を擦るような音を立ててフランを包む甲羅の中へと戻っていく。

「フラン……？ いやクーパーか？」

「はい。私の名前はクーパー。火の精霊です」

「セイラムの時より話が出来そうだ」

「時間はあまりありません……あのリアムにいるのは私のもう片方。私達は二つで一つ」
「二つで一つ……？」

レオンがそう訊ね返すと返事は来なかった。代わりに全身が真っ赤なオーラで包み込まれていた。あの時と同じだ。

湧き上がる力の奔流に身を委ねていると自然にトランス状態へとなることが出来た。全身を光が包んで、手には赤色の剣がある。

「嫉妬、憎悪を持つリアムの心に強い反応をしたのでしょ」

「テッドが……」

「レビー。その名前が彼の心を支配している」

「レビー……俺達の母親の名前だ。俺達を捨てた母親の名前……」

頭の中で響く誰かの声にそう答えるとレオンは途端に無力を感じる。自分は守れなかった。自分は幼くて何もしてあげられなかった。テッドは怒っていたんだ、と思うと今までの母親への嘆きが頭に浮かぶ。

深い憎悪、捨てられた憎しみが塊となって心の隅で転がっていたのだろうか。目の前のテッドは怒りに身を委ねている。深い痛みだ。深い憎しみだ。鮮明に見える赤色が心の痛みだと知った。

顔には出さないテッドの内面にくすぶり続けていた火がこんなに大きいなんて思わなかった。

「レビー……母か……」

レオンは少ししかない記憶の糸を手繰り寄せた。

リールサナと呼ばれる砂漠の手前にある旅商人や旅人が砂漠を超えるために一泊過ごすために作られた街に兄弟はいた。街の大半の人間は旅人相手の商売をしていて母のレビーも例外では無かった。夜の17時から24時まで四公演を繰り返す毎日で昼間も練習に時間を費やしてロクに話した記憶もない。そんな街の子供達の大半は街外れにある教会や孤児院に預けられて母の帰りを待つ日々。迎えが来ない日も少なくはない。

「また来ていたよ」

近くにある施設の研究者である犬族の医者が気絶したテッドを抱きかかえて教会の扉を叩くのも見慣れた光景になりつつある。

テッドは毎日のように街へ行き、劇場へ足を運んでいる。レオンは呼ばれたことも行くことかと思っただけのことでもない。待っている、と言われたのだから待っているのが当然だと同じ街の子供に言われていたからだ。

寂しいか、と聞かれれば複雑な気持ちだった。ここには神父さんもシスターも多くいて同年代の子供もたくさんいた。

「……これはまたご迷惑をかけました」

「いいえ。母親に会いたいのでしょうか。お気持ちは察します」

神父が困り果てた表情でテッドを受け取ると犬族の研究者は神父の膝もとにいたレオンへ視線を移した。

「この子もリアム……ということはお兄弟ですか？」

「はい。父親は違いますが母親は同じ兄弟です。まるで違った性格をしていますよ」

「優しい目をしている」

「この子は優しい。兄もまた優しいですがこの子は特別施設の子供たちにも人気がありますよ」

「リアムは特別な血を持っている。かつてのレッドと同じようにこの街を守る力がある」

レッドとはこの国境線上にある街が戦乱に巻き込まれた時に孤軍奮闘し戦火を退けた英雄の名前だ。昔話の類で何度も聞かされた。レッドに似ている、というのもも大人が良く使う褒める言葉の一つだったことを憶えている。

「それでは私は」

去ろうとした犬族の研究者の裾を引っ張る小さな手が神父の腕の中から伸びている。

「この子は母を思いすぎている。依存しているという方が近い」

「五歳に満たない子供が母親の傍にいたいと思わない方がおかしいだが街には荒くれ者や流れモノも少なくはない」

「危険なのも承知しております。学業の一環で教えてもおりますが……まだ若すぎる。学ぶには時間が必要です」

「ええ。我々も出来る限りのお手伝いは致しますよう」

「申し訳ありません。甘えさせていただくしか出来ません。何しろ人手が足りないのです」

教会の中には街中の子供でひしめき合っている。うるさくてドタドタと暴れ回る子供の声はまだ背後から聞こえている。

「いいえ。お互い様ですよ。では」

犬族の研究者は小さな手の指を一つずつ離して街の方角へ続くならかな斜面へと歩き始めた。その向かう先には灯りがともり始めてここからでも賑わいが感じられた。

「俺はあんまり覚えていないぜ。断片的な表情や仕草やニオイしか憶えていない」

クーパーの声にノイズが入ってもう会話が出来なくなった。ふいに思い出した懐かしい光景にも涙一つこぼす気にはなれない。

「何だっていまさらそんなことで憎しむんだ？ もう過ぎたことだぜ。まあ俺だっつて色々思うことはある」

レオンは顔を半分だけ振りからせてフランを見る。全身を覆う赤いオーラが波打ってそれ自体が生物みたいだった。

焦点が合っていない瞳孔が開いた瞳の中は互に見合わせて真ん中にいるレオンは空気がみただった。精霊同士も強い感情があるのを心の奥で知っている。

憎しみを持ったテッドのクーパーとは違った感情。暖かくて相手のことを深く愛している感情で満たされる心が全身に力を注ぎ続けてくれる。

「母親なんてロクな人間はいないか……」

ふいに過る言葉。フランの母親が見捨てたという話をしていた時にテッドには予兆があった。声を荒げることなんて珍しいと思っ

いた。

いまさらっていうのもフランの顔を見たから思い出したのか。フランも同じ境遇なのにさえ怒りを感じているのか。

「スウイニーも神父さんもさ……優しいのはテッドの方だけ。俺はただ何も考えていなかっただけさ」

レオンはそうこぼして迫りくるテッドの長槍の猛攻を正面から受け止めた。背後にいるフランを守るために戦い続ける。だがテッドも守りたい。それがわがままなのか？何かを選べば何かを捨てなきゃならないのか？

「違うッ！！ 目を覚ましてくれ」

「うるさいッ！！ 退けッ」

「退かないぜ。俺は守るって約束したんだ。たとえこの身をその炎で焦がしてもここを退かないぜ」

レオンは槍を弾き返したが追撃はしなかった。テッドの身体を覆う赤い色がドンドン、と黒ずんで深紅に近い色までなってきた。

「退かないなら全てを壊してやる」

「どうしちまったんだ……テッド……」

「怒りをくえ。俺が味わった苦痛をお前は知れ！！」

「辞めてくれッ」

長槍を掌の中ですり回して先端を足元の黒いブロックへ突き刺した。先端がブロックを突き抜けてからもテッドは全身の力を込めて奥へと押し込み続ける。

「何をしているんだ？ クーパー！！ 教えてくれ」

レオンの声が虚しく響いた。
その時、静寂を破るありったけの魔力を込めた一筋の矢がレオンの背後から槍を突き立てるテッドへと伸びた。

「辞めるー!!」

「ですが……今がチャンスです」

「チャンスだって？ あれは仲間だ」

「私にはそう見えません」

キツパリと言ったのは案内人だった。構えたボーガンをおろして立ち上がりテッドの様子を確認する。

矢はテッドの肩へと突きぬけて背後のブロックに当たって折れた。テッドは顔を苦痛に歪ませて長槍から手を離れた。槍はすうーっと落ちて足元に広がるマグマへと落下する。

「ッ!!!」

槍が火の海へ落ちた途端に複数の火柱があがり、ブロック群の高さも遙かに越えて白い煙を突き破った。

「噴火させる気だったのかッ」

「……どうしてだ？ テッド……辞めてくれよ」

「やはりこれは危険すぎる。レオンさんも手伝ってあれを倒しまし
よう」

「倒す？ 倒すっただって……あれは……あれは……あいつはテッド
だ」

悔しさを吐きだすように咆哮し、また赤色の光を掌に集め始める
テッドが獣のそれに似ている。いつものクールな表情は消えて怒り

に身を任せているのが一目でわかる。心で感じる。震えているのは心の中にいるクーパーだ。きつと泣いている。

レオンの頬に暖かな涙が流れた。憑依された身体を使ってクーパーが泣いている。

「どつすりゃいいんだよ」

身体を抱く炎の色も黒ずみながら肥大していくのを見て案内人は慌ててもう一つの矢をボーガンに装填し始めていた。

追憶のテッド

テッドの回想

教会のお手洗いは外の離れにあった。幼児を寝かせるシートの中
央に折り目を付けておくと一定の時間で背中がかゆくなり泣き始
める。そのドタバタの最中にトイレへ行くと行って街へいつていた。

方法はいくつもあった。たとえば近くにある森から迷いこんで
たうり坊を畑がある囲いの中へ置いて窓の外を眺めていると幼児が
興味を示してちよつとした騒ぎになる。その騒ぎの中、礼拝堂の
口から堂々と抜けることが出来た。

「靴を履いてくれば良かった」

大きな車輪付きの馬車が通らないので小石は潰されな残って
いる。舗装なんてされる費用もなくボランティアで草が整えられ
いるだけのあぜ道をひた走るテッド。子供の足でも十分ほどで街の
入口付近へと降りれる。

小高い丘の上にある教会。砂漠の興業都市との距離感が絶妙な
の心を表している。

入口に掲げられた電飾付きの看板の足元に身を寄せて街の中を覗
くテッドの視線の先には劇場【マドラーデ】があった。昼間に
見ると間抜けな外観の分厚い布で覆われて太い木々が支柱の代わり
に使われてあるだけの劇場に人が吸い込まれる。

昼間に入る人間は劇場の関係者が多いとスウィニーが言っていた。
犬族の研究者は今日も夕方になるとふらつとやってきてテーブルの
隅でミルク割のスコッチを飲むのだろう。

「見えない……か」

テッドは入口からは街の中へ入らずに柵に囲まれた外周にそって歩いた。劇場の数だけでも十以上はある。宿にカジノに武器も材料も砂漠を超えるために必要な道具は何でも揃えることが出来た。柵の内側でわずかな活気があるのはそのせいだ。

大半の人はその一つ前の街で全てを揃えて夜に砂漠を超える前に仮眠をとるために利用するがまれに数日間もうろろしている人もいて、その人は名前が覚えられるほどに入れ替わりが激しい街だった。

円形に広がる街の裏口、砂漠に近い出口の脇に小さな穴があった。テッドがほふく前進をしても背中を擦るほどに小さな穴を通り抜けた場所で折り返し今度は柵の内側を来た道に戻った。

「もう日が上がりきったか……」

教会の人が気づいて騒ぎ始める頃だ。最近じゃ諦めて探すこともしていないと思うが、とつかの間の感傷に浸りながら太陽を見上げて先を急いだ。劇場はどれも同じ外観をしているが毎日のように見ている母親がいる劇場だけは一目でわかる。

「……それは……いい値段するが……だが……」

「運搬に費用が……何しろノールからの代物で……エレンからだと税金が……」

「仕方ないにしろ……ううん」

テッドは声が聞こえて足を止めた。

露店の武器屋と体躯が二回り大きい男の話声。その呼吸に合わせてそつと足音を立てて移動する。見つかれば騒ぎになることもある。まるで子供の獣を見つけたみたいを目を丸くしている姿は何度も見た。

代物を手にとって鞘から剣を抜いた時に一気に走り抜ける。店と店の間からこちらを見ようとした横顔が店主の言葉に振り返った。少しだけ走り材料屋の裏にある樽と樽の間にすっぽりと身を挟んで呼吸と胸の鼓動を整える。口を押さえて思いつきり息を吸うとだいぶ楽になる。口元から手を離して空を仰ぎつかの間の休息を得る。

「もう少しで会える」

念のため、左右の人影を確認してから樽から身を剥がした。立ち上がり脇を見ると柵がさつきよりも高く見えた。

テッドは疲れを自覚しながらも劇場へと走った。

数分。劇場裏のテントの隅をしっかりと握って到着の味をかみしめる。時間によって太陽にさらされる部分なのでまだ温かさが残っていた。

耳を当て中から洩れる声を聞いた。舞台を踏む足の音と手拍子が続いている。

「……」

それだけで嬉しかった。テッドは涙を堪えながらその音にただ身を寄せた。

テッドは水平に手を払って案内人が放った一筋の魔法矢の軌道を変える。矢の軌道は弓なりに湾曲し斜め上にあつた真紅と黒のブロツクの隙間を抜けて火山の壁へぶつかり二つに折れて火の海へと沈んだ。

「辞めろ!!」

「ですがッさっきの火柱を見たでしょう？」

「ッ」

「溶岩の雨が街へ降るのは絶対に阻止しないと」

また矢を装填し始めようと屈んだ案内人にテッドが攻撃を仕掛けようと駆けだす。

「辞めてくれ」

「退ける」

間に入り槍を受け止めるレオンがそう叫んだがテッドは冷静な口調で返した。

「テッドは……テッドに怒りは似合わないぜ。誰かに操られている姿も様になってねえぜ」

「……」

「目を覚ましてくれよ。俺は……俺はッ」

「退ける」

一瞬のすきをついて剣を弾くテッドが開いたスペースをくぐり抜けて案内人へと槍を一闪させる。反応が遅れた案内人。盾で直撃だけは避けれたが盾は破損し出力が低下する。

仰け反り尻をつく案内人の頭上から槍を縦に構えたテッドが追撃する。

「ッ」

その槍の側面から炎が流れてくる。手元から槍を奪い去って壁の

奥へとねじ込んだ。勢いを失った炎と共に火の海へ落ちる槍が小さな火柱を起こしたのが足元に見える。

炎を放ったのはフランの肩から生える角のような何か。

「クーパー……お願いだから辞めて……そうじゃないと私は」

「またお前だけで独占しようとするのか？」

「違う。違うの」

「お前は私だと言うが、私はお前ではない。断じて違う!!」

テッドではなく中にいるクーパーが言ったように聞こえる。フランの中にいるクーパーが違うと返せば倍の声で違うと言い返した。

言い合いが続くほどレオンのトランスの力が弱まってくる。力が抜けて手に持った剣の輪郭もぼんやりとし始めていた。その代わりにフランの周囲を囲う炎は大きく膨らんでいく。

ひゃーっ、とその隙に逃げる案内人にも目を向けずににらみ合う両者が作り出す空気に火の海も押されて静かに波打つ。

「あなたはクーパー……私もクーパー。二人は一つ（パーニャ）二人で一人」

「憎しみ、嫌悪、嫉み。押しつけたのはお前だ」

「違う」

「そしてお前はそれを望んでいる。だが人に愛されることを望んだお前は私と言う姿の無い獣を作り出して全てを押しつけた!!この気持ちかわかるかッ」

「……違う」

「否定は私のモノだ。それさえも奪おうとッ」

テッドは長槍を作り出してフランへと襲いかかる。フランは微動だにしないで周りを覆う炎の外殻が長槍を阻んでいた。

「レオンさん……逃げましょう」

「逃げられるかよ。お前だけで逃げてくれ」

「あなたでは勝てません」

「……勝てない？ 勝つんじゃない。止めるんだよ」

レオンは自らの力の消失を感じながらもフランとテッドの間へ入ろうと駆けだした。案内人も戸惑いながらもリュックの中から使えるような道具を探る。

壊れた盾を押し込んでボーガンの矢を取り出したが人外の戦いに手が止まる案内人は矢も押し込んでリュックの紐を締めて静かに祭壇から逃げようとしていた。

周りを囲んだ壁の隙間から飛びおりればギリギリ縁へ乗つかれる部分を見つけて飛ぼうとするが、直前で足元を見てしまい全身をすくませてへたり込んでしまった。

「フランでもクーパーでもどっちでもいい。教えてくれ。どうすりゃいいんだ？」

レオンはテッドと外殻の間へ身体をねじ込んで交差させた拳底で双方を押し返して距離を離させた。もろにお腹へ喰らった一撃に表情を歪めるテッドとビクともしないフラン。押した掌の方が軽く爛れてヒリヒリとする。

「目を覚ましてくれよ」

「……」

「俺だつて話をしている。自分が自分だつてわかる。テッドだつて負けるんじゃないやねえぜ」

「クッ……うっ……」

テッドは丹田の位置を押しえながら立ち上がり低くうなった。

「それにフランも辞める！！ 言いたいことがあるなら話せよ。戦うことを望んでいるわけでもないだろう？」

「戦いを望みません。ですがクーパーの激しい怒りに身を捧げるわけにもいきません。あのような感情に支配されるとこの大地も滅ぼされかねません」

「あのような……お前は何もわかってないぜ。怒りも嫉みも大切な感情なんだぜ。それを分離して必要ない感情だつて見捨てるなよ！

「見捨てる……？」

「そうだ。あいつが拒んでいるんじゃないからお前が拒んでいるんだ。恐れているんだ。自分じゃないつて受け入れられていないんだ！！

レオンの言葉にフランを覆う外殻が反応して蠟が溶けるように姿を崩したが、ややあって元の形状、いやさらに強力で禍々しい姿へと変化していく。角も先端が伸びながらグングンと鋭利になった。

「怖がるなッ」

「……」

「誰だつて認めたくない感情はある。そいつのせいで面倒なことにもなるもんだぜ。だがそれも自分つてことさ」

「……」

「フラン。精霊は人の心に反応しているんだろう？ クーパーの深い愛情が反応した自分の愛情を信じる。きっと愛することが出来るさ」

怖がり、拒絶するほどに力が沸きあがるのをレオンも感じる。狂いそうな力の奔流に酔い始める自己愛^{ナルシズム}がかすかにくすぶる胸の中、爛れた掌でガバツと自らの胸もとを掴んでおさまれと命じる。

フランは長い間、人と接することが極端に少なかったせいで色々な感情をコントロール出来ずにいた。迷い・戸惑い・困惑する感情がふいに外殻を柔らかくさせるがすぐに拒絶し、形状を保とうとする。

「うるさいッ」

テッドは声を荒げることで拒絶し、フランは黙ることで拒絶していた。対照的な二つの意思に挟まれたレオンはそれでも叫び続けた。テッドもフランも失いたくない。火山が噴火して街が消えるのも困る。だからといって戦いたくない。

「選択するのはいつだって何かを失うものならさ、俺の全てを失わせてくれよ。テッドとフランと街の皆を巻き込まずに俺の身体の中で話合ってくれ」

「黙れ!!」

「俺は壊れたっていい。何かを失うくらいなら自らを失うさ。俺はリアム。精霊を宿せる身体なんだろう？ だったら俺の身体をくれてやる」

「……黙れ」

「テッドの肉体から離れるよ。フランからも離れてくれよ。フェリアだって俺の頭の中が気に入っているんだぜ？ 精霊の住み心地は保証するぜ」

かすかに笑みを浮かべて冗談を言うのが正しいことかもわからない。ただ怒りの矛先をレオンに向けてくれれば、と願った。

フランを守ってやる。遠い昔にかわした約束に思える。時間の経過が足りないってんなら言葉で補おう。何度だって守ると誓おう。

「黙れって言っているんだ!!」

「ッ」

テッドは低い姿勢から地表すれすれを滑るように走り、手に持った槍を突き付けてくる。深く息を吸って剣を捨てたレオンが両手を広げる。

わき腹に強い衝撃があった。視界が歪んで意識が途切れかける。わき腹から燃え広がる炎が全身を黒く染め始めた。全身で怒りを感じる。こんなにも強い怒りを隠していたことを知らなかった。

記憶の中にあるテッドは常に冷静で感情を出さないクールな男だった。まるで別人に触れているみたいにテッドは感情をあらわにしている。

「……ごめんッ……」

レオンは身体をめぐるテッドの感情を得て謝ることしか出来なかった。

「謝るしか出来なくて……こんなに苦しい思いをしていたなんて知らなかった」

「……れ、れお……」

よれよれと力が抜けて自らの肉体も支えられない身体が自然と前に傾いてテッドに寄りかかろうとしたのを抱き締めるテッドの腕。

「本当にごめんッ……テッ……」

痛みすら彼方へ消えた。ただこの胸に伝わる怒りが悲しくて、こんなにも溢れた想いを抱えていたのに甘えていたのを悔んだ。

テッドの回想。

夕暮れが迫るにつれてまばらだが人が増えてくる街の光景。昼間とは違った種類の賑わいに看板にもライトが灯った。様々な色の電飾に群がる旅人はまるで蛾みたいにふらふらと誘われる。

露出の高い服を着る女を中心に人ゴミが出来始めて、五分も経たない内に流れが出来た。当然、劇場にも人が多く流れ込んできて第一公演が始まった。

「寒いな」

近くにあった布を拾って包まるテッド。日影に長時間いたこともあって体温はずいぶんと低下していたので全身を掌で擦る。掌も冷えるとはあ、と息を吐きかけて温もりを持続させて再び擦っても寒さには勝てなかった。

砂漠の気温は昼と夜では雲泥の差があり、ひなたでも日影でも差がある。

「あんまりだな」

布は薄くて耐寒にもならないが手放さなかった。すっぽりと頭にかぶせればフードにもなる。人目をしのぐ役割もあって問題は背丈だった。

小人族に変装しようにも腕や足が細すぎる。獣人族では毛深さが全く違うし、ヌツと付き出した鼻頭もない。

「仕方ない。待つしかないのかな」

テントに背を預けて身体を乗りだし街の様子を眺めた。ざわめき始める街の様子を察知して誰か有名な戦士がいるのだと推測する。

有名な戦士の一団の姿が見える位置にまで走る。テントとテントの間だがすぐ前には広い路地があつて近づいてこられると影でも子供だということがバレる危険な位置。

戦士たちを囲む女を不機嫌そうに睨む酔いどれの戦士が多くいた。

「おいッお前ら、ガイザーの傭兵だろう？ 俺とどっちが強いか勝負してくれよ」

「確かにガイザーの傭兵だが争いは辞めておくよ。お金にならない戦いは趣味じゃないんでね」

「何だつて？ だったらお金をくれてやるよ。いくら欲しいんだ？ ほらッ」

一人の男が札を投げつけて挑発するがガイザーの傭兵は呆れた様子で答える。

「飲み過ぎじゃないかな？ 俺らだって長い旅で疲れているんだ」

「何だッその言い方はッ。気に食わないね」

「はぁ……手荒い真似はしたくないんだつてば」

「舐めてやがるのかッ」

街でも馴染みの光景だ。毎日誰かが誰かと喧嘩をし始めてそれに野次馬が群がる。

屈強な男に囲まれてもなお、威勢のいい男が殴りかかると周囲を歩いていた男達がやじを飛ばし始めて一気に過熱する。

「今だッ」

テッドはタイミングを合わせて一気に路地へ出て劇場の中へ入った。切符を配る男も喧嘩を苦い顔で見ても足元のテッドに気づいていない様子だった。

中は丸いテーブルが七つあって椅子だけの席が壁に並んでいる。人の入りはまばらだった。

入口からすぐにはバーカウンターがあつて劇場に背を向ける形で椅子が設置されている。その隅に身を押しこんでいつも角に座るスウィニーに黙っていてくれと目で合図をした。

困った顔のスウィニーはそれでも黙つてスコッチグラスをちびちびと舐めていた。

「間にあつたか」

開演の合図のブザーは鳴っていない。

「また来たのかッ」

太い声が頭上から聞こえてすぐにカウンター越しから手を伸ばしたガタイのいい男にテッドは首筋を掴まれて引き上げられる。

「離せよ」

「レビーの子供だからって何度も許してもらえと思つなよ」

「離せてんだ」

「はあ……やれやれ」

そう言つて腰辺りに置いてあつた眠り花をテッドの顔に近づけると途端に眠気が来た。

次に目を覚ました時は教会のベッドの上だった。また母親に会えなかった。どうして？なぜ…会いただけなのに…なぜなんだ…。

憶えているのは母親では無い誰かに抱かれた腕の温もりと全身を包むわずかな揺れ。

テッドは起き上がり己の非力さを怨もうとした時、ベッドの隅で座ったまま眠りこけるレオンの姿があった。

「ッ」

待ってたのか、とレオンに手を伸ばそうとした時、かすかにニオイがした。母親と同じニオイがベッドに乗つけた頭からにおう。

「おい……母が来たのか？」

「ん？……うん？ ああ……起きたの？ おは」
「いいから答えろ！！ 母は？」

のんびりと欠伸をするレオンの肩を何度も揺らして強引に訊ねるテッドの迫力に押されてもなお眠たそうにしているレオンはもう一度眠ろうとした。

「まだいるのかな？ さつき来たよ。何かね、色々……うん……」
「クソッ退け」

テッドはレオンを投げてベッドから飛び降りて入口へと向かったが、人の姿はない。まだ夜で遠くに見える街には人の姿がある。

「どうしてなんだ……」

嘆いた言葉が夜の静寂に吸い込まれていった。

「あの時、母は……テッドに会わなかったんじゃなく会えなかったんだよ。会つと余計に辛くなるからって」

記憶なのか、今考えていたことなのか、レオンは見えた光景に対してそう答えた。相変わらず力が入らない身体をテッドに預けている。

「俺を少しだけ抱きしめられてすぐに帰ったよ。寂しそうな顔をして震える腕を憶えているんだ」

「……」

「母だつて一人でいるのもすごく怖かった。すごく弱くてすごく辛かったんだと思う。だから会いたいつて思つて街まで来るテッドに会つてしまうと帰れなくなりそうだったのかな……ごめん……よくわからないんだ」

「勝手な……勝手なことを言つてッ」

テッドはもたれかかるレオンの身体を剥がした。立って支えられる力もないレオンは勢いよく倒れてしまう。震える腕に力を入れても上半身さえ起こすことも困難だった。

「怨まないでくれよ。母だつて同じ気持ちさ。会いたくても会えなかった」

それでも力を入れて立ち上がるうとするレオン。

ぶるぶると震える腕に鞭を打つて上半身が起こせると残った力に火がついて立ち上がることが出来た。

「母もテッドも同じ気持ちなのにどうして怨まないとダメなんだ？

「違っつ」

「違うないさ。俺は二人とも知ってる。二人とも俺の大切な家族なんだ」

「だったら……だったら何故捨てたッ。お前も捨てられたんだぞッ」
「捨てられた……理由があるんだと思うぜ。母を守れなかったのは俺のせいだ。だから捨てたんじゃない……俺の力が足りなかったんだ」

レオンはほんの三歳で何も出来ずにいた。寂しさを埋めることもお金を稼ぐことも漠然とした恐怖を拭うことも出来ない子供だった。子供が母を守りたいって願うことは罪なことなのか。

「仕方無かったなんて言葉は使いたくないケド…俺達は子供で一人で何も出来なかった」

「辞めろ……辞めてくれ」

「認めたくない弱さがあった。愛を憎しみにすり替えても弱さは強くはならないんだぜ。カードの裏が表になるみたいに」

「辞めろッ」

「テッド……お願いだから目を覚ましてくれよ。憎しみなんて悲しいだけだぜ」

強い拒絶にテッドを包む黒ずんだ炎が膨れ上がり続けた。違っ、違っ、違っ、と否定し続ける言葉とテッドの意思がぶつかり合い激しく燃え上がる炎。

その炎はねじれて竜巻になり、熱風を周囲に散らせた。黒ずんだ火の粉も舞い踊る中、テッドは喉が干切れるくらいに叫んだ。

「信じるぜ……テッド」

そう言っつてこの成行きを見守るしか出来なくなつたレオンは無意識に刺されたわき腹に手をやつた。掌を脈打ち流れるのは黒ずんだ炎ではなく、自らの真つ赤な血だつた。

鎮まる怒り

炎の竜巻が頭を大きく振って側面のブロックに衝突を繰り返していたのをただ見守るレオンは膝をついた。案内人が駆け寄り傷口に回復アイテムを擦りつけたがアイテムは身体を覆う光に効果を消されてしまった。

「回復が出来ない……？　痛みはありますか？」

「痛みはないぜ」

「おそらくアドレナリンのせいでしょう……」

「血が出ているのはわかる。掌に脈を感じるぜ」

掌を傷口から離してすぐに血は止まった。ギュツと何かが軋む音が骨に響いてレオンの身体中を駆け巡る痛みが変わった。

歪ませる表情に案内人は別の治療法があります、とリュックの中を探ろうとした斜め上から大げさに頭を振った竜巻がレオンと案内人を薙ぎ払った。

身体ごと吹き飛ばされる二人。案内人のリュックの中身が転がって一部は火の海へと転落してしまった。すぐに残ったアイテムを拾い集めようとした案内人よりも早く竜巻が起こした熱風がアイテムを外へ弾き飛ばした。

「この竜巻がクーパーなのか？」

「いえ。これは意思同士が衝突し合っています」

「意思同士の衝突ッ?!」

「リアムの意思とクーパーの意思が離反し始めています」

「それは……どうなんだ？　いいことなのかッ?!」

レオンが叫ぶ声に抑揚のない声で答えるフラン。クーパーが話し

ていると言った方が正しい。

竜巻は上下にも揺れ始めて激しさを増している。これだけの激しい衝突にも壊れることのないブロックだが、その奥に見える火山の表面が割れて火の海へと崩れる岩石の姿もあつた。

「ここも祭壇も危ないのか？」

「いいえ。ここにいれば安心です」

「だったら外はまずいつてことなのか？ さっきの火柱も気になる」

「この足元を波打つ火の海はクーパーの心。怒りに身を任せれば噴火してしまう。それだけは止めないといけません」

「何だつてツ?!」

その言葉で火の海がとてつもない脅威なモノに思えた。竜巻は勢いを増して長槍の炎とは比べ物にならないほどの力を感じる。あれが落ちれば火柱なんてレベルじゃ済まないことはレオンにも理解出来る。

「止めないとツ。選んでいる時間はありません」

フランを守る炎の外殻が膨らんでいく。二本の長い角が内側へ折れていき互いに巻き付くとそれは一つの大きな角になった。

「もう少し時間をくれ……テッドなら……テッドなら必ず何とかしてくれるぜ」

「待てません。時間は長くない」

「どのくらい？」

「正確には何とも……ですがもうクーパーを止められないのなら無理やりに一つになるしかありません」

「精霊も手荒な真似をするんだな。だったら俺も加勢する……少しだけ俺に時間をくれッ」

レオンは痛みから抜けだす為に声の限りに叫んで突進した。竜巻の根元にテッドがいると信じてグルグルと回る竜巻を避ける低い姿勢で駆け寄った。

風力で身動きが取れなくなりそうだ。全方向からの圧力に耐えながら前へ、テッドがいる竜巻へと足を進めた。頭の上で腕を交差させて一気に通り抜けるつもりだったが、力が足りずに弾き返されてしまった。

後方へ軽く飛ばされるとそのまま足を取られて身体はフランの手前まで投げ出された。

「何度でもやってやるさ」

風に乗ってレオンへ降りかかる火の粉を腕で払って立ち上がりもう一度竜巻へと挑戦するがビクともせず風に押し返されるだけだった。

「辞めなさい。半覚醒しか出来ていない精霊の力では覚醒した精霊の力には対抗出来ません」

「半覚醒？」

「意識が統一されていない。今は精霊の力を使いこなせていない」

「使いこなせていないかッ。自慢じゃないが俺は銃だって剣だって演劇だって中途半端だ。上等だぜ」

レオンは自分の胸を拳の底で叩いて奮い立たせる。技術が劣っていても心だけ負けていなければ必ず道は開けると経験が教えてくれる。

うおおおおお、と雄たけびをあげて竜巻へ突っ込むレオンが根元にしがみつく。大きな手に掴まれて投げられようとしているみたいに足が浮いた。

だが上半身にありつたけの力を込めてしがみついた。

「テッド……」

竜巻の音に叫ぶ声も奪われる。

「ぐぐぐと音の洪水を全身に浴びながらも何度もその名前を呼んだ。

「れ……れお……」

「そう俺だ。レオンだ」

「れお……」

「呼べ……俺の名を。そして思い出せ」

竜巻の根元から小さな赤いデツパリが見えた。指だとわかったのはそれが二本出た時だった。それは確実に外へ向かって突き出している。

レオンはそれを掴もうとしたが竜巻の勢いに動けなかった。

「レオン……レオン……」

「テッド」

指先だけだったのが炎に包まれたテッドがよろめきながら竜巻の外へ出てくる。それをレオンが抱きとめて二人は風に吹き飛ばされる。

しっかりと抱いた腕の中にはテッドがいて黒ずんだ炎ではなく、レオンと同じ真っ赤な炎をまとっていた。

「ギヤアツアアアア」

断末魔の叫びが竜巻からして規則的な動きが不規則になり、やが

て根元に吸い込まれるように縮小していった。

黒ずんだ炎はある人と同じくらいのサイズになるとテッドに似た外見に落ち着いた。黒ずんだ炎は頭を抱えてもがき苦しみ、自らの炎を手で千切って宙へばら撒いた。

「テッド……無事か？」

「ああ。弟に助けられるとは情けない」

「そんなこと……俺はいつも助けられていたんだ。お互い様さ」

テッドの背中を支えて立ち上がる二人。レオンの全身はギラギラと輝く光に満たされ始め、痛みは消えた。

「まだです。まだクーパーの怒りを鎮めないと」

「ああ……でもどうやって？」

「精霊の血を引く少女はまだ受け入れることが出来ていません」
「説得する」

「話を聞けるほど安定していません。声は聞こえない」

「フランツッ！！聞いてくれッ」

「無駄です。無駄……無駄なんです」

「テッドも助けられた。フランも必ず答えてくれるさ」

レオンはクーパーの制止も聞かずにフランの名を呼んだ。

だがその名を呼べば呼ぶほどに拒絶は深いモノとなったのが外殻の形状が禍々しくなることで理解出来た。角だけだった姿が全身に棘が生えて中にいるはずのフランの姿も見えなくなった。

「ああああああああ」

声にならない悲痛の叫びを続ける黒ずんだ炎が側頭部に手を当てながら立ち上がる。片方の手を伸ばしてよれよれと歩いてくる。

「俺はわかる。その叫びが痛いほど胸に響く」

「……」

「愛されたいと願って街へ降りた俺はきつとこう見えたのかもしれない」

「……テッド？」

「なあレオン……俺は羨ましかったんだ。母そっくりなフランに素直に話しかけられるお前が」

「ああ。これからはテッドも話してやってくれよ」

「その素直さに嫉妬していた。親を恨み弟に嫉妬して……俺は何をやっている」

独白するテッドは自分自身と会話するように話を続けている。黒ずんだ炎は過去の自分と重ねているのがレオンにもわかった。

「一人にはなりたくないよな？愛されたいと願えば、人に求めるばかりになる。それが母を追いつめていた」

「テッド……」

「最期にそれが知れただけでもここへ来た意味があったもんだ。ありがとうなレオン。ありがとう親方」

「何を言っているんだ？ テッドッ！！」

「フランと仲良くしているよ。もしも母親に会えたらごめんと謝っておいてくれないか？」

「それじゃまるで……まるで……」

「一度壊してしまった関係はもう二度と戻らないからクーパーが手を出す前に俺が説得する。ただそれだけのことだ」

テッドはレオンの肩に手を置くとガクン、と力が抜けた。

「何を……？」

「説得は必ず成功させる。兄を信じる」

「テツ……」

テッドはレオンを片手で持ち上げてフランを覆う外殻へと投げる。外殻の棘が豆に似た形になりクッションの役割をした。レオンはそのクッションに拾われてゆっくりと足元へ下ろされる。

「シリアテイルは必ず任務は達成する」

走り出すテッドは長槍を作り出した。黒ずんだ炎へ向かってそれを両手で握った。

握った長槍に思いを込める。この一撃は激しい憎しみを共有した自分にしか放てないと確信している。この一撃は憎しみではない。

この一撃は何よりも深い愛情。

子供の時に欲しかったただ一つの心。孤独を壊してくれる深い愛情。満たされた愛の結晶。本当は自分が欲しかったもの。子供の時に願った、夢見たものをくれてやる。

「精霊の代わりに俺が伝えてやる。俺はお前でお前は俺だ」

長槍の一閃は胸骨の隙間から肩甲骨の中央を抜けて黒ずんだ炎を後方の宙へ散らせた。羽根が生えたように黒ずんだ炎が広がり続ける。

テッドは黒ずんだ炎を片手でグッと抱き寄せると炎はさらに縮小してあの時の自分の大きさになった。抱き寄せる手を巻き込んで抱きしめる形になった。

「……ありがとう」

そう聞こえた気がした。

黒ずんだ炎はさらなる縮小の後に膨大なエネルギーに発光し始めた。腕の中で膨れ上がる炎にテッドも満たされた気分になる。

脳裏には母親の姿が蘇った。別れの時、こうやって抱きしめてくれると言ったのに意地を張って断った。罵った。捨てるのかっ叫んだ。

本当は、本当はこうしてもらいたかった。

そして、一気に膨らむ黒ずんだ炎はテッドの腕の中で爆発した。

黒ずんだ炎とテッドは宙に霧散している。舞いながら黒ずんだ炎に触れようと手を伸ばす赤い炎が重なった。

フランを覆う外殻が緩やかに解けていき、ドサツと支えを失ったフランを抱きとめるレオンの視線は霧散する炎周辺にさ迷っている。

「テッドはどうなったんだッ……クーパー！！ いるんだろう？」

叫ぶが返事はない。ひらひら舞う火の粉が酸素を消費して燃え尽きる。数は減り続ける度にフランの表情も和らいでくる。

腕の中でつつかえるような苦しみを小さな喉がこくと飲み込んでいるフラン。レオンの身体を覆っていた炎も頭上へひねり出されて大きな炎の塊が赤いドレスを着た女性になったのもつかの間、すぐに消滅した。

「おいッテッドは？ テッドはどうなったんだ？」

「くーくー」

消滅したはずの炎の塊から一部が飛びだしてフェアリアに似た小さな妖精になる。黒ずんだ炎と赤いテッドの炎が重なった炎からも同じような赤いドレスを着た妖精が出現して互いに惹かれあうように両手を伸ばした。

手を握り合って再会を喜ぶ妖精に言葉を失うレオン。

「くーくー」

「みゅーみゅー」

「くー」

頭の中にいるフェアリアがクーパーを呼ぶのがわかった。声に導かれたクーパーが手を結びあってレオンの頭の中へと消えた。

響く再会を喜ぶ声の中にまぎれて聞こえたのは「ありがとう」というテッドの声。テッドは犠牲になった。そう理解すると自然と涙がこぼれる。

「どうしてだよ……他に方法はあった……方法はあっただろうがッ」

レオンは力の限りに叫ぶ声に案内人も声をかけるタイミングを失ってレオンの肩に手を伸ばした中腰の状態で立ち止まっている。

ややあつて案内人の手が肩に触れた。

「……帰りましょう」

「……」

「火の精霊を回収し終わりました。テッドさんは街にいる全ての命を助けた。我々も助けられた」

「フランをうまく説得出来れば……テッドは助かったのかな？ 俺

が代わることは出来なかったのかな？」

「……」

案内人はあえて何も言わずに時間を与えた。何もかもを受け入れるには幼すぎるレオンの姿に自然と顔色も強張る。

「くーくー」と話しかけてくるクーパーもみゅーみゅー、と答えるフェリアも腕の中で眠るフランも手放したくなかった。だが、実際は強く抱きよせてフランの目覚めを望んでいた。

心と心が離れるレオンの涙はいつしか止まった。

「戻りましょう」

驚くほど素直に言えたレオン自身に違和感を感じながらもフランを抱きかかえて立ち上がる。

トランスしていないのに心の中に別の自分がいる。それが悲しいほど淡泊に事実を受け入れる。胸にあった乱雑に散らばったテッドとの思い出をラベル付きの箱へ入れたりしてさ。

街には落石やマグマの侵攻を防ぐのに使われる移動式の盾がずらりと並んでいる。その足元には兵士と共に親方の姿もあった。

親方は足りない一人に対しての言葉もなく、すぐに移動するとシアアテイルへと歩き始めた。ノアールの兵士とは打ち合わせを終わったらしく滑走路にあったシアアテイルも補給を終えていた。

あまりにも連携と手際が慣れ過ぎていて妙な気分になった。

「フランを医務室へ運んだ後に話があるぜ」

「ブリッジで待とう。出発してから時間を取ろう」

「ああ……」

ブリッジと医務室へ別れる道でレオンは親方にそう言って別れた。医務室へ運ぶとスウィニーがいてベッドにフランを寝かせるとすぐに身体の具合を見始めた。

「札が壊れたか……一体何があった？」

「精霊が現れてフランを守った。もう片方の精霊はテッドにくっついてこの火山を噴火させようとした。俺は……何も出来なかったぜ」

「テッドはどうなった？ 無事……なのか？」

「さあ……ただ最期だと言って火の精霊と共に姿を消したよ」

ありのままを伝えたくもりだがレオン自身もよくわかっていない。あの火山の暑さばかりが思い出されてすっぱりと抜けた記憶はまるで夢だったみたいだ。

「テッドは憎しみを司る火の精霊に反応したって言うていた。そんなことを考えもしていなかった」

「レビーがいなくなった時には三歳だ。テッドだって五歳。考えられる年齢じゃない」

「そうかな……テッドに触れた時に色々と思いついたことがあった。街へ行ったテッドをスウィニーが連れて帰った後に母親が少しだけ様子を見に来た時に俺はテッドを起こさなかった。俺だって……会いたかったんだ」

「悪いことじゃない」

「甘えていたんだ。俺は離れたくないって思ったから……ギョツと抱きしめ返したんだ」

あの温もりを憶えている。守りたいと思いついたながらも甘えていた。会いに来てくれた嬉しさで何も考えられなかった。その愛に包まれていたい、と願ったのも離れたくないと願ったのも鮮明に憶えているのにテッドには知らないふりをしていた。

そんなレオンはまたフランが現れた時もテッドの気持ちなんて考えもせずにフランの傍にいた。

「無理もない。三歳の子供だ」

フランの腹にペタリとチューブに繋がった蝶の形をした吸盤を左右に置いて装置を起動させる。

「テッドは二人を守った。いや街をも守った。それに感謝するべきだと思う」

「綺麗事さ」

「それが必要なんだ。今は特にそれが大切だ」

「心に踏ん切りをつけるためかッ！！ 仕方ないって思うためにかッ」

「違う。テッドの思いを無駄にしないためだ」

スウィニーは淡々と作業を続けながらつとめて冷静な口調で声を荒げるレオンへ言った。

「親方はこうなることを知っていたのか？」

「さあ……我々には何も言ってくれない」

「ノアールの兵士との関係もそうだ。親方は何を知っているんだ？」

「あいつは元々ノアールの兵士だ。知っている話はそれだけで昔の話はしない。ここにいる誰も昔話はしない」

シーアテイルの船員の過去の話はタブーとされているのが暗黙の了解だった。詮索はしない。それがルールの一つ。

「……フランの容態はどうなんだ？」

「問題ない。今は安定しているように見える」

「そうか。フランが怒りを受け入れることが出来なかったからテッドは犠牲になったって思われなかな？」

「やっぱりか、と風当たりが強くなる人間も少なくはない。黙っておく方が無難だ」

「言えはとうなると思っ？」

「フランを降ろせとどうにかしようとする運動が起こるかもしれない。この子自身も自分を責めて魔力を暴発させる可能性もある」

「何もかもが壊れるかもしれないのに俺はまだ一緒にいたいと願っている。いないとダメな気もしている。それが自分の意思なのかもわからなくなっているくらいに頭の中にはいくつもの意思があるのも感じる」

「自分の意思が離反しているのか……？」

「ああ精霊が頭に増える度に心と心が離れていくぜ」

それを聞いて表情をくもらせるスウィニーは何も言わずに作業へ戻った。毛深い顔で見えにくいと言われている犬族の表情でも同情しているのがわかる。

「それぞれ父親に似ている。テッドの父は強引に劇場に通い続けて毎晩レビーに愛を伝えた。レオンの父はテッドの父が亡くなった後も献身的に支えてレビーに愛を与えた」

「だが両方、母親の元を去った」

「戦乱の命は長くない。レオンの父も戦争へ徴収されて帰らぬ人となった。あの街は国境沿いにあり砂漠も近い。人が死ぬのも珍しいことじゃない」

「スウィニーが父親だったら良かったぜ」

「長生しているからか？」

「それもある……そうなればテッドと母親と四人で暮らせたのかな？」

レオンの言葉に返事をしなかったスウィニーは出港の合図を聞いて医務室から出て行くように言った。

船内の亀裂

扉を閉めたレオン。揺れる船内に、出港の合図の鐘の音色が響いている通路に人の姿は無かった。

揺れがおさまるのを待たずに左右の壁に八つ当たり気味にぶつかりながら歩くレオン。足元をすくわれて倒れるようなへまも普段ならば絶対にしないが今は冷たい廊下が頬に触れている。

立ち上がりブリッジへ向かおうとした間にあつたプレイルームに多くの船員が見えた。レオンを見つけると一人が手を引いて階段の中腹辺りに連れてくる。プレイルームにいた全員が静かに視線を集中させた。

「テッドが乗船していないのはどうということなのか説明してくれ」

先頭にいた真剣な眼差しของロニーが腕を組んで威圧的な態度でレオンへ詰め寄った。舞台の大工をしているロニーの両腕から背中にかけて刺青が入っている。

後ろに視線を巡らせると同意するようにつなずく船員達で溢れていた。

「説明も何も俺もわかっていないんだぜ？」

「何があつた？」

「テッドは火山の噴火を止めた。俺達を守ってくれた。ただそれだけだ」

「あの子……あの女が関係しているんだらう？ 魔力を放出するか？それに巻き込まれて死んだんじゃないのか？」

「そうじゃない」

「レオン……そうだとすればこっちを見て言ってくれよ」

レオンは無意識に視線を外していたのにロニーの指摘で気付いたが言い訳することも真剣に向き合うこともせずただうつむきがちに首を左右に振った。自分だってわかっているのに説明するも何もないだろうって曖昧に受け答えをしてブリッジへ向かおうと階段を登る背中に声をかけるロニー。

「俺の居場所はここしか無いんだ。他の皆も不安を感じている。お願いだから本当のことを言ってくれ」

「本当のこと？ それなら俺が聞きたいくらいだぜ。一体俺はどうすりゃ良かったんだ……これからもどうすればいいと思う？」

足を止めたが振り返らずに言い返すレオン。わなわなと震える小さな背中にロニーの表情も曇った。

「親方は何も話そうとしない。あの子が誰なのかも……手探りで情報を集めてもただ不安定にさせるとこの船が吹っ飛ぶくらいの力があるってことくらいしか手に入れられない」

「精霊を集める理由は今から聞いてくるつもりだ。テッドの死についても話すつもりだ」

「だったら待つていていいか？ ……ブリッジから戻ってくるお前を」

「考える時間が欲しい。そして何より少しくらいテッドを悼む時間をくれてもいいだろう？」

テッドの名前を聞くなりロニーの気迫が緩み、その背後にいる全員の緊張も緩和されるのを感じた。

レオンは返事も待たずに階段を登ってブリッジへ向かい始めた。テッドはあの全員と対峙して何を話していたのだろうか。何と聞いたのだろうか。

「テッド」

名前を呼ぶとまだここにいるような気がする。テッド、とその名前を口内で噛み締める。

ブリッジへ向かう通路に人気は無く、冷たい壁に感傷は吸い込まれていく。上部や下部に複数ある小さな穴からは空気が流れており、頭を冷やすのに役立つた。

船は安定し始めて航路に乗ったと判断してから扉をノックして中へと入った。

親方の前にはミレイが先にいてレオンと入れ替わりに外へと出て行った。

「親方……もう黙っているのも限界だぜ？　ロニー達にも」

「わかっている。フランと呼ばれる子供だがあればノアールの姫君だ。ノアールの兵士だった時に仕えた風の谷にある城があの子の生まれだと聞いたのは偶然だ。赤ん坊はどれも同じに見える」

「あの執事もどうしてそんなことがわかったんだ？　そんな秘密が漏れるとは思えない」

「執事は王族の関係図が頭の中に描ける。どうしても合致しないフランを疑問に思っって出生を追った」

「どうして？」

「城の全てを知るのが仕事だからだ。それに国と同じで執事も一筋縄ではない。いくつかの派閥やスパイもいて情報を集めるのは難しくはないだろう」

「それが城から抜け出してノアールへ行った理由とも繋がるのか？」

「エレンの国は闇の一族と手を組んでから何もかもが変わった。表面的には気付かないことがあっても内情は悲惨なようだ」

「だから逃げたのか？」

「そうだ。あの子を連れて戻ればノアールで雇ってもらえると思っ

て依頼をした」

「それは」

「愛情からと思ったのか？ それならばお姫様を人に託したりはしない」

執事の顔は思い出せないが、柔和な顔をしていたと思う。犬族だから表情が見えにくいのが本気で心配しているように見えたのもフラシがいなくなるとノールとの交渉に響くからと思えば悲しくなった。道具として扱われている。

「まるで道具だ」

「否定はしない。だが価値のある道具だ。エレンとノールが戦争に入ってもあの子がいれば戦争に巻き込まれることはない。いざとなれば人質に出来る」

「見損なっただぜ。テッドも道具だと思っていたのか？ 火の精霊のことも知っていたんだろう？」

「知っていた。だからあの街を守るために防壁を張っていた。万が一のことがあれば逃げる用意もしていた」

「俺らを捨てて……か？」

「そつだ。俺は船を守る。俺の船だ」

キツパリと言い切る親方は片手でグイツとワイン瓶を傾けた。甘ったるい酒の匂いがしてレオンは目を細める。

「その言葉をロニーへ言っつてやれよ。喜ぶぜ」

皮肉を込めた台詞に親方は曖昧にうなずいた。テッドが見捨てられた気がして怒りがこみ上げてくる。

「船のことを決めるのは俺だ」

「そうだな。事情を話してフランへ本当のことを言われたら大変だ。この船も爆発しちまうかもしれないぜ」

「もっ少しだ。どうせ風と土の精霊を回収すれば終わる」

「終わる？ フランを見捨てるかッ」

「精霊の力を全て手に入れた人間はその全てを解放し、約束の地へと導く道を開く。そうなつてしまえば闇でも手が出せない」

「闇は諦めてフランを追いまわすこともなくなるってか？ それならノアールが昔に行っているんじゃないか？ 大切な人間ならさらわれたら慌てるだろう？」

「ノアールは精霊を失うこととなる。封印された土地に精霊が戻るまでは長い時間がかかる。闇さえ来なければあの子の身柄も突っぱねただろう」

「闇に壊されるよりはマシだつていまさら躍起になったのか。一体誰と戦っているんだよ……誰から守ればいいんだ……全然わからねえぜ」

混乱する頭を振ってレオンはそう嘆いた。

「時間を稼げば世界は元通りになる。精霊は失つても力は大地に残り続ける」

「それがこう着は続く……全て元通り？ テッドは犠牲になって時間を稼いだつて褒めてやるのか？ 教科書にでも乗せてやればそれでいいッて言うのかッ」

「選んだのはテッド自身だ」

「ッ」

「お前もそれを知っている。考える時間はまだある。次の目的地まではずいぶん時間がある」

「フランにつく嘘を考えろつて言うのか？」

「子供じゃないんだ。それは自分で考えろッ。話は終わりだ。さあ出て行け」

親方は空になった瓶を振ってレオンを下がらせる。
まだ言いたいことはあったが、言葉を引っ込めてブリッジから通路へ出ていくレオン。言いようのない喪失感が感情を喰い散らかしている。

急いで扉を出るとすぐ脇に先に出たはずのミレイがいた。

「話……あるのよ」
「ああ」

ミレイはそれだけ言って船室へ歩き始めた背中をついて歩く。

ミレイの部屋

ミレイは化粧台の鏡に向かってメイクをなおしている後ろ姿を入口の扉に背中を預けながらただ眺めていた。

「……何か話があるんだろう？」
「ええ。話して」

抑揚のない声でそうとだけ言ったミレイに困るレオンは少しだけ間を置いて扉から背中を離れた。

「動かないで」
「……」
「そこで話して」

ミレイは言い終えるとまたメイクを続けた。舞台用のメイクと違ってかなり薄いメイクだが念入りに下地を作らないと肌が悪いと言って長時間メイクをしている時は考え事をしている時だと知っている。

丸い頬に大きな瞳。長い睫毛に愛くるしい低い鼻。大きな耳が嫌でいつも髪の毛で隠している。メイクをしている時だけはタオル生地へのアバンドを乗せてある大きな耳が見えた。その地域特有の先端が尖っている耳の形を隠したいだけだろう。

「テッドが死んだ……たぶん」

「知っている」

冷たく言い放ったミレイに困り顔のレオンは頭を掻いて慣れない時間に戸惑った。女の人の冷たい怒りは言葉だけを失わせる。

「何て言えばいいんだ??」

「私が納得出来るように話をしてくれたらいいのよ」

どうして俺が、とレオンは思ったが口にはしなかった。

テッドは死んだ。

あっさりと言えた自分にも驚いたが悲しみが薄いのに驚いた。希薄な関係じゃなかったはずなのにテッドの顔も思い出せなくなりそうだった。

「悲しみは後から来るものよ。今の内に全部聞いておきたいのよ」
「……」

無言でいるレオンに続けてミレイはそう言った。

「案内人に連れられて山へ登ったんだ。火の精霊の祭壇へ行くために歩いたがこの街にいるよりもずっと暑かった。白い煙に視界を塞がれると蒸されている気分になった」

「……」

「俺はずっとフランを気にかけて火山口へ向かった。テッドと案内人は先へ行つて祭壇にも先へついた。少し遅れて祭壇へ足を踏み入れると途端にフランが苦しみだした」

「……あんだ、バカね」

「なッ何ッ?! 何だよ、その感想はッ」

ミレイの冷たい態度にそう言ったがミレイはふつと弱く笑みを見せてバカよ、ともう一度付け加えた。船で言う姉のような存在でテッドとは深い仲だった。詳しくは聞いたことはないがそうだと全員が知っている。

「それからいきなりテッドも苦しみ出してフランへ攻撃を仕掛けてきたから俺は止めたんだよ。そしたらフランも反撃しちゃってそっちも止めたんだ」

「……」

「あ、フランに殺されたってことじゃないんだ」

「つ・づ・き」

「ああ……それからテッドと剣をぶつける度に昔の記憶が蘇ったというよりテッドのが見えた。憎しみを持っていたことは少しは感じて痛ぜ? でも……あんなにも辛いと思っていたなんて」

「テッドは自分の愛情をうまく表現出来ないの。あんだみたいに素直になれなかった。ただそれだけ。ただそれが憎しみとすり替えられただけ」

「……フランのことをあの子って呼ぶんだぜ? 女好きのテッドが。やっぱりそこで気づくべきだった」

「気づいてどうしたの?」

「」

「どうしたのって言われても困るが、火山へ行くのを反対したら助かったかもしれないぜ？」

「無理でしょうね。親方が行けというならテッドは行った」

「ああ。親方はこの船の、テッドにとっても父親みたいなもんだからな。この船は家族だって教えられた」

船へ乗せてもらった日のことも憶えている。テッドの手に引かれて夜の森を走っていた。すごく寒くて凍えてしまいそうになったがテッドの悲しそうな横顔を見ていると何も言えなかった。

「親方と出会わなければ……テッドは死ななかったのかな？」

「話が脱線しているわ。話を戻して」

「……」

ミレイはマイペースにメイクをこなしながらレオンへそう言った。

「それからテッドを助けようと自分に精霊を憑依させようと思って精霊を呼んだが俺には来なかった。それでもテッドには言葉が届いたんだと思う。俺のことをレオンって呼んだんだ」

「自分なら何とか出来るって思ったの？」

「わからないけど何とかしなきゃって思った。自分を取り戻したテッドと精霊が離れる時にすごい竜巻になって暴れたがテッドは精霊から離れることが出来た。だがテッドはまた精霊へ向かっていった」

「そうしなければならなかった？」

「フランが精霊を受け入れることが出来れば……あるいは必要なかつたかもしれない」

そう言い終わる前に目を細めて足元を見た。熱で溶けた岩石の一部が靴の先端にあってそれがどうしようもなく気になった。

「テッドがそうしたから精霊は無事だった。そう思いたい……そうじゃないとあの子、フランに強く当たってしまいそうだよ」

「精霊が無事だったのはテッドのおかげだ」

「やっぱりあんたはバカよ。精霊がどうしてもして必要かをそれが無ければどうなるのかって話をするもんよ」

「ぐめん……」

レオンは謝ると少し楽になれる。

「エレンの国が精霊を集めると破壊神つてのになるらしい。それに乗じて闇の一族も破壊された世界で闇の領土を広げることが出来るらしい」

「神話の世界ね」

「ノアールは精霊を集めて約束の地へ返すつもりらしい。そうすると誰も手が出せないとこへ精霊を封印出来るって大地には精霊の加護が残るから大丈夫だって」

「そんなことをどうして今までやらなかったのでしょうか？」

フランがさらわれた時に取り返そうともしなかった理由もわからない。ただ精霊っていつのを封印すればどうなるってのも精霊ってのが何なのかさえも不明だ。

「精霊と対話するには精霊の血を引くものじゃないとダメだからフランしか話せないのかも？俺もフランがいれば声は聞こえるがノアールにはそれがいなかった。フランも赤ん坊だったからとか……かな？」

「テッドには声は聞こえたのかしら？」

「さあ……でも精霊に何か言っていたが話せているというよりは一方的に言っていた気がする。自分に言い聞かすように話していた」「……もういいわ」

「え？」

「メイクで忙しいの。早く帰って」

「はい？」

「話は終わり。ここは女性の寝室よ。すぐに出て行って」

「……」

急かされて外の通路へ出たレオン。

女つてのはよくわからないと思いつながらフランの様子を見に行こうとした足が止まった。ただ何もかもが億劫で一人になりたいと思つた。

踵を返して自分の船室へと向かうレオンが眠つたのはそれから五分も経たない時だった。

ちよつとした騒ぎで目を覚ました。言い争う声。喧嘩だろうか、とレオンは起き上がり船室から飛び出る。

通路には人だかりが出来ていてその中心には仲裁をするロニーの姿があつた。

「あいつは何だよッ！！　ちくしょうッ」

「何かあつたのか？」

レオンが人だかりをかきわけてロニーへ訊ねるとロニーは困つた顔で医務室の扉へと視線を送つた。

「フランが関係あるのか？」

「ああ。あの子がテッドは何処に居るのかって言うてきたんだよ。」

あいつが殺したんだろうがッ」

「……違う」

「じゃあテッドは何でいないんだよ？ 教えてくれよ」

怒鳴っているのは照明担当のヤーガス。常に長袖を着ているのは蛇の鱗に似た皮膚があつて部分的に壊死した細胞が黒ずんで割れている姿を見られたくないからだった。

「親方に聞いても何も答えてくれない。ミレイは部屋にこもりっぱなしだ」

「だから医務室へ聞きに行ったのか？」

「ああ。スウイニーが少し離れた時だからほとんど会話らしい会話もしてねえ。目を覚ましたから何があつたか聞いたんだ。だったらそう訊ね返してきた」

「落ち着いてくれ」

「お前は落ち着いていられるのは何でも知っているからだ。俺らは何も聞かされてない。不安だ。また……また居場所を失うかと思うと怖いんだ」

レオンよりも十以上も歳が離れたヤーガスがそう言うと胸にズシンと響く。表情には隠すことのない不安があつて周りを囲む多くは同じ顔をしていた。

「……だったら話そう。だが俺だつてわからないことだらけでうまく伝えられないかもしれないぜ？」

「知らないよりは随分とマシさ」

レオンはミレイと話した時よりも慎重に言葉を選んで話をした。

精霊のこと。エレンとノアールのこと。フランの心が不安定だと危ないってこと。

ここからは推測だが精霊と深く共鳴し合っている間は記憶がないのでテッドがどうなったのかも知らないこと。そして真実を言うべきかを悩んでいること。それにはリスクを背負うことになり、最悪船をふっ飛ばす力は充分にあり、コントロール出来ないというのも正直に話した。

その結果、泣きだす船員もいれば震える船員もいた。全員に共通しているのは安心したって表情の人間は誰もいないってこと。

不安が駆け巡り、興奮状態にあったざわめきの質が徐々に変化していくのが目に見えて感じる。その空気に話すのは早過ぎたか、とも感じたが話を続けた。

親方は船員のことを思っ黙っていたことを話してそのことで船を降りたいと思えば降りてもいいと言う話もした。選択の余地を確かめる沈黙に船員達は互いの顔を見合わせる。

「それは一体どういうことなんだ？」

「俺が聞きたいくらいだぜ」

「……話が大きすぎる。俺はてっきりエレンのお姫様のわがままに付き合っているのかと思っていた」

「エレンのお姫様じゃなく、ノアールのお姫様でそのことは本人は知らない」

「家族だっと思っていたのが実は敵で本当の家族は見捨てた？ そんな話を知ったらショックを受ける。不安定になれば船を壊してしまいかもしれない。だから親方は言わなかったっていうことか？」

「そうだ。多くの人が知ればそれだけフランの耳に届く可能性がある。言わなくとも態度に出れば不安にさせる」

「そんな……だったら……」

「知らなかった方が良かったって言うのか？ そう思うなら忘れてくれ。だがフランには何も言わないで普通に接して欲しいんだ。約束してくれ」

レオンはそう言って周りの人を見渡したが全員が視線を外して答えをはぐらかした。

「ここでそんな話をしているのを聞かれるのも困るだろう？騒ぎを不安になつても困る。だから今日は各自部屋に戻って考えよう」

沈黙の中心でロニーはそう提案した。同意する声もそれ以上追及する声も無くて全ては足音に踏みつぶされていく。

ロニーとレオンだけが残されて不気味な静けさだけが通路にあった。

「聞かれていないか？」

「医務室は防音になつていいるから大丈夫だと思う。どれだけ聞こえたかも知りたいから俺がそれとなく医務室へ入るぜ」

「ああ……レオン。すまない」

「気にしてないぜ。いつもはテッドがこうやってたんだなつて思うと色々と考えることがある」

「テッドのことも責めてすまない。本当は兄弟のレオンが一番悲しいはずなのに、皆も余裕が無いんだ」

「ああ。ロニーも皆のことを頼む。今日は医務室で眠ることにするぜ」

「見張りもつけようつて言つても清掃の当番を作つて通路を巡回するくらいだが」

「ありがとう」

ロニーはうなずいて船室の方とは反対の方向へ歩き始めた。通路には静けさが戻り、夜の闇がやれやれというように空気を冷やし始める。

医務室の扉は近くにあつて扉をノックするのにも緊張する。もしも、と嫌な考えが頭に流れたが頭の中で冷静にごまかすイメージを

繰り返して医務室をノックした。

扉の奥からスウィーニーの声がして扉を開くとすぐに脇にあるベッドに視線を送る。ちよこんと布団から飛び出た眠ったフランの頭が見えて胸をなでおろした。

「全員が不安に感じている。もちろんこの子も」

「目を離したのが悪かった。今日は俺もここで眠るぜ」

「ヤーガスも悪いやつじゃない、と言っておいた。幸か不幸か、疲労のせいですぐに眠ってしまったよ」

「良かったぜ」

「だが何処までもごまかせるもんでもあるまい。何処かで話さない
とダメだ」

「わかっているさ。だが話をして身体がどうなるってのもわからな
い……自然に魔法を発する体質さえ抑えられたらいいんだが」

「あの札だけでなくポケットに入れておいた札も全て破れてしまっ
ている」

デスクの上には破れた札が並んであつてそれぞれ違う色のパツケ
ージに詰められて解析結果のグラフがラベルに貼り付けられている。

「解析でも強度不足と出るだけで解決策は見えなかったよ。街でい
くつかの書籍も買ってみたが参考になりそうな話はない」

「そうか。祭壇に入った途端に共鳴したんだ。共鳴するのは魔力を
増幅させるとかも関係ないのか？」

「因果関係は難しい。何しろ共鳴現象さえも滅多に見れるもんじゃ
ない」

「詳しくは知らないんだが何かあつた時に共鳴して俺の方から魔力
を抑えるって出来ないのかな？」

「何とも言えん……だが共鳴とは同じ魔力波が同調しているのと魔
力そのものを共有するのでは意味が変わってくる」

「難しい話はさっぱりだ」

お手上げの格好をするレオンは視線をフランへ送って寝顔を覗き見る。

「まあ俺もあんまり寝てないから寝かせてもらっぜ」

「勝手にしろ。私は作業をしている」

「ああおやすみ」

「おやすみ、レオン」

レオンはゆつたりと大股でベッドまで近づき、隣で眠るフランを起こさないようにゆっくりと寝ころぶ。横着して足でかかを蹴ってブーツを脱ぐとスウィニーが顔をしかめるのが視界の隅に見えた。

ウェルスタンへ

「くーくー」

「みゅー」

「くーくーくくくッ」

「みゅー？ みゅみゅー」

言い争うクーパーの声が眼前で迫ってくる。時々、鼻頭を蹴ってくるのでヒリヒリしているがまだ半分は夢の中みたいと願うレオンを起こしたのはフランがベッドから押して床へ落としたからだ。

「レオンさんは寝ているんですからダメですよ」

「ッ」

「あ……」

「いってててて………ったく朝から何だよッ」

床にぶつけた右半身を擦りながら立ち上がるレオンの視界にはフランの背後に隠れる精霊達。

「ん？ 精霊がッ?!」

「私が目を覚ましたら精霊達がレオンさんの頭の上で喧嘩をしてみましたね。あの……私は止めようとして……あの……大丈夫ですか？」

かたまってているレオンの顔色を覗くようにフランは訊ねてくる。昨日のことは全く憶えている様子もなく、元気で普段よりも明るいくらいだ。

「ああそれはいいんだ。それより精霊がいて何ともないのか？」

「はい。何だか元気になった気分です」

「そりゃ……良かった。昨日のことは何か憶えているのか？」

「いいえ。火山の道中からはすっかり忘れてしまっています。でも新しい精霊がいるので成功したのでしょうか？」

「……ああ」

「レオンさん？何かありましたか？」

「いや何にも無かったぜ。しいて言うならテッドが別行動の任務になつてぼやいていたくらいだな」

「テッドさんが？一言お礼を言いたかったのですが……」

「まあいいんだよ。それが仕事だからさ。それにテッドのことは誰にも聞かない方がいいぜ？」

「はい？ どうしてですか？」

「えっと……何でだろうな。別行動中は話をしない決まりなんだ」

「常識つてことですか？ そうなんですな。わかりました。帰ってきましたらたくさん話をします」

あまりにも笑顔で言うのでレオンは複雑な気持ちになった。曇りそうな顔を隠すように振り返ってブーツを履きながらそうだな、と返事をする。

「よし、今日も行くかってまだ飛行を続けているみたいだから親方のブリッジまで行こうか」

「はい」

振り返る時にはすっかり笑顔も見せられるようになっていたのにホッとした。すらすらと出てくる嘘に慣れると妙な気持ちになる。

扉を開けて通路に出ると明るい日差しが穴から洩れて新鮮な朝の風が吹き抜けてくる。

「あ、そうだ。名前は決めたのか？」

「」

「マインとララです」
「どっちがマインでどっちがララなんだ？」
「この優しい顔をしているのがララでちょっと悪戯そうな顔をしているのがマインです」

二人の周囲を回る火の精霊は未だに喧嘩をしているのをフェリアは呆れた様子でレオンの肩に座っていた。

すれ違った船員があっけにとられて驚く表情だが何事もないようにはおはよう、と言うのは昨日の説明があつたからだと思いたい。誰かとすれ違つ度緊張する。

そして一番緊張したのはヤーガスだった。相手も緊張した面持ちであいさつをしてくるがフランも自然だったので安心したヤーガスとレオンは小さくうなずき合った。

ブリッジに辿りつくのがやけに遠く感じたが無事に辿りついた。

「待って」

「あーユナか。整備だろう？ 珍しいな格納庫から出てくるなんて」「そりゃあたしだって格納庫のオイルの二オイにまみれていたんだよ。だってば。でも中には入れないよ」

「どうして？」

「親方が寝ているからさ。起こすと大変だからね。とにかくレオンが来たら格納庫へ案内してくれて頼まれたから待っていたんだ」

「格納庫へ行くのか？ まだ航路の途中だろう？」

「それがさ、色々あつて。まあ立ち話もなんだからついておいでよ」

ユナと呼ばれたぶかぶかのオーバーオールを着てマスクを耳にひっかけているくしゃくしゃの髪の毛をした女の子に先導されて格納庫へ向かった。

お尻にはスパナとモンキーレンジがあつて歩く度にそれらがぶつかる音が聞こえた。そのおかげで精霊の関心はその工具にいつてい

つしか喧嘩は終わっていた。

「珍しいのかい？ 格納庫へ来るとすっげーのがあるんだぜ」

うししし、と独特の笑い方をするユナは工具を手に持って精霊に話しかけていた。ユナは機械以外に興味があるものが少なくシアアテイルの整備スタッフとして格納庫で寝泊まりしている変わった女の子だ。

器用に工具をぐるぐると回すのに夢中になる精霊はいつしかユナの手元に全員が集まっていた。

「楽しそうな方ですね」

「ユナは誰にでもあーいう感じさ。それは精霊でも機械でも人間でも接し方が変わらないんだぜ」

機械に話しかける典型的な機械少女。両親の工場ですっと育ったせいもあって機械に思い入れはかなり強くて変な使い方をすると途端に豹変する。

怒らせると怖いんだぜ、と茶化すように笑うレオンがちらりとユナを見る。ユナを案内によこしたのはありがたかった。今まで不自然だったのが一気に自然に親しんでいく空気になった。

空気が良くなったただけフランもレオンも明るくなって話も弾んだ。格納庫へ辿りつくときイルの二オイが充満していて照明も薄暗いので精霊はすぐに姿を消した。頭の中に逃げたのだ。

「この二オイは慣れるといいんだけどなー」

と不満っぽく言ったユナは格納庫の奥へと進んでいく。レオン自身も格納庫へはあまり来る機会はなく並んでいる全ての装置や機械に関心しながら歩いていった。

大型の戦闘機からガトリングやバズーカなどの兵器が多くあつてフランは少しだけレオンの背中へ近づいた。

ユナの足が止まったのは殺伐とした部品の上に寝そべっている優雅な緑色のボードだった。

ジャットウェイバーという風に乗る板でユナの趣味であるライディンググリフトに使う板だった。

「色を塗り替えてワックスもかけておいた。多少の癖はあるけど誰も乗れるように改良もしてある」

「改良……？」

「そう。これをここへ填めると波を覚えてくれるから勝手に目的地へと連れていってくれるし帰りはこの船をインプットしてるから帰られる」

ユナは板を持ち上げて縦にすっぽりと板を置ける装置へ立てかけながら説明する。手に持ったクリスタルはメモリーストーンという本来は記録に使われる代物だった。

「これは私物だから絶対に持つて帰ること。それにメモリーストーンは降りたら必ず手に持つて保管しないとダメ。高いんぜ」

「一体何の話をしているんだ？ そもそもどうしてここへ？」

「あー……そうだな。忘れていた」
「頼むぜ」

「悪い悪い。シーアテイルは駆動部が問題があるから補給してから【ウエルスタン】へ行くことになる」

「風の谷にある都だったっけ？」

「そう。森の頭上を板で滑って越えれば近道になる。ノアールから急いで来るようになって言われたから先に二人だけでも行かせようってね」

ユナの言葉で補給もあるが船員の乗り降りも含めた整理があることを考えてしまうレオンはふいに言葉を詰まらせる。

「心配するなっではじめてでも乗り方を教えてやるぜ」

それを不安ととったのか、ユナはレオンの背中を叩いてついでに言うように言った。

少し歩いた先にコンテナがあつて甲板へ昇降する装置に繋がれていた。板と共に昇る三人の頭上の扉が開いて太陽の光が降り注いでくる。

強い風が吹く甲板の上にせり上がったコンテナ。その周囲を囲む結界が半透明の薄い幕となつて風を和らげる。

「ここで練習してから飛べばいい。とにかく乗れよ」

板を寝かせるとふわりと膝辺りの高さで浮かんだ。ユナがグツと両手で沈めてもビクともしない。

「前に力を入れると減速になり、後ろへ体重をかけると加速するからビビるんじゃないぜ」

「止まるにはどうすればいいんだ？」

「キユツと半分の円を描くように板のお尻を振れば止まる。最悪、飛び降りる。上に乗っているライダーがいなくなれば衝突防止で自動操縦になつて近くで止まってくれる」

「はじめから自動操縦でいいだろう……」

「わかつてねえな。自分で操作するから面白いんじゃないかよッ」

「面白いのかな？ まあ乗ってみる」

レオンは板へ乗るとゆらゆらと前後左右に身体が揺れてバランスを保つのがやっとだった。

「これは魔力で動いているのか？」

「風だよ。ただの風」

「勝手に動くぜ」

「そりゃ動いてんだよ。お前がッ」

「　　つとこれで大丈夫か……」

ようやく安定した板にセンスあるぜとほめるユナが板の裏の中央部分にある丸みを帯びた機械の脇にメモリーストーンを差しして何かを打ちこんだ。

「帰りはこれで。ストーンを持っていたら何処へいてもシーアティルの場所もわかるし絶対失くすなよ」

「わかつたつて」

「普段の仕事もそれでやってんだからな。それと中身は見るなよ」

「見方もわかんねえぜ。扱い方も知らない」

「……なら問題ねえか。とにかくフランも乗って、ほらッ」

ユナはフランの手を引いてレオンの前に乗つけた。レオンも手を伸ばしてフランを受け取ると一気に引き上げる。

「揺れます」

「悪いな。狭いし慣れるまでは我慢してくれよな」

「……はい」

「しがみついているよ。落ちると危ないぜ」

「はい」

ギョツとレオンの胴体へ手を回すフランの肩を抱くレオンを見ながら背後へ回り込むユナ。

「右手に見えるのが森だ。あの上を抜けるよ」

「ああ……っつて」

「グッドラック」

ユナは結界を解除するボタンを押しながら思いっきり板を蹴った。二人を乗せた板は勢いよくシーアテイルの甲板から飛び出て大空へ投げ出された。

「ひでえな……おい」

「ドキドキしています」

「ああ俺も死ぬかと思っただぜ。今頃、笑ってんだろっつな」

レオンは頭上を通過するシーアテイルを見上げてそう嘆いた。蹴られた板はシーアテイルの外へ出た瞬間に失速し、自ら安定行動を取り始めた。板の裏にある丸みを帯びた装置が赤く点滅したのがセーフティを意味する緑に変わったのに気付くと笑ってやがるユナの顔に見えてくる。

冷静になってフランのことを考えれば魔力が爆発することも思い出して今になって冷や汗が出たがフランは震えながらも少し笑顔でスリルを楽しんでいる様子だった。

「怖く無かったか？」

「レオンさんといれば平気です。何があっても守ってくださいますもんね」

「この高さだと……無理かな？ フランは高いのは大丈夫みたいだな」

「はい。ずっと塔から見えていましたから」

塔の高さは十メートルを越えている。そういえば時計台へ飛んだ時も何のためらいもなく飛んだ姿には驚いたものだ。

板は高度を徐々に下げていく。少し体重を右に寄せて森の方角へ板の頭を向けた。二つの山に挟まれた間にある霧がかかった森に近づくと空気が変わってくる。

肌に吸いつくような冷気があって腐敗した何かのニオイが漂ってくる。

「この森を抜けることを考えると板があって良かったぜ」

「森は危険なのですか？」

「ああ……風の通り道なはずの森に霧があるのが不気味だろう？あれは死人がさ迷う森だって言われているんだ」

「死人の森？」

「存在しない森。地図にも記載されていないくらい人の出入りがない。そのおかげでウエルスタンも平和だって言う説もある」

「物語にも登場しません」

「舞台は観光誘致の目的が多いからな。何も無い場所は舞台にならないっていう事情もあるぜ」

板の扱いにも慣れてくると姿勢を崩して風を楽しむことが出来る。長い髪が風に流されて首筋の風通しが良い。

「ッ」

山の間に入ると途端に急減速する板。風の力が弱まったことに気づいてレオンはグッと後方へ体重を移動させるとゆっくりと加速し始める板。それでもさきほどまでの速さの半分にも満たない。

「風があんまり無いな……仕方ないぜ」

「ウエルスタンにはどのくらいで着くのでしょうか？」

「俺はこっち側は全然行ったことないからな」

レオンは周囲を見渡してそれらしい街を探したが波打った山脈の間にはビッシリと森と霧が並んでいるばかりで街がある風景には見えない。

「ウエルスタンだと物語では丘の古城が有名ですよな？」

「ああ確か真実の鏡と壁面の家族絵が有名だぜ」

「風の精霊は古城にあるんでしょうか？」

「観光したいのか？ もしも風の精霊が違つとこにいても街を観光する時間はあるぜ？ 合流には時間がかかるだろうしな」

「……はい」

何か言おうとしたフランは途中で辞めたのがわかる間があった。

レオンは気になったが突っ込むことはせずに風が気持ちいいって話に変えた。

フランの表情が曇ると不安になる。徐々に高度を下げる板よりもフランのことばかりが気になった。

「あれでしようかつ？！」

「ああ………すげえ風車の数だぜ」

森の奥に背の高い壁があつてその縁にはずらりと風車が並んでいた。角にある白い風車の羽根の部分が割れているのも鮮明に見えるほど近づくとメモリーストーンが目的地を知らせるベルの音を鳴らした。

設定しておいた、と言つたユナの言葉もあつてそこがウエルスタンだということがわかり風車の隙間を抜けて街の中へと高度を下げ

ていった。

街の中の半分は畑だった。板は設定どおりに進んでいる様子である民家へ向かって進んでいるのがわかる。

「レオンさんッ」

「どうかしたか？」

「子供が手を振って……振ってます!!!」

「ああ……あ、そうか」

板に向かって手を振る子供が足元で走って追いかけている。外部から人が来るのが珍しいのか、民家の中にいた人も農作業中の人も手を止めて板に乗る二人を見上げていた。

安定走行を続けている板は高度を下げるために段階を分けて減速を続けている。一番大きな建物の敷地には少ないが兵士の姿も見えている。

「あの……」

「手を振ればいいんだよ。ほらっ」

背後からフランの手をとって小さく持ち上げるレオンがフランの手を左右に振る。手を広げて自分の力で振れるようになった時、フランは優しくほほ笑んだ。

子供も手を振りかえしてくれた喜びに両手で答えると共に追いかけるのを辞めて立ち止まった。フランは少し寂しそうにもう片方の手で自分の手を胸の方へ抱きよせる。褒めるように手の甲を擦った。

「良く出来た。たったこれだけでいいんだよ」

「……はい。でもドキドキしています」

「ハハハ。すぐに慣れるぜ」

そう言ったレオンは複雑な心境だった。水の都市で手を振ることが出来ていればクーパーを受け入れることも出来たのではないかと、思った感情を頭の中から消す為に頭を振った。

もしも、を考えてしまふレオンは無意識にそっとフランから離れて距離をとる。

「しっかし、畑が多いな。無理もねえぜ。こんなところに運搬するのが難しいから自給自足になるよな」

「難しいんですか？」

「あああのルートも小型船を通るのも難しい。板は楽に通れるが板でアイテムや食材を運ぶとしたら何度も往復しなけりゃならないからな」

「往復するのは大変ですね」

「風が逆向きだから一度反対側へ流れて山へ登って大周りのルートを辿らないと元の位置へ戻れない」

「そうなんですね。だったら帰りはシーアテイルで帰るんですよね？ 帰れますよね？」

真剣な顔で訊ねてくるフランは心に何かを引っかかっているのだろう。昨日のことも知っていて知らないふりをしているとも考えられることが不安だったが、レオンは知らないふりをした。

「ああ心配しなくとも帰るさ。もうあんな怖い真似はごめんだぜ。それにこの板も返さないとどやされるぜ」

「ユナさんの大切なものですもんね」

「そう。あ、そうだ。心配ならメモリーストーンを持っているか？絶対に返さなきゃならないからこれを持っていれば絶対に帰れるだろう？」

「いいえッそんなそんな大切なものをッ！！私ガッ」

「ハハハ。いいんだよ。俺が持っていると忘れそうで怖いんだ」

「……はい。じゃあ……絶対に返します」

「そう。フランの手で返してやってくれよな」

レオンはそう言って約束するとフランは大きくうなずいた。

板は地表すれすれの低空を減速し、兵士が多くいる民家の前でちよつと着地した。フランを降ろしてレオンもおりると同時に板をひっくり返してメモリーストーンを抜いてフランに手渡した。

ファミルと精霊

「シーアテイルから来た」

「やはり……ではこちらの方が？」

「ああ。そんなことよりも風の精霊ってのは何処にいるんだ？」

レオンは板を脇に挟んで訊ねる背後でフランはメモリーストーンを嬉しそうに眺めていた。兵士の視線はレオンよりもそちらへと向きがちになっている。

咳払いをしてこちらに意識を戻すとハツと緊張する顔になって敬礼をする兵士。しっかりしてくれ、と思いながら頬をかいて何気なく民家の方角を見るとそこにいる老齢の男がフランをジッと睨んでいる姿が見えた。

「それで精霊の場所は知っているのか？ 先に来るように言われて急いだんだすぐに出発するんだろう？」

「いいえッ！ そのようなことは……？ ここは人の出入りが少なくて穏やかな街なので最後に来られると思っておりました」

「……？」
「何か？ 何かありましたか？」

「いや何でもないぜ。だがフランにはその場所へ行く道が封鎖されているとか何とか言ってくれよな」

「……？」
「頼むぜ。それと場所を知りたい。現地に詳しい人と話したい。出来れば精霊の場所を知っている人、案内してくれる人っていうのかな？」

「でしたらこちらへどうぞ」

兵士はたどたどしい口調で案内する。人の出入りが少ないというのでかなり緊張しているのだろう。兵士はちらちらと辺りを見て誰を紹介すればいいのかを困り果てた様子だった。

「民家の前にいるあの老齢の男は？ 事情を知っているのかな？」
「ええ。あの方は王族に仕えていた大臣様です。今ではこの街の長をやっております。と言っても相談役のような役回りです。特に何かをされるような特別な人ではありません。はい……」

いちいち顔色をうかがう兵士にレオンは不満だったが、何も言わずにその男の元へ連れて行ってくれと頼んだ。フランのことを凝視しているということは事情を知る人物だろうとふんでいた。

他の集まった人々はすっかり慣れたのか、それぞれの作業へと戻り始めていた。

「あの……それに民家ではなく、これがウエルスタンの城のようなものでして。都会の方から見れば民家かもしれませんが一応、そう呼ぶのはちょっと……はい」

「ああすまない」
「いえいえそんなッ」

レオンが素直に謝ると慄く兵士がコミカルだった。ひどくうろたえた姿に大丈夫だろうか、と心配してしまうレオンが元大臣の前に通される。

元大臣は凜々しい顔をしていて老齢なのに鋭い眼光があった。兵士も引き締まった表情になり、元大臣がご苦労と言うと敬礼してすぐさま逃げていく。

ようやく追いついたフランとすれ違うと大げさに驚いてヘルメットがずれたまま走り去った。

「何ぶん、平和な街でして」

「いいや。頼りない兵士だが悪いやつでは無さそうだ。それにこんな場所に攻め込もうっていう物好きはいないんじゃないかねえの？」

「もう王族も去り、何も無い街ですから心配はしておりません。ただ静かに暮らせればいい」

「それがいいと思うぜ。俺らも風の精霊に会ってすぐに帰るようにするぜ。それで場所を知りたいんだ」

「そう焦らなくてください。まずは小さいですが我が家でくつろぎ下さいませ」

元大臣はそう言って民家の中を案内する。レオンは困ったがフランに無理をさせるのも良くないと思って元大臣の後について民家中へと向かった。

吹き抜けの建物で玄関からは全ての部屋の扉を見ることが出来る。一人には広すぎる建物です、と感傷的に呟いた元大臣は右手に見える暖炉があるリビングへと二人を通した。

「すぐに戻ります。ここは自分の家だと思ってごゆっくりお過ごしください」

元大臣は深く礼をして玄関の外へと出て行った。

残された二人は持てあます時間に悩まされる。妙に居心地の悪い広さにレオンは戸惑っているとフランの表情が強張っていく。

「何か……？ 具合でも悪いのか？」

「いいえッそんな。ただ……」

「ただ……？」

「見覚えがあります。この絵に」

暖炉の上にあった一枚の絵を指差して表情を曇らせるフラン。人

の絵だ。優しい瞳に金色の髪が似合っている若い男の肖像画。

「有名な絵なのかもな。それが俳優とか。舞台が好きだって言った
だろう？」

「違います。俳優さんや女優さんの名前は全て暗記しています。そ
れに本にあった絵ではなく、実際お会いしたことがあるような気が
します」

「ずっと塔にいたんだろう？」

「……はい。物心がついた時から塔にいました」

「もしも会ったとしたらその前か、それとも気のせいかな。何の絵か
戻ってきたら聞いてみよっか？ だがここはノール領だからエレ
ンの人を飾るとは思えないけどな」

「そうですね。私の勘違いです。きつと」

やけにあつさりと引き下がるフランにレオンも黙ってしまった。
元々ノールの人間ならば王族に知り合いがいてもおかしくない。
赤ん坊の時の記憶でも憶えていることもある。レオンが母親の顔を
ハッキリと憶えているように近い人間の顔は忘れない。

さらわれた子か、とレオンも考え込むと室内は無言になった。フ
ランは変わらず絵ばかりを見上げているし、レオンは怖くて話をす
ることが出来なかった。

元大臣が戻ってきたのはそれからしばらくしてからだった。

「この絵は誰の絵でしょうか？」

フランは元大臣の顔を見て飛び付くように訊ねた。元大臣は視線
をレオンへ送ってからフランの方を見直す。緊張するレオンも息を
飲む。

「ウェルスタンの城主 コットンウェザーミルファミル様です。私

が仕えた方ですのでもう数十年も前の写真です」

「エレンへと来られたことはありますか？」

「エレンへ……？ いいえ。この界隈から出ることは決して無かった人です。小さな頃から森へとよく一緒に遊んだものです」

「そう……そうですか。ありがとうございます」

フランは諦めて視線を下げると精霊が現れた。レオンの頭を蹴つてフランへと飛んで慰めるようにフランへ鳴いた。

その光景を表情のない瞳で見つめる元大臣はレオンの前へと座り、声を落として話した。

「やはりあの方はファミル様の娘ですな」

「ッ」

「わかっております。事情も知っております。ですが、目の前にしても未だに信じられません」

「……本当なのか？ さらわれた子って言うていたが、その話は真実なのか？」

「はい。私も精霊を見たことがあります。森であのようにファミル様を囲む精霊の姿を見たのを今でも忘れられません」

元大臣はフランを偽物だと疑っていたことも正直に話した。あの睨む瞳はそういう意味もあったことを深くお詫びをした。

「先にお越しいただいたのは私のわがままからです。どうしてもこの瞳で確認したかった」

「それで本人だという確信が出来たのか？ 絵に懐かしさを感じたからか？ 偶然かもしれないぜ」

フランは精霊と話をはじめて、やはり肖像画が気になるのか、そちらばかりを見上げてこちらの話を気にする様子もない。

「私はそう信じたいのかもしれませんな」

「さらわれたのも赤ん坊の頃だ。何があったのかは知らないが負い目があるんだろう？ だから生きていて欲しいとか思っているんじゃないかねのかな？」

「そうかもしれませんが。さらわれたのは赤ん坊の頃で精霊の仕業と言われておりました。何しろ突然、城から消えたので」

「なるほど。精霊の仕業だと思われていたから搜索もされなかった」
「搜索はしました。ファミル様の言いつけどおり森をくまなく調べましたが……ファミル様は病気で若くして亡くなり、女王様はすぐに搜索を断念しました」

「……それですぐに都へ行った。もしかすると女王が加担しているのかもな」

「真相はわかりません。ですが我々は女王様の命令に従うしか出来ません。最も、今でも森の研究と言って森へは探していたのですが」

元大臣は深くため息を吐いた。

「あんたは事情を深く知ってそうだな。聞きたいことはたくさんある。時間があるなら出発を遅らせて話をしたい」

「私も同意見です。リイザ様には別の事情を伝えて待つてもらいましょう」

「リイザ様……？」

「申し訳ございません。今はフラン様と呼ばれているのでしたね」

「ああ。フランはフランだ。そうフラン……フランだ」

噛み締める言葉を何度も繰り返した。

その後、フランを近くに呼んで話をした。精霊を呼ぶ条件が揃わないとダメだと言って今夜はここで泊まるようをお願いされるとフランはレオンの顔を見る。

レオンはクイツと眉尻をあげて、仕方ねえんじやねえの？　と言
うとフランは少し間を置いてコクン、とうなずいた。

オレンジ色の提灯が軒先に並んでいる。

これは歓迎の気持ちです、と元大臣は言っささやかな祭りをさ
せてもらいたいとフランを街の若い女性達に案内させた。

レオンは元大臣と精霊についての話し合いがあると行ってここへ
残った。一瞬、不安げな表情を浮かべたがすぐにパツと笑顔を見せ
て迎えにきた女性達と並んで街の喧騒に消えていった。

「何処から話せばいいのでしょうか……やはり父のファミル様のお
話からした方がよろしいでしょう」

「ああ」

「あの方の父、ファミル様はイタズラ好きで活発な坊ちゃんでした。
私は年齢も近いこともあり付き人として幼少期を過ごしました」

何もかも懐かしい、と言うように柔らかく笑ってしわだらけの顔
に憧憬が映ったように思える。外を走る子供の声が聞こえたからそ
う見えただけでも思えるほどふいに老齡のしわがれた男に戻ってし
っかりとした口調で続きを話した。

「精霊に関係する話からにしてくれ。フランが戻る前に聞いておき
たい」

「……はい。精霊と出会ったのはいつものように森へ入った時でし
た。あの日は霧が濃くて五歩前を歩くファミル様の背中も見失いそ
うでした。ただ見失ってはならないという気持ちだけで追いかけて

いたので何処にいるかすらわかりませんでした。ファミル様には位置も把握出来ていたようです」

「位置を精霊が教えてくれていたとか？」

「いいえ。それはわかりませんが……おそらく妙な自信をお持ちの方でしたから」

妙な自信とはじめての舞台でフランが口にしたようなことだろうか。そうだとすればファミル自身も不安を感じていたに違いない。それを悟られないための強がりだとレオンは思った。

「そのファミル様が急に立ち止まり、何かを見つけたと大変興奮した様子でおっしゃりましたが情けない話ですが私はもうヘトヘトで」
「霧があつたんだよな？ だったらファミルの位置しか見えなかつたとも考えられるぜ」

「気遣ってくれてありがとうございます」

「いいや……そんなんじゃないけど、それで続きを話してくれ」

「ほらついてこいって、と私の手を引いて何かの元へと走っていききました。すると深い霧が発光している姿が見えたのです」

「それが精霊だった？」

「都合のいい話に聞こえるかもしれませんが、精霊だと思います」

「だと思っ？」

「ファミル様は光に手を伸ばして触れて会話をしていたら私にはファミル様の声しか聞こえませんでした」

フランも精霊と話が出来た。その目で光景を見たという話をすれば、やはりリイザ様だと確信するのだろうか、とぼんやり考えて続きを待った。

「ややあつて発光する光は弱まりやがて消えてしまいました。手を伸ばしたまま動かないファミル様へと話を聞くと約束をしたって言

うのです」

「約束？」

「家に帰られるように俺が何とかしてやる、と。無責任に聞こえるでしょうがファミル様はそういう優しい方でした。困っている人には手を差し伸ばすのは当たり前だと口癖のように言っておりそして実行していました」

「精霊の血を引くって……そういう話を精霊からされた。てっきり精霊との子供がフランだと思っていた」

「精霊の血を引く……もしかするとあの時にファミル様の身体へ入ったと解釈をすれば、おそらくは」

「理解出来るってことか。こじつけにも見える話を信じるっていいのか？」

「残念ながら私には見たままをお伝えするしかございません」

元大臣はうやうやしく頭を下げた力添え出来ませんで、と謝るのに困り果てるレオン。

「だったら他の話を聞きたい。たとえば、何か特別な体質を持っているとか」

これでも確信を持ってない。赤ん坊に多い体質だとも言える魔法を自然に発する体質。

「それから結婚したのは五年後。リイザ様が産まれたのはさらに後。その時には大臣の職について多忙な身でしたので詳しくは何ともお答えできません」

「……だが、子供だって直感的に思った」

「はい」

「何か他にはないのか？ 子供だって確信出来れば、出来れば」

思わず口走りそうになった言葉を引つ込めてレオンはうつむいた。全てが終わった後に帰れる場所がある。それだけでずいぶん救われるだろう。

「確かめる方法ではございませんが、昔住んでいた古城が残っておりますので何かを思い出すかもしれません」

「……思い出せたとしてどうすりゃいいの。フランはエレンにさらわれてエレンの子だとして育てられた。それがいきなりノアールの産まれでさらわれて幽閉されていたって知ったら混乱するぜ」

「あの絵をご覧になったリイザ様の顔を憶えておりますか？」

元大臣はフランが見ていた絵を指差して訊ねた。コクン、とうなずいたが正直あまり憶えていない。フランが遠くに行ってしまうようで見れなかった。

「きっとリイザ様は今困惑しておられる。それを黙っているのと正直にお話するのではどちらの方がリイザ様のためになるのか、おわかりになりますね？」

「……ああ。だが話していないことがある。フランには魔法を自然に発する体質があつて不安定な心になるとどうなるかわからない。もしも魔力が暴走すればこの街なんて」

「心得ております。魔法を自然に発するのは精霊が己の場所を仲間知らせる合図。その波長同士があつて互いの居場所を確認し合うことと聞いております」

「聞いた？ 誰から」

「ファミル様からでございます。魔法を自然に発する赤ん坊が産まれた時に魔力を拘束しようとしたことがあります、そのままにしておいてくれと命じられたことがあります」

「さらわれた子がその子だって言うのか？」

「はい。さらわれた時に同時にファミル様も殺されたので搜索が遅

れたと共に結婚されていた奥さまが女王様になり、主人のことを忘れたいと何もかもを捨てて忘れたいと都へ行かれました」
「うやむやのままに探せなくなったのか……ッ」

レオンは顔を歪めて怒りをあらわにする。これは誤解していた自分への怒りと共にエレンへの怒りでもある。誰かが一つを奪うだけで全てを壊していったのが許せなかった。

「犯人は誰だかわかっているのか？」

「いいえ。ですがかなりの大男だった、と聞いております」

「大男……巨人族ってやつか？」

「おそらく。ノアールの鎧を着ていたので誰も気に留めなかったようですが」

思い当たる人物がいる。どうしてこの国へ来なかったのかもわかった。おそらく近くで合流すると伝令を送ってくるに違いない。

親方だ。

怒りは戸惑いに変わり、やがて無へと消えた。

「古城へ行くよ。だが条件がある。城へ行くのは俺達だけだ」

「はい。それでは近くまで案内させていただきます。風の精霊がいる住処もその城の近くにございます」

「ああ……話せて良かったぜ。もしもその子供じゃないとしてもフランが気に入ったらここで住んでいいか？」

「何も無い街ではございますが……それでよろしければ二人で住む家を用意いたしましょう」

元大臣に礼を言ってレオンも歓迎祭へと向かうことにした。

外は肌寒い夜。オレンジの暖かな光に包まれた静かな街は誰もが仲良くて、その輪にいるフランも今までに見せたことのない笑顔を

見せていた。

ここで暮らすのも悪くないかな、とレオンは思いながら踊り続ける人々の輪へと加わったのであった。

真実の鏡

その次の日、踊りつかれた余韻に浸って布団の中の温もりにまどろむ朝を変えたのは一通の伝令だった。

合流地点の変更の旨、港の街【シャガール】に変更。とだけ書かれた紙を丁寧に畳んでポケットの奥へと押し込んだ。

「何か……ございましたか？」

「いや。ただ補給に手間取っているみたいだからこつちから板で港へ戻って来いだってさ」

「……」

「たまにあるんだよ。つたく港で遊びたいからって」

「遊び？」

「そうだよ。シャガールつてのは貿易の拠点になるから面白いものや珍しいものまで集まってくるし、ギルド協会の中央もそこにあるんだぜ」

「行ってみたいです」

「八八八。だったら早く精霊を連れて戻ろうぜ」

枕元へ手紙を置いた元大臣のメイドの女性は足早に部屋を後にして、薄く開けたままの扉の隙間からこちらを待っていた。

レオンは立ち上がり、大きな窓際にあるソファアの上で精霊に囲まれているフランに言って先に部屋を出る。扉の脇にいるメイドは目を伏せて二人の退出を無表情で見送り、中に誰もいなくなるとすぐさま中へと身を押しこんでベッドメイキングを始めた。

二階の右手にある大部屋。フランに用意された部屋は隣の部屋だが、先に起きてレオンの起床を待っていたのだらう。

こんなにも広々とした部屋にゆっくりと眠れる環境に面倒な片付

けはメイドがやってくれる贅沢な朝なのにレオンの表情は浮かなかった。

「疲れたな。そりゃあんだだけ踊れば疲れるよな」

背後で視線を感じて背筋を伸ばしてそう言ったレオンへフランもそうですよ、と笑った。特別気にしている様子も無かったがレオンの猜疑心が焦らせる。

十段の階段の下、玄関には数人の兵士がいてレオンを見るなり敬礼をする。その背後にいたフランが視界に入ると先頭にいる老齢の兵士だけが顔をしかめた。

「こんなにも兵士がいるなんて遠くなのか？」

「いいえ。念のため、リイザ様に何かあつては」

「……まあ多い方が心強いぜ」

兵士はレオンの放つ眼光に言葉を詰まらせるがレオンは呼吸を一つ置いて何も聞かないふりをした。精霊がまた喧嘩をしているのに助けられたのもあり、兵士はヘルメットを深くかぶりなおして先導致しますと言つて外へ出た。

レオンとフランが老齢の男の背後を歩き、その背後を若い兵士が囲む陣形で畑の脇道をひたすら歩く。

「街の外へ出るのか？」

「いいえ。外壁のせいであまり大きくないように見えますが、畑の裏側の風が来ない位置にまでは長い距離があります」

「低い位置に城を作るのか」

「はい。昔は今のように入音が無かったもので風車の音が静かになる場所は風の通らない道しかありませんので」

「なるほど。静かに眠りたいってことか」

「攻められるようなことも無いので……暮らしが一番に設計された城です。太陽の明かりも入って中はとっても暖かいのでもう少し御辛抱ください」

畑の裏側へ回ると山と風車が立つ壁のせいで全体がすっぽりと影に隠されてしまっている。フランが両手で自分の腕を擦っているのを横目に老齢の兵士はそう労った。

フランはコクリ、とうなずくだけで感動して泣きだしそうに表情を歪める兵士。

「何処へ向かっているんでしょうか……？」

「古城だぜ。移動した後の新しい方だが」

「そこに風の精霊がいますか？」

「いいや古城に行くのは そうだな……えっと……」

レオンは唐突の質問で返事を用意していなかった。頭を掻いて困っているのと老齢の兵士が救い舟を出してくる。

「城へ向かわれるのは真実の鏡というものがあって、それはそれは巨大なレンズでして天窓から差し込む光を吸収して魔力へ返還していたこともあるそう」

「舞台でも出てきます。嵐が来たのを鏡の力で跳ね返したっていうのもありますよね？」

「はい。あれは民の街を思う心が鏡に反射して嵐を押し返したと言われてあります。事実はわかりませんが、そう信じるだけのお姿をしておられますよ。鏡には幾万のウェルスタンの心が宿っております」

「すごい……それが精霊と会うのに必要なのですね？」

「何かあるのかわかりませんゆえにお祈りを捧げてから、と元大臣様がおっしゃるもので回り道になることをお許しく下さい」

「いいえッ。いいえッ。そんなとんでもありませんッ。わ、私は鏡も見たかったのです」

「それは良かった。して、鏡は見たことありませんか？ お嬢様は」

「いいえ？」

「さようですか。それならば……さぞ、感動なさるかと思います」

老齡の兵士は何かを期待したように訊ねたがフランは首を振った。寂しそうに前を振り返る思わせぶりな兵士にフランはレオンの顔を覗く。

もしもここがフランの故郷でその城がフランが産まれた城ならばこのくらい少しずつフラン自身におわせる方がいいのかもしれない、と思つて何も言わずに無言でほほ笑みかけるだけにしておいた。

一本道で迷う必要も獣に襲われる心配もないのに兵士に囲まれた異様な光景に目をつぶればのどかな街だった。畑から果実の二オイがあつて防音から少し漏れて聞こえる風車の音も丹田に響いて眠気を誘つてくる。

「つきました」

老齡の兵士は立ち止まる。

錆びた銅の門扉に城壁の欠片が伸びつばなしの雑草の上に落ちてゐる。平らに長い城で中央に長細い筒がある。その筒に日の光が吸い込まれたふもとに鏡がある、と老齡の兵士は言つてフランの顔を覗いた。

比較的新しい建物だが廃墟特有の空気が充満しているせいでやけに寂しく見えた。周りに建物がないというのも寂しさを助長しているんだな、とレオンは周囲に目を配つた。

「中へ入るのは私とお二人様だけです。ここを見張つていてくれ」

「わかりました」「わかりました」
「うむ」

老齡の兵士は若い兵士にそう言つて門扉を押し開いた。簡単に開く門扉の端を持ってフランとレオンを待つ。二人が通り抜けると手を離して門扉がゆっくりと閉まつた。

丸い円柱が多くあるだけの殺風景な通路。カーペットもカーテンも無く、生き物の気配もまるでない。

「右手に行くと王族の部屋があります。左手へ行けば奥にメイドや執事が使う部屋やゲストルームに厨房や食堂があります」

「真つ直ぐに見える中庭……」

「さようでございます。この目の前に見える階段の裏に行けば中庭がございまして中央にテラスがあり、上の部屋から差し込んでくる光が漏れて大変過ごしやすい空間だと幼きお姫様や王子様には人気でした。駆け回る姿も憶えております」

「……」

フランはそれっきり黙つて目を細める。やはり何かを思い出したのだろうか、とレオンは訊ねようと思つたがフランの表情を見てみると声にならないで黙ってしまった。

「今は手入れもしておりませんので雑草ばかりですのでお見せ出来ません。では上へ案内いたします」

老齡の兵士は事務的に案内をしているのだが、やはりちらちらとフランの顔色を覗いて反応を窺っているのがレオンには気になった。

三人は無言で階段を登り始める。手すりの途中には平べったい物置があつてそこにはオブジェが置かれていたと推測出来る。フランにはそれが見えているのか、平べったい物置に視線を向けて何かを

眩いていた。

「人が出払ってからは全てを引きあげましたが、間取りは変わっておりません。二階は鏡とそれに関係する魔術書庫がありました。研究者も多く居て城とは思えない光景が広がっております」

「ここは入れない……たとえ王族でも入室許可はおりなかった」

「さようでございます。私の目を盗んで二歳のお姫様がよく遊びにこられておりました。やはり……リイザ様でしょうか？」

「……リイザ？」

「勘違いならば失礼をいたしました。そのお嬢様のお名前です」

老齢の兵士は深く頭を垂れてそう言うとフランは口内でリイザ、とその語感をなぞった。

「レオンさん……私……おかしいです」

「どうかしたのか？」

「来たことがないはずなのに、ここを知っています。おかしいです」

「舞台や本で見たんじゃないのか？」

「違います。違つと……思います」

フランも困った顔でレオンを覗いた。

レオンはただフランの手を握った。

「嫌ならさ……出てもいいんだぜ。祈りなんて俺がやっておくからさ」

「嫌じゃありません。それよりももっと知りたい。もっとここへいたい」

「……」

その言葉を背中で受ける老齢の兵士はしばらく間を置いてから歩

き始めた。その背中へついでにこうとレオンが動く。フランも無言で掴んだ手を握りかえた。

おそらくフランはリイザというお姫様でさらわれた子というのは本当の話。だとすれば、やはりさらったのは親方なのだろうか。親方の態度がおかしいとかノアールとの関係だとか巨人族であると言ったこと、全てが思考を悪い方へと迷いこませる。それを知ればフランは何て言うのだろうか。

「レオンさん……どうしてここへ来たのでしょうか？」

「……それは、何て言えば伝わるかわからない」

「待っています。私はレオンさんのことを信じていますから」

その手から伝わってくるものは焦りだった。フランはこの街へ置いて行かれると考えているようだ。船にいと迷惑がかかると思っているに違いない。そして、これもレオンの勘でしかないことをレオンは知っている。

大広間に入ったその中央に光が収束しているのが見える。筒状に伸びる天井には大きな窓があつて眩しいくらいの太陽の光が室内にはあつた。

「昔はあの鏡一点へと光を集める装置で埋まっていた部屋もご覧のとおりです」

老齢の兵士は殺風景な部屋を紹介した。

中央にある鏡もくすんだ銀に見える。鏡は楕円形でほんの少し傾いて天井を見上げていた。それを支える土台の側面には多くの装置が接続されていた痕跡があり、床には大量に張つてあつたチューブの跡が残っていた。

太陽の光にうつすらと舞う埃が幻想的で思わず息が止まるレオンは視線を少しずつあげて天窓を見上げた。

「すげえな……何か歴史を感じるぜ」

「この鏡があつたのは数百年も前からです。精霊が落とした涙が結晶となつてこの形になつたとも言われております」

「今はどうしてここへ？ 何かに使わないのか？」

「はい。鏡はある事件に亀裂が入ってしまったので使えなくなつてしまつたのです。廃棄するのも忍びなくて今では祈りを捧げるためだけにあります」

「ある事件……？」

「はい。それは誘拐事件でございます」

老齡は眉に皺を寄せて後悔の念を隠すことなくそう答えた。

「誘拐……？」

「そう、リイザ様が誘拐されたあの日、巨人族の男は……陛下を……ファミル様を殺してリイザ様を誘拐してその街から逃げました」

「その誘拐された子は何処へ……」

フランの問いに何処まで答えていいのかわからずに老齡の男はレオンの顔色をうかがう。レオンは大きくうなずいた。

「少し前にエレン領で見つかった、と聞いております」

「エレン領で見つかった？ そんな話は……」

「はい。聞いていないはずでしょう。それはあなただからです。リイザ様」

「……私が？ そんな……私が……」

「私を憶えておりませんか？ ヒースでございます。いつもリイザ様の警護をさせていただいております」

「憶えてませんッ」

強く反発するフランの声が広い室内に響いた。

「フラン。真実はまだわからないからここへ来たんだ。混乱させたことを謝るぜ」

「レオンさん……私はどうしたらいいでしょうか？」

「それはフランが決めることだ。俺はフランの傍にずっといる。これだけは変わらないぜ」

「ずっと……？」

「ああ。何があるかと俺は傍にいる。だから受け入れられなくても何もかもが嫌になってもいいんだ。ただ真実を知った方がいいだろう？」

「……」

「あー……なんて言えばいいのかわからねえぜ。とにかく何も変わらないんだ。過去がどうあってもってのは無理か……」

困惑するレオンにフランはただすがるような視線を向けている。

「何もわからないでいるより、知った方がいいと思っただからここへ連れてきたんだ。エレンを怨めとか、ノアールにいようとかなんかそんなんじゃないよ」

「……」

「困らせるつもりは無かったんだ。それは知っておいて欲しい。フランのために思ってそうした方がいいと思っただ。うまく言えなくてごめん」

「……レオンさん、私は」

「ゆっくり考えよう。受け入れられないならそれでもいいんだ。この話は忘れよう」

「無理です」

「強引だったな……ごめん」

「謝らないでください」

「そうだった。俺が言ったんだっただな」
「……はい」

少しずつだが、口数も増えて会話もするようになってくるフラン。拒絶の意思も和らいで見えた時、ポケットからメモリーストーンがこぼれた。

「これも返さないとダメだし、急いで精霊のところへ行こうか？
もう考えるのは辞めよう」

レオンが拾い上げようと手を伸ばした。

メモリーストーンがチチチ、と何かを呼び出す音が聞こえた。落ちた衝撃でボタンを押してしまったのか、と思って拾い上げて操作しようとする。

「お前のせいでッ！！ テッドは殺されたんだッ」

響く声。

メモリーストーンの表面からフォログラフが扇状に拡散して映像を見せる。レオンの頭上辺りに展開される光景にフランは目を疑った。

「私……私がいる？」

寝ぼけたフランはすぐに眠ってしまい、スウィニーがヤーガスを追いだす医務室から場面はパツと通路へ変わる。

騒ぎをおさめるロニーにレオンがやってくる。船室での出来事を野次馬の後方からとった映像だ。

姿はあまり見えないが、声はハッキリと聞こえてくる。

「何ですか……これは……」

「フランツ。これは」

「テッドさんは私のせいで死んだ？ 別行動だって……」

「……」

メモリーストーンはまた場面を変えた。

パツパツと映像は何度か変わって見たこともない図式になり、風の進行制御をどうかという音声が流れて少ししてメモリーストーン
のフォログラフは消えた。

「嘘をついていたんですか？ テッドさんは私のせいで」

「違う。俺のせいだ。俺が助けられなかった」

「違いますッ！！ 私が受け入れられなかったから……死んだ。そ
うおっしやっているじゃないですか…… どうしてまた嘘を言うん
ですか……」

フランはレオンから目を背けて繋いでいた手もすうーっと離れた。

「私の強い魔力から仲間を守るためですか……？ 私は邪魔ですか

……？ 私は……」

「……」

「守ってくれるって言ったのも嘘ですかッ！！ 何が本当で何が嘘
なんでしょうかッ？！ ここにいるのも何かの嘘……本当はここへ
捨てるために仕組んだんですかッ！！」

「違う」

「目を見て言ってください！！」

その言葉で目を背けていたのは自分だったことに気がついたレオ
ンだが、視線は埃だらけの廊下に吸い込まれていた。

どうしてすぐに答えられなかったのだろうか。守りたい、傍にい

たいって言葉は本当の気持ちだとレオンは確信しているが、色々迷いがあつた。負い目があつた。そしてテッドの死を受け止められていない心がフランのせいにしてしようとしていたのを知つた。

「舞台に出ていられる方ですものね。嘘だつて慣れたものでしょう…… すっかり騙されてしまいました」

「……俺は」

「私だけが喜んで私だけが楽しんでバカみたい。そんな姿を見て何て思っていましたか？ 『ああこれで仲間を守るんだから我慢しよう』 って思いましたか？」

「違う」

「だけでもう耐えきれなくてここへ捨てるつもりだったんでしょッ？！」

「違う」

「だったら…… だったらどうして助けてくれたんですか……ッ」

フランは涙声でそう叫んだ。

何も言い返せないレオンは黙つたまま、ゆっくりと振り返る。目を見て答えよう。ありのままの気持ちを言おうと決めた時、鏡が眩い光を放つた。

「フラン様。お迎えにあがりました」

光が落ち着いて、目を開けると鏡の前で黒いスーツの男が跪いた。男は丁寧な口調でフランにそう言った。

「お前はッ」

「ダリア様が心配なされております」

「タイミングが良すぎるッ。お前の仕業かッ」

黒いスーツの男へと攻撃を仕掛けようと剣を抜いて飛びかかるレオンだったが、男が宙に手を払っただけでレオンの身体がねじれて床へ伏せた。

「……………」

「さあフラン様。私と共に帰りましょう」

「わかりました」

フランはハッキリとした口調でそう返事して男へと歩いた。倒れるレオンは立ち上がろうとしたが、指先さえ動かせなかった。

「待ってッ待ってくれ」

レオンは声の限り叫んだ。

身体が動かない。それでも動け、と動いてくれ、と身体へ鞭を打つように叫んだ。

「待ってどうしますか？ また嘘を言っで慰めてくれますか？」

「フランどうしたんだ……………？ フランッ」

「その声で優しいふりをしますか？ その腕で強く守ってくれますか？ その笑顔で幸せにしてくれますか？」

「……………」

フランは疑問符をたくさん乱雑に並べても歩みを止めることは無かった。全てを聞くだけのレオンはやがて支配する力に負けて言葉も失った。

「失礼いたします」

「ええ。風の精霊を回収してから帰りましょう」

「はい。仰せのままに」

黒いスーツの男の前で反転し倒れたレオンを見つめたフラン。男は立ち上がり、手をかざすとフランと共に闇に包まれてあっと言う間に消えた。

同時に動けるようになったレオンに老齢の兵士が近づいてくる。

「アポリの陣宮か……」

「それは何ですか？」

「バツハシヨートルとリゲルベントレの脚本ではラストが違うが、有名な物語だ」

「……」

「フランの言った台詞がその物語の有名なシーン。親友の死を奥さんに隠していた兵士がその未亡人と恋に落ちる」

「それがどうかしましたか？」

「途中で部隊長が謝罪に来て死んだことがバレた時に未亡人が主人公へ言った台詞」

「……」

老齢の兵士は気が狂ったのか、と言わんばかりに首をひねってレオンに手を貸した。

「主人公はもう一度、戦地へ行かなければなくなるんだ。その時に言った言葉がさっきの台詞」

「それが何の意味があるのですか？ 私には見当もつかない」

「もう一度、チャンスをくれるってことだ。最後の風の精霊へ行くと宣言したのもそこで答えを聞くってことさ」

二人にしかわからない秘密みたいで今はそういう場合じゃないが、嬉しかったと素直に思えたレオンはかすかに笑った。

「バツハは戦地へ行かずに二人で逃避行をさせた。リグルは戦地へ行って必ず帰ると約束したが、ついに死んでしまった」

「だとすればバツハと答えるべきです」

「そうすれば精霊も何もかも捨てるんだぜ？ ノアールの兵士がそんなことを言っているのか？」

「構いません。私は一国の兵士である前に一人の人間です」

「……この街は、フラン達を愛してくれていたんだな。それなのに俺は見捨てたとばかり思っていたぜ」

「私は今も何も出来なかった。見捨てたのも同じことです。あの日も怖くて動けなかった。巨人族の血まみれの男が怖くて私は隠れたのです」

「……すまない。思い出させたか」

「いいえ。追いましょ。その言葉が本当ならばリイザ様はあなたが来てくれるのを待っておられます」

「そうだといいいんだが」

そう不安をにごして言ったレオンは伸ばされた手を掴んで立ち上がった。

風の祭壇

レオンと老齡の兵士が扉から出てきた時に若い兵士は表情を曇らせたが、質問してくることは無い。

「ご苦労。街へ戻れ」

「ハッ」

老齡の兵士に敬礼を返して足早に去っていく若い兵士の背中がゆっくりと遠のいていく間にレオンは頭の中を整理して呼吸も整えた。

「それでは行きましょう」

「ああ」

「こちらへどうぞ」

老齡の兵士は若い兵士の姿が背の高い草に隠されてようやく歩き始めた。風の精霊の居場所は山の中腹にある貫通した穴にあると言った。その穴は強い風が吹いているせいで精霊の場所へ行くには山のふもとの岩穴から中央へ向かって、そこから上へ登るしかないと言って古城の裏手へと続く細道を案内した。

正方形の石の足場が等間隔にあるが、手入れのされていない雑草があるせいで楽な道ではない。老齡の兵士が太い腕でかきわけてグングンと進んで行く。鋭い葉先が細い血の線を作ってはいるが老齡の兵士は表情を変えることはない。

「なあ……聞いていいか？」

「何でも」

「巨人族と会ったって言うていただろう？　さらわれた夜の話なんだが」

「ええ。血まみれの巨人が赤ん坊を抱いている姿を見ました。どうして言わなかったというお話でしょうか？」

「違う。理由はだいたい察しがつく」

「おそらく勘違いなさっています。私は自分のために黙っておりました。この街は平和で何も無い持ち場を離れたことを黙っておきたかった」

「……」

「弁解するつもりも開き直すこともしません。それが理由に解雇されるのが怖かった。ただそれが無くとも巨人族は怖い。持ち場で会っても隠れてやり過ぎしたでしょう」

老齢の兵士は淡々と事実を言う間にも葉が擦れ合う音がうるさかった。足元にある石の足場が途切れてからもまだ奥へと進み続ける兵士の背中と背の高い雑草で視界が埋められている。

「まだ少しあります。ここからなだらかな斜面になります。足元の土も脆くなっておりますので十分に注意ください」

「ああ」

突然、ひょこんと老齢の兵士の頭が一分だけ下がった。踏み出した足がそこにあるはずの地面を踏めずに宙で浮いた。バランスを崩しそうになったレオンは視線を足元へ向けて体勢を低く保ちながら歩く。

「話つてのはそうじゃなくて巨人族のことを聞きたい。どんな姿をしていたかっていう具体的な話を聞きたい」

「具体的な話ですか？」

「特徴っていうのかな？ ノアールの服を着ていた以外にわかることは全て」

「夜でしたからね……それに赤ん坊の方ばかりに目をとられていて

ほとんど憶えていません」

「そうか」

「力になれなくて申し訳ありません。付かぬことをお伺いいたしますが、それがリイザ様の説得に關係あるのでしょうか？」

老齡の兵士はバランスを保つために身体を後方へ倒しつつ重心を下げるヘンテコな格好だが、口調は真劍そのものだった。

「わからない」

正直にそう答えると老齡の兵士は大きくうなずいて先を急いだ。斜面だった場所もいつの間にか平面に戻り、徐々に重心をあげていく背中が大きくなっていく。

それからすぐに雑草が生えているエリアを抜けて平地に出る。眼前にそびえる山が妙な音を立てている。

「空洞に流れる風がうめき声に聞こえることからあの森は死人の森だとか揶揄されております」

「腐敗臭に深い霧にこの音……これが人を遠ざけていたのか」

「はい。街を守るために噂を広めたのは先代の王族ですがそれにしても不気味でしょう」

「ああ。これだけの音が聞こえてくるってことはかなりの風があるってことだよな？」

「はい。中へ入れば音は消えますが、風の通り道と交差する場所では気をつけてください。足をとられてしまえば一気に風に流されてしまいます」

整った岩肌を手で触れながら老齡の兵士はそう言った。髪の毛がふわりと浮かぶ程度の小さな風だがハッキリと冷たい風を肌で感じる。

「祭壇はあの辺りにあります。祭壇への道には学者が目印を置いてありますので迷うことは無いかと思われます」

「どのくらいの距離がある？」

「私は自分の足で歩いたことがありませんので何とも言えませんが、リイザ様への答えを考える時間は充分にあると思います」

「……ああ」

「迷っていられるようですね」

「……情けないが、まだ迷っていることはたくさんある。フランを見つけることが出来てもうまく話せるかが不安だぜ」

レオンは指差した位置を見上げながらそう答えた。山の中腹よりも低い位置だが、目測でもかなりの距離はある。

「私には妻も娘もおります」

「……はあ？」

「平和な街を守る仕事ですが、やりがいがあります」

「……何の話だ」

「ただ退屈でついつい勤務中に遊びにいつてしまうこともあります。そしてそれを黙っていることも少なくとも無い」

「あのな、それがどうしたっていうんだよ」

「誰かに認められるようなこともありません。何かを成し遂げたこともありません」

「一体、何だつてんだッ」

「だが、妻を愛しております。喧嘩もしたこともありますが、その度に喧嘩をしても思いがあれば伝わるものです。つまりはそういうことです」

「……」

「今まで何があったかは存じ上げません。ただ何かあるうと自分の気持ちを正直に言えば伝わります。レオンさんはまだ若い。私がそ

の歳の時には浮気がばれて何度どやされたことが」

老齡の兵士はまいった、と言わないばかりにヘルメットを撫でて頬を赤らめる。人懐っこい素朴な笑顔を見せて無理やりに声を出して笑った。

「ハハハ。演説が出来るほどの器量もありません。美しいと言われる妻がどうして私を選んだのかさえ今でも謎です」

「……」

「まずは嘘をついたことを謝りなさい。そしてどう思ったかを正直にお話ください。美しい妻を女房に迎えられただけが自慢の私に言えることはそれくらいです」

「正直に……か」

「それでは私はここで」

老齡の兵士は真剣な表情に戻り、レオンへ敬礼する。

反応に困るレオンを置いて逃げるように去る男の背中を見送ってまた山を見上げた。

「フラン……俺は……」

「目印ってやつはこれかッ」

微量の風の力を吸収して発光する魔法石が岩肌の隙間にねじ込まれてあり、薄暗い穴の中ではずいぶんと目立っていた。

レオンは指でつまんだ魔法石を元にあった場所に戻して先を進ん

だ。小柄な身体では背中を曲げる必要もなく、足早に空洞を駆けた。足音が反響して進んでいるのか、止まっているのかすらわからなくなる。まるで夢の中にいるみたいに見える。

「祭壇でフランを見つけたら何て言おうか。俺は何を迷っている。ただ正直な気持ちだったって……それがわからないんじゃないか」

嘆く声も響いた。耳の奥で振動する音が歩みを遅くさせた。

レオンは自分の気持ちを整理するために今までの出来事を自分自身に話した。

「エレンへ行つて時計台の上に登った。それで塔にいるフランを見つけた。よくわからねえことばかりを言つてさ、本当に意味がわからねえよ」

「それでさ、変わっているのは勇氣もないって言いながら役になりきることと空を飛びやがった。落としたら死んでいたぜ？ 下手すりゃ二人とも時計台から落ちていた」

「……軽かったな。細くてさ、抱き返した腕の力も弱かったのを憶えている。首の後ろで組んだ腕の隙間がありすぎて、気を使つていたのかな？」

「そのわりに強い瞳をしているんだ。機械人形だつて言つたらシルクくんだつて言い返してくる時、眉をしかめたあの顔がやけに憶えているんだ」

独白を続けるレオンは狭い左右の壁に両手を置いて進んでいることを確認する。感覚を失った。今は何処にいるんだろうか。

「それから水路をくぐって舞台の光が俺らを迎えてくれた。暖かくて帰ってきたんだつて思った。大げさだな、ハハハ……」

「舞台の上でのフランはジツとしていた。邪魔だけはしないように

してくれたんだろうな。ただ小刻みに震えていた。終わってから上手でしようって言って赤らめた顔も不安だったからだろうな」

「舞台が終わってからは部屋で一人だったんだな。皆はどんな顔でフランを見て、フランもどんな顔でいたんだろうか。俺は何をしていたっけ？」

「閃光弾を見つめる横顔を見て、俺はもつと一緒にいたいって願った。それが罪なのかな……あの時に願わなければテッドは、いやそれよりも水の神殿に行かなければ良かったのか？」

「子供に手を触れなかったと寂しそうにする顔が強烈に印象深かった。そういや昨日か、手を触れたのは。ずいぶんと昔に思えるぜ」

レオンはふいに立ち止まり、息を飲み込んだ。風が森の腐敗臭を連れてくるせいでひどいにおいが一瞬して人差し指で鼻を擦った。

「水の神殿へ行った時に見たウォーラムには焦ったが何とか守らないうって思った。フランは何て思った？ なぁフラン……何て思ったんだ？」

「そういえばフランは何も言ってくれない。俺に気を使っているのだろうか。第三の門をくぐった時も何も言わずに行ってしまった」

「俺だけが置いて行かれて……あの馬も精霊も別世界でさ、とにかく一人になりたくなかった。精霊の力がもらえて正直ホツとしたんだ」

「別れだと思ったがどうやら違うらしい。親方の様子が変わったぜ？ でも深く聞かないようにした。俺は一人じゃないって安心していただけから気にならなかった。その時は何も考えたくなかったんだ」

「……船の様子は？ まるつきり憶えてないぜ。歓迎していたのかすら疎ましく思っていたのか、どうだったんだろう？」

「あの火山の帰り道の船の様子だとテッドが全てを説得してくれたいたのかな？ テッド……兄貴……」

「あんまり話す機会が無かったな。特にフランがいてからは疎遠に

なっていた。俺は離れたくないって気持ちを察して離れていたのかな？ 今になつては答えも聞けないぜ」

行き止まりになる。頭上を見上げるとそこへ魔法石の光が点々と輝いているのが見えた。段々にデッパリがあつてそこに掴まって登るしかない。

「火山の街でテッドも来た。火の精霊を呼ぶのに強い力が必要だったのは後でわかった。それがどうなるのかも親方は知っていた。テッドも知っていたんだろうな」

「フランはテッドのことを気にしていた。それが嫌だった。独占欲つていうのかな、あの時は案内人も嫌だった。だから少し離れてついていった」

「そつからはあんまり記憶にない。剣を交えるほどにテッドの心までも見えて、ぐちゃぐちゃだった。自分の思いが何なのか、自分とは何なのかつて」

「でもテッドは……母親を思う気持ちが強かった。それは痛いほどわかる。あ、フランは……フランも心が見えていたの」

横からの風が吹き抜ける。とつさにデッパリに掴まって我慢するが、横から吹き付ける風に身体を奪われそうになるのを必死に堪えるレオンが一気に次の段差へと身を押し込んだ。

「風か……風が強いぜ。何を考えたっけ？ 思い出せない」

「またごまかそうとした。俺は嘘をついた。俺しかないのにしつかりしてくれよ」

「テッドは満たされていた。それはわかる。最後にちらつとフランを見て何かを悟った。いや俺らを見たのかな？」

「ズルいぜ……俺だけがわからなくてテッドは全てわかった風な顔をしている」

「今でも死んだなんて思えないぜ。どうせまた帰ってくるんだろう？　なあ……そうだろう？」

「親方とテッドは何を話していたんだ？　ミレイも知っていた。どうして隠すんだろうな。知れば怒鳴るからか？　それが子供だって言うのか？　だったら黙っていればよかったのか？」

レオンは手をあげて風の流れを確認するようにして上へ急いだ。指先に風が触れると呼吸を置いて一気に登るようにした。

「テッドの代わりなんてなれねえよ。俺に言われたってどうしようもないぜ。混乱しているのは俺も同じだ」

「子供じゃないって言いながらその言葉に逃げようとしている。情けない。あの時、フランに言えば良かったのかな？　フランもバカじゃない。知っていたのに黙っていられたのをどう思っていたんだらうな？」

「億劫になった。フランのこともうんざりし始めた時だ。心が冷めてフランを遠くに感じた。いや遠くにしたのは俺だろうか？」

「今は会いたいって思っているのか……わからないぜ。でもこの街にいてから楽しそうだったな。あんなに笑っているフランもはじめて見た」

「それを奪ったのは親方……？　どうして何も言ってくれないんだ」
「城へ来て何かを思い出したフランを遠くに感じた。いやもう全てを忘れたかった。フランを手放して一人になりたいって思った。一緒にいたいと願った心は消えてしまった」

消えた、と認めてからフランの顔を思い出した。いつも不安げな顔をしているが、目が合うとつとめて明るく振舞っていた。

デッパリを掴む手に力を入れ過ぎて腕が痛い。肩にも痛みが走ってきてもう片方の手で肩を揉んだ。

「正直になると俺は何もかもから逃げたいと思っている。嘘をつけば逃げられる気がした。少なくとも物事から目を背けることが出来る」

「それでさっぱりだ。何もかも無くて……それでどうなる？ フラン……いなくなったら寂しいぜ」

「一人は嫌だ。また一人になるのは嫌だ。フランがいると一人じゃないって思える。すぐるように握る手が震えているのは俺の方だ」
「エレンやノアール。世界なんてどうでもいいじゃねえか。精霊なんてどうでもいいぜ」

「失うのが怖かった。力が暴走するから嘘をついたんじゃない。俺はフランを失いたくないから嘘をついた。信じてなかったのかな……信じるのって難しいぜ」

「だってさ、全てを委ねて拒絶されたらどうすりゃいい？ 俺は自信が無かった」

「俺は自分のことしか考えていない。だからテッドは死んだ。親方のせいでもフランのせいでもない。そう、テッドは死んだんだな……」

「……」

レオンの手が止まる。

頭の中がごちゃごちゃしてきて何も考えられなくなる。熱っぽくなる頭に散らばる思い出が互いに衝突して思考を押し出そうとする。

「……」

いつの間にか登りきったようで光が漏れてくる。頭上の光へ振り返る視線の先に魔法石の光ではない光が見えた。おそらくあれが祭壇の間だ。

頭の中はまるつきり空にしてただ光へと這い上がるレオンの手が祭壇の間に入った。

「レオンさん……」

山肌の割れ目から自然の光が漏れて室内には充分の明るさがあった。その隅にあった穴から這い上がって姿を見せたレオンの名前を小さな声で呼んだ。

フランがいるのは正方形の数センチの低い段差の上。特別な装飾もないが祭壇だとわかったのはその頭上にエメラルドの精霊の姿が見えたからだ。

「フラン……」

「……来ないでください」

「悪いな、それは聞けないぜ」

レオンは優しい口調でそう言って歩き始める。

「来ないでッ！！」

叫ぶ声が室内に反響する。割れ目から降り注ぐ太陽の光がまだら模様を作り、ちょうど表情を隠す場所で立ち止まった。眩しい光に目を細めてレオンは笑った。

「眩しいぜ。少し前に行つていいか？」

「……」

「二歩だけだ」

充分の間を置いてから二歩進んで立ち止まる。フランは変わらずにかたい表情を浮かべている。その手にはエメラルドのドレスを着た小さな精霊がいてフランの丸い輪郭を見上げていた。

「俺は色々考えた。フランに何を言おうってさ」

「何も言わないでください」

「黙っていたことも謝りたい。知っていたんだろう？」

「……」

「火の精霊の処で共鳴した時にテッドの心が流れ込んできた。たぶん、テッドにも俺の心が流れてきていると思う。だとしたら当然フランにも見えたんだろう？」

「……はい。夢だと思うようにしました。そう信じたかった」

「やっぱりそうか。知らないふりをして待っていていたんだな？」

「俺が言うのを」

「……」

フランは黙ってうなずいた。

「膨大な怒りや妬みが奔流してくるのが怖かった。私はそれに触れるのが怖かった」

「責めているんじゃないぜ」

「責めください……船でも知らないふりをしてくれる優しさが辛かった。怒鳴って欲しかったッ」

「……」

「どうして何も言ってくれないんですかッ。私はその優しさに甘えてしまうッ!!!」

「優しいんじゃないんだ」

「え……？」

「違うんだ。俺は認めるのが怖かった。テッドは死んでないって思いたかった。そう言えば少し気が楽になれた」

レオンは胸に詰まっていたものを一気に吐きだしたせいでかなり大声になった。フランが怯えて身を縮めたことでハッと気付いて声を落とす。

「いつもそうだ。火の精霊の時でも俺は信じたくなかった。テッドは無上の愛をくれる人だと甘えていたからどうすりゃいいかわからなかった」

「レオンさんは違うッ」

「違うないさ。フランが怖がったのも俺が怖がっていたからさ。受け入れられなかったのも俺が受け入れられなかったからそれが共鳴してフランもそう思うようになった」

「辞めてください……また自分のせいだって言って私を庇おうとする」

「庇う？」

「……私はレオンさんの母親の代わりなんかじゃありません」

「母親に面影を重ねていたってのも否定しないぜ」

フランはその言葉に目を伏せた。妙に開いた間にレオンの胸はざわついた。このまま消えてしまっうんじゃないかっていう儚さを包みこむように慎重にそれでいて丁寧に伝わる言葉を探した。

「はじめて会った塔で扉が開いた時にフランの顔見た時は驚いたぜ。本当に時間が止まった感覚と時間がまた動きだした感覚が同時にあったぜ」

「まだ少ししか経っていませんから……憶えています」

「子供の時に会ったきりだ。俺は嬉しくてさ、すぐにでも触れたかった。城と時計台は遠すぎるぜ」

「それに寒いです」

「ああ寒かったな。ハハハ。そう寒いんだ」

照れるように笑うレオンにつられてほんの少し笑みが漏れるフランは奥歯をグツと噛んで口元を尖らせた。

「それに高い。あんな位置から思いつきり飛ぶなんてすごいお姫様だっと思ってたぜ」

「あれは勇者様がいたから……絶対に受け止めてくれると思いましたが」

「ああ俺が知っている勇者だっけって全てを受け止めてくれる深い優しさがあったぜ。俺はその真似を出来たのかな？」

脳裏に浮かぶのはいつもの勇者役のテッド。レオンは仮面越しにその姿を見つめていた。幕が下りて光が消えるとすぐに近づいてきて良かったぜ、と言って仮面を叩いて笑うんだ。

「テッドならうまく伝えられた。テッドが迎えに行っていればこんなことにはならなかった。そう思う自分が情けなくてさ」

「レオン……さん……」

「でもダメなんだ。俺じゃなきゃダメなんだ。フランの傍にいるのは俺であって欲しいって願うのはわがままだってわかっているぜ。その二つの思いが迷わせたんだ」

「……」

「自信が無かったんだ。俺は何度もフランを守るって言った。それは言わなきゃ自分に押しつぶされそうだったからだ。弱くて情けない勇者様でごめんな」

「そんなことはありません」

「アルドリアみたいに強ければフランもこんなにも辛い思いをしなくていい。不安に思う何もかもから守ることが出来る」

言えば言うほどにフランの顔が曇っていくのがわかる。だが、レ

オンは最後まで言おうと決めた。

「……俺は弱い。すぐに逃げたくなる。責任つてのはめんどくせえよな？」

「めんどくさいですか？」

「ああ。メモリーストーンでも見たあの光景。全員が俺に責任を押し付けてくるから嫌で嫌で投げ出したくなった。どうして俺がって」「ごめんなさい」

「でもそれは俺が望んだことだったんだ。俺はフランの傍にいてフランを守りたいって思った。船の皆のことともそうさ、船の皆を守りたいとも思った。自信がないって逃げようとしていたのがバレルのが嫌だった」

「……」

「俺は認めるのが怖かった。認めて弱い自分が見つかって人が離れていくのが怖かった」

「……」

「でもそれじゃダメだって思ったから、変わりたいって思った。時間にかかるかもしれないが、そんな俺で良かったら一緒にいてくれよ」

言い終えた後の沈黙が苦しい。

「……チャンスが欲しい。答えは一人で決めようぜ。バツ八でもリグルでも他の選択肢だってたくさんある」

何も答えないフランは涙を湛えて顔を歪ませる。その複雑な顔を見て不安だけが募っていく。

「ありがとうございます」

「フランッ」

「レオンさん、それが聞けただけで私は嬉しかった。来てくれてありがとうございました」

「フラン……？　おい！　フランッ」

すっつと息をゆっくりと吸って無理やりに笑顔を見せるフランの頬に涙が流れた。

「フラン様。それでは行きましょうか」
「はい」

背後から闇がすっつと現れてフランを抱きかかえる。黒いスーツの男だ。

「おい！！　フランを離せッ」

レオンは剣を抜いて体勢を低くした。

「離せだと？　小僧……調子に乗るなよ」

スーツの男がそう言って手を払うと周囲に細長い影が伸び続けている。水の神殿で見た影だ。

「辞めて下さい。ロウグ……闇を戻してください」

「クッ」

「お願いです」

「……仰せのままに」

ロウグと呼ばれたスーツの男が握り拳を作りながら手を戻すと影も周囲の闇に吸い込まれて消えた。

「これはどうなっているんだ……フランツ？」

「レオンさんも剣を戻してください」

「説明してくれよ」

「レオンさん……レオンさんには関係のないことですから」

「ッ」

フランはそう言っただけで精霊を乗せた掌を水平に差し出した。その上で不思議な顔をしている精霊がフランとレオンの顔を交互に見た。

レオンの頭の中に住んでいる火の精霊と水の精霊が姿を見せるとハッと驚いた顔をしてフランへ「ふー、とあいさつをして仲間の元へとゆったりと飛んでいく。レオンの視線とフランの視線を結ぶ中間で四人の精霊は手を取り合っただけで再会を喜んだ。

「名前はマリナです。少し臆病な子ですが、きっとレオンさんを気に入ってくれるはず」

「何だよこりヤツ。俺に関係ないって言いながら精霊だけを託すなんてどういうことだよ」

「……これでいいんです」

「わからねえぜ。フランツ全然わかんねえぜ」

レオンは構えた剣をロウグの腕を狙って突き刺そうと走る。精霊達は気迫に押されて散開していく。

「ッ」

二人の前にあった透明な壁に阻まれて剣が折れた。剣先が勢いよく回転し、地面の割れ目に突き刺さる。

「レオンさん、精霊をお願いしますね」

「それではまいりますよ」

「はい」

「待てッ！！ まだ話が残っているぜ！！ 待てっつてんだッ」

レオンは剣を投げ捨てて素手で透明の壁を殴ったが、ビクともしない。

「何があつたんだッ何を言われたんだッ」

ドンドン、と壁を叩き続けるレオンの表情が見る間に歪んでいく。怒りにも悲しみにも嘆きにも戸惑いにも見える複雑な表情でフランの名を呼んだ。

「……辞めてください。レオンさん辞めて」

「辞めるかッ俺は守るって決めたんだぜ。どう考えてもどう見てもおかしいってことくらいはわかるぜ」

「お願いします。辞めてください」

「俺も話したんだ。フランも話してくれ。チャンスを与えたんだろう？ アポリの陣宮はそういう話だろう？」

「……」

「トランスッ？！ そうだ。トランスさせてくれよ。こんな壁くらいぶっ壊して助けることが出来るぜ」

「辞めてください！！ 行かせて下さい」

ドン、とその言葉を拒絶するように思いっきり壁を殴りつけた。

「行かせられるかよ。そんな辛い顔をしたフランを放っておけるかッ」

ロウグと呼ばれた男が手荒い真似をお許しください、と言った薄

い唇の動きが見えた。ざわめく胸に感情が追いついてこない。鼓動に押し潰されて何も感じないままにロウグとフランは闇に飲まれて消えてしまった。

別れの際に見せたフランの顔はどんな顔をしていたっけ？ 数秒しか経っていないのにまるで憶えていない。レオンは膝から崩れて座り込んでしまった。様子を頭上で見ていた精霊達も互いに寄り合っつてレオンへと降りてくる。

「みゅー」

「くーくー」

「ふー」

三つの撫で声がレオンを慰めているのがわかる。レオンは祭壇に額を押し当てて悔しさに奥歯を噛んだ。

「……もう少しだけこのままにさせておいてくれ」

と言って聞こえたのかわからないが、しばらくの間、精霊はなくことを辞めて黙ってくれた。

兆し

「さようですか」

全てのことを聞き終えて元大臣はそうとだけ答えた周りを精霊達がふらふらと飛んで、場の空気にそぐわないのんびりとした姿を見せてくれて少しは気を楽にしてくれている。

「ノアールへの報告は私に任せていただきますしよ。レオンさんはいつでも戻られますように板は整備させております」

「……ああ。それと頼みがある」

「頼みですか？」

「ああ。剣を貸してくれ」

「剣を？ エレンへ行かれるおつもりですかッ？！ 剣だけで戦うなんて無謀だ」

「違う。俺が戦うのは……戦うのかもわからないが、剣が欲しい」

レオンがまるで戦いたくないように言うので元大臣は困り果てたが、しばらく考えて言われた通りに剣も用意すると約束をした。

「あんまり思いつめないでいただきたい。お気持ちわかります。

私も陛下を失った身。何も出来ずにいた歯がゆさは知っておりますゆえ」

「俺は何も出来なかったんじゃないぜ。何もしなかったんだ」

「いいえレオンさんは充分にやってくれました。だからこそ、リイザ様はあなたに後押しをしてもらいたかったのでしよう」

「後押し？」

「はい。何もかもをリイザ様は知っていたのならば、そのメモリーストーンが落ちたのは偶然ではありません」

「ああおそらく口ウグってやるうが」
「違います」

ふっと浮かびあがろうとした感情に蓋をするように強く否定する元大臣。レオンはようやく顔をあげてその言葉の意味を待った。

「リイザ様は自ら落としたのです」

「どうして？」

「知りたかったからです。あなたの気持ちを」

「俺の気持ち……？」

「はい。レオンさんの気持ちを知って、もしも自分のことを本当に思ってくれているのならばそれだけを胸に去るおつもりだったのでしょうか」

「去る？ どうして？」

「優しいお方ですから。自分よりも他人のことを先に考えてしまう。船に乗られている人々を守るためにも自分が去ってエレンへ戻ることにしたのでしょう」

「俺にはどうしてもフランが危ない力を持っているなんて信じられないぜ」

「精霊の力はもろ刃の剣。全てを守る力でもあり、同時に全てを壊す力でもあります。テッドさんの一件もあります。どうしても悪い方向へと考えてしまったのでしょう」

「あれはフランのせいなんかじゃないぜ」

「……わかっております。そしてあなたのせいでもないこともわかっております」

元大臣は優しくうなずくとレオンはいたたまれない気持ちになる。

「では、用意いたしましょう」

黙っていると元大臣はすうーっと立ち上がり、メイドを呼びつけて板と剣を持ってくる段取りを整えるように指示する。

「見送りはいいぜ」

「いいえ。私の仕事ですから最後まで同行させていただきます」

「……風を受けれる場所へはどう行けばいい？」

「こちらに」

屋敷を出ると老齡の兵士がいた。

板を脇に抱えて剣を腰の鞘におさめたレオンは一人になりたかったが、老齡の兵士は有無を言わさない様子で案内をすると言ったのに負けて案内を頼んだ。

二人は壊れた風車の真下にある城壁の隅に設置されたエレベーターに向かい歩き続ける。

「聞かないのか？」

「何を、ですか？」

「……」

「もしもリイザ様のことならば答えは 『聞きません』 です」

「だったらどうして案内を？」

「さきほども言いましたが、それがお仕事ですので」

老齡の兵士はキツパリと言うなり振り返ることも無かった。ただレオンの三步前を黙って歩いている。

カラカラと回る風車を見上げて目を細めるレオン。居心地の悪いだけの時間が流れる。フランもこんな気持ちだったのだろうか、と

ふいに思つて考えるのを辞めようと頭を振つた。

「少し揺れますが我慢してください」

エレベーターへと辿りつくなりそう言つて滑車の鎖を強く引つ張り強度を確認する。エレベーターは木製の板があつて二人が並んで乗るには充分の広さだった。その四方に膝くらいの低い柵があつてそれをひよいと乗り越えるように手を振つて指示された。

不安になるほど脆い造りに感じるレオンへと座つてくださいと老齡の兵士が言つた。

強度の確認を終えて自らも乗り込み、四角に垂らされた鎖を内側から引つ張り確認した後に老齡の兵士は座つて城壁の窪みに設置されてあつたレバーをおろすと滑車から回る音がして、ややあつてからゆつくりとお尻が浮き始める。

「私には妻がいます」

「聞いたよ」

「妻と付き合えたのは六回目の告白の後でした」

「……」

「一回目は即答で拒否されました。三回目でもようやく少し考える間があつて五回目です。何回言うの？」

「……ふられたのか？ 俺は」

「それはわかりませんが、ただ言えるのは何度でもチャンスはあるということですよ。当たつて砕けるという言葉はいい言葉ですな」

老齡の兵士は笑顔を見せて朗らかに笑つた。レオンは目を背けて黙つてしまふ。からからと回る滑車の音がうるさくて助かつた。足元を見るとまだ屋敷の二階よりも低い位置だ。

「女性というのは時として人を試し、人に愛されたいと願う生き物

です。それならば男はそれ以上に愛する生き物になるべきなのです」
「わからないぜ」

「拒絶されようが、どっか行けと罵られようが、嫌われるのはちょっと違いますが……」

「邪険に扱われようがってことか？」

「そうです。例え何があるつと傍にいて例え何があるつと守ると信じてもらうには多くの時間と乗り越えなければならぬことがあります」

老齢の兵士が目を閉じて丸い輪郭を手で擦りながら大きくうなずいた。

「……して、好きだとはおっしゃいましたか？」

「またいきなり何だよ」

「一緒にいよう。守りたいだけでは足りないのです。何故守りたいのか、を女性は知りたいと願うものがあります」

「……」

「魔法の言葉。これで私は結婚することが出来ました」

ニコツとほほ笑い、何かを思い出すように目を細める老齢の兵士は手を離して頬を赤らめる。

「よくわからないぜ」

「私にもよくわかりませんが、あなたとリイザ様を見ているとどうしても世話を焼きたくありません。互いのことを考えすぎて大切な何かがすっぽりと抜けてしまっているのです」

「大切な何か？」

「自分の気持ちです。あなた方は自分の気持ちを言っていない。それでは伝えたいことは伝わりませんよ」

「伝えたいこと……か」

「はい。考える時間はあります。もう一度、会えるチャンスも必ずあります。その時はどうかこの言葉は忘れないようにしてください」

そう言い終わるとちょうどエレベーターは城壁の上へと辿りついた。乱暴に止まるエレベーターに風車が回る音がうるさくてかなわない。

「案内出来るのはここまでです。ここからは板へ乗り下さい」

レオンは板を地面と水平に置いて丸い装置の部分にメモリーストーンを差しこんだ。老齢の兵士の肩を借りて板へ乗る。

「それではグッドラック」

板の上で体勢を整えているといきなり老齢の兵士はそう言って板の尻を思いっきり蹴っ飛ばした。

シャガール

貿易拠点として栄えている街。近隣の多くの労働者が押し寄せて急速に発展したことから多くの民族で形成される。

内陸に湾曲した浜辺に沿うようにホテルが並んでいて世間ではリゾート地として利用されることが多い。シアタールもホテルからの依頼で演劇を行うこともあり、何度も訪れている。

リゾート地と隔離されるように漁港があってその一部に格納庫もあった。その港口で開かれている市場は昼夜問わず盛んだった。

レオンが着いたのは夕暮れ前。

狭いスペースに詰め込まれたテント群とその隙間をぎゅうぎゅうと身体をねじ込みながら移動する人々の頭上を越えるほどの風の勢いもないことから入口の手前で板を降りた。

「くーくー」

「ふー」

「みゅーみゅー」

精霊もくたびれた様子で何かを言って姿を消した。頭の中で眠ったのがわかる。不思議な感覚だが悪い気はしない。この精霊はフランとの唯一の繋がりです。フランの意識がある時は姿を現して意識がない時は消える。

「眠ったのか？ フラン」

優しくそう問いかけるがもちろん、返事はない。

レオンは板を脇に抱えて漁港の中へと足を進めた。夕暮時なのに人が減る気配はなく、むしろ人が集まってきたりとさえ思える。

格納庫へ向かうルートは二つある。一つは真っ直ぐに市場の間を抜けて進む、二つ目は迂回して建物の裏を通り市場を大回りする道。レオンは板を持っていることから後者を選んで迂回道へと入る。市場を通る時に荷物を持っているとストリートチルドレンに盗まれることが多いので、市場を通る人間は買った物あるいは持っていた物を頭上へ持ち上げて運ぶ姿がこの街のイメージとして定着している。迂回道には街灯が多くあったが人の気配はない。舗装もされてあるがやはりこちらの道は不人気だった。市場の半径は100メートル程度のこともあり、少々の窮屈は我慢して進む人の方が多いせい。この道は常に閑散としていた。

「……」

静かだ。思えば一人になることも無かった。常にフランがいて矢継ぎ早に質問をされていた。今ならば街を説明していることだろう。きつと何かの舞台の話になって観光をしたがるに違いない。

そうなればきつと無理をしても市場の中を通った。この市場はヤリハンがキキをさらうシーンの場所として有名だ。

フランと会ってからまだ数日。長いような短いような数日を過ごただけ。たった数日。それなのに。

「考えるのはよそう。だが……」

とつさに剣の柄を指先で触れた。立派な装飾もないシンプルで身軽な剣。体格が小さな人間でも扱えるような工夫がされてある一点もの。主に獣を狩る用に使われる剣。

考えなくてはならないことは他にあった。自分でも迷っていることもあり、遠回りの道を選んだ。

避けられるならば避ける道を選びたいというのが本音だったが、レオン自身知らなくてはならない気がしている。過去の話聞いてどうなる？ ほらまた迷いがうまれた、と自分自身を自嘲する。

視界の隅で格納庫の一部が建物の奥に見えたが、迷いは続いていた。潮風があつて肌に吸いつくせいで身体が重くなる。

「レオン？」

「ただいま。あのさ、親方は何処にいるんだ？」

「親方？ あ、確か甲板にいたと思うけど」

「ありがとう」

ちょうど入れ替わりに入口から出てきた厨房担当のポアップがレオンに何か言おうとしたがするり、とかわしてタラップを駆けあが

る。その後ろ姿にしばらく目を止めていたがそうだった、と買い出しを思い出して市場の方向へ歩き始めた。

格納庫の中は薄暗く、天井にあった照明の光もわずかにしか届いていない。そのわりに整備する機械音がうるさくてかなわないと外の酒場へと逃げる船員が多いので船室は空っぽだった。

毎回、この街へ来るとそうなることは船員ならば誰もが知っている。例外なく、レオンも親方も。

「待っていたぞ」

「ああ……俺も聞きたいことがある」

甲板に辿りついた時、親方は振り返らずにそう言った。甲板から見える格納庫の天井や壁はどうも汚くて好きになれないな、とふいにシーンに合わない胸中の台詞がずっと疑問だったが、今ならわかる気がする。きっとそれは懐かしいって意味だと思う。

「あの子はどうした？」

「エレンへ行った。ノアールにも報告をして俺はフランを追いかけるつもりだ」

「そうか……」

静かにうなづく親方の手元にずっしりと重い双刃の斧が見えた。わずかな光を弾いて鈍く輝いている。

「それならば任務は終わりだ。ご苦労」

「……ああ。終わったぜ。だが、そんな話をしたくてここへ来たわけじゃないんだぜ？」

「何も話すことはない」

「いつもそうだ。まあ知ってもどうすることも出来ないってのはわかっているんだぜ」

「ならば休め。出発は明日の朝だ。積み込み作業も残っている」

やれやれと肩をすくめ、つとめていつも通りを装うレオンを冷たくあしらう親方がようやく振り返った。

目が合った。それだけだ。それだけなのに動けなくなった。色々考えて先手を取るために襲いかかるうとかこうしようとか考えていたものが全て吹っ飛んだ。

「俺はフランを追いかけるぜ。だから聞きたいことがある」

「そうか」

「そうか……じゃねえぜ。俺は聞きたいことがあるってんだぜッ！

！」

レオンは勢いに任せて剣を抜いて板を背後へ投げ捨てた。両手で剣を構えたが、腕が震えている。

「だったら……船のルールで決めさせてもらっぜ」

そう言ってレオンは親方へと駆けだした。

旅路

親方への意見に異議を唱える場合、親方へ挑戦し勝てば従わせることが出来るというもので古くは海賊時代から行われている伝統を多くの空を飛ぶ船も引き継いだ経緯がある。船長の交代の際にも行われる正式なものであれば船員全ての観客が必要となるが、こういった非公式のものであれば観客は不要だった。

「負ければ去らねばならないッ！　それでも剣を向ける意味があるのかッ」

「クッ……あるぜ。俺はどうしても知らなきゃならないんだ」

挑戦の代償はただ一つ。負ければ船を去るというものだった。それはたとえ非公式であろうと船の長に剣を向けたからには離縁を覚悟するものだった。

親方は60センチ以上の半円状の刃が二枚ついてある斧を軽々と振るってレオンはそれを剣の腹で受け流して距離を保つことしか出来ずにいた。

「知ってどうなるッ」

「それは　ッ」

迷った時、一瞬の隙をついてもう片方の腕が視界の外からレオンの側頭部を殴った。グラリと揺れる視界に斧をふりあげる姿が見えてとっさに避けようとしたが、身体が動かない。

「ぬっ」

視界が傾いて甲板に頬をぶつけた冷たさで目が覚めた。レオンは身体を起こして剣を構えると親方の周りに精霊達がいて、それぞれの属性魔法で攻撃を遮ってくれていた。

フランが守ってくれているのか？ と脳裏に過った直後、親方が太腕で精霊達を一気に押し払った。吹っ飛ばされる精霊が甲板に投げ出される。

「今だッ」

精霊が作ってくれた隙を狙って剣を真っ直ぐに突きだす。精霊を払った腕が伸びきっている根元、右肩に狙いを定めた。

「ッ」

だが、足が言うことを聞いてくれない。気持ちだけが前へと進んでいるが、実際の自分はその場で座り込んでしまっていた。殴られた側頭部に手を当てて回復を待っていると親方がゆったりとした足取りで向かってくる。

「親方……何でそんなに隠そうとするってんだ？ やっぱり親方がフランをさらったのか？」

「知りたければ倒してみせろ」

「何だよッその答えはッ」

「ここでは俺がルールだ。それに従えないものは消える」

親方は目の前で立ち止まり、斧を払った。レオンは座った姿勢のままに剣の腹で斧を受けたが衝撃に負けて身体ごと吹き飛ばされる。全身が仄かに暖かな痛みで包まれている。ギュッと剣の柄を握っても感覚がわからない。レオンはねじるように剣の柄を持って不安は消えなかった。

相手のゆつたりとした足取りに合わせるように呼吸をしてタイミングを待った。

「ハアハア……勝てる。俺は勝てる。勝たなきゃダメなんだ」

自分に言い聞かせる言葉が次第に胸中から口内へとあがってくる。やがて声に出して勝ってやると叫んだ声が格納庫中に響く工業用機械の轟音に飲み込まれた。

音が止まった。

レオンはそれを合図に自ら走りだして親方へと攻撃を仕掛ける。膂力で足りない分を速度と手数でカバーする。

「どうして親方はウエルスタンへ来なかったんだ？ 来れなかったんだろう？」

「俺が何をしようと勝手だ。俺の船」

「おかしいぜ。あんたらしくくない」

レオンの連撃を斧の腹で平然と受け止める親方のもう片方の腕が後方へ下がったのを見てレオンは一気に距離を離して逃げる。

握った拳を開いて後方へ下げた肘も戻して仁王立ちの体勢になる親方にはまだ余裕があった。一方、レオンは肩で息をして今でも倒れそうなほど疲弊している。

「もう一度だけ言おう。出発の用意がある。もう休め」

「休めばこれも夢だって許してくれるってか？ 俺はもう決めただ」

「……そうか」

「正直言つと戦いたくもないし、この船にずっといたい。だがそれじゃダメなんだってッ」

レオンは怒りに似た感情を何て呼べばわからずに戸惑った。

「うまく言葉に出来ないぜ。だが……それでも……今のままじゃダメなんだ」

「それを知ったところで何が変わるッ?! 何が出来るッ」

「わからないぜ。親方がフランをさらったとしても何も変わらない」

「ならばなぜ戦うッなぜ知ろうとするッ」

「知りたいんだ。俺は今まで何も知ろうとしなかった。知るのが怖かった。何もかもをごまかせばうまくやっていけると思っていた」

「この船はうまくいっている。違うか？」

「ああ。うまくいっている。俺もここでずっと暮らしたいぜ。ただ……ただ……」

言葉が詰まった。格納庫の騒がしさが続いている。親方がグツと斧を握りなおした手に目がいく。

「フランに出会えたから」

「わがママを言う」

「ああわがママだって知っているぜ。フランとも離れたくないし、この船にもいたい。そのためには壁を壊さないと帰ってこれないだろう?」

「それならば帰ってくる必要はない。お前も去れ、レオンッ」

親方がはじめて走った。

レオンは窮屈に身体を小さくして剣を構えた。もう長くは戦えないことは自分自身で感じている。一撃、まぐれでいいから一撃をくれ、と願った。

「ッ」

二人の身体が交差した時、レオンの手からは剣が弾かれて親方の手が見えなくなり、おちに練り込んだ。

見慣れた天井とレオンの顔との間に精霊達がまた喧嘩をしているのがおかしくてなぜか笑ってしまった。

「頭でも打ったか？」

「いいや。わからないけど無性に嬉しいんだぜ」

上半身をゆつくりと起こすと白衣を着たスイニーがカルテを整理している最中だった。角にある四角い机には段ボールが二つ並べられていてその間にカルテが積み重ねられている。それを仕分けして右と左に分けている後ろ姿に哀愁がある。

「やっぱり誰か出て行ったのか？」

「誰も出て行かなかった。外で病院へ行く時に引き継げるように持病やアレルギーがあるモノと健康のものを分けておこうと思ってな」
「……誰もか。そりゃいい。フランがいればもつと良かったのにな」
「それは私には何とも言えん。だが、少なくとも前よりは理解を得られたということだろう」

「一歩前進したんだな。それで充分だ」

レオンは自分のことのように喜び、また笑みを広げた。精霊は喧嘩をする手を止めて全員がスイニーの背後へと滑っていく。興味を引いたのは手元にあったピーカーになみなみと注がれている培養液だった。

これは酒だ、とスイニーが言っても視線はそこから離れようとする。しない。

「これで何だかスッキリしたぜ。親方からは何も聞けなかったのが心残りだが……気分は悪くないぜ」

「黙っておけば出て行く必要はない。この船には三人しか残っていない」

「ありがとう。でも俺は出て行くって決めたんだ」

「行くあてはあるのか？」

「ああ……フランを追いかけるぜ」

「エレンへ行こうと言うのか？ 無謀だ」

「無謀なんてわかってはいるぜ。でも俺は行くって決めた」

あきれた様子のスイニーは整理を中断させて脇にある樽状の装置の蓋を開けて薬品棚に置かれてあった何かを乱雑に投げ入れた。精霊達の興味もその中へ移り、覗きこもうとするがマリナだけは少し離れた位置で見守っている。

蓋を閉めるぞ、と言ってから蓋をゆっくりと閉めて装置の胸元を指先で押すとボタン類が収納されているボードが出てきた。スイニーは入力してから左端にあるボタンを押すと装置はガタガタと揺れて精霊達は一気に逃げてレオンの元へと戻ってくる。

「エレンへは内陸の海岸沿いを通って行けば潮風に押されて到着するだろう……」

「どのくらいかかる？」

「さあ……数日では辿りつけるかどうか。風によるとしか言えん。だが早くつこうとすれば強風にあおられて事故を起こす可能性もある」

「数日か……それが早いのか、遅いのか。フランは大丈夫なのか、つとわからないことだらけだぜ」

ベッドから飛び降りて身体の調子を確認するレオン。

「もう行くのか？」

「ああ。今はきつと日の出前だろう？誰も起きていない内に消えてしまおうと思って」

「時間がわかるのか？」

「そのやかましい装置で目が覚めるのはだいたい朝なんだぜ。防音でも振動が聞こえてくる」

「すまんな」

「何、目ざましにちょうどいいぜ」

レオンはそう言ってうるさい室内から出て行こうとした。扉の前に立てかけられてあったメモリストーン付きの板を持ち上げる。

「ユナにいつか返しにくる。壊れたら最新のやつをおごるって言うといってくれ」

「自分で言うことだ」

「……頼んだぜ」

扉を開けてレオンは振り返らずにそう頼んだ。精霊達もレオンの歩みに合わせて動いてくる。みゅーとかくーとかふーとか居心地の良い喧噪に包まりながら外へと向かった。

エレンへ

夜明けなので静かな格納庫の天井には淡い光の電球が数多く並んでいる。工業用機械の音も無く、怒号に似た作業員の会話も聞こえない。

レオンは船室へ続く階段から甲板へ足を置いてからもなかなかタラップを踏んで降りれなかった。親方にも何も聞けずに仲間にも別れを言っていない。それが引きとめる全て。

「何も言わずに出ていくつもり？」

「……ああ」

「帰ってくるの？」

「……」

レオンは振り返り、声の主を見た。ミルク色のカーディガンに腕を通さず羽織っただけのミレイだ。手にはティーを注いだマグを両手ですくうように持って船室へ続く階段の裏にある手すり辺りからこちらへ向かって歩いてくる。

「親方だって本気で出て行けなんて言っていないわよ」

「……だが、船のルールで負けたから戻ってくるとは言えない」

「ハア……どうして兄弟揃って剛情なの？」

「だったら親方を説得して一緒にエレンへフランを迎えに行ってくれって頼むのか？ 無理だ。船の皆を危険な目に合わせるかもしれない」

「だから一人でエレンへ行くの？ 無謀だわ」

「知っているぜ。だが、もう決めただ」

自然と笑顔がこぼれた。ミレイの変わらない姿がふいに嬉しくな

った。

「バカね。エレンの情報も知らずに向かおうってんだから
情報？」

「そう。エレンは封鎖しているわよ」

「封鎖……だが、それでも」

「バカッ！！ エレンの全兵士と戦って勝てるつもりなのッ？ あ
んたはこの船の親方一人さえ倒せないほど弱いだよッ」

「……見ていたのか？」

「いいえ。姿は見えていないわ。ただ連絡管から声が漏れて聞こえ
ていたわ。そして親方があんたを背負っている姿を見て、だいたい
のことは想像出来たわ」

ミレイは激昂し、早口になる。

「ああ。それでも行かなきゃならないんだ」

「行かなくていいの。ウエルスタンであの子と別れたんでしょ？
だったらもう任務は終わりよ。これからはこの船の一員として船
のことを一番に考えなさいよ」

「もう俺は船の人間じゃない」

「親方に負けたから船を出るッて言うの？ そんなの逃げているだ
けじゃ無いッ」

「違うぜ。俺は自分の意思で船から出るんだ」

「あの子のために？」

「……ああ」

レオンはやけに冷静に返事をして大人びた表情を見せる。その白
い輪を持った瞳はミレイの顔をしっかりと見返して受け答えをして
いた。

「その後はどうするの？ 迎えに行つてからどうするつもりなの？ さあ、とかわからないじゃごまかせないからね」

「本当はこの船に戻つて一緒に過ごそうと思つていた。だが、戻れないならフランの見たいツツ言つていた世界を見て回ろうと思つて
いる」

「あの子が嫌だつて言つたらどうするつもり？」

「何度でも会いに行くぜ。それで何度でも気持ち伝える」

「それがあの子にとって……あの子にとって迷惑だつたらどうするの？」

「考えても無かつたぜ。だが、わかるんだ。精霊が教えてくれる」

「話せるの？ 自分勝手な解釈をしているだけでしよう」

「感じるんだ。頭の中で機嫌がいい精霊の心を感じるとフランが笑つているような気がして嬉しいんだ」

「きつと同じ気分だと思つて言いたいの？」

「そうじゃない。俺はそう思つて話をつつて話をフランに伝えたいんだ。そうすればきつとまた笑つてくれると思つていただけだぜ」

妙に清々しい顔をするレオンがふいに笑顔を見せる。

ミレイはその笑顔が不安だった。両手でティーを持つ指が震えてくる。格納庫と海面の隙間から吹き抜ける潮風がカーディガンと長い髪をわずかに揺らした。

「勝手にしなさいよ。もう知らないわ」

「ああ。そうするぜ」

「……そうしなさい」

「ありがとう」

レオンはミレイに感謝の言葉を言つとミレイは黙つてコクン、とうなずいた。彼女なりのエールに励まされた。胸につつかえていた何かが嘘みたいに消えていく。

それ以上は何も言わずにレオンは振り返り、タラップを降りるのをミレイはずっと眺めていた。

朝日が昇りきる前なのに市場には人がいて、港にある漁船には一つ仕事を終えた漁師が今日の収穫を市場へと運んでいる最中だった。

「おやおや、お久しぶりじゃありませんか。レオンさん」

「セイファーか？」

「ええ。今日はおひとりですか？ あのお姫様はいかがなされたのでしょうか？ うふふふ……」

青色の派手な装飾で彩られた特注のスーツで漁師が行き来する港にいたのはずいぶんと不自然で、漁師も横目でセイファーを訝しげに見て通り過ぎていく。その背後にいる珍しく露出が低いアリーデも早朝にはまるで似合わない。

「情報は命なんだろう？ それで何か用か？」

「いえいえそんなつもりは全くありません」

「だったらどうしてここへ？ 待っていたんだらう？」

「いえいえ。私達はエレンへ行こうとしていたのですが、問題がありましたね。立ち往生ってやつですよ。うふふふ……」

「そんなだつて港のそれも漁船の近くにいなかったっていいだらう？」

「

「ええ。ですが、向こうの港で待っておりますとレオンさんが街を出てしまつかと思ひましてね」

そう言つてセイファーはまた含み笑いを浮かべる。訝しげに顔を見ていると扇をぴしゃり、と広げ、顔を隠した。

「……エレンは封鎖しているんだろう？ 聞いているぜ」

「それでもエレンへ向かおうとしているのでしょうか？」

「ああ。フランを迎えに行くんだ」

「うふふふ……いいですね。私は好きですよ、そういうレオンさんは」

「嬉しくないぜ」

少し目線を外してセイファーの背後にいるアリーデを見るとアリーデは相変わらず表情のない瞳で真っ直ぐだけを見つめている。

セイファーは扇をわざと音を立てて閉じ、注目を自分へと戻させた。

「エレンへは行けませんよ。封鎖している理由が理由ですからね」

「理由？」

「お姫様の帰還と歓迎。そして、婚約の式典がありますからね」

「婚約ツ?!」

「おやおや、知らないで行こうとしたのですね。何でも王族とは無関係な人と結婚するとか」

「……」

フランが結婚する？ どういうことだ、と思考が全身を駆け巡り、視線もセイファーの顔に固定される。ただ睨まれたカエルのように黙っていると扇を広げて時を動かす奇術師のような格好のセイファー。

「その式典が終わるまではエレンをあげて祝福するようですから、封鎖ということになります。困りましたね、全く……仕事になりま

せん」

「そうだな」

「そうです。困りましたね、封鎖さえとければいいのですが……たとえば婚約が破たんになるとかね」

「……それが目的か？」

「いいえ。私はそうなればいいな、と願望を言っただけです。目的は他にありませんよ」

「回りくどいぜ。早く話せよ」

「不機嫌そうな顔も……悪くない。本当に退屈しません。うふふふ……」

苛立つレオンを弄ぶセイファア。怒って立ち去ることも出来ないことをわかっていて焦らして含み笑いを浮かべる。いつだってそういう奴だった。

「ノアールの国王から直々に頼まれましたね。お姫様を取り戻してくるようにと。少しすればギルドへと手配も回るでしょう。騒がしくなるのは好きじゃありません」

「ギルドの介入があればまたノアールとエレンが戦争になるぜ」

「ええ。もう精霊を三つも持たれている。四つ目、土の遺跡の精霊を手に入れられると困るのでしょう。そして精霊を手に入れる方法を知っているとノアールは焦っておられる」

「結婚もそれに関係あるような口ぶりだな」

「ええ。水にも火にも風にも必要なものがあり、それぞれをあなたは偶然持っていた。最後の土の遺跡にも必要なものがあります」

「必要なもの？」

「水は流れて火は燃える。風に舞い上がり、やがて土におりる。さあ行きましようか、レオンさん」

「どういうことだ？」

「歩きながら話しましょう」

セイファーが踵を返して自分の船へと歩き始める。少し後ろをレオンが歩いて、そのさらに後ろをアリーデが歩いた。

「本来の順番は火で燃え上がり、風と共に舞い上がり、空の上で水となり、落下し、土となりかたまる」

「……歌みたいだな」

「歌が歴史を伝えるために出来たものですから、当然でしょう。出会う時は激しく愛し合い、時には喧嘩する。しかし風のように舞い上がる時期があつて、やがて冷静に考える時期が来る。やがて地に足をつけて二人で歩くようになる」

「まるで恋人になるまでの経緯みたいだな」

「ロマンな言い方ではありませんね。精霊は互いを結ぶ象徴。それぞれが本音、ということでしょうか？」

「だったら怒っているのか？ 火の精霊がよく喧嘩をしているぜ」

自嘲気味にそう言って、レオンは黙りこむ。

ややあつてセイファーは大きくうなずいた。漁港から離れて、港に並ぶ船の種類が大型へと変わり、装備が充実し始めた。むき出しの大砲を磨く屈強な男に積み荷を乗せる男もいた。

「二人がしようとしなからしているのでしょうか」

「……」

「互いを大切に思いすぎて本音を言えない。まるで子供。うふふふ」

「……」

「悪いな」

「いえいえ。色々な精霊に見えますが、全てはお姫様の意思。離れないのもお姫様の意思であると考えると、素敵なお話。物語なら王子様が悪い魔法使いから救いに行かないとダメですね」

「俺は王子様なんかじゃないぜ」

「残念ながら物語と現実の違いは違います。ただそうだとってもやはり救いに行くでしょう？」

「ああ。俺はフランに伝えたいことがある。まだまだ話したいことだっただけなんだぜ」

「正直なお方。あまりにも真っ直ぐで穢れの無い心。伝わるといいですね。うふふふ……」

大型船が並ぶ港でも異彩を放つ装飾を持ったセイファアの船が視界に入った。その無駄に豪華な船に乗り込む三人はエレンへと向かうこととなった。

ラスラという国

エレンの領土にありながらエレンとも言えない独立小国【ラスラ】の港へと船を停泊させて、作戦を確認したレオン。内部へ入りこむ手筈もすでに整えてあり、ラスラの兵士の格好へと着替えも終わった。城の地図も懐へ入れて馬車に乗り込む。

ラスラから招待された陛下の護衛の一人として潜り込む作戦で、フランを回収する。セイファアの船は沖に停泊しており、レオンの居場所はサーチの専門魔術師であるアリーデが常に追っているの都合はレオンに合わせる事が出来る。

はじめての共同作戦でも無い。腕と度胸とその計画は全て信用している。ただ自分はフランのことだけを考える、と言いつ聞かせるように胸を叩くレオン。

「心配はしておりません」

胸を叩いたのを心配するな、というように聞こえたのか、禿げた頭の小柄な陛下はレオンへ向かってそう言った。

「いやいや緊張しているのさ」

「あなたのような方々でも緊張はしているのですか？ やはり断るべきでしょうか？」

「ウジウジするなよ。ドンと構えてりゃいいじゃねえか。それでも独立国の陛下だろうか？」

「はい。ただ何もないブドウの産地だけですから占領されなかったのでしょうか。農耕者しかおりませんので」

陛下も普段は農業に従事していると笑った。

「セイファールのところとは貿易で知り合ったのか？」

「はい。販売経路やその他全てを任せております。今回の護衛もお願いしました」

ラスラの半分はセイファールのモノということか、とレオンは胸中で呟いた。だが、そのおかげで中へ入ることが出来る。

「任せておいてくれ」

レオンは力強くうなずいて、ヘルメットをかぶった。馬車の外にはフランがいるはずの城が見え始めていたからだだった。

門番が手をあげて馬車を止める。手綱を持つ老齢の男が招待状を手渡すのが小さな窓から見えてレオンはヘルメットを深くかぶりなおした。ゆつくりとした足音が馬車を囲んでいる。

レバーを引いて扉が開かれると険しい顔をした兵士が中に入っここよつとする肩をレオンが押し返す。

「陛下は疲れておられる。招待状の確認が済んだのならばすぐに通してもらいたい」

出来る限り低い声で言うと身をよじって中の陛下の様子を覗きこもうとするが、レオンは身体を使って入口を塞いだ。

「問題はない、ラスラの印鑑もついてある」

招待状を受け取った兵士が今にも剣を抜きそうなほど殺気だつていた兵士の肩に手をやってそう言った。レオンは門番を睨みつけながら馬車の中へと戻る。

馬へ鞭を打つ音が聞こえて、表面を丁寧に研磨され、その上からナシの実を溶かしたものを塗ってコーティングしてある岩が敷き詰めてある上を車輪が通過し、城壁の中へと入る。

厳重な警備。

広場にさえ、人の気配はなく、武器を持った兵士がうろつくと巡回している。

「セイファーさんの言う通り警備を外部の方に頼んで良かった」

さっきの光景で震えていた陛下がため息交じりに言ってレオンの顔を見た。

自分よりも激しい感情にある人を見ると不思議と冷静になる。レオンは冷静そのものだ。窓の外に見えるフランが閉じ込められてあった塔を睨んで、また座り直し腕を組んだ。

「任せてくれ。中へ入れれば一安心だ」

「ええ。いつもは子供達もいて商人達も多く露店を構えています。宿なんかも繁盛してとても楽しい雰囲気でしたね」

「来たことがあるのか？」

「ええ。前に舞台を見に来ました。遠くであまり見えませんでした。が、とても素敵な劇でしたね」

「そうだな」

外の気配に気を配りながら答える。そのあご先あたりに視線を置く陛下から顔を隠すようにあごに手をやる。

他にも多くの馬車があり、石畳の上を歩いてある。広場から螺旋状にゆるやかにおりる道。それにそって渋滞する先に城の入口があ

つて、また門番が招待状を確認している。

「あれはエレンの住民票の確認ですね。付き人の素性を確認しております。ラスラは小さな国ですので、住民票なんてありませんが」「だったらどうやって証明する？」

「言つて説明するしかありませんね。任せて下さい。あなたはロツドランという庭師の二男。無口でウェルスタンからの移民です」「わかった。だが……リアムの瞳の話が聞かれば困ることになるな」

「安心して下さい。ロツドランという男も白い輪を持っておりますからエレンでは悪魔と呼ばれ追い出されて戻れなくなったのを私達が拾いました」

「そうか。良かったぜ」

「はい。この話は知っておる人も多い。これ以上の証拠は無い。セイファーさんはだからあなたを寄越したのでしょう」

陛下はさすがだ、と関心して次第に落ち着きを取り戻してきた様子。子。

カラカラと回る車輪の音を背中に受けて、レオンもロツドラン庭師という言葉を繰り返し憶えようとした。

馬車が止まる。

招待状を手渡す手が見えて、レバーを引いて扉が開いた。今度は陛下ではなく、レオンの方を見て訊ねてくる。

「ラスラから参りました。ロツドラン・リバーです。我が国には住民票と言う制度はございません。何で証明を致しましょうか？」

「ロツドラン……？ お前、もっとこっちへ顔を見せる」

「はい」

レオンはヘルメットを脱いで入口手前まで歩いた。中腰になり、

顔をヌツと出したのをじろじろと見る兵士。

「若いな」

「ええ」

「陛下の護衛をどうしてお前みたいな若者がする？」

「はい。我が国で腕っ節が一番強い人間を決めて、それで参りました」

「ふんッ強いのか？」

「はい」

「そうは見えんがな」

兵士は嘲笑して自らの大柄を見せつけるように胸を張った。

「ラスラに逃げた悪魔……ロッドランか」

その脇にいた兵士があごに手をやって、何かを思い出そうとする。

「おい、お前、こつちを向け」

あごから手を離し、レオンへ命令する兵士。レオンは馬車から降りて兵士の方を向いた。

二人の兵士の胸の位置よりも低いレオンの顔を睨みつけて会話を始めた。

「ロッドランってのは悪魔だな。確か殺人事件の容疑者にもなったことがある」

「確か大柄の男だと聞いているが？」

「ああ。だが、白い輪がある。確かに血縁関係である可能性は高い」

「おう。悪魔が別にいてたまるものか。神聖なエレンの血を踏ませるのも忌々しい」

「そう興奮するな」

「おお……」

「よし、行っていていい。おそらく、嫌がらせで悪魔の子供を寄越してきたんだろう。卑怯なラスラの考えそうなことだ」

レオンはその場でくるり、と踵を返して三つしかない横に長い階段を一步ずつ歩いて馬車の中へと戻った。

兵士も離れて別の門番に手を振ると門扉が開いた。馬車はゆっくりと進んで城の中へと入って行った。

馬の蹄が石畳を叩く音が足から伝わり、気分が悪くなりそうだ。馬車を止めた場所は城に入る扉の前にある広場。舞台を設置し、アルファレスを置ける広さも充分にあったのが、今では馬車で埋まっている。

入口から等間隔に並んである木のオブジェの尻を向けて停車する馬達を繋ぐ男達に嫌がる馬のいななきが響いている。他は人がいるのに静かだった。まるで葬式みたいに黙ってうつむいている人ばかり。

「失礼いたします。ラスラの陛下ですね。案内人のシェドンです」

シェドンと名乗った兵士がレオンと陛下の前で立ち止まり、敬礼をする。客人をもてなす兵士らしく、他の客にも一人ずつ兵士が迎えにきていた。

「式までの時間を過ぎす宿へ頼む」

「かしこまりました」

レオンの言葉に短く返して、踵を返すシエドン。その背後をついて歩く。

シエドンは城の中へ入り、二つに分かれた通路と真っ直ぐに伸びた道の分岐点で立ち止まり、丁寧に回れ右をして右手側の通路を歩いた。

赤い絨毯に豪華な装飾品。花瓶にさされた花は美しい。

「城内の説明を頼む」

「……失礼ですが、理由をお聞かせてもらわねばお答え出来ません」「簡単な退出経路だけでいい。非常事態の時に逃げ場を確保しておきたい」

「はい。この通路の全ては客間です。そして奥には食堂と兵士の宿舎がございます。そちらへ抜けられると裏の港へ続く出口があります」

「わかった。一度、この目で確認したい」

「では参りましょうか」

「いやまずは陛下をお部屋に通しておきたい。それから案内してもらう」

「承知いたしました」

シエドンは歩調を速めようとしたのを辞めて、老齡の陛下の歩みに合わせて歩く。

客間にはおそらく七十ほどの部屋があり、ラスラの陛下の部屋は一番手前の部屋だった。レオンは扉を開けて陛下を中へと誘う。

「それでは確認してまいります。陛下は中でお待ち下さい」

そう言い残して扉を閉めるレオンはシエドンへ連れられて奥の宿

舎の方角へと進んだ。

「式典は何処で行われる？その警備も見ておきたい。お姫様は何処で待機しているかも知っておきたい」

「式典はあちらで見える教会で行われます。お姫様は教会の控室で待つておられます」

部屋が並ぶ扉の隙間に奥へ行ける細い通路があった。そのずいぶん向こうにまた庭が見え、教会らしき建物があった。

「我々は客室までしか行けませんのでこちらの警備を見に行くことは出来ません。申し訳ございません」

「誰ならば行くことが出来る？」

「小隊の隊長クラスであれば可能でしょう」

「それでは宿舎で交代して案内してもらおう」

「今は作戦会議へと出かけております。他は全て教会の警備に回っております」

「……」

「つきました。ここが宿舎になります」

シエドンは手を流して、中へと入るようにながしてくる。レオンは円形の宿舎の中を見渡す。奥に出口が見えて、その前に兵士がたむろしている姿が見える。

「休憩中の兵士は全員があそこです。出口を見張るのも含めておりますから手薄になることはありません。安心をしてください」

壁にかかっている武器や乱雑に置かれた防具を奪って、兵士たちを倒して外へ出る？ 難しいだろう、と思った。

「いかなさいましたか？」

「いいや。ありがとう。これで一つ安心した。部屋へ戻る」

そう言っレオンはラスラの陛下が待つ部屋へと戻ることとした。

「そうそう、式典の時間は？」

「これから明日の正午から開始します」

「そうか。ご苦労様」

部屋の前で敬礼し、また違う客を迎えにいくシェドンを見送った。

決行の夜

ドスン、と倒れる鈍い音が扉の外から聞こえて、扉を開くレオン。通路には花瓶の花を変えるメイドの姿があり、その足元に兵士の姿があつた。扉を開く音にメイドは無関心で花瓶から取り出した昼間の花をカートに乗せて次の花瓶を移し替えるために移動する。

セイファアの仕込んだ人間だ。花瓶に強烈な催眠効果がある花と花瓶の内側にそれを増幅させる魔法石を貼って兵士達を眠らせる。

効果はそれぞれで身体が大きいほど眠りは深く、意識を混濁させる。レオンは昼間の内に調べて置いたフランのいる教会に隣接する花嫁が前夜を過ごす建物へと続く連絡通路を急いだ。

教会は中庭の中央にあり、その周りを黄色い花が咲いている。その花にも細工がしてある。ごく一部だけ催眠効果がある花に植えかえられてある。

「ここにも兵士が……まだいるのか？」

教会の前に兵士が二人倒れている。その少し離れた位置にも一人の兵士がいた。

レオンはその兵士を横目に教会のレオンから見て右側にある方の建物へと走る。

建物はレンガづくりで即席で建てられたにしては頑丈で丁寧に作られてある。その隙間にはセメントとバラバラに刻まれた魔術符が敷き詰められている。花から出る催眠を助長させる魔法の効果も弾かれて、壁の前で小さな火花となって消失している。綺麗な火花が建物のあちこちで散って幻想的な姿に見せてある。

「これかッ」

建物は宿舎に似た円柱の形をしていて、裏側に入口の扉があった。建物の周囲を囲むように鎖が巻きつけられてあり、その中央には魔法で作られた錠が薄白く発光していた。

セイファーが言うには内側から フランの自然に発する魔力 魔法を吸収し、それを魔力源として永続的に防衛魔法を放ち続けているらしい。つまり、フランは自分自身の力で自分自身を閉じ込めていることとなる。

一つ指を触れると防衛魔法が作動し、触れた対象の肉体を破壊する。

「大丈夫……なのか？」

レオンの身体には魔力の資質が無く、身体に宿る精霊の素質だけがあるとセイファーは言った。その素質とはつまりフランの魔力の素質と同等のもので防衛魔法が発動しないと説明を受けたが半信半疑だった。

ためらう手が宙で止まる。もう数十センチ伸ばせば錠を掴むことが出来る。魔法の錠は物理耐性は極端に低く、壊れやすい。軽く引きちぎるだけで壊せるはずだ。

「……時間は無いんだぜ」

覚悟を決めて開けようとした時、頭上で火花が散った。催眠効果を増幅させる魔力を防壁が壊している音と儂い光にまた手が止まった。

レオンは首を振って、喉元に溜まる汗を衣服の袖で拭う。視線を周囲に配らせて警戒しつつ、おそるおそる錠へ手を伸ばす。

扉は大きく無い。2mにも足りない大きさの鉄製の扉で全体に小さな錠が打ちこんであった。その腰辺りに錠が青白い光を放っていた。

息を止めて、錠を掴む。拳の隙間から洩れる青白い光。痛みは無い。息を吐くと同時に錠を引きちぎって後方へ投げ捨てる。

ゴン、と鈍い音をして庭を転がる錠。

「ッ」

その錠が突然、光を長い尾を引いて城の内部へと引っ込んでいく。魔力の消失を誰かに知らせるような光を追いかけるか、否かを迷うが目の前につつすらと開く扉の中にいるはずのフランが先だと思いなおす。

誰かが来る前に説得しないと背後を振り返りながらも扉を押し開いて中へと入る。

円形の小さな部屋。窓も無く、あるのはベッドだけ。その上にフランはいた。

「おいッ!! フラン?」

慌てて駆け寄りフランの名前を呼んだが返事は無い。ただ眠っていると思えたならいいが、その病的に白くなった肌を見るなり血の気が引いた。

レオンはフランの肩を揺すぶり、名前を呼ぶが反応は無い。

フランの格好は真っ白なドレスを着させられていて、口紅だけは真っ赤に塗られていた。ヘアメイクも完璧にされている。まるで人形みたいだ。

外がにわか騒がしくなった感覚があった。姿は見えない。音も聞こえないが、確かに何か動いた感覚が背後にある。

レオンはチツと舌打ちをしてフランを腕に抱きかかえて外へ出る。

「囲まれたかッ」

地面に貼りつく闇が波打って移動している。その一つ、黄色い花がある位置、レオンの正面にあった闇が又ツと宙に向かって伸びて人の形へとなる。

「ここまで追ってくるとは。やはり祭壇で殺しておけば良かった」
「ロウグか。お前、フランに何をしたッ?!」
「何を? 我々は何もしていない」
「何もしていないだッ」

レオンは怒りをむき出しにして叫ぶ。
闇は黒いストライプのスーツの男、ロウグへと姿を変えた。

「自分で眠りを希望したのだ。そして閉じ込めるように、と命令をされたのを実行したまで」
「フランは外へ出たいって言うていたんだぜ? 中へ戻りたいなんて言うわけないだろう」
「フラン様は自らの意思でお戻りになった」
「だが、こんな姿になりたいと願ったわけじゃないのは俺にでもわかる」

細くて軽すぎる身体をグツと抱き寄せてレオンは顔を覗きこんだ。
真っ白な肌。近づくと赤らめる頬も冷たい雪みたいだ。

「ふんっ。子供に何がわかると言うのだッ」
「わからねえってんだろうがッ!! わかってたまるかッ」
「あまり……私を怒らせるなよ。フラン様の頼みとは言え、許されないこともある」

ロウグは白い手袋をはめた手をすうーっと挙げて、小さく払った。

うごめいていた闇が人の姿へと変えていくのが視界を埋めていく。ザツと100は越える闇人形が現れてレオンは息を飲んだ。

「警告だ。フラン様を置いて出て行くと言うのなら見逃してやる」
「優しい警告だぜ」

「フラン様の願いは、誰も傷つけることのないように、とのことだ。私はそれを忠実に守ろうとしているだけだ」

「そうか……フランがそんなことを言っていたのか……」

レオンは少し嬉しくなり、口角が緩んだのをロウグは訝しげに見ている。フランは優しいんだな、とまた一つ知ることが出来た。

「その大きすぎる力を封印することでエレンを守ろうとした。もしも力が暴走すればこの国は壊れてしまう」

「それで眠っている内に利用だけはしようつてののか？ 結婚に何の意味があるってんだよ」

「闇の地位を表に残すためだ。結婚は私とする」

「どいつもこいつも……フランを何だっと思っているんだ」

ノアールでは母親に拒絶され、エレンでも闇を押しつけられた。エレンは闇の力を欲しいが、同族になるのに抵抗はあるらしい。だから眠っているフランと婚約させたのだろう。

「その後土の遺跡へ行って精霊を回収する。それで破壊神を呼び起こせば精霊を全て壊すことが出来る。そうすればフラン様も安心してお外へ出られる。何処へでも行くことが出来る。そうは思わないか？」

「いいように言ったって説得はされないぜ。そんなにバカじゃない」
「だとすれば仕方あるまい」

レオンは剣へと手をやろうとした時、遠くの方から何かすごい勢いで走ってくる音がした。

ロウグも振り返り、その姿を確認する。

「シルク君かつ」

何処かにいた機械人形のシルク君がフランの魔力に反応して動いたようだ。おそらく、物置か倉庫にでも置かれていたのだろう。

シルク君はグルグルと腕を回転させながら客室があった城から闇の人形達を破壊して真っ直ぐにフランの元へ来る。

ガタガタ、と揺れながら腕を止めて、首をグルツと回した。城へ逃げ、というように聞こえた気がする。それも都合のいい解釈だとはわかってはいるが、シルク君が通った後は黄色い花も闇も払われて通り道が出来ていた。

「掴まってくれよ」

フランへ優しく言ってシルク君が作った道を急ごうとした。

「行かせるかつ」

ロウグが白い光をレオンへ放ったが、シルク君が間に入り、白い光の魔法をグルグルと回した腕にぶつける。白い光の消失の代償に一本の腕が吹っ飛んで草むらへと放物線を描いて落ちる。

レオンは振り返らずに走り続けた背後でさらに大きな音がある。シルク君が壊れていく音だ。次第に大きな部位が壊されていくように音は激しさを増していく。

土ではなく、通路にひかれた赤い絨毯を踏むと走る足は加速した。体勢を低くして前のめりに走るレオンはT字になった通路を左へ折れて、宿舎のある方角へと向かう。

「もう来たかッ」

曲がってから二十五目の部屋を通り過ぎた時、視界の隅に角を曲がってくる闇が見えた。

直角に薄っぺらい身体を曲げて闇が宙を泳いでいる足元を灰色の馬が追い上げてくる。ロウグだ。馬は鼻息を荒く、グングンとレオンとの距離を詰めてきている。

視線を前に戻したレオン。宿舎までは逃げ切れる。兵士はいるのか？ 港へ逃げ切れるか？ と思いを巡らせる。

「ハアハア……まだかッ」

長い通路。まだ半分といったところだが、闇との距離はさきほどよりもずいぶん詰まっていた。

逃げ切れるのも怪しくなってきた、とレオンは走る足に力を込める。腕の中にあるフランの頭が揺れても眉ひとつ動かさない。

レオンは重く邪魔になっっている剣と鞘を捨てたのを馬は踏みつぶす。破片が窓を割り、一部に穴があいた。夜の肌寒い風が室内に流れる。

「後少し」

もう九つも扉が残っていないが、馬も数メートルしか離れていない。馬は回りにいる闇を吸収して体格を膨らませていたのに気づいてもなす術は無かった。

レオンは何も考えず逃げろ、と足へ命令する。アドレナリンが出て疲れは無い。ひどい興奮状態に胸の動悸と荒い呼吸だけが聞こえた。

宿舎へ身を押し込むのに成功する。馬はその体格のせいで一度に

入れない。宿舎の入口の壁にぶつかり、ベチャツと闇が通路一面に飛び散った。

「時間は稼げるか」

背後の光景にそうこぼして前を急ぐ。奥の出口付近には兵士達が倒れてあり、それらを踏まないようにうまく避けながら港へと向かって走った。

円形の宿舎は短く、出口は近い。出口を出るとすぐに森になった。方角はわからないが、ただ真っ直ぐに誰かが歩いて踏み固められた道を見つけてそこを走った。

夜の風が冷たく、レオン達の身体を冷やす。冷静になると疲労が一気に身体を支配する。

「クツ……頼む。もう少しだ。もう少し走ってくれ」

足元の悪さもある。土が腐敗して湿気に濡れた葉も多く落ちてあり、足元をとられる。

レオンはそれでも走り続ける。

背後にヌツと出てくる闇人形を踏みつぶして、また体格を膨らませる馬の足音が迫ってきている。かなり離れたが充分ではない。何しろ森の中の闇の気配が城の中とは段違いだ。

ただ一つの救いは闇が直接、レオン達の邪魔をしてこないことだ。闇人形は必ず背後に現れて、馬に踏まれるのを待っていた。

「逃がさんツ」

馬は長い首を伸ばしてレオンへ噛みつきこうとしたが、屈んで避ける。そのまま、左の草木へと突っ込んで別の道を走った。

バキバキと草や木を倒しながら追ってくる馬。森にいる動物は悲

鳴をあげ、夜に響く。

踏みならされていない道。フランを抱えながら走るには難しい。枝や背の低い木々や葉っぱが邪魔をして走る速度も目に見えて落ちていた。

お構いなく真っ直ぐに向かってくる馬を華麗にかわして元にした道へ戻る。

「港はツ?! クソツ。まだかツ」

レオンは苛立ちを口にして疲労を意識の外へと飛ばそうとした。夜は薄暗い。城から洩れるわずかな光と月明かりだけを頼りに走り続けた。するり、とフランの腕がレオンの腕の中から垂れる。まるでかけておいたバスタオルが椅子から落ちるみたいで恐怖を感じる。片方の手で強く引き寄せて、多少の自由になったもう片方の手で垂れた手を戻した。

「あの時みたいに俺の首にしがみついてもくれないのか……」

あまりにも命を感じられないその姿にレオンの不安は膨らんでいく。

「しゃがめツレオンツ」

男の怒号が降り注ぎ、頭を下げる。その頭上すれすれを強風がぶおん、と吹いた。身体までその風に持つていかれそうになるのをこらえるのがやっとだった。

「何をしているツ!! 走れツ」

「お前はセイファーのところの……」

「いいから走れツ」

頭上を通過したのは巨人族ゴルザレムの剛腕から放たれた斧の一撃だった。闇の人形が霧散しているのが見える。

レオンは立ち止まり、背後の様子を確認していた。ゴルザレムは走れ、と言つて馬とレオンの間に立ち、斧を構えて咆哮した。

「あいつがいるってことはもう近いぜ。フラン……助けてやるからな」

そう誓つて走るレオン。背後で交戦する音が聞こえ、馬とゴルザレムの頭上を越えていくつかの闇の人形が追いかけてくる気配があった。だが、馬のような威圧感はない。ただ静かに嫌な気配があるだけで追いつかれるような焦りも無い。実際に距離は保たれたままだった。

視界に飛び込んでくる暗い海。耳には波の音。潮の二オイがするとようやく森を抜けられる、と確信した。

「セイファーツ」

「うふふふ……ようやくお越しのようですね」

木々の隙間を抜けると木の板を組まれただけの簡素な船着き場があった。そこに巨大なセイファアの船があり、港を守る兵士が倒れている姿が確認出来る。

堂々と停泊してある船の前、セイファアもまた自信に満ちた表情でレオンは迎えた。

「必ず奪還なさるとは思つておりましたよ」

「ああ。作戦は完璧だ。すごいぜ、セイファアは」

「褒めていただけるとは光栄でございます。ですが、まだ終わっておりませんのであしからず」

「そうだったな……早く出よう」
「ええ。お姫様は預かりましょう」

セイファーはそう言って疲弊しきったレオンの腕からフランを受け取るように部下へ指示する。部下である屈強な身体をした男に手渡す際、嫌な予感がした。

「どうかいたしましたか？」

「いや……何でもない」

「うふふふ……いいんですよ。さすが場馴れしていらっしやる」

男にフランを手渡した刹那、レオンは膝から崩れて倒れる。脳を直接プレスされているような圧迫感があり、立ち上がることが出来ない。フランを抱いてゆつくりと歩く男が離れていく。

「何だ？ これは……」

「うふふふ……どうしてもあの防衛魔法を壊す方法がレオンさんの力以外無かったものですから協力してもらったまです。あなたはお姫様を助けたかった。助けられて良かったですね」

「クソッ！！ 騙されたのかッ」

「いえいえ。確かにお姫様は救いだすことが出来ました。ただこれ以上はあなたにいてもらっては困るんですよ」

「何が困るってんだッ！！」

「本当の力に気づいていない。だから今、処分するんですよ。これから創る世界にあなたは脅威になりかねない」

「何ッ」

馬のいななきが聞こえた。巨人族が退避しながら馬と格闘している姿が見えるとセイファーは目を細めて薄く不気味な笑みを浮かべて振り返る。

「おやおや闇の一族もなかなか手ごわいようですね。処分はエレンの人にお任せしましょう。では、ご機嫌よう」

「待てッ!! フランはッ」

「うふふふ……嫌ですね。きちんと救ったじゃありませんか。エレンからね」

セイファーはゆったりとした足取りで船に乗り、その後ろをアリーダーとフランを抱いた男がついて歩く。

動いてくれよ、と身体に命令しても頭に響く甲高い音が邪魔だった。

背後から駆けてきたゴルザレムはタラップを片付けた船へと軽い跳躍だけで飛び乗る。それを追いかけていた馬も飛び乗ろうとしたが、船に張られた結界に阻まれて港と船の間へと落下する。

あざ笑うようにゆっくりと出港する船に闇の人形達も突進をするが、セイファーの強力な魔力に全てを弾かれている。

「フラン……」

船が遠ざかるほどに頭の痛みは薄まったが、立ち上がることは出来なかった。呆然となるレオンの肩をグッと掴む力があつた。そのまま、一気に引つ張られ身体が宙に浮いた。

「レオンッ」

「ユナッ!! どうして？」

「話は後、後。そんなことよりもこのグライダーカッコいいだろう？」

鋼鉄の羽根を持ったグライダーの底から伸びた爪ががっしりとレオンの両肩を掴んでいた。眼下には闇の人形達が海へ落ちた馬をみ

おろしている姿が遠ざかっていく。さらに遠くへセイファアの船があった。

「最近作っただけ。果物だって掴めるくらい爪を柔らかくするのに苦労したんだからな」

「そんなことはどうでもいい。あの船におろしてくれッ」

「無理、無理。今は逃げよう」

「逃げるったって。フランが船にいるんだ」

「行ってどうするんだ？ さっきみたいに何も出来ずに倒されるだけだろう？ それに結界を壊せる力なんて無いもん」

冷静な言葉を投げかけてくるユナに言い返す言葉が無い。グライダーは1m程度の大きさ。狭い運転席に細い両翼があり、そこに風を制御する魔法石が並んで緑色の光を発光していた。

「だとしてもッ」

「うわっ！！ 暴れんなってば。落ちるぞ、グライダーと共々」

「降りて助けないと」

「いや辞めておいた方がいいぜ。それに今は逃げるってんだ。素直に従ってくれよな」

「今は？」

「そうそう。いったん戻るぜ」

そう言っただけで高度をあげるグライダー。夜風の冷たさが全身に吹き付けてくる。長い髪はあおられて、視界に入ってくる。髪を退かそうとも爪に掴まれたせいで腕を動かすことが出来ずにいた。

髪が暴れる隙間から見えるエレンが遠ざかり、レオンはやがて諦める。

「ただいまー我が家」

ユナは鼻歌交じりにそう言って、飛行中のシーアテイルの甲板へとグライダーをおろそうとした。

臆病者

綺麗に着地するのは未だ無理なんだぜ、とレオンを乱暴に投げるグライダーが放物線を描いて空へと消えていった。投げ出されたレオンが甲板に転がり、全身を打ちつけた。

「イテテテテ……」

レオンは痛みがある部位を撫でながら立ち上がり、振り返った先に親方が腕を組んで待っていた。

「板はどうした？」

「板？」

「ユナからの依頼で板とメモリーストーンを回収する。お前はそれだけで」

親方はぶつきらぼつにそう言った。

頭上には旋回し、大きな声ではしゃぐユナの声が降り注ぐ。近い位置を飛ぶので風に巻かれ落下することを心配する船員が格納庫から戻れ、と指示を飛ばす。

「二つはセイファアの船だ」

「そうか」

「ああ。弁償でも新しいのでも買うつもりだぜ。あの……ありがとう。助かったぜ」

「依頼はやり遂げる。追いかける」

「追いかけるたって。何処へ行ったのかもわからねえぜ」

圧倒的に空の方が早いとされているが、セイファアの船には光を

屈折させて姿を消す魔法がかけられている。船底で割られた波を追うにも夜だと暗すぎる。

「問題ない。奴らの行先はわかっている」

「何処だッ！！ 親方はどうして知っているッ」

「……」

「まただんまりなのかッ？」

レオンが詰め寄っても薄く開いた細い瞳を宙へ漂わせるだけ。ひとひらの自由を待っているような儂さもあつた。

「ノアールの王国から要請があつた」

「エレンからフランを奪還するようにだろう？」

「違う。セイファアが国家反逆罪で問われている」

「何だつてッ？！ それはエレンと衝突しないために切り捨てられたつていうのでは」

親方のその表情に、言葉が吸い込まれる。悲しくて虚しくて懐かしくさも入り乱れてる感情を空へ還しているようだった。

「依頼には関係ないことだ」

「やっぱり話はしてくれないんだな？」

「そつだ。ずっと言っている。昔話はするつもりは無い」

「じゃあ聞かないぜ。もう二度と聞かない」

約束する、と言つたレオンに親方はようやく視線を下げ、顔を見る。

「今回の作戦は二つ同時に行く。一つは板とメモリーストーンの奪還。二つ目はあの子の回収」

「フランを？」

「セイファアの狙いは精霊の力。最後の土の遺跡へ行けばおのずと会うこととなるだろう」

「そこで戦うのか？」

「ノアールの部隊がすでに囲んでいる。だがセイファアは必ず強行突破してくるだろう」

「ノアールの兵力を強引に越えてくるのか？」

「遺跡へ来る部隊は多くない。世界の崩壊よりも次の世継が大切と見える」

親方は鼻でふん、と笑った。

「その代わりギルドの連中が多く来るんだろう？」

「そうだ。すでに土の遺跡にもエレンへも移動をはじめているだろう」

「……そんなに大規模な動きがある？ セイファアは仮にも貿易商だろう？ それを捨ててまでつてのが引つ掛かるぜ」

「精霊の力にはそれだけの価値がある。セイファアの狙いはおそらく約束の地だろう」

「約束の地？」

「多くの精霊が暮らす大地。光にあふれ何もかも願いが叶うとされている」

「願いか……そういえばこれから創る世界、と言っていた。俺が邪魔だとも」

レオンの身体に残るわずかなしびれ。自分の手にあったフランの温もり。もう何年も前のように感じる。

「精霊の力は強大すぎる。その力を全て解放することが出来れば闇が呼び起こそうとしていた破壊神さえ壊すことが出来る。破壊神と

は創造主でもあり、唯一の力でもある」

「そんな力がこの身体に？　だが、白い輪の瞳の男は少なくともいないが。ラスラにいる巨人族だって白い輪があるって」

「白い輪の巨人族。ロッドランか……」

「ああ。知り合いなのか？」

親方はやはり答えなかった。親方に限らず過去の話をしたがらない船員は多い。

「一つだけ聞かせてくれ。フランを取り戻せたとしてそれからどうするつもりなんだ？」

「依頼人の元へ返す。ノアール国へと」

「返して精霊を封印するんだな。その後はどうなる？」

「俺にはわからん。土の遺跡へは飛ばせば数時間で到着する。まだ眠る時間がある。休んでおけ」

そう言っただけで甲板から船室へ続く階段を降りる親方。言いようのない不安がトクン、と胸を突いてくる。

グライダーが側面に張りついて爪を器用に使って甲板へ戻ってくる。カニやクモみたいな姿で格納庫へ戻るユナがレオンの視線に気づいて小さく手を振った。

昇降機械の駆動音があり、グライダーが沈んでいく姿を見送ってからレオンも船室へと続く階段を降りた。

「おお。レオンか」

「ああ。レオンだ。すまないな。板もメモリーストーンも返せなくて」

「いいんだ。それは親方に依頼したんだぜ。だからバッチリ取り返すぜ」

ユナはへへへ、と人懐っこい笑顔でレオンを受け入れた。

飛行中は整備を極力しない方針の技師達も今は機械を稼働させて武器の調整や運搬をせわしなく行っている。

「無理に取り返しに来なくても俺は新しい品物を届けたぜ」

「何を言ってるんだよ。俺はあれがいいんだ。思い入ってるのはお金じゃ買えないってね」

「そんなものか？」

「そうだし。それに皆を見ているときっかけが無いとレオンを迎えに行けないもんな」

その言葉が素直に嬉しかった。レオンは照れて笑うとユナは頬を油まみれの指で搔いた。黒い線が猫の髭みたいになっている顔を見ているとホッと安心する。

二人がいるのはグライダーの前。昇降機からクレーンでつるされて格納庫の端に移動されているのを見上げながら話を続けた。

「本当はもっと早く行けたらあの子も一緒に連れて戻れたんだろうけどな」

「ああ。俺がもっと警戒していたら。離さなければって後悔ばかりしている。また追いかけても結局失敗するんじゃないかって思ったりもする」

「何を弱気になってんだッ。いつものレオンらしくないぜ？ 当たって砕ける。考えるのはその後でやってきたんじゃないかッ」

「そうだな……だが、俺は皆が思うほど役に立たないんみたいだ。痛感しているぜ。このグライダーでユナが来てくれなかったら今頃、エレンへ幽閉されて夜が明ける頃には死刑だろうな」

「レオンは自分で何でもやろうとするのがダメなんだぜ」

ユナがパツと言った言葉はいつも胸に響く。

ユナはモンキーレンジをくるり、と回してグライダーの方角へ歩いていくのでレオンは後ろをついていく。作業員や技師の怒号が飛び交う格納庫は戦場に似ている。

「皆、不器用なんだ。それなのに何とかしようとしてダメになる。そういうのって板に乗るのと同じでさ、風に身を任せれば何とかなるって」

「それが難しいんだ」

「まあな。慣れるまでは不安もあるし、何とか自分の力で制御しようってこういう気持ちが多いもんな」

「ああ……」

「レオンの場合は制御出来る力があるって言われてその気になっちゃまったもんな。へへへ」

グライダーの前、正確には斜め下に辿りついた。継ぎ接ぎの縫い目が荒くてそれぞれを固定するボルトがむき出しになっている。爪もグラグラと揺れて関節部分が緩くなっているのをユナは触って苦い顔をする。

「俺にはすごい力があるって言われた。俺自身、その力を感じたこともある。だが自分の意思で使えないときたもんだから笑えるぜ」

手をやれやれとすくめて自嘲気味に言う言葉に虚しくなる。本当は笑えないし、悔しくてたまらない。それを知ってかユナは返事を

せず、レンジでボルトを外し始めていた。

「嘘だ。俺はその力を使いたいが、使えない。こんなにも悔しいと思ったことはないぜ。何が嫌だつて悔しいつて思いながらも仕方ないつて受け入れようとする自分がいることだ」

「諦めちまうのがレオンの悪い癖だ。つたく、ようやく気付いたかッ」

「ああ。だが、どうすりゃいいかも検討がつかない。考えたつて何も思い浮かばない」

「そりゃ考えたつてダメだぜ。機械も失敗の繰り返しでようやく形になるんだからやってみないと」

「やってみる？」

「実験だ。飛ばして落ちて、考える。また飛ばして何が違うのかを考える。繰り返しさ」

「そんな時間も知識もない。それに戦闘中は誰も待つてはくれないぜ」

「……すっかり臆病になつちまったな。悲しいぜ」

ユナの声がかすかに聞こえた。表情は相変わらず笑っている。固定したボルトを直接触れて感触を確かめて、グライダーの真下へ潜り込む。

「あのさ、ちょっと忙しいから用事が無いなら出て行ってくれない？」

急にそっけなくなつたユナが黙つて突っ立っているレオンへそう云い放つた。レオンは言い返す元氣も無く、ただうなずいて格納庫を去つていった。

気づけばまた甲板に戻っていた。人と会うのが嫌で知らずに人を避けているといつもここへ来てしまう。

「どうしろってんだよ。俺には何も出来ないぜ」

空を飛ぶ船は帆を中心とした風避けを展開しても風がうるさい。足元からは格納庫の作業する音が足裏からわずかに伝わってくる。レオンは雨避けがある船室へ続く階段がある場所から移動しようとした。

「それでもやるうとしたのが昔のあなたよ」

「……ミレイ？」

「私。悪いかしら？」

「いや、こんなところで何をしているんだ？」

「あなたを待っていたって言ったら泣いて喜んでまた愚痴を言うのかしら」

背後から声がして振り返るとミレイが船室へ続く階段の脇に設置されたプラスチックのベンチに座ってティーを飲んでいた。ぶかぶかのセーターを着てシャンプーの匂いがする。

「親方も飛行中なのに迎えに来たのよ。まずはただいまって言うべきじゃないかしらね」

「……飛行中か」

「そう船長室から離れるなんてね。後で怒ってやらないとダメね」

「そうだな」

「気のない返事。エレンで助けられなくて向こうへ行くって騒いで

る方がまだマシね」

「……一体、俺にどうしろってんだ？ 俺は何も出来ないのにどうして俺なら出来るって期待するんだッ」

「甘えないで。私は愚痴を聞きにここにいるわけではないわ。美味しいティーをゆっくりと飲みたいの」

ミレイは湯気が立つティーを口に流して、舌で唇を舐めた。

「セイファーにも闇の一族にもまるで歯が立たない。親方にも敵わない。皆が俺を見ずに話をして、置いていかれているみたいだぜ」

「悔しいのね。でもそれが現実よ。トランスしなければあなたはただの子供」

「わかっている……言われなくたってさ」

「わかっているわ。弱いのにあの子を助けようとして無茶をする。

それなのに最後まで続けなくて中途半端なことばかりやっているのよッ……」

「半端か。だったらどうしろってんだよッ！ トランスもやり方わからねえし、どれだけ懸命にやろうとも力の差を返す方法が思い浮かばないんだぜ」

「言い訳しないでッ……」

「何が言い訳なんだよッ。俺は弱いつて言ったのはミレイだろう？ それが現実なんだよ。フランを想う心だけではどうにもならない

ッ」

「だったら想うのを辞めなさい。勝つのが無理なら諦めなさい。そして、忘れなさい」

言葉に詰まるレオン。一瞬揺らぐ心に憤りを感じる。

もう迷わないって決めたのにもう離さないって決めたのに一体何をやってんだ、と胸中で嘆くレオンは踵を返して船室へと戻ろうとした。

ミレイは止めもせず視線をティールカップの中で揺れるティールへと注いだのであった。

脚本家 ミット

船室へ戻ろうとした足がふらり、と医務室へ向かっていた。扉を開けた先にいたのはスウィニー。レオンの顔を見ることもなく、ベッドは空いているとだけ言ったので素直に従った。

ゴロン、と寝ころぶレオン。装置が揺れる振動が足元からベッドに伝わって心地よく揺れている。

「何も聞かないのか？」

「何かを聞いてもらいたいのか？」

「いや……別に」

二人は短い会話をしては黙った。スウィニーは相変わらず装置をいじって何かを研究している。レオンはベッドで寝ころんで天井を見上げている。汚い部屋だな、とレオンは思っただけでシミになっている部分に嘆いた。

「あの子がいなくなってから医務室は寂しくてな」

「掃除しねえからだよ。ついでにうるさい装置を静かにしてくれれば誰でも来るぜ」

「そうか？」

「ああ装置を静かにしてもらうためにユナでも呼べばいいんじゃないか？」

「えらく豪快に改造されてしまいそうだがな」

「違うない」

レオンはふつと笑ってまた二人は黙った。その間を埋めるように装置がうるさく騒いでいた。まるで精霊が喧嘩している時みたいに装置はガタガタと揺れ続けていた。

スウィニーのため息が聞こえてようやく振り返る。

「あの子はどうなった？」

「セイファーに連れていかれた。俺が渡したんだ。この手に掴んでいたのに……離してしまった」

「遅かったようだ。と言ってもセイファー相手じゃ無謀だが」

「セイファーってのはそんなに強いのか？」

「強い。エレンともノアールとも対抗しても充分に戦えるほどの戦力はある」

「そんなセイファーがどうして破壊神なんてモノを欲しがるんだ？」

「

「自分にとって唯一敵わないとする力だからだろうな」

「敵わない？ 少し人見知りするただの女の子だぜ？」

「レオンにとってはそうかもしれんが……」

その先は言わなかったスウィニーはまた身体をデスクに向けてカールテ作業に取り掛かる。ペンを持って何かを書きこむ音が聞こえてきた。それが止まってから充分に間を置いてから会話を続ける。

「親方はフランを取り返す作戦があるって言うんだ。それってどうなんだろうな……」

「どうって言うのは？」

「何て言うか、うまくいくのか。その作戦ってのはやっぱり俺が精霊の力を使えなきゃならないんだろう？ 使えるのかなって思うんだ」

「すっかり弱気になった。無理もない」

「期待し過ぎているだけだぜ。俺は何も出来ない。テッドが生きてもりゃ良かったんだ……そうすりゃ今頃うまくやっているぜ。あの時に迎えに行ったのがテッドだったら良かったんだ」

「……」

「そうすりゃ俺もまた女好きが出たぜって笑いながらも皆でうまくやっていけたんだ。そうすればフランも」

腕の中で人形のように揺らされるだけのフランが脳裏に過って言葉に詰まる。

蝶ネクタイを置いたような機械。真ん中に丸いクリア板を填めた蓋があつて紫と緑の液体が波打っていた。それらが混ざり合つて色が変わりつつある。

「俺にもつと力があれば守ることは出来たのに、トランスさえ使えたら失うことは無いんだろう？」

「それはわからんな。トランスにどのような力があるのかも保証は出来ん。だがセイファーさえ警戒する力を秘めているというのは事実だ」

「悔しいぜ。俺にはその力があるって皆が言うのに俺自身が扱えないなんてさ」

「難しい話だ。人間には不明な部分が多すぎる」

「人間か……俺は人間なのかな？」

「そうじゃなければ良かったみたいない方に聞こえるが」

「ああ。きつと人間じゃなくバケモノなら、エレンが言うような悪魔だったら、それだけの力があればフランを助けられた」

「まだ助けられる。諦めるのは早過ぎる」

「無理だぜ。俺には何も無い。精霊の気配すら消えた」

レオンはこめかみに指をトントンと当てて薄く笑つた。

「次に向かう土の遺跡にいる土の精霊に会えば何かが変わるかもしれない」

「会えることさえ出来ないんだぜ？ 風の祭壇にも入ることさえ出来なかつた。フランがいなけりゃ精霊を感じることも無理だ」

「やってみないとわからん」

「わかるさ。俺の身体だ」

「……すっかり臆病になった」

「聞いたぜ。何度もそう言われた。船で流行りでもあんのか？ レオンにそう言うのが流行りとかなら笑えない冗談だぜ」

「冗談ではない。テッドを失ってからすっかり変わった。少し持ち直したと思った矢先にあの子を失って逆戻りになった」

「俺は変わってないぜ」

「……」

「ただ少し大人になっただけさ」

装置が止まり、丸い蓋がかすかに開いた。スウィニーは蓋を開いて中の容器を机の上に置いた。青色に近い色の液体をビーカーに注いでビーカーを揺らしながら観察して手元のメモに何かを書きこんでいる。

レオンは言いよのない虚しさを抱えたまま眠ろうとしたが、眠れなかった。虚しさはあまりにも冷た過ぎてハッと目が覚めてしまふ。

「何か、方法は知らないのか？」

「何の？」

「トランス状態にする方法や精霊と話す方法。何でもいいから……眠れないんだ」

「眠るのに話をしてもらうような歳ではあるまい」

「わかっている。俺だってこのままじゃダメだったことくらいわかってる。実際何かしないと現実が変わらないことも知っている」

「土の遺跡まで着くのに関日以上はかかるだろう。だが残念だ。私は精霊もトランスも専門外で知識は無い」

「……」

「参考になるかはわからんが、脚本のミットの書斎に行けば何かわ

かるかもしれない。物語には多くの歴史が記されているだろう」

「ありがとう。おかげでやる気になったぜ」

「何もしておらんがな」

「それがスウィニーのいいところ」

「ただ歳を取り過ぎただけに過ぎん」

レオンはガツと起き上がり、ベットから降りて部屋を出てミットが常にこもっている書斎へと向かった。

ミットの書斎はエンジンルームの傍にあり、滅多に人が出入りする場所ではない。本人は静かに集中したいと言うのだが、どうにもエンジンの音が気になる。耳を塞いでもまだピストンの音が聞こえてくる。

船室から壁に沿って備えつけてある階段を降りて何の部屋かわからないむき出しのパイプが並ぶ通路を抜けた先にエンジンルームがある。その手前で右手に曲がるとミットの部屋があった。

「入るぜ」

そう言ってノックをしても返事は無い。エンジンの駆動音のせいで音が聞こえにくいのか、と思いつながらドアノブを回して扉を開いて中へと入る。

「勝手に入らないでくれよな」

「悪い」

「んで、しめてくれ。うるさくて仕方ない」

「ああ」

レオンが扉を閉めないでいるのに対して怒鳴るミット。小柄なウザギ族の女。かじりつくように四隅の端に置いた机に向かってせつせと本を書いている。他はベッド以外全て本棚。足元にも散乱した書類があつた。

扉を閉めてもまだ苛立っていることから怒っているのは訪問したこと自体だということがわかった。

「何か用事かい？」

「ああ精霊のことで聞きたいことがあつてきた」

「精霊のこと？ 今度の舞台は精霊なんて出てきたっけ？」

ずっとこんな調子で舞台のことしか考えていない。外で何があるうと関係ない様子でもっているので存在も知らない人も少なからずいるだろう。

ミットはあーでもないこーでもないと独り言を言つてペンを走らせている。

居心地が悪そうに扉の前で立っているレオンは置き去りにされている。扉を閉めると静かで薄暗い部屋だった。天井にある明かりも一つの電球だけでこの部屋に対しては十分な光ではない。

「違う。俺は知りたいんだ」

「知りたい？ 勉強したいんだつたらスイニーかゴーにでも聞けばいいだろう？」

「そのスイニーからこっちへ来るように言われたんだぜ」

「あのじいさんでもわからないことなら私だつてわかんないよ」

「精霊はこっちの方が詳しいって聞いたぜ」

「まあな。色々な調べ物をしないといいシナリオは出来ない。時代背景も少し違うだけで作品の全てを否定されるからまいっちまうよ」

ミットは長い耳をピンと立てて感情を見せるらしく、ため息を吐く代わりに耳がピンと立ってはしなるの繰り返しだ。

散乱する資料に視線を落とす。見たことのある建物の写真があり、その写真に対する説明が長々と書いてあり赤い文字でラインが引かれてあった。

レオンはそれの一つを拾い上げる。

「一つの建物にだって建てられた理由もある。それはミスウリ族が他の民族と対立し、領域を互いに監視するために作られた監視塔つてのが始まりなんだ。だから入口が二つあって中で繋がっているが、決して向こう側には行けないようになってる」

見ないで説明する写真には左右対称の建物があった。二階には大きな窓があり、そこから仕切りが見えていた。

「そんなこと聞きにきたわけじゃないんだろう？　話は短く簡潔にしてくれると助かる」

「そうか。だったら知りたいことを言っぜ。精霊と話をする方法とトランスを出来るやり方を知りたい」

「ハア？」

はじめてミットはペンを止めて振り返った。耳が呆れた様子で垂れさがるのを邪魔そうに持ちあげて椅子から飛び降りた。小さな身体を器用に動かして資料を踏まないように移動してくるミット。

「ヨツと。それってのはつと。お前がつと。ちよつとは片付けるんだつたな……まいつたな」

「知っているなら教えてくれ」

「精霊と話をしてどうするんだ？　確か作戦がどうこうっていつの

があるが関係あるのか？」

「ああ。今から土の遺跡へ向かって精霊と話をする」

「話をしてどうするんだ？」

「フランを助けるんだ。俺が精霊を回収してトランス出来ればセイファーからフランを取り返せる」

「取り返して約束の地がどうこうっていうあれね。あれか」

ふむふむ、と一人でうなずいて部屋の中央辺りで立ち止まったミツト。その場でしゃがみこんで資料の山に手を突っ込んで何かを探していた。

「仕事熱心だね。もう辞めときゃいいのに」

「仕事じゃなく、俺がフランを助けたいんだ」

「助ける？」

「そう。フランを守りたいんだ。トランスさえ出来れば何もかもから守ることが出来る」

「守る……守るね。あんまりしっくり来ない言葉だ」

「どうして？」

「だってさ、約束の地へ送るってことはフランって子を精霊の世界へ送ることなんだけどさ」

「闇の一族から精霊を守るために約束の地を封じるって聞いたんだが？」

「あの子の魂も一緒に世界へ送られる。今回の作戦はあの子を犠牲にして世界を守るうってんだろう？　じゃあ守るだとしっくりこないと思わないか？」

「何を言っているんだ？　そりゃ本当かッ」

「カナリアの舞台でも心はあなたと共にって台詞があるだろう？

あれは巫女が約束の地へ行ってしまいが私の心はあなたと共に生きていますっていう別れの台詞だってば」

「だったらフランは……何をしても助からないのか？」

「さあね。何を助かると表現するかによると思っけど」

えっとどれだったかなーとのん気な声で資料を探すミットの姿を
ジッと見つめていたレオンだった。

夜中の船内

「誰もそんなこと言っていないぜ」

「そりゃそうだろう？ 生きるために不要の知識ってのは自分から知ろうとしない限り手に入れることは出来ないからね」

「だがそれは大切なことだろう？ 任務にだって」

「だったらなおさら自分で調べなかったのか？ 責任ってのは自分にあるんだよ。子供じゃないんだから」

あきれた声で資料を探るミットに言い返す言葉も無かった。

レオンは小さな部屋中に視線を巡らせた。本棚には無数のファイルがあつて表紙の上に色とりどりの付箋が見えていた。薄暗い室内でもハッキリと区別出来るようにつつすらと蛍光塗料が塗られている。

「それは止められないのか？ 約束の地を封じるだけでフランを助ける方法とか、精霊からフランを離す方法とか」

「調べたケドどの記述や神話にも約束の地へ封じたってだけ書かれてある」

「今までの人は全員アルドリアみたいに諦めたのか？」

「別れを受け入れたって言って欲しいね。そう言わないと彼らが行った行為の意味合いが変わってくる」

「同じだぜ。世界を救うなんて言って一人の女の子を助けられなかったんだ」

「現実とは理想とは違う。いくら力があつたってどうにもならないことがある。巫女だって怖かっただろうよ。それでも受け入れた」

「追いこんだんだろう？ 皆が寄ってたかって死なないと世界が危ないとか言っただけさ」

「否定はしないけどね。そうじゃないんだよ」

ミットは少しだけ悲しげな表情になり、耳を垂らした。
やや無言が続いてミットが資料の山から一枚の紙を拾い上げる。
鼻をひくひくさせながらその資料に目を通していた。

「トランスに関しての記述はこれだけ。精霊をその身に宿して戦う姿は鬼神である」

「それだけか？」

「待つてな。えつと……瞳に白い輪があるリアムと呼ばれた人種だけが精霊を降臨されることが出来る。その精霊を降臨させる方法は精霊の全てを受け入れること」

「全てを受け入れる？」

「無意識に拒否してんじやないかな？ 理由はテッドがフランって子か。思い当たることならばたくさんあるだろう？」

「ああ。受け入れるにはどうすりやいいんだ？」

「私を知るわけないだろうに。半端に知ってしまったから戸惑っている部分もある。迷いもあればそれも影響するのかも。何か悩みあんのか？」

「迷いに悩みなんて無い人間はいないぜ」

「そりゃそうだ。特に他人との信頼関係に深く影響する悩みが邪魔してんのかもね。たとえば親方の過去とかね」

思いつきり伸ばした手で資料をレオンへ渡してまた資料の山へ手を突っ込むミット。紙が擦れ合う音がシャカシャカと聞こえている。

「それも何かしっているのか？」

「親方は何て言っていた？」

「絶対に言わない、と」

「だろうね」

「やっぱり何か知っているのか？」

「まあね。この船の初期メンバーだからね。ほんの少し小耳にはさ
んだ程度さ」

「教えてくれ。少しでも聞きたい」

「あんまり人の話をベラベラとしたくはないんだがね」

ミットは頭を掻きながらクリップで挟んである束になった資料を
持ちあげる。端が丸く折れて何度も読み直した癖がついていた紙を
何枚もめくりながら何かを探していた。

妙に空いた時間を渡された紙に目を通して潰しているが全く内容
が頭に入っていない。レオンは紙を丸めてお尻ポケットへと入れて
読み続けるミットへ視線を送っていた。散乱する資料に埋もれるミ
ットの手がようやく止まった。

「あの日は演習中の事故っていう名目でウェルスタンへ停泊したん
だ。風車に船尾をぶつけて修理をするとかで数日いた」

「ミットもいたのか？」

「私は元々ウェルスタンの人間。アルファレスの設計にも関わって
いるんだけど、そんな話はどうでもいいよね」

「ああ。続きを頼む」

「んで三日目の夜、事件は起こった。突然、船員と獣の一部が暴れ
回って 後に病気が発症したとか説明しているけど それを止
めようとした巨人族も入り乱れて城は大混乱になった。ノアールが
精霊の血を引くお姫様をさらうように指示したっていう噂もあつた
ね」

「誰もそんなことを言っただけだった」

「言わないよ。今でもウェルスタンはノアール領だからね。情報は
規制されている。それでその争いの最中にファミル陛下が暗殺され
てその子供が誘拐されたって記述されている」

「知っているぜ。それが親方なのかが知りたいんだ」

「記述にはノアールに保護されたって話もない。親方の供述調書で

は保護して安全な精霊の森へ行ったところに白い輪の瞳の巨人族に襲われてお姫様を奪われたって言っている」

「ロッドラン……そいつと親方が知り合いみたいなんだが」

「ついでに言えばロッドランはファミルの親衛隊。ファミルと親方は旧知の仲だね」

「どういうことなんだ？」

レオンは頭をひねって肩をすくませてミットを見る。ミットは相変わらず資料とにらめっこしていた。

「ロッドランはエレンへ行った。エレンにリイザがいたってことはロッドランが運んだ。おそらくそういうことだろうね」

「今はラスラにいる。取り返しのつかないことをしたって言っていた。国へ帰れないとも」

「会ったのか？」

「いやラスラの陛下と話をしたただけだぜ」

「そうか。だったら殺したのはロッドランかもな。記述には陛下を殺し真実の鏡を割ったのは巨人族と書かれてある。お姫様をさらったのも同一人物とされているが」

「城の外へ連れ出したのは親方なんだろう？　だったら殺したのは

……」

「考えられるのは二つ。ロッドランと親方が組んで金目的で誘拐。

もう一つはファミルの願いでこうなった」

「ファミルの願い？」

「ノアールから子供が狙われていることを知っていたファミルが仕組んだ可能性がある。殺されたのは親方の証言を裏付けるためだとも考えられる」

「そんな……ッ」

「お姫様を安全に国から逃がし、親方を罪に問わせないようにするにはこの方法が一番だ」

「そのために犠牲になったっていうのか？」

「命にかえても守りたいものがあつた。ただそれだけさ。ファミル陛下は優しい陛下だつた。もしものことがあれば国民にも迷惑がかかる可能性もある。子供もお妃も民も愛していたからな」

ミットの耳がピクリ、と動いて作業の手を止めた。やや寂しげな表情になった気もするが、部屋が暗くてよくわからない。獣人族は表情が見えにくい。

「親方は兵士としての仕事を失つて多額のお金とこの船を手に入れた事実もある。前者の可能性は0ではないね。帰れないと言つのもどっちにも取れる」

「結局、わからないか……」

「記述ではね。都合のいいように考えればロツドランだけを悪人にすればいい」

「それは違うと思うぜ」

「だろうね。まあ親方が話さないならここまでしかわからないね。

「ただど直接殺したか、間接的に殺したか。それだけの違いさ」

「そこへ繋がる経緯が違えば意味合いも違つてくるつて話か」

「そう。裏切りか、ファミルの意思を尊重したか。重要なのはそこつてこと」

ミットはクリップで挟んだ部分を持ってレオンへ投げてよこした。

「わかつてくれたかな？ だったら出てつてくれると助かるんだけどね」

「ああ。トランスとか精霊の資料はもう無いのか？」

「無いね」

「そうか」

「そう。ついでに親方へこれを届けてくれると助かる」

「これは？」
「ラブレターに見える？」
「見えないが……設計図か？」
「そう。セイファアの船と同じ型の船の設計図」
「なんで持ってたんだ？」
「脚本家になる前は設計士だったの。はいはい。他人の詮索はもう辞めましょうね。私は仕事をするの」

投げてよこした一枚の図面を開くレオンに手を振って早く出て行けと催促するミットに礼を言っ書斎から出て行った。

ブリッジ

飲んで眠っていた親方を起こして設計図を渡すと大きな欠伸をしながら立ち上がり、設計図を開いた。
座席の下にある小さな扉が薄く開いていてゴアの細い手が見えていた。ブリッジの中は人が少なく、巡航モードになっている。

「ご苦労。だがこれはお前が持っておけ」
「どうして？ 俺は土の遺跡で精霊の方へ行くんだろ？」
「事情が変わった」

目頭を摘まんで深くため息を吐いて設計図を丸めてレオンへ返した。

「それを持ってユナと一緒に船にもぐりこめ。メモリーストーンの

場所はお前しか知らん」

「だが精霊と話が出来る可能性つても俺しかないんだろ？」

「ああその話だがノアール国からリアムの青年が願い出たと言われている。もうすでに土の遺跡へ向かって交信をはじめていると聞く」

「……リアムだからって話せるのか？」

「わからん。だが少なくともお前よりは信用されていると見える」

親方はサイドテーブルに手を伸ばして何かを探る。そこにあるはずの瓶が無くて苛立ってサイドテーブルを軽く叩くと椅子の下からゴーが現れてすうつと瓶を置いて自室へ消えた。

「信用されるってことは交信したのを見せたのかもしれないぜ」

「そうだろう。それも確実に話をしてみせたと言える。ノアールの中心部近くには水の神殿がある」

「ああ知っているぜ」

「俺はそっちへ合流しエレンやセイファーから青年の護衛を任されている。お前らは二人でセイファーが停泊させた船に乗り込んでメモリーストーンと板を取り戻してこい。場所は憶えているか？」

「ああ。動かしていなければわかるが、いくら戦いの最中だと言っても船に侵入するのは難しいぜ」

「問題は無い。手は打ってある」

心配するな、と言わないばかりに酒をあおる親方。

レオンは言いたいことを飲み込んだ。漂うお酒のニオイに面倒そうな対応。何を考えているのかが全くわからなかったのがさらにわからなくなりそうだ。

酒を飲んで真っ赤になった顔色。瓶を置く手元もふらついている。サイドテーブルへとコトリ、と瓶を置いた。うまく置けない様子でゆらゆらと輪を描くように揺れる瓶がややあつて制止した。

数秒の沈黙。ソナーが鳴って進路上に鳥が通過していることを知

らせる報告の声が聞こえた。

「板とメモリーストーンを回収した後はどうするんだ？」

「アルファレスの中へ置いて待機しておけ。最悪、船にいる面子だけで船を動かして逃げる」

「最悪って何だよ」

「セイファーとエレンとノアールが集まって戦う。それだけで巻き込まれる可能性は充分にある」

「それは……親方達を見捨てて逃げろってことなのか？」

「俺らならば心配いらん。うまく勝手に逃げる。勝手に巻き込まれて死ぬのはごめんだ」

「ああ。そうだな」

フランのことを言おうとしたが辞めておいた。後から来るリアムの青年が何とかしてくれるのだろう、と信じていると言い聞かせてはいるが胸に妙なざわつきがあった。それは残念だとも安心だとも違って説明出来ない感情だった。

レオンは目を伏せてただ次の言葉を待っていた。親方の様子を眺めても何も言うこともなく、薄く充血した目をこちらへ向けていた。

「あのさ、親方。迎えに来てくれてありがとう」

突然、そう言ったので親方も困った風に首をひねって大きくうなずいた。

レオンはどうすればいいのかわからなくなって逃げるようにブリッジを去って行こうとした時、背中から声が聞こえる。

「帰ってきて何よりだ。レオン」

言葉が終わってから振り返ることなく、短い階段を降りてブリッ

ジの扉を開けて格納庫にいるはずのユナの元へと向かった。

親方の過去

作業用机に設計図を広げて、四隅を手近にあった部品を置いて固定する。側面についた手巻きのレバーをくるくると回すと机に角度がついて縦になる。

ユナは小さな工具入れからペンを取り出して設計図の空白に文字を書き始めたのをレオンはジッと眺めている。

その周囲は夜中にも関わらず平常運転でうるさい工業用機械の音とオイルの二オイでまみれていた。怒号のような話声がないだけ静かに思えた。

「ここが客室だからここにあるとして、どのルートから入れるかを考えないとな」

「ああ」

「何処に停泊させるかでもルートが変わるもんな」

「ああ」

「遺跡の屋上にそのまま乗せるつても考えにくいから足元に置くと思うんだよね」

「ああ」

「レオン？ 話を聞いている？」

「ああ」

大げさに肩をすくめて聞いていないよ、とため息を吐くユナ。レオンはユナが話を終えたところでようやく視線に気づいてユナがいる右側を振り向く。

二人は隅にある小さな製図室を借りて作戦を考えている。彼らの背後にはグライダーがつかられて湾曲した爪が剥がされているのが見え、中の配線がむき出しになっていた。

「心ここにあらずつてやつだな」

「ああ悪い」

「気になるんだろう？ 新しく来るリアムの青年ってのがさ」

「まあ……それなりに」

「いきなりだもんな。エレン大陸から旅を続けてつい先日にもアール大陸へ来たんだつてさ」

「知り合いか？」

「いいや。書いてあった。これに」

ユナはツナギのお尻ポケットから新聞紙を取り出してレオンへ渡す。武道通信という特定のマニア向けの新聞だ。全国で行われた大小全ての格闘大会の結果や注目選手の紹介などが書かれてあり、整備主任のロックが愛読している。

レオンは赤い線で囲まれていた文章に目をやるとそのリアムの青年という人のコメントが書かれていた。飛び入り参加でリージュネイル武道大会を制した。そこには本国の親善試合に呼ばれる精鋭達がひしめくブロックから勝ちあげり続け、それはまるで奇跡としか思えないという見出しが目を引いた。

「そいつが大会に優勝した時に渡された精霊術式がかかった符を簡単に解いたことがノール本国に伝わって水の神殿へ連れていったんだつて」

「話が出来たつてのはどうしてわかつたんだ？」

「さあな。わかんねえな。この新聞だつて今日のやつだからな。顔さえわからないぜ」

「だが信用されている。何か理由があるんだらうな」

「まあ大臣の推薦とか素性を保証してくれる王族がいるのかもな。」

まあ向こうは任せよう。俺らはこっちをどうにかしないと」

「そうだな」

ユナはまたボードに向かつて頭を悩ませる。レオンから新聞紙を受け取ってまたお尻ポケットへ入れてからも一向にペンは進まなかった。

「狭いから機械も入れない。かと言って力任せに突入しても無理だしな」

「ああ。打つ手がないならやっぱ俺が弁償して新しい物を買っせ」「ダメだぜ。仕事もあれでやってんだっつーの」

「そんな大切なものを貸してくれたんだな」

「そうだぜ。へへへ。いい奴だろう？」

ユナが鼻をすすりながらくしゃくしゃの笑顔を浮かべる。オイルまみれの姿だが、女の子だと言うことがわかる表情だ。

「ああ。いい奴だ。俺が勝手に持っていったのが悪かった」

「まあな。メモリーストーンの大切さなんて普段扱わない人にはわからないもんだぜ」

「色々記憶出来るみたいだもんな。便利だ」

「ポケットに入れてあるから勝手に変な録画とかしてあつたりするケドそれもお茶目だと思えば可愛いぜ。どうだ？ レオンも買ったらどうなんだ？」

「使わないからな」

「どうして？ ダイアルストーンなんか繋げるだけでも色々と便利になるぜ」

「ダイアルストーンにつなぐ？ 録音とかするの？」

「そうじゃない。ダイアルストーンにつなぐとその周囲の様子が映像として見ることが出来る。会話だけでなく、カメラの役割もするんだぜ」

他にも、と話が脱線しそうになったユナはハツとなって話を戻し

た。

解体した爪を大人が二人で抱えてそつちじゃないこつちじゃないと喧嘩するような声が背後から聞こえてくる。クレーンから降りてむき出しの配線を手に取り、一本ずつ確認する作業員が誘導する形で落ち着いた。

「船へ近づくのもグライダーで近づくのか？」

「グライダーはとっさの動きには弱いから無理だぜ」

「じゃあ歩くしかないのか？」

「歩くと遠いぜ」

「だったら……板？」

「帰りは板で帰る予定だから片道の乗り捨てステップを使おうと思
う」

「乗り捨てステップか」

乗り捨てステップとはバウンドの魔法を仕込んだ魔力を一定感覚で放ち続けるバネ付きの板のことだ。身体を傾けるとその方向へと魔力が尽きるまで進む。尽きた後はバネも板も壊れて使えなくなる。

ユナはグライダーが並ぶ奥にステップを組んであると言って3メートル程度の平面の段差があるだけの製図室から降りて爪を抱えた男の一人にあれを頼む、と声をかけていた。

数分して男が脇に抱えて乗り捨てステップを持ってユナへと渡した。ユナはそれを受け取り、製図室の設計図が貼り付けてある前の地面へと置いた。

「乗れるか？ 二人」

「これは見本。二人用はもう少し大きいから大丈夫だぜ」

コマのようにバネが板の下にあって、その上には手に持つ棒が伸びていた。そこにスイッチがあつてオンにすると魔力が放出される。

「走り出しは勝手に進むから飛び乗って一度、身体の方向に引つ張って減速させないと乗れないぜ」

「練習しろって言うことか？」

「狭すぎて無理だぜ。これには魔力も組む前だからボタンの位置と一応どんなのかっていうのを見せたかったただけだぜ」

「そうか。これを押せばいいんだな？」

「ああ。押した瞬間進むからもう片方の手でしっかりと棒の上の方を掴んでおいてくれよ」

「わかった」

レオンは棒の部分を握り込んで感触を確かめて答える。直径1.5センチの棒はひどく頼りなくて大丈夫かな、と思った。

ひとしきり確認し終わるとユナはステップを縦になった机の裏にある壁へと立てかけた。また同じ場所へ戻り、話はルート選択へと戻った。

長い議論の後にセイファアの停泊するエリアを見てからルートを選択することに決めた。

終わった頃には格納庫の機械音も減って、人の数も室内の明かりも消えていた。ユナも先に寝るぜ、と言って格納庫にある仮眠室へと向かった。

レオンは黙って見送った。何もしてないよりも何かをしている方が気が紛れるのでいつまでも何が起こる可能性があるのかを記憶にあるセイファアの船員達と照らし合わせて考えていた。

「大丈夫かな？」

「これだけいるんだからそう簡単に突破はしてこないだろう」

「まあな。筒状の魔法砲台も並べて戦争でもしようっていうのか」

遺跡から数百メートル離れた西にある森に身を隠して双眼鏡で周囲の様子を覗き見するレオンとユナ。目の前には草原が広がっていて、正方形の石を積み上げられただけの遺跡だけが目立っている。

周りには遺跡を囲むように長方形の石が三つ縦に積まれた柱があり、中には壊れている柱もある。そこを中心に兵器を空へと向けて迎撃態勢を整える兵士の姿があまりに多い。

「アルファレスや奇襲部隊が潜んでいるのが後ろにあるのも含めるとすごい数だ」

「ああ。それにエレン側にはギルドから派遣された傭兵が陣形を組んでいる。ここを突破するのは想像も出来ないな」

「ううん……確かに。何処へ止めても狙われる。死角も無ければ容赦もしないだろうな。ぶっ壊れたらどうすんだろうな、船ごと」

ユナは軽くそう言ったが、この草原に広がる緊張感を肌で感じているとあり得る空気が漂っている。

レオンが心配していたのは船の中にいるフランのことだった。フランを助けようなんて考えるとは思えない。その時は壊れた船からフランを助ける？ 俺に出来るのか？ と自問自答をしながら寝そべった体勢から上半身を起こした。肘についた草を払うと生物が腐敗した時に放つ独特のニオイがあつて顔をしかめる。

妙に静かな草原。遺跡の屋上へ続く階段が中央にあつて親方達が登り続ける背中が見えていた。滅多に装備しない完全防具にそれぞれに馴染みの武器を背中にくくりつけていた。

「チーム2の様子？」

「問題ないよー。特にこつちの変化は無い」

「了解。こつちも変化なし」

ダイヤルストーンから通信が入り、定期連絡に答えるユナ。耳につけたイヤリングがそのダイヤルストーンだ。骨に振動させて声を伝えるので動きながらも鮮明に声を拾えるが話す時は立ち止まらないと伝えにくい性能が不満だ、と言って耳につけてから二時間経った。未だに定期連絡以外の通信は入ってこない。

レオンは空を見上げる。太陽の光が遺跡の表面に照りかえされて足元の草が燃えて焦げた土があるだけの広場に兵士の姿は無く、不自然にスペースを開けている。

「誘導じゃないにしてもあそこへ停泊してくれば楽だな」

「階段の目の前だから罨を警戒して止めないと思うぜ？」

「罨だとわかっていてもこんな警備の中来るんだ。よっぽど自信があるんだろう？ だったら可能性は高いんじゃないかな？」

「どうかな？ 降りた瞬間に兵士に囲まれる。あの場所は照り返しがキツくて長時間船を止めていたら内部が蒸されて船員が耐えきれないような気もするぜ」

「今日の天候だとそんなに急激に暑くならないと思うぜ。季節も穏やかになりつつある」

空は全くの青空というわけでもなく、まばらだが大きな雲が流れている。

ユナは体勢を起こしてあぐらを組んだ。首から下げた双眼鏡を外して足元へ置いて、疲れたげ、と力なく笑った。

時間ばかりが経って何も起こりそうもない。兵士達も無表情ながら苛立ちはじめているようにも見えた。

レオンは双眼鏡を借りて階段を眺めた。もう肉眼では親方達の姿

も見えない。遺跡の屋上は四十メートル以上の高さがある。

「エレンからも闇の一族も来る。あいつらは姿を自在に変えられるから空を飛ぶ鳥へ化けているのかもしれない」

「何かしたいのはわかるけど少しは休んでおけよ。いざって時に疲れたーじゃしゃれになんねえぜ」

「悪い」

「まあ何かしないと落ち着かないってのは誰にでもあるぜ。好きな女が関係しているなら尚更そのせいだぜ」

ユナは自らの肩を揉みながら首を回している。

何となくうなずいて同意しているようなしていないような曖昧に返事をして、また双眼鏡へ意識を集中させる。

親方は階段を登り終えて屋上へと進んでいく。角度的に様子はいかがえないが屋上へ入った途端に手をあげて誰かにあいさつしたのが見えた。

双眼鏡を動かしてエレンの方角を見る。わずかながら高低差があり、西の森の方が高いので傭兵の姿が確認出来る。

「何か見えたか？ レオン」

「いいや」

「あの例のリラムも見えていないのか？」

「屋上は見えないぜ。今はギルドの傭兵を見ているが、慌ただしい雰囲気も無い」

「そっか。来ないのかもしんねー」

「それに越したことはないが、土の精霊の儀式はどうなっているんだろうな？」

「儀式ってさ、どうなんだ？」

「どうって？」

「ほら、精霊が現れる時に何か変化あるのかな？ って。肉眼でも

見えるような光の柱が立ったりとか」

「どうだろうな、と答えて静かに考える。水の精霊や火の精霊や風の精霊は室内だった。もしかすると屋外では何らかのことがあるのだろうか、とふと考えていた時、暗雲がエレン側の空から流れ込んでくる。」

「急な雨か？ 全くめんどくせえな」

「わからない。だが兵士も傭兵も立ち上がった」

「空を見上げているな。魔法陣が消えると厄介なことになるぜ」

「ッ」

「どうしたッ？」

「何か来る……」

レオンが急に立ち上がったのにつられてユナも立ち上がった。双眼鏡の中では傭兵も立ち上がり、剣や斧を手に取り同じ方角を睨んでいる。双眼鏡をさらに奥へ向けると一頭の馬が見えた。

「ロウグか……」

「何がいた？」

「馬がいる」

「馬？ そりゃ馬くらいいるだろう？ 草原なんだからさ」

呆れた様子のユナがもう一度、座り直そうとした時、暗雲からひねりだされた雷が落ちる。光に遅れて轟音が流れてきた。それが引き金になったのか、暗雲から雨が降り始めた。

馬はいななき、助走をつけて走り出したのも同じタイミングだった。馬を止めようとして得物を振る傭兵達の頭上を軽い跳躍で飛び越えてグングンと加速している。

ドン、と大砲の音。焦った兵士が傭兵がいる場所へと大砲を撃ち

こんでしまった。その弾が放物線を描いて着地しようと落下し始めた頭を雷が壊した。爆発が傭兵達の頭上で起こり、とっさに伏せる傭兵が振り返り兵士たちを睨んでいる。

「貸してくれ」

レオンの手から双眼鏡を奪い取ってユナが確認する。

肉眼では馬の姿は黒い点だった。雷が様々な場所へ落ち続ける中を疾走する馬の姿に震える兵士。ひやっと情けない声を出して剣を捨てた兵士の頭上を軽く越えて馬は真っ直ぐに遺跡へと向かってくる。

ユナは双眼鏡を外して空を見上げた。雨だ。しとすと降り始めた後、ややあつて雨足が強まる。

「馬が呼んだのか？　これが儀式のあれなのか？」

馬はあまり濡れていない。馬が走った足跡を消すように雨が強まってきた。まるで馬が連れてきているように見えた。

レオン自身もただ見ているしか出来なかった。視界の中では矢や剣などで馬を止めようとしているが、無駄だった。

「馬は実在しているのか？　影みたいに闇色になってないか？」

「いや実在しているぜ。見た感じだと」

「だとすればあれも儀式と関係あるとか……」

「そりゃ都合よすぎんじゃないかな？」

双眼鏡を馬の足並みに合わせて振るユナ。兵士の猛攻もモノともせずに走り続ける馬がとうとう焦げた土の広場まで現れた。

いななき、ぶるるるうと鼻息を荒くして前足で土を蹴っている馬をゆっくりと囲む兵士達。

「何だッ」

馬の姿がいきなり溶けて、液体になる。ゆっくりと地面の土へと吸い込まれてあっと言う間に消えた。

「アリーデか……来るッ」

レオンはようやくそれに気付いて幹に立てかけていたステップを持った時、暗雲は綺麗に去って雨も雷も止んだ。

何だっただ、とあっけにとられる兵士達が気を抜けて陣形が崩れていることに気づいていない。レオンは叫んで知らせようとした時、ユナが叫んだ。

「見るッ！！ セイファアの船だ」

船は静かに空を移動している。

眼下にいる雨で消えた魔法陣を組み直して慌てている兵士たちをあざ笑うかのような速度だ。兵士の中でもせつかちな人間は組み直しを待てずに自ら背負った長い砲身の銃に鉛を詰め始める姿も少ない。

それとほとんど同時に東の森が騒がしくなった。森の生き物が鳴く声が出て森全体がうねり、異物を吐き出そうとしている。吐きだされたのは闇。エレンから闇の一族が草原を黒く染めていく。

「傭兵が動き始めた。準備をするぜ」

ユナは双眼鏡を足元へ置いて、ステップの近くにたたんで置いていた光学迷彩をはおった。レオンにも一つ渡して二人の姿は森の一部となった。

傭兵が消えた魔法陣を組み直す時間は無いと悟り、それぞれの得意な武器を持って静かに広がっていく闇に攻撃を仕掛ける。虚しく空を斬る剣が何度も振られた。

「いいか、レオン。見えなくなるだけだぜ」

「わかっている。鉛に当たれば痛いし、すり抜けられるものでもない」

「そう存在が消えるわけでもない。ただ気休めみたいなもんさ」
「無いよりは安心出来る」

迷彩の裾をグツと握り込んでステップを足元へ置いて空を見上げる。ようやく鉛を詰め終えた銃声が空へ向かって放たれる。だが遠すぎる。

相変わらずのペースで進み続ける船からも何の攻撃も仕掛けられてこない。ただ静かに土の遺跡へと向かい続けている。目の錯覚か、と思えるほどゆったりと空を滑っている。

ユナもレオンの背後へ回り、肩を持った。いつでもステップへ乗れるようにレオンの呼吸と合わせて自らも呼吸する。

「船の進行速度から見ても予想通りあの焦げた広場へ降りてくるだろう。問題は闇の動きだね」

「ああ。あれがどう動くかで話は変わってくる」

「いい方に転がれば楽に侵入も出来るぜ」

「悪い方へ転んでもどうにかしてみせる。それがシーアテイルだろう？」

「イヒヒヒ。さっすがレオンじゃない。そう来なくちゃ」

ユナは満面の笑みを浮かべてレオンの背中を軽くつねった。

状況は静かに進行し、大きく動いたのは魔法陣の組み換えが終わった直後だった。一面の緑色の草原に紫色の魔法陣が大量に浮かん

だ。それは丸みを帯びた筒にエネルギーを送り、くびれた砲身から空へと同じ色の光を射出し始める。

空へ落ちていくような帯が視界を埋める。

セイファアの船の航路を邪魔するように伸びる光を船底に張った防衛魔法で弾き返す。光を歪ませても船全体がぐらり、と揺れるのが見える。

「落ちないか……落ちるな」

思わず声に出してそう言ったレオンを静かに見守るユナ。

揺れ続ける船。射出され続ける光。足元では闇と人間が交差し、赤い血が流れた。草原を染める色が見るものの心を蝕む。

無意識にレオンは目の前にある棒を強く握った。今にも走り出しそうになるのを感じてユナも手を腰へ回した。頬を寄せてしがみつくユナが小声で大丈夫、と呟いた声も戦いの音に消されてしまった。

「船が降下を始めた」

「落ちていいのか？」

「いや着陸するつもりだ」

「こんなに兵が待っているのに平然と着地するなんて肝が据わっているぜ」

ユナは関心した声をあげて片眼を開いた。横にある木が大きく揺れているのを見て迷彩を深くかぶり直す。

風は無い。あるのは破壊の音だけだ。

「すぐに白兵戦になる。背後から飛び乗る形になりそうだがせ」

「そ、そうか。乗る時は合図をくれよ」

「ああしっかりしがみついでてくれ」

ユナはうんうん、とうなずいてまたレオンの背中に顔をうずめた。細い身体なのに筋肉が引き締まっていて素直に身体を預けられるとユナは褒めたが、レオンの意識は眼前の戦いに集中していた。

兵器を抱える魔術師だけを残して、支えていた兵士は剣を抜いて船が降りてくるのをひらすら待った。

遺跡よりも低い位置に船首が来る。砲撃は止んで、静かな時間が流れる。屋上にいる人々の緊張も剣を握る兵士の緊張も伝わってレオンは棒をいつそう強く握り直した。

「来るぞッ！！ 全員構えろッ」

「おお！！！」

振り絞る声で兵士長の言葉に答える兵士。指揮が高まる中、船は衝撃吸収の魔法陣を仕込んだ網を投げて、その上へ着地をする。

ズズズ、と船底を引きずる音が聞こえた。焦げた土が挟れて中の土がむき出しになる。完全に止まるのに十メートル以上の距離を要した。

ゆっくりと周りを囲む兵士達が息を飲んだ。

盛った土の上へタラップが降ろされた。船員が固定する姿が見えて、一人の兵士と目があう。

「あら皆様お揃いで歓迎してくれるのでしょうか？ うふふふ」

タラップの上にセイファアの姿が見えた。いつもよりも派手な襟付きの服を着ている。長いキセルは金で出来ていた。その背後にはアリーデとフランを抱いたゴルザレム。

レオンはフランの姿を見て、ピクリと反応したのをユナが強く掴んで制止させる。

「大人しく投降してお姫様を渡せ！！！」

「渡せば見逃してくれますか？ それはそれは素晴らしい提案です」

細く長い指先を開きながら拍手するセイファー。

面持ちを変えずに剣を構えて警告を続ける兵士長。力の差は明白だった。対峙する二人のやり取りを見て臆した兵士が後ずさりして、ちぐはぐな包囲網になってきた。

その奥、傭兵達が次々となぎ倒されて真っ直ぐに闇が向かってくるのをセイファーは遠目で見て、急がないと面倒なことになりますね、と笑った。

「私も急がないといけない身なので退いて下さいませんか？」

「それは出来んツ」

「ならば仕方ありませんね。本当に残念です」

セイファーはキセルを持った手で軽く払った。

兵士長を含む、遺跡に背を向ける位置にいる全員が同じ方向へ吹き飛ばされた。瞬きするよりも早く人が消えた。遅れて風の流れる音がして、風の魔法を使ったことに気づく。

「失礼」

タラップを悠然と降りるセイファーを止めるモノなど誰もいなかった。

飛ばされた仲間の安否を確認するために列を離れる兵士が一人出るとすぐに陣形は破たんした。次々と小さな悲鳴をあげて逃げて行く様にセイファーはすっかりご機嫌になり、鼻歌まじりに遺跡へと向かった。

レオンは仕方ない、と思って棒の下の方にあるボタンへ触れた。

着火した音がうるさくて一瞬だが、ためらう。それでも行くしかないと思えば、腹をくくって身体を丸くして前傾姿勢を取る。バウンドする

バネの歩調が速くなり十秒もかからずに船に辿りついた。

「乗り移るぜ」

「ああ」

「せーの」

ほら、と最後のバウンドで自らの身体を宙へと投げる。その足元にあったステップが船底の防衛魔法陣に触れて爆発する音が響いた。甲板に着地して、すぐに座る。目の前で音に反応した船員が下を覗く姿が見えた。首を傾げて周囲を見るがバレている様子は無い。ややあつて元の位置へ戻ろうとした船員の足音に紛れてレオン達も船の中へと侵入したのであった。

中は薄暗く、静かな空間だった。甲板に、主に遺跡側に人が集中して兵士を睨みをきかしているせいで手薄になっている船内。

「ダメだ。慎重にな」

迷彩を脱ごうとしたレオンへユナが小声で注意をする。

「だが、迷彩の隙間からだ見えにくいぜ」

「辛抱しろよ。見つかるよりはマシだぜ」

「ああ」

レオンは仕方ない、と思い直して隙間の狭い視界で前へ進む。船室は長い一本道。左右に船員室があり、客室はもう一つの階だった。奥へ行くと階段があり、折り返すこととなる。

「待て」

人の気配があった。

足音。一つ、二つ、消えた。レオンは隙間から音の正体を探したが姿は見えない。ゆっくりと足を忍ばせて通路を歩くレオンの後をユナがついて歩いた。

最新鋭の戦艦らしく、通路まで強化素材を使っている。魔法を無効化する装置も柱に見えて、白兵戦にも自信があると見える。足場の中央には正方形の板があつてそれを踏むと天井にあるライトが点く設計になっている。

レオンは端を慎重に進んで自らが案内された客室へ侵入することが出来た。

「ふう」

「ここまで来れば一つ安心出来るぜ」

「そんな悠長なことを言つてないで探そうぜ」

「だな」

二人は迷彩を脱いで室内を物色する。雑魚寝だと七人は十分に眠れるスペースに生活家具は全て完備してある。冷蔵庫もシャワールームもあつたが生活感は無かつた。

片付けているようでもしかすると何処かへ移動されたのか、とも思ったが念のために探すことにしたレオン。タンスを開けたりシャワールームを開けたりするが見えない。

「横着な人間が片付けたりすると……この辺にあるんだよな」

ユナは地べたに腹をつけてベッドの下に手を入れた。にやりと笑つて、ベッドと床の狭い隙間に細みの身体をねじ込んだ。

「あつたのか？」

「おお。バツチリだぜ」

板とメモリーストーンを引っ張って部屋の中央へ置いて、自らも立ち上がる。

レオンはそれらを拾い上げて迷彩の中へ抱えて持った。目の前で揺らめくエメラルドの光。メモリーストーンが輝いている。

「何か輝いているんだが？」

「ん？ 通信か？ ダイアルストーンと繋げればいい」

ユナは耳からダイアルストーンを外してメモリーストーンに触れさせた。

「どうもレオンさん。人のいぬ間に船室へ入るとは何と失礼な方でしょうね。うふふふ」

「セイファー……」

「おっと、怒らないください。どっちかと言うと私が怒るべきなんでしょうが」

声はすぐにセイファーだとわかった。その後、映像も浮かぶ。階段を登りながら話すセイファーの姿が見える。カメラ位置からすると屋上に立つ誰かのダイアルストーンだろう。

レオンは映し出された光景　掌におさまるほどの小さな映像を睨みながら話を続ける。

「私はとっても気分がいいんです。ですから許してさしあげましょう」

「何か用なのか？ 用件を言え」

「サービスをしてあげようと思ひましてお姫様を取り返してくれたのはレオンさんですから私なりに感謝の気持ちだね」

セイファーはカメラに向かってほほ笑み、小さく手を振った。

「何をするつもりだ」

「教えてあげようと思ひまして。あの日、何があったのかをね。ずっと知りたかったのでしょうか？」

「あの日？」

「お姫様がさらわれた日。わかりやすく言うと親方さんが殺したかどうかという話です」

その一言でカメラが親方のモノだとわかった。

すぐ後に斧の端がカメラに映って確信する。途端にグラグラと揺れる映像。親方が走ってセイファーに斬りつけたのをゴルザレムが片手で押しのけた。

放出する光。精霊はすでに姿を消して、リアムの青年の掌には茶色の精霊が座っていた。

セイファーの一団が階段を登り終わると屋上の空気が一変する。ノアールの兵士や親方達を含めた精鋭が武器を構え始める。祭壇は中央にあり、親方はリアムの青年の背後へと回り込んだようだ。

カメラの中に青年と祭壇とセイファーが一行に並んでいる。

「あらら、とつくに召喚は終わってしまったようですね」

「終わりだ。もうこれで手をだせない」

「そうですね。大変だ。奪おうにもリアムの力が怖いですね。うふふふ」

「余裕だな……だが、それで夢が潰えた」

親方がそう言って斧を構えなおしたのか、画面が上下に揺れた。

「そうですね。もしも奪えることが出来なければ、ですが」

「奪うつもりかッ」

「止めて見ますか？ 是非見てみたいものですね」

セイファーは魔法球を祭壇へ放つ。リアムの青年は動じず精霊に向かつてぶつぶつと話している前に親方が割って入り、魔法球を斧で破壊した。

割れた魔法球が屋上の表面を削り、左右の外側へ弾きだされる。ややつて爆発音がする。

「魔法を壊す。さすがに面白い手を使う」

「簡単な魔法で殺されはしないだろう。大魔法を使えば精霊ごと壊してしまう可能性もある」

「人質にとられたのでしょうか？ ますます面白い」

「そう思えるのは今だけだ」

親方はそう言った背後でリアムの青年にこちらに非難を、と声をかける音が聞こえている。

「うふふふ。だったらこうして見ましようか？」

セイファーはキセルの取っ手を抜いて仕込み刀をゴルザレムの腕の中で眠るフランの首筋へと向けた。

「大切な人でしょう。何しろあのファミル陛下のご息女ですからね」
「……………」

「ご友人に願われて助け出したのにもう一人の巨人族がエレンへと渡してしまった。本当ならば静かに暮らしていればよかったのに」

「それ以上は言う必要はない」

「何故でしょうか？ 皆様も聞きたいと思っっているのかもしれないよ。ねえフランさん？ いいえ、リイザ様も聞きたいでしょう？」

「

セイファーはフランの頬を長い舌で舐めて耳に口づけをした。

「あなたの愛した父親を殺したのは目の前にいる巨人族ですよ。ねえ？」

「……そうだ。俺が殺した。この手でファミルを殺した」

「素直な言葉。奥にいる船員達も動揺しておられる。うふふふ」

ざわめきが画面を通しても見えそうだった。

カメラは一瞬、青空に浮かぶ太陽を見つめて、またセイファーを見る。

「お前は何が目的だ。昔話をしにきたわけではあるまい」

「うふふふそうですね。だが話を聞きたいじゃありませんか？ ほら、船員の顔を見てごらんなさい」

「……」

「やはり話していなかったでしょうね。ファミル陛下に頼まれたとはいえ、子供を手放したのは事実」

「あの子は俺ではどうすることも出来ん」

「だから白い輪を持った巨人族に渡した。いいわけとしては悪くない」

セイファーが言っているのはロッドランというラスタにいる巨人族の人だろう。エレンへ渡り、ウェルスタンへ帰れないという真相も見えてくる。

「ロッドランでしたね。あの巨人族はウエルスタンにいた人間です。多くの人間が黙っていたのは彼を守りたかった。信じたくなかった、ということですよ。愛されていたのでしょう」

「暗闇でロッドランと見間違えた人間も確かにいるだろう」

「そう。全てはあなたの計画。罪を被せ、自らはのうのうとノアルで暮らす。おまけに豪華な船まで手に入れて演劇ですか？ ひどい話だ」

「何とも言う方がいい」

「あなたの生活に関しては何も言いません。兵士としての職を失う代わりに自由と財産を得た。だが、あなたに奪われたロッドランの人生は悲劇だった」

親方の斧が揺れている。動揺が見えたが、レオンは冷めた気持ちで見ている。

「エレンではリアムは悪魔と呼ばれ蔑まれ、何処へ行っても頼るあてはない。それに追い打ちをかけるようにウエルスタンへの思い出が浮かんでくる。手には泣いたお姫様」

「お前に何がわかるッ」

「失礼ですね。私も人の子、心を痛めることもありましょう。だから私は親切に真相を話そうとしたのですよ」

「誰に」

親方の視界が歪んだ。ゴテン、と巨漢が揺れて壁が迫ってくる。倒れたんだ、と思った時、カメラの中央に長い刃が見えた。血がどつぶりどつぱりつついている。

首を曲げて刺した人間を見る。背後から刺した主は冷たい目をして、死ぬ、と吐き捨てた。

その手にいた精霊は小さく震えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7863x/>

その名も嘘つき勇者様

2012年1月9日00時52分発行